# 東大阪市下水道事業関係
# 発掘調査概要報告

－ 平成13年度 －

2002. 3

東大阪市教育委員会

# 例　　言

1．本書は、東大阪市教育委員会文化財課が、東大阪市建設局下水道部の委託を受け、平成13年1月～12月末日まで実施した公共下水道管きょ築造工事に伴う埋蔵文化財調査の概要報告である。

2．本書には山畑古墳群・遺跡、額田寺跡、鬼虎川遺跡、芝ヶ丘遺跡、河内寺跡、みかん山古墳群、孤塚遺跡、神並古墳群、辻子谷遺跡、馬場川遺跡、北鳥池遺跡、岩田遺跡、船山遺跡、五里山古墳群、若宮古墳群、出雲井遺跡群、舳古墳群、西ノ辻遺跡、東高野街道、桜井古墳群、千手寺山遺跡、上六万寺遺跡、段上遺跡、縄手遺跡の概要を収録した。

3．現場は才原金弘・木村健明・岩間俊之・吉田綾子・松田留美、遺物整理は現場担当者がおこない、報告の分担は各章の表に記した。

4．本書に収録した現場写真は、各担当者が撮影し、遺物は株式会社コミュニカに委託して実施した。

5. 土色名に数字が入っているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じている。

6. 調査の実施にあたっては、東大阪市建設局下水道部のご協力のもと、施工業者ならびに近隣市民の方々のご協力を賜った他、現場作業および整理作業には坂野正典、井上成、高畑慎太郎、松田亮一、岸部国次、辰巳友邦、泊清治郎、大山えりか、畑中愛、北野晴香、中野知香、堂阪加奈、高井真樹が従事した。これらの方々に記して感謝いたします。

# 目　　次


第１章　平成13年度の下水道関係調査について …… 1
第２章　山畑古墳群の調査…… 4
第３章　額田寺跡の調査…… 6
第４章　鬼虎川遺跡の調査…… 8
第５章　芝ヶ丘遺跡の第11次調査 ……10
第６章　河内寺跡の第９次調査 ……17
第７章　みかん山古墳群の調査 ……38
第８章　孤塚遺跡の第３次調査 ……40
第９章　神並古墳群の調査 ……45
第10章　辻子谷遺跡の調査 ……47
第11章　馬場川遺跡の調査 ……49
第12章　北鳥池遺跡の調査 ……51
第13章　馬場川遺跡の第12次調査 ……53
第14章　岩田遺跡の第２次調査 ……70
第15章　船山遺跡の第５次調査 ……75
第16章　五里山古墳群の調査 ……88
第17章　山畑古墳群・遺跡の調査 ……90
第18章　若宮古墳群の調査 ……92
第19章　出雲井遺跡群の調査 ……94
第20章　舳古墳群第２次・西ノ辻遺跡第46次他の調査 ……96
第21章　桜井古墳群の第２次調査……104
第22章　山畑遺跡・古墳群の調査……108
第23章　千手寺山遺跡の調査……110
第24章　上六万寺遺跡の第６次調査……112
第25章　河内寺跡の第10次調査 ……121
第26章　段上・縄手（第16次）・上六万寺遺跡の調査 ……126
附　章　西ノ辻遺跡第43次調査出土の縄文土器 ……134

# 第１章　平成13年度の下水道関係調査について

下水道管埋設工事に伴う発掘調査を平成11年度より東大阪市教育委員会が実施しており、４年が経過した。下水道工事は前年と同様に東地区を中心におこなわれた。

今年度の調査件数及び調査内容の概略は下記の調査一覧表に記した。調査にあたり下水道部と文化財課で協議したが、今年も工事は道幅の狭い旧集落内や道路の迂回路が確保できない場所が多かった。種々の条件により立会調査が中心になった。また、交通量の問題から夜間工事になり、調査を断念した遺跡もある。

今年度の調査成果は馬場川遺跡で縄文時代晩期の集落を検出したことや桜井古墳群の北で古墳に共伴する可能性がある遺物を確認したことなどが上げられる。

今回の収録した調査は平成13年１月１日より12月31日までに実施したものを対象とし、それ以後のものは次年度に報告することにした。

平成13年度下水道工事に伴う埋蔵文化財の調査一覧表

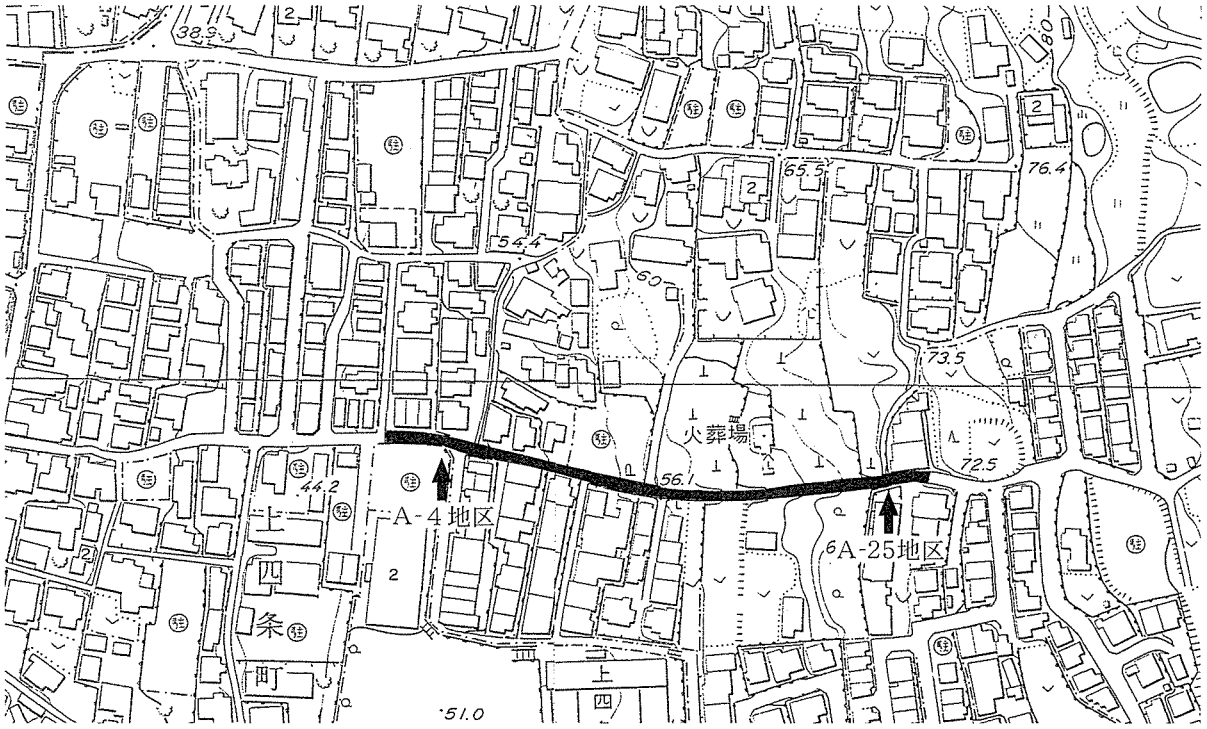
| | 届出番号 | 下水番号 | 遺跡名 | 届出の工事名称 | 調査場所 | 調査 | 調査期間 | 調査結果・所見 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 12-173 | 下設-55 | 山畑古墳群 | 平成11年度公共下水道第44工区管きょ築造工事 | 上四条町 | 立会 | 12.9.6～13.6.26 | 第２章で報告。 |
| 2 | 12-365 | 下事-13 協-12-24 | 額田寺跡 | 平成11年度公共下水道第１－８工区管きょ築造工事 | 東山町～立花町 | 立会 | 12.10.16～13.1.16 | 第３章で報告。 |
| 3 | 12-637 | | 鬼虎川遺跡 | 平成12年度公共下水道第43工区管きょ築造工事 | 弥生町 | 立会 | 13.5.9～13.5.21 | 第４章で報告。 |
| 4 | 12-665 | 下事-64 協-12-8 | 芝ヶ丘遺跡 | 平成11年度公共下水道第1－5工区管きょ築造工事 | 中石切町2丁目～4丁目 | 立会 | 13.1.9～13.2.20 | 第５章で報告。 |
| 5 | 12-666 | 下事-63 協-12-7 | 河内寺跡 | 平成12年度公共下水道第５工区管きょ築造工事 | 本町・河内町 | 立会 | 13.5.11～13.6.26 | 第６章で報告。 |
| 6 | 12-667 | 下事-66 協-12-10 | 東高野街道 | 平成12年度公共下水道第７工区管きょ築造工事 | 喜里川町 | 慎重 | | 工事実施。 |
| 7 | 12-668 | 下事-65 協-12-K-7 | みかん山古墳群 | 平成12年度公共下水道第12－1工区管きょ築造工事 | 山手町 | 立会 | 13.4.3～13.5.24 | 第７章で報告。 |
| 8 | 12-669 | 下事-62 追加 | 孤塚遺跡 | 平成12年度公共下水道第202工区管きょ築造工事 | 喜里川町 | 立会 | 13.3.1～13.3.19 | 第８章で報告。 |
| 9 | 12-683 | | 出雲井遺跡群 | 平成12年度公共下水道近鉄奈良線横断部管きょ築造工事(夜間) | 出雲井町 | 慎重 | | 夜間工事のため調査できなかった。工事実施。 |
| 10 | 12-684 | | 河内寺跡 | 平成12年度公共下水道近鉄奈良線横断部管きょ築造工事(夜間) | 客坊町 | 慎重 | | 夜間工事のため調査できなかった。工事実施。 |
| 11 | 12-685 | 下事-79 | 神並古墳群 | 平成12年度公共下水道第12－2工区管きょ築造工事 | 山手町 | 立会 | 13.1.11～13.2.27 | 第９章で報告。 |
| 12 | 13-24 | 下事-7 | 辻子谷遺跡 | 平成12年度公共下水道第３工区管きょ築造工事 | 中石切町２丁目 | 立会 | 13.1.22～13.2.26 | 第10章で報告。 |

| | 届出番号 | 下水番号 | 遺跡名 | 届出の工事名称 | 調査場所 | 調査 | 調査期間 | 調査結果・所見 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | 13-36 | 下事-20 | 馬場川遺跡 | 平成12年度公共下水道第37工区管きょ築造工事 | 横小路町３丁目 | 立会 | 13.6.4～13.7.25 | 第11章で報告。 |
| 14 | 13-37 | 下事-19 | 北鳥池遺跡 | 平成12年度公共下水道第13工区管きょ築造工事 | 若草町 | 立会 | 13.1.30～13.3.7 | 第12章で報告。 |
| 15 | 13-38 | 下事-21 | 馬場川遺跡 | 平成12年度公共下水道第20工区管きょ築造工事 | 横小路町３丁目 | 立会 | 13.5.1～13.10.12 | 第13章で報告。 |
| 16 | 13-59 | 下事-36 | 岩田遺跡 | 平成12年度公共下水道第48工区管きょ築造工事 | 岩田町５丁目 | 立会 | 13.7.1～13.9.25 | 第14章で報告。 |
| 17 | 13-60 | 下事-37 | 鬼虎川遺跡 | 平成12年度公共下水道第16工区管きょ築造工事 | 宝町 | 慎重 | | 夜間工事のため、慎重に変更。工事実施。 |
| 18 | 13-61 | 下事-38 | 船山遺跡 | 平成12年度公共下水道第26工区管きょ築造工事 | 六万寺町３丁目 | 立会 | 13.3.19～13.6.21 | 第15章で報告。 |
| 19 | 13-115 | 下事-68 | 出雲井遺跡群 | 平成12年度公共下水道第12－３工区管きょ築造工事 | 出雲井町 | 立会 | 13.9.26～ | 調査中。 |
| 20 | 13-116 | 下事-69 | 五里山古墳群 | 平成12年度公共下水道第38工区管きょ築造工事 | 上六万寺町 | 立会 | 13.4.3～13.4.28 | 第16章で報告。 |
| 21 | 13-117 | 下事-67 | 山畑古墳群・遺跡 | 平成12年度公共下水道第11工区管きょ築造工事 | 上四条町 | 立会 | 13.5.11～13.7.19 | 第17章で報告。 |
| 22 | 13-134 | 下事-83 | 西ノ辻遺跡 | 平成12年度公共下水道第12工区管きょ築造工事 | 宝町・南荘町 | 慎重 | | 工事実施。 |
| 23 | 13-135 | 下事-84 | 鬼塚遺跡 | 平成12年度公共下水道第12工区管きょ築造工事 | 宝町・南荘町 | 慎重 | | 工事実施。 |
| 24 | 13-157 | 下事-96 | 若宮古墳群 | 平成12年度公共下水道第27工区管きょ築造工事 | 額田町997～1125地先 | 立会 | 13.8.23～13.12.3 | 第18章で報告。 |
| 25 | 13-158 | 下事-97 | 和泉遺跡 | 平成12年度公共下水道第209工区管きょ築造工事 | 中石切町５丁目2939～2942地先 | 立会 | 13.5.10 | 延べ1日の立会調査を実施。工事予定地には既設管があり、工事掘削深度まですべて撹乱であった。 |
| 26 | 13-159 | 下事-98 | 出雲井遺跡群 | 平成12年度公共下水道第２工区管きょ築造工事 | 出雲井本町304～424地先 | 立会 | 13.9.26～13.11.19 | 第19章で報告。 |
| 27 | 13-160 | 下事-99 | 北鳥池遺跡 | 平成12年度公共下水道第44工区管きょ築造工事 | 下六万寺３丁目1112～1794地先 | 慎重 | | 夜間工事のため慎重に変更。工事実施。 |
| 28 | 13-161 | 下事-100 | 舳古墳群 | 平成12年度公共下水道第６工区管きょ築造工事 | 東山町917～1059地先 | 立会 | 13.6.11～13.11.15 | 第20章で報告。 |
| 29 | 13-162 | 下事-101 | 西ノ辻遺跡 | 平成12年度公共下水道第６工区管きょ築造工事 | 東山町736～1248地先 | 立会 | 同上 | 同上 |
| 30 | 13-163 | 下事-102 | 東高野街道 | 平成12年度公共下水道第６工区管きょ築造工事 | 東山町736～1248地先 | 立会 | 同上 | 同上 |
| 31 | 13-226 | 下事-129 | 桜井古墳群 | 平成12年度公共下水道第31工区管きょ築造工事 | 六万寺1丁目949～957 | 立会 | 13.7.17～13.11.1 | 第21章で報告。 |

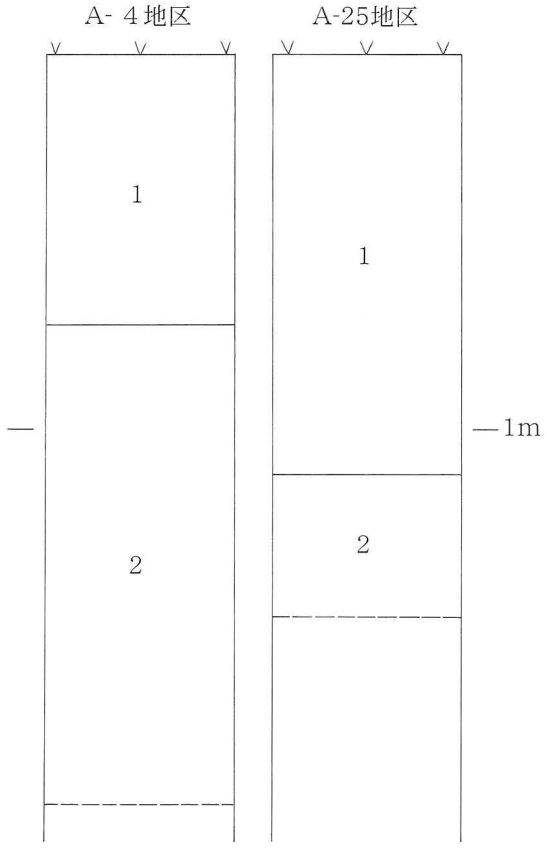
| | 届出番号 | 下水番号 | 遺跡名 | 届出の工事名称 | 調査場所 | 調査 | 調査期間 | 調査結果・所見 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 32 | 13-227 | 下事-130 | 額田山古墳群 | 平成12年度公共下水道第12－4工区管きょ築造工事 | 山手町1954～2142 | 立会 | | 平成13年5月16日受付 |
| 33 | 13-228 | 下事-131 | 額田山古墳群 | 平成12年度公共下水道第12－5工区管きょ築造工事 | 山手町2142－4～2141 | 立会 | | 平成13年5月16日受付 |
| 34 | 13-229 | 下事-132 | 山畑遺跡・古墳群 | 平成12年度公共下水道第23工区管きょ築造工事 | 上四条町1693～2063 | 立会 | 13.5.28～13.10.12 | 第22章で報告。 |
| 35 | 13-230 | 下事-133 | 暗峠越奈良街道 | 平成12年度公共下水道第50工区管きょ築造工事 | 松原1丁目21番地先 | 慎重 | | 工事実施。 |
| 36 | 13-231 | 下事-134 | 千手寺山遺跡 | 平成12年度公共下水道第45工区管きょ築造工事 | 東石切町4丁目363 | 立会 | 13.9.6～13.10.2 | 第23章で報告。 |
| 37 | 13-295 | 下事-158 | 上六万寺遺跡 | 平成12年度公共下水道第29工区管きょ築造工事 | 上六万寺町1394～1940地先 | 立会 | 13.8.17～13.10.12 | 第24章で報告。 |
| 38 | 13-356 | 下事-183 | 河内寺跡 | 平成12年度公共下水道第47工区管きょ築造工事 | 河内町669～685 | 立会 | 13.10.30～13.11.26 | 第25章で報告。 |
| 39 | 13-449 | 下事-201 | 水走氏館跡 | 平成12年度公共下水道第12－3工区管きょ築造工事 | 五条町1319、1213 | 立会 | | 平成13年9月4日受付 |
| 40 | 13-450 | 下事-217 | 河内寺跡 | 平成12年度公共下水道第12－3工区管きょ築造工事 | 客坊町700地先 | 立会 | | 平成13年9月4日受付 |
| 41 | 13-451 | 下事-216 | 客坊山古墳群 | 平成12年度公共下水道第12－3工区管きょ築造工事 | 客坊町1570地先 | 立会 | | 平成13年9月4日受付 |
| 42 | 13-452 | 下事-218 | 山畑古墳群 | 平成13年度公共下水道第3工区管きょ築造工事 | 瓢箪山町35～308、335、342 | 立会 | 13.8.23～ | 調査中。 |
| 43 | 13-453 | 下事-219 | 段上・縄手・上六万寺遺跡 | 平成13年度公共下水道第8工区管きょ築造工事 | 六万寺町3丁目 | 立会 | 13.10.25～13.12.17 | 第26章で報告。 |
| 44 | 13-487 | 下事-228 | 日下遺跡 | 平成12年度公共下水道第212工区管きょ築造工事 | 日下町1163～3丁目1169地先 | 立会 | | 平成13年9月4日受付 |
| 45 | 13-534 | 下事-245 | 善根寺山遺跡 | 平成13年度公共下水道第28工区管きょ築造工事 | 善根寺6町目739地先 | 立会 | | 業者の事前着工により、調査はできなかった。 |
| 46 | 13-575 | 下事-259 | 法通寺跡辻子谷遺跡 | 平成13年度公共下水道第22工区管きょ築造工事 | 中石切町1丁目641～596地先 | 立会 | | 平成13年10月26日受付 |
| 47 | 13-576 | 下事-253 | 山畑古墳群 | 平成13年度公共下水道第5工区管きょ築造工事 | 上四条町380～371地先 | 立会 | | 平成13年10月26日受付 |
| 48 | 13-577 | 下事-245 | 皿池遺跡河内寺跡 | 平成13年度公共下水道第21工区管きょ築造工事 | 河内町334、336、438～434地先 | 立会 | 13.12.4～ | 調査中。 |
| 49 | 13-659 | 下事-309 | 出雲井遺跡群 | 平成12年度公共下水道第12－3追加工区管きょ築造工事 | 出雲井町267～262 | 立会 | 13.9.26～ | 調査中。 |

# 第２章　山畑（やまはた）古墳群の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成11年度公共下水道第44工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市上四条町 |
| 3 | 調 査 面 積 | 304㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成12年９月６日～平成13年６月26日（延べ34日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は東大阪市立上四条小学校の北である。当地点は山畑古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約1.7～2.1mで長さ172mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（１/2500）




土層断面柱状図

調査地遠景

掘削状況

土層断面

1. 調査の概要

A－4地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒色(10YR2/1)小～巨礫混じり粘土。

A－25地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒褐色(2.5Y3/1)細～中粒砂混じり粘土質シルト。

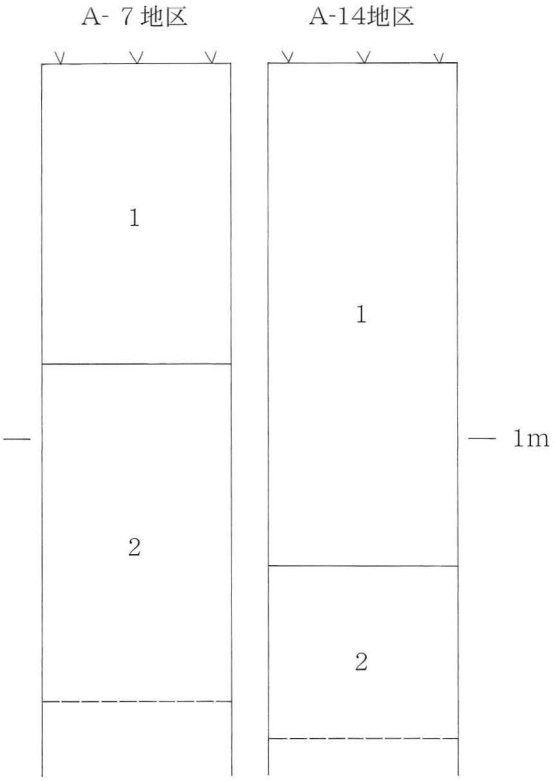
2. まとめ

立会調査を実施したが遺構・遺物は検出できなかった。

# 第３章　額田寺（がくでんじ）跡の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成11年度公共下水道第１－８工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市東山町～立花町 |
| 3 | 調 査 面 積 | 95㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成12年10月16日～13年１月16日（延べ41日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪枚岡奈良線の北で旧170号線の東に位置する。当地点は額田寺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ112mの間であり、開削工法である。 |

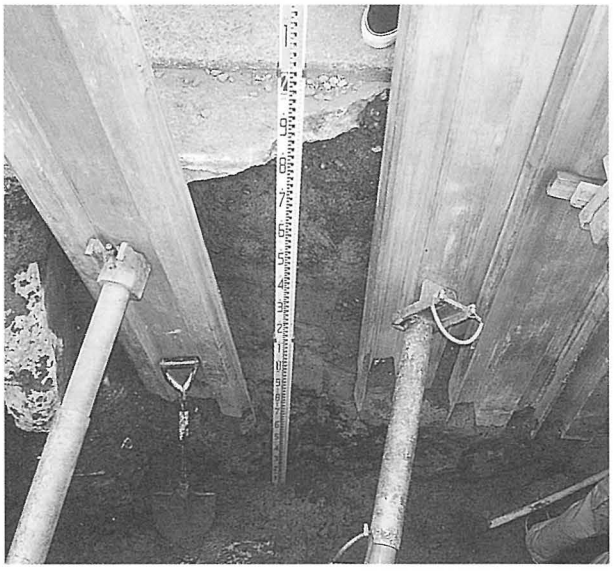
調査地点位置図（１/2500）




土層断面柱状図

調査地遠景

掘削状況



土層断面

1. 調査の概要

A－7地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒色(10YR2/1)粗粒砂～大礫混じり粘質土。中世期の遺物を微量含む。

A－14地区の層序

第1層　盛土。

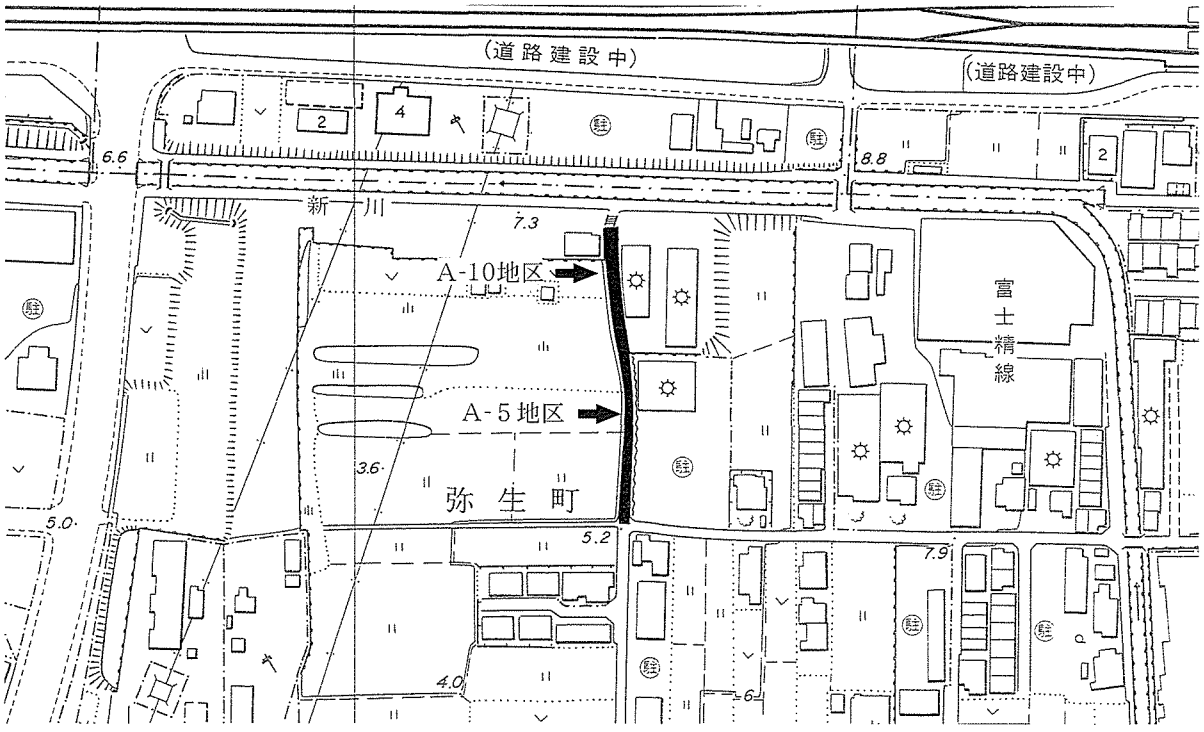
第2層　黒褐色(2.5Y3/2)中礫混じり粘質土。中世期の遺物を微量含む。

2. まとめ

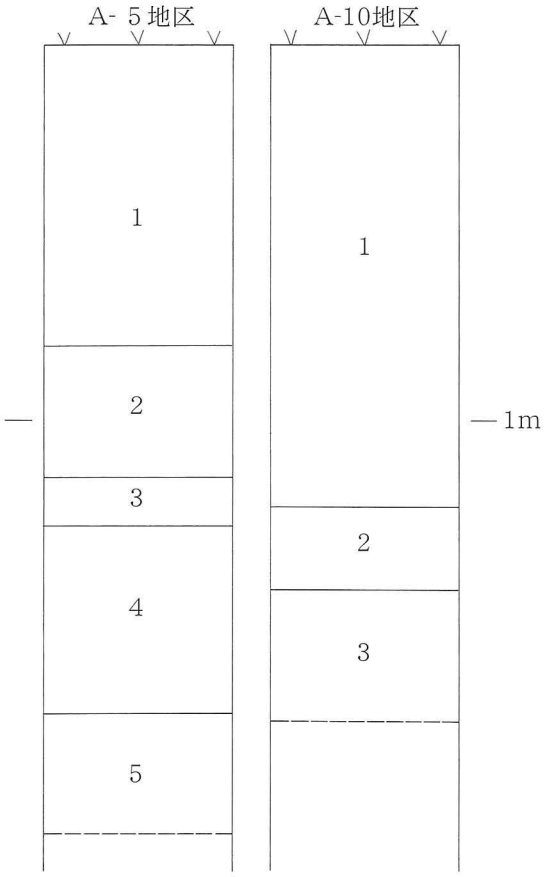
第2層で中世期の土師器・瓦器の細片が出土したが明確な遺物包含層とは言いがたい。

# 第４章　鬼虎川（きとらがわ）遺跡の調査

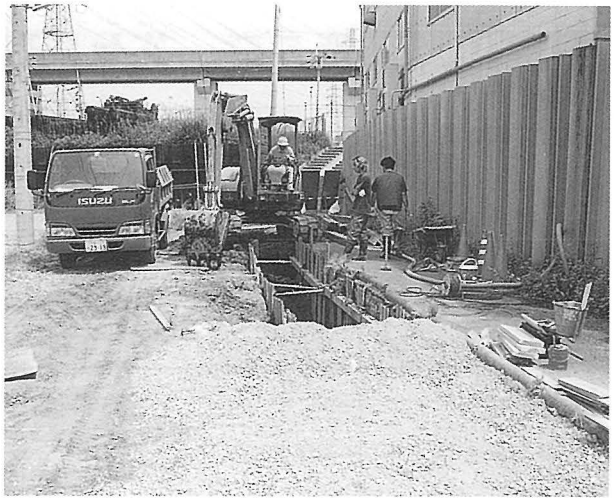
| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第12－43工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市弥生町 |
| 3 | 調 査 面 積 | 81㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年５月９日～５月21日（延べ８日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は外環状線（国道170号線）と国道308号線の交差点より南東である。鬼虎川遺跡の第45次調査地点より北へ伸びる。当地点は鬼虎川遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約1.1mで長さ81mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（1/2500）

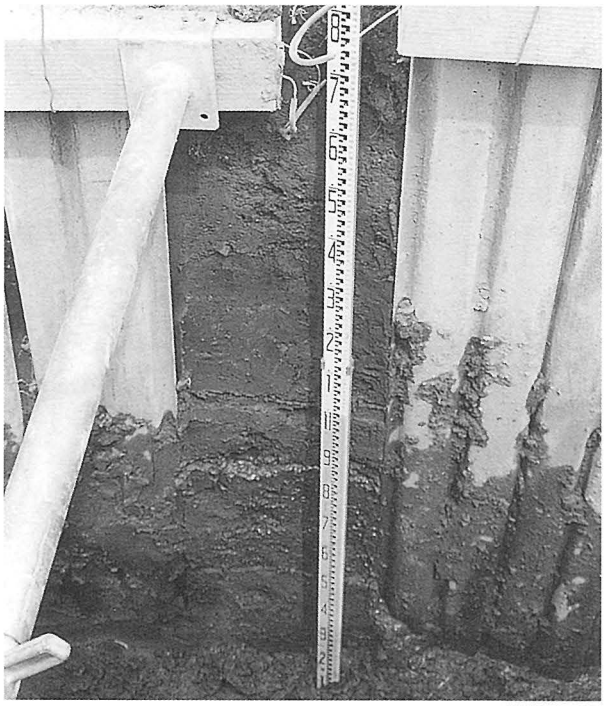



土層断面柱状図



調査地遠景

掘削状況



土層断面

1. 調査の概要

A－5地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト。

第3層　灰色(7.5Y4/1)砂。

第4層　オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂混じりシルト。

第5層　暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細～中粒砂混じりシルト。

A－10地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗緑灰色(10GY3/1)小礫混じり粘土質シルト。

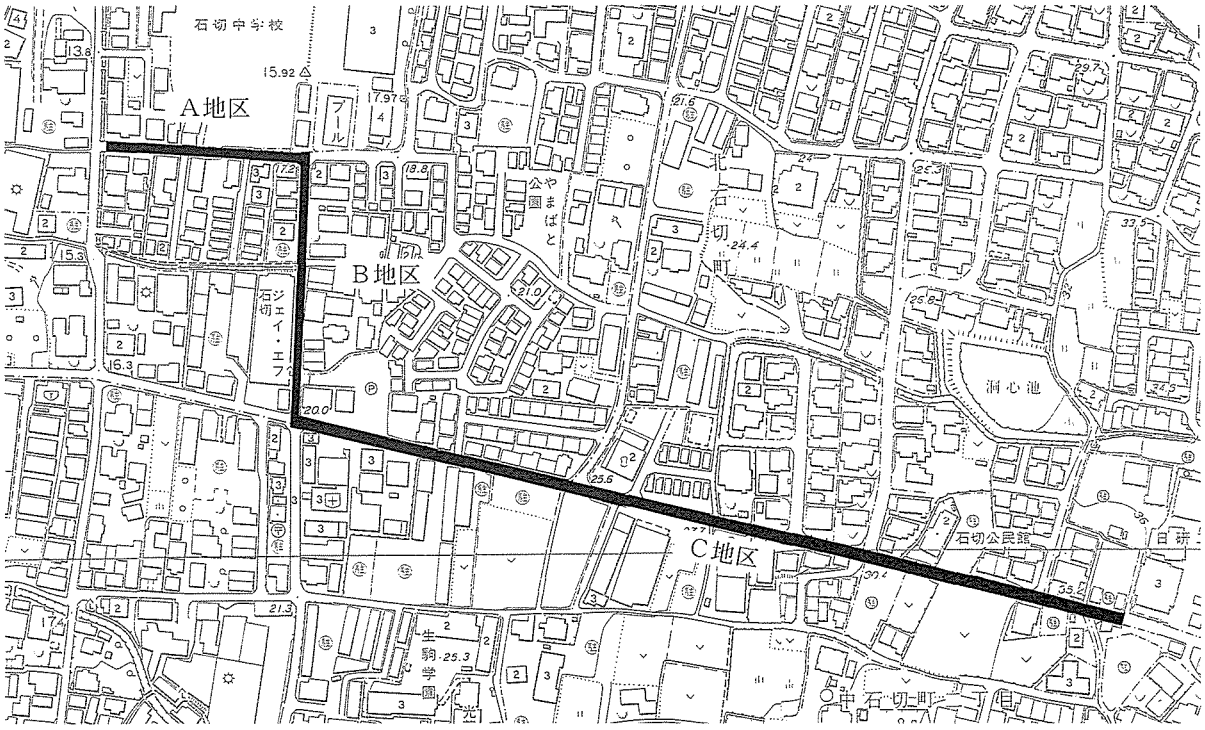
第3層　灰オリーブ色(5Y4/2)小礫混じりシルト。

2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

# 第５章　芝ケ丘（しばがおか）遺跡の第11次調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成11年度公共下水道第１－５工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調査地点 | 東大阪市中石切町２丁目～４丁目 |
| 3 | 調査面積 | 587㎡ |
| 4 | 調査期間 | 平成13年１月９日～２月20日（延べ25日） |
| 5 | 報告担当 | 松田留美 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は石切中学校の南である。当地点は芝ヶ丘遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ691mの間であり、開削工法である。Ｃ地区は夜間工事のため、立会調査はできなかった。 |




調査地点位置図（１/3300）

1. 調査の概要

当遺跡は生駒山麓から市立石切中学校周辺一帯に広がる扇状地上に立地する。調査地は同中学校の南側に位置し、東西をＡ地区、南北をＢ地区と呼称して調査を行った。

Ａ－２地区の層序

第１層　盛土。

第２層　灰色(10Y4/1)シルト。遺物が出土。

第３層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト。遺物が出土。

第４層　灰色(7.5Y4/1)シルト。

Ｂ－１地区の層序

第１層　盛土。

第２層　灰色(7.5Y4/1)シルト～砂質土。遺物が出土。

第３層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト。遺物が出土。

第４層　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト。

Ｂ－５地区の層序

第１層　盛土。

第２層　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。細礫を含む。遺物が出土。

第３層　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。細礫を含む。第１層より粘性が強い。遺物が出土

第４層　黒褐色(10YR3/1)粘質土。下にいくにしたがって0.5～４cmの細礫から0.5～10cmの細礫～中礫を多く含む。

2. 出土遺物

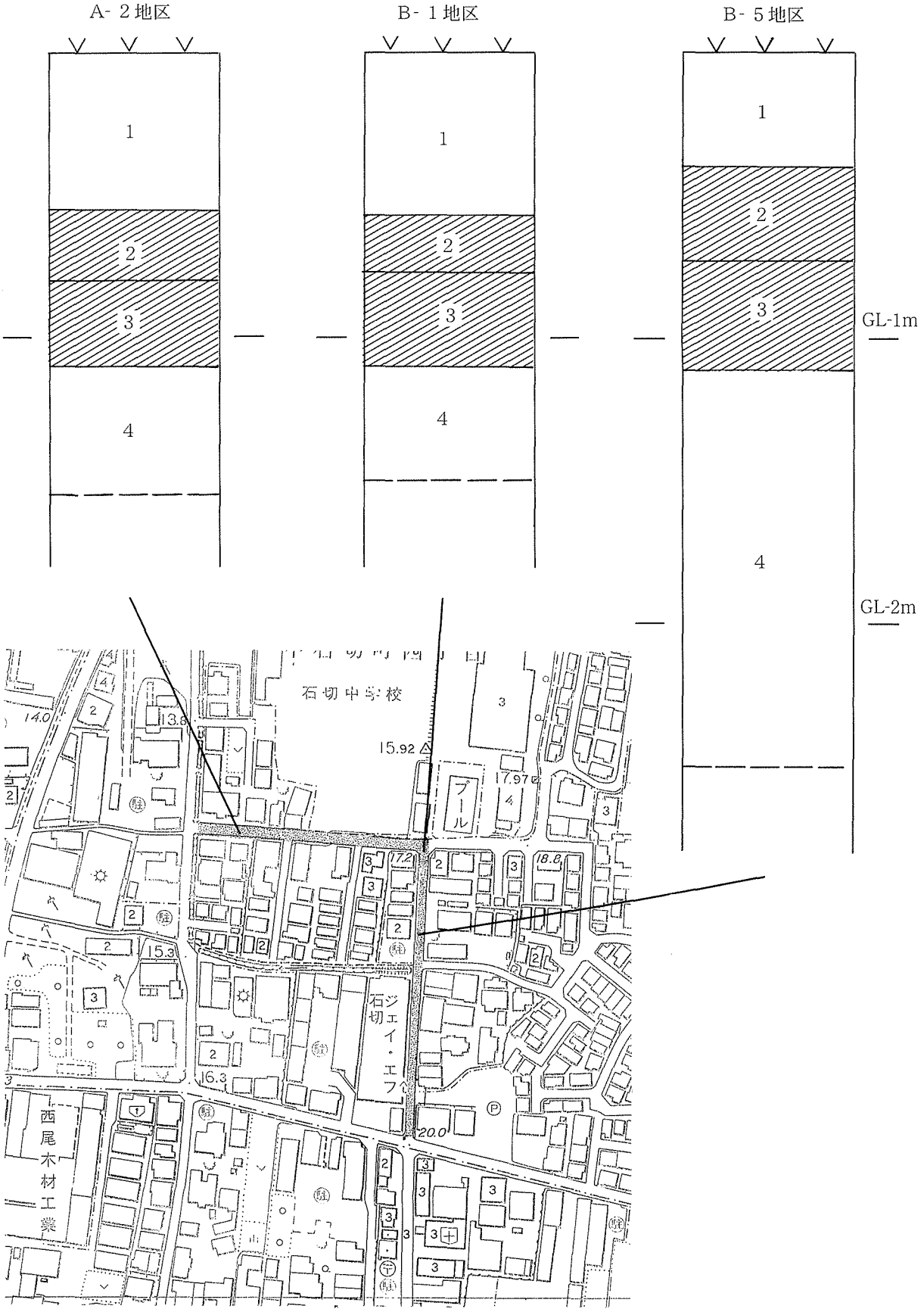
出土遺物には弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、韓式系土器、製塩土器、奈良～平安時代の須恵器、黒色土器、中世期の瓦器などがある。２・３はＢ－１地区第３層、５はＢ－８地区第３～６層、６・８はＢ－３地区第３～４層、19はＢ－1～３地区第３～４層から出土し、その他のものの出土層位は不明であるが、遺物は地表下約0.7m以下に堆積する黒褐色～灰色系シルト（土層断面図の各地区第２、３層に相当する）を中心に出土した。以下、概要を述べる。

弥生土器（１～４）１は壷の体部である。８条/1.2cmの櫛により直線文と波状文を交互に施す。２～４は平底の底部である。いずれも生駒西麓産の胎土をもつ。

土師器（５～10）５～７は甕である。５は外反して立ち上がる口縁部をもち、端部は内側に肥厚し、内傾する面をもつ。体部外面にハケメが残る。生駒西麓産の胎土をもつ。６は内弯気味に立ちあがる口縁部を持ち、端部は肥厚する。頸部内面はやや鈍角に屈曲し、以下はケズリを施す。体部外面には粗いハケを施す。布留式期。８は小形鉢である。扁球形の体部から短く外傾して立ちあがる口縁部をもつ。内面調整はハケののち体部から底部にかけて粗い放射状暗文を施す。外面調整は摩滅のため不明である。９・10は高杯である。９は杯部で口縁部は内弯気味に立ちあがり、端部はやや外側に肥厚する。内面にハケメが残る。10は脚裾部である。

韓式系土器（14～17）いずれも軟質である。14は甕である。体部外面に平行叩きを施す。15は甑の底部で円孔が１箇所残る。体部外面に格子叩きを施す。底部付近に黒斑がある。16・17は体部片である。16は縄蓆文叩き、17は格子叩きを施す。14・15は生駒西麓産の胎土をもつ。５世紀中葉以降。

製塩土器（11～13）截頭卵形を呈する丸底Ｉ式に該当するもの。５世紀中葉以降。器壁は２～３㎜前後である。11・12は体部外面に横方向の叩き、内面にはナデを施す。11は口径5.6cm、残存高6.3cmを測る。二次焼成を受けている。色調は灰白色を呈する。12は口径3.2cmを測り、色調はにぶい黄


A- 2地区
B- 1地区
B- 5地区
1
2
3
4
GL-1m
GL-2m
石切中学校
プール
石切ジェイ・エフ
西尾木材工業
14.0
13.8
15.92
17.97
17.2
18.8
15.3
16.3
20.0

土層断面柱状図

褐色～にぶい橙色、13は口径3.6cmを測り、色調は橙色を呈する。

須恵器（18～21）18は杯蓋である。天井部はやや丸みを帯び稜は鈍い。口縁端部には内傾する凹面をもつ。天井部の約１/２まで回転ヘラケズリを施す。口径は12.6cmを測る。19は杯である。口縁端部には内傾する凹面をもつ。20は杯Ａである。21は壷である。口縁部から下がったところに沈線が１条残る。18・19は５世紀中葉以降、20・21は奈良時代以降の所産である。

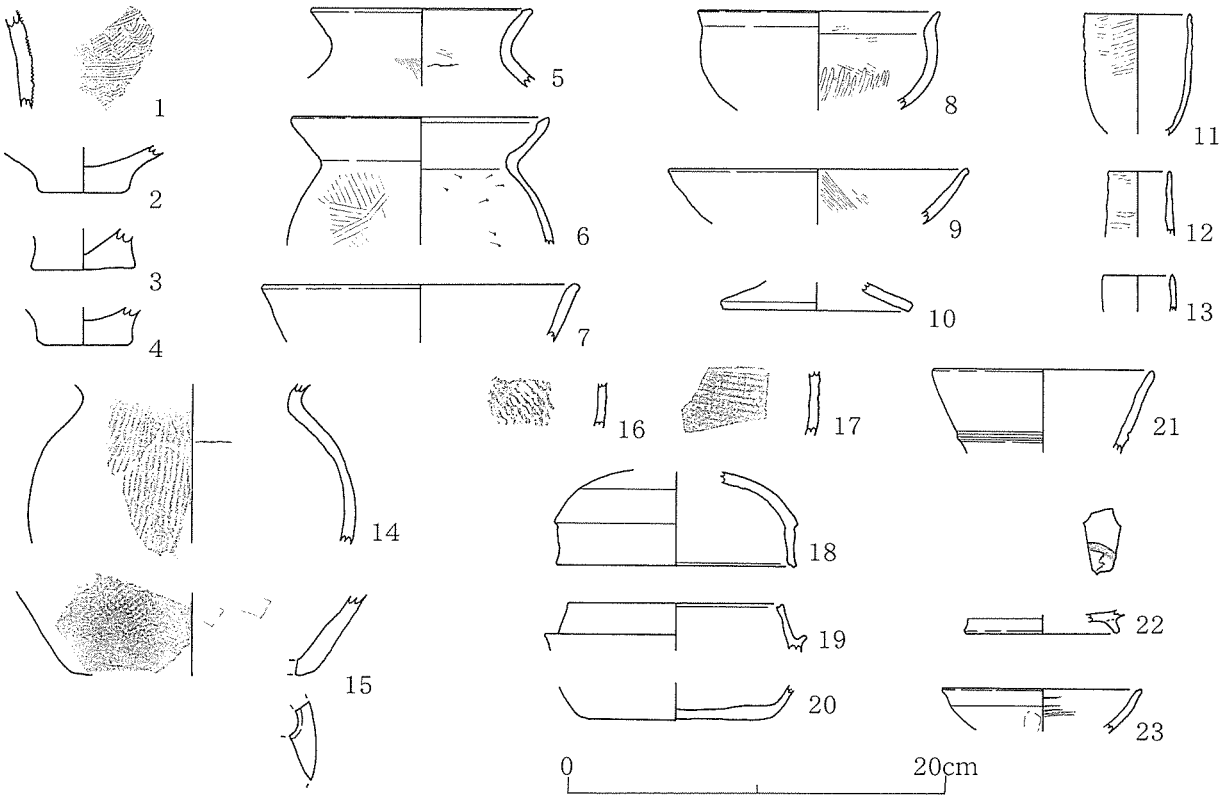
黒色土器（22）高台部である。内面黒色のＡ類である。内面に暗文が残る。９世紀以降。

瓦器（23）椀である。口縁端部内側に１条の沈線を施す。大和型である。外面は口縁部をヨコナデし、以下は不調整で指頭痕が残る。内面は細い暗文をまばらに施す。

3. まとめ

調査地は市立石切中学校の南側に隣接する。同中学校敷地内の東側では昭和47～59年の間に４回にわたって発掘調査が行われ、縄文時代後期～古墳時代の遺構および遺物を検出した。第４次調査では古墳時代中期の掘立柱建物を検出し、本調査地では遺構は検出できなかったが、地表下約0.7m以下に堆積する黒褐色～灰色系シルト（土層断面柱状図の各地区第２、３層に相当する）を中心に古墳時代の遺物が出土しており、第４層上面がこの遺構面に対応するものと考えられる。また、第４次調査地点に近いＢ－１～３地区に集中して古墳時代の製塩土器、韓式系土器が出土した。

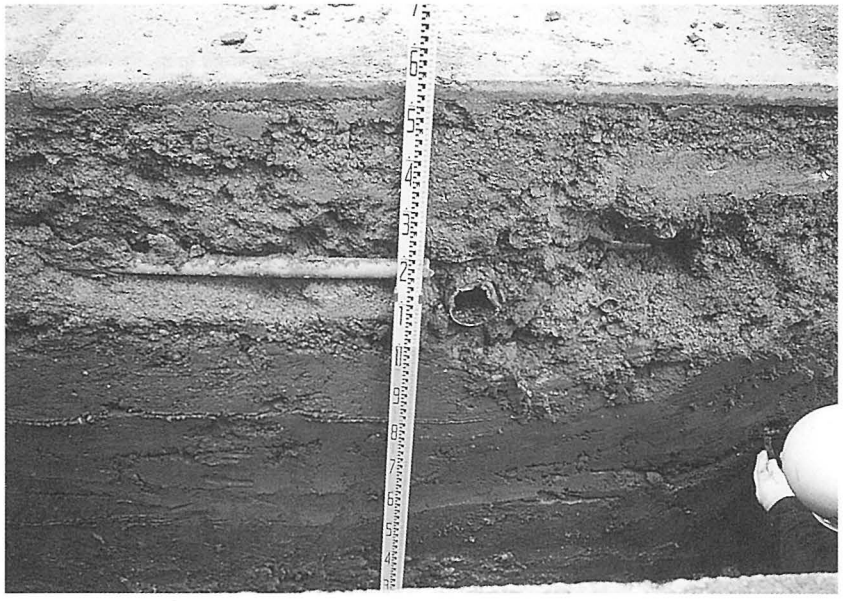
今回の調査では古墳時代の遺構を形成すると考えられる土層の堆積を確認することができ、これは居住域が南側に広がる可能性を示唆するものである。



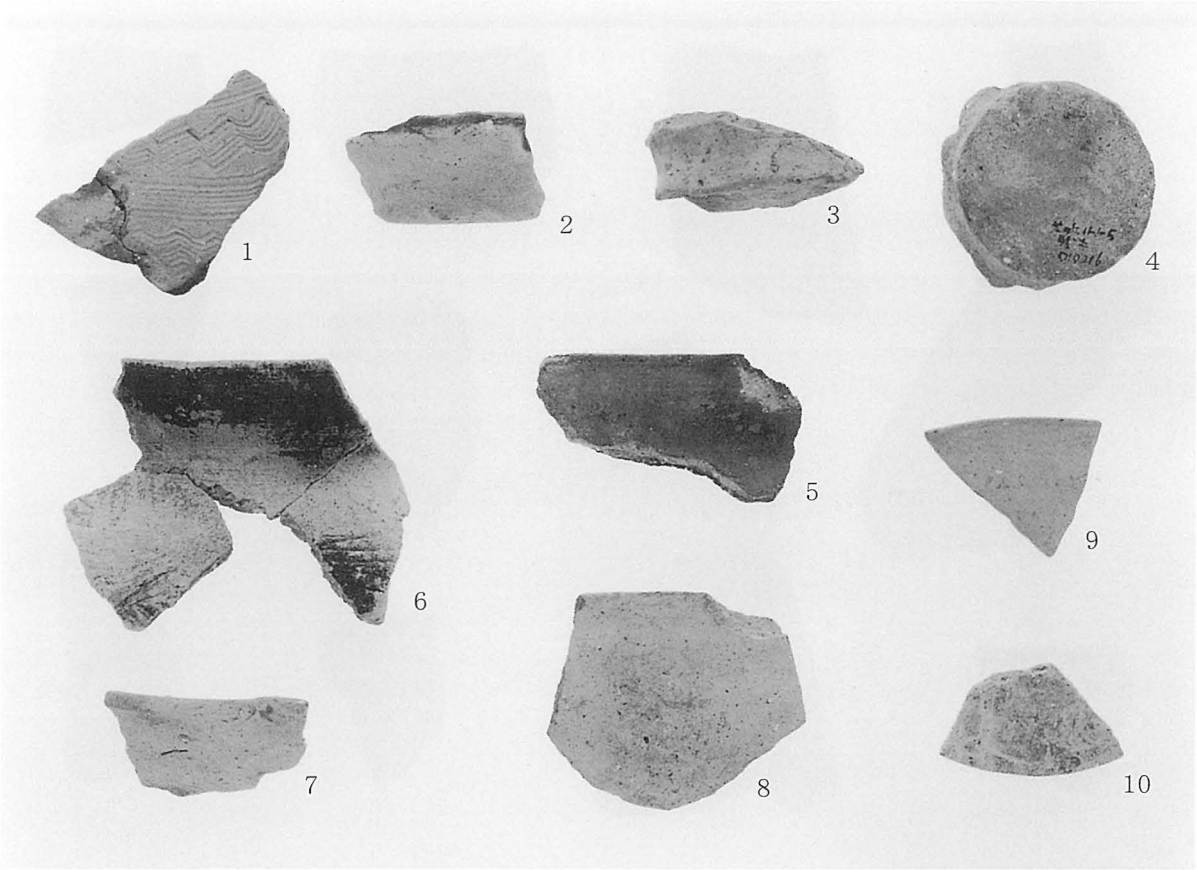

出土遺物実測図

A地区調査地近景

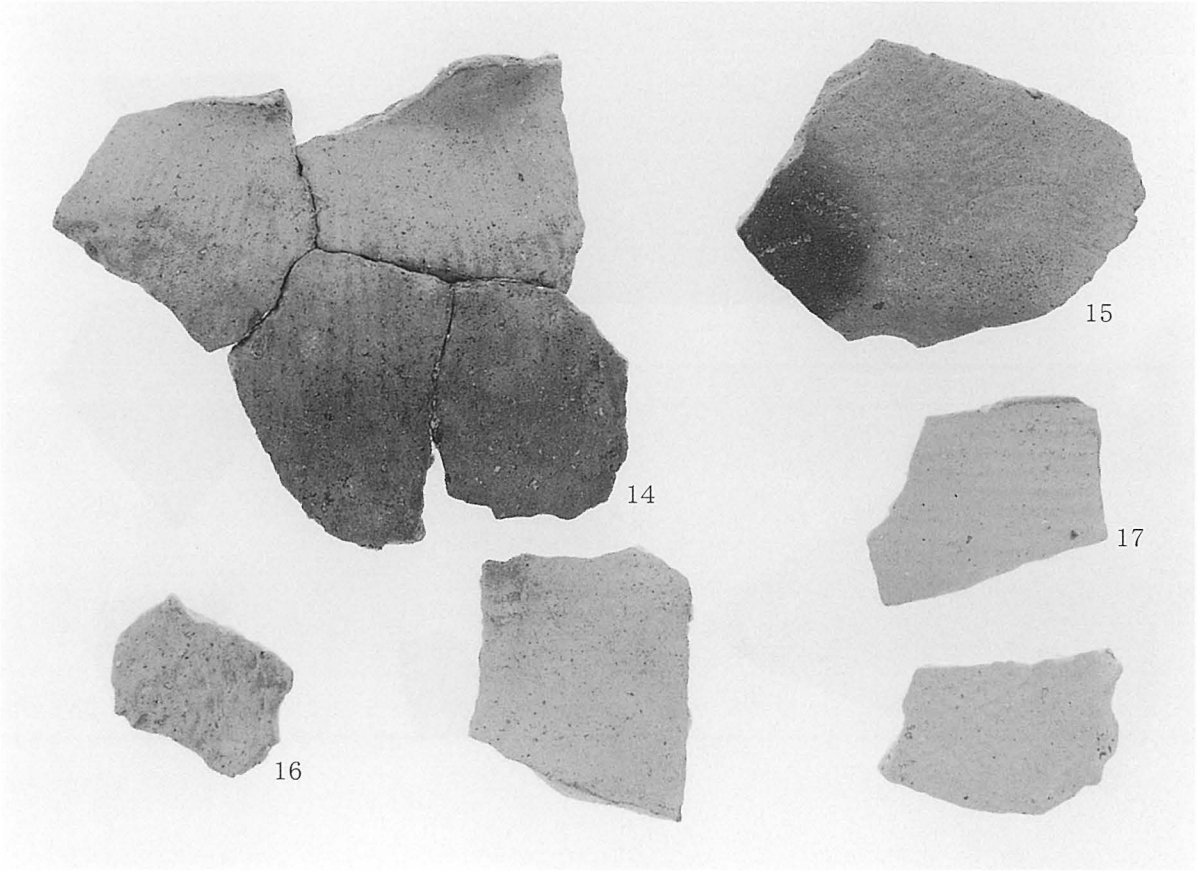
A－2地区土層断面



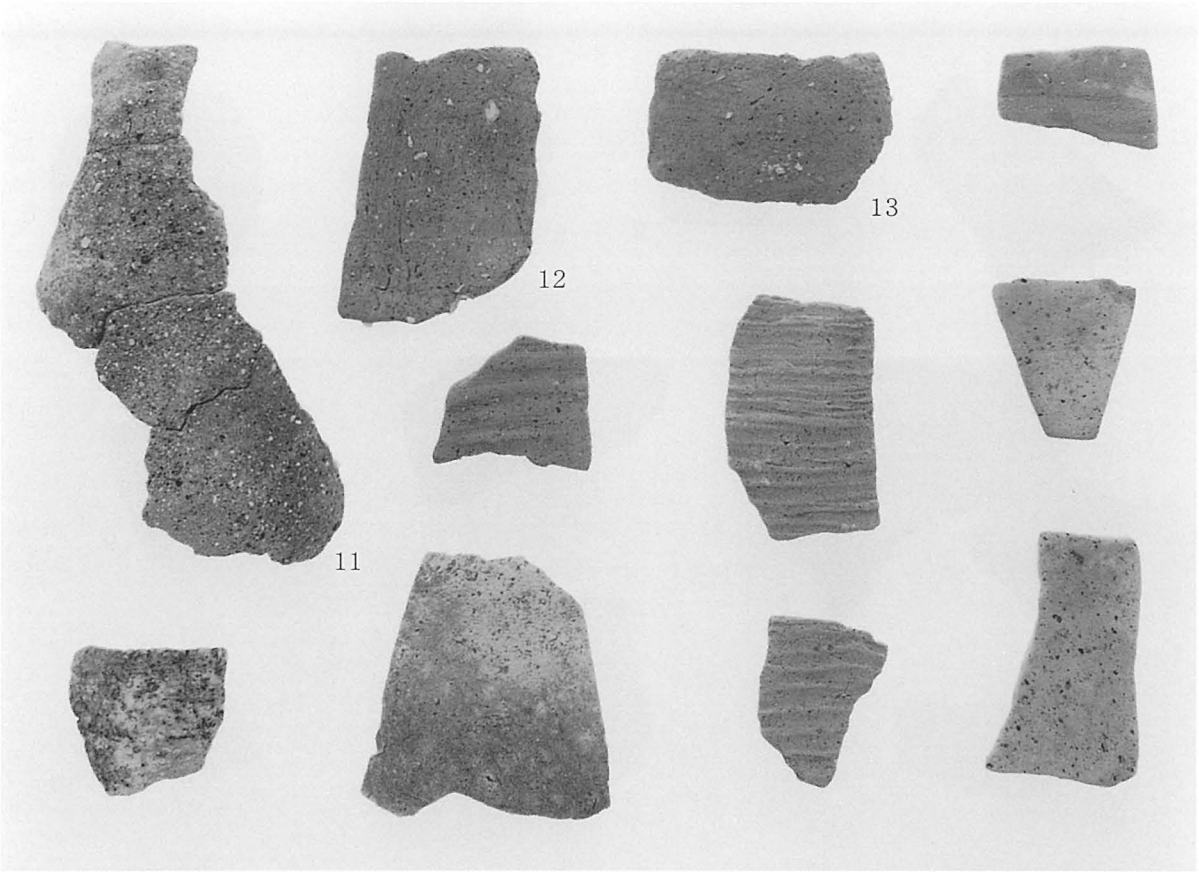
B－1地区土層断面



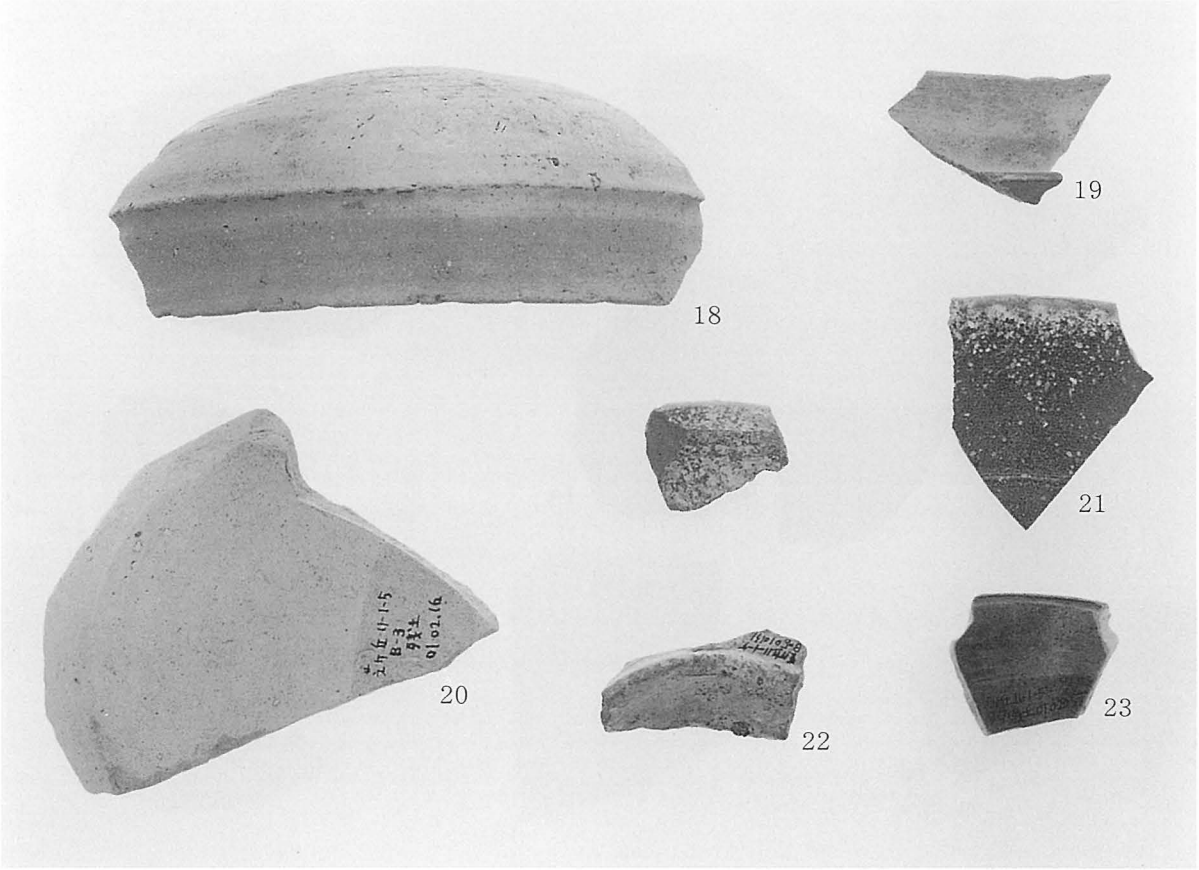

出土遺物（弥生土器・土師器）




出土遺物（韓式系土器）



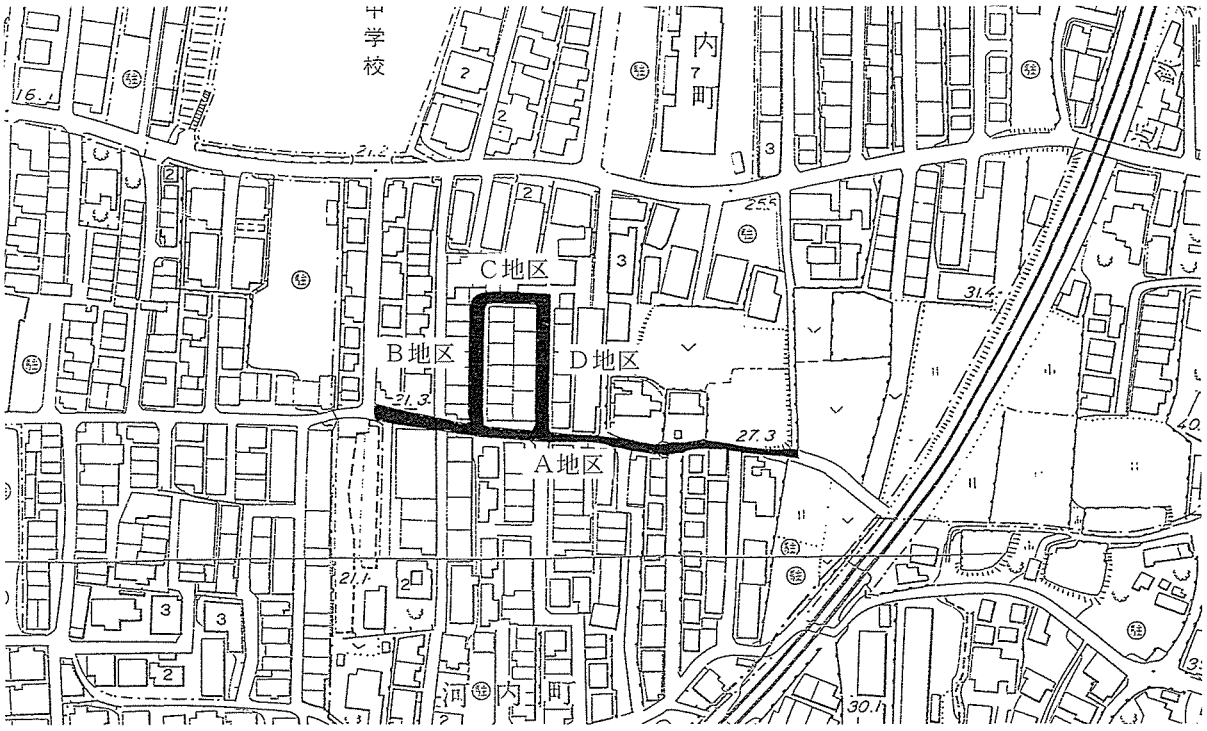

出土遺物（製塩土器）




出土遺物（須恵器・黒色土器・瓦器）

# 第６章　河内寺（かわちでら）跡の第９次調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第５工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市本町・河内町 |
| 3 | 調 査 面 積 | 205㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年５月11日～６月26日（延べ21日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 吉田綾子 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は縄手北中学校の南東である。当地点は河内寺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ241mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（1/2500）

1. 調査の概要

調査は便宜上Ａ～Ｄ地区に分け、Ａ地区から順次調査を行った。

Ａ地区の中程から東側にかけて(Ａ－10′地区～Ａ－13地区周辺)にかけて、瓦器や土師器などとともに多量の瓦が出土する層を確認した。またＡ地区の中ほどからＢ～Ｄ地区（Ａ－７地区～Ｃ－２地区周辺）では弥生時代後期の遺物包含層を部分的に確認した。

2. 層序

Ａ－１地区

第１層　盛土。

第２層　灰色(5Y5/1)小礫混じり砂質土。小礫が少量混じる。酸化鉄を含む。古墳時代～中世の遺物が出土。

第３層　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。酸化鉄が沈着。

第４層　灰色(10Y4/1)礫混じり粘土質シルト。３～７cm大の礫が多量に混じる。

第５層　灰色(7.5Y4/1)細粒砂・礫混じり粘土質シルト。細粒砂、２cm大の礫が少量混じる。

第６層　オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂～小礫混じり粘土質シルト。細粒砂～小礫が少量混じる。炭化物を少量含む。弥生時代の遺物が出土。

Ａ－７地区

第１層　盛土。

第２層　オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂～中粒砂・礫混じり粘土質シルト。中礫～６cm大の礫が混じる。古墳時代～中世の遺物が出土。

第３層　オリーブ黒色(10Y3/1)中礫混じり細粒砂質シルト。

第４層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)礫混じり細粒砂質シルト。中礫～５cm大の礫が小量混じる。弥生時代の遺物が出土。

第5層　灰色(10Y4/1)シルト混じり細粒砂。小礫が少量混じる。

Ａ－10′地区

第１層　盛土。

第２層　オリーブ黒色(5Y3/2)粘質土。

第３層　黒褐色(2.5Y3/2)中礫混じりシルト。中礫が少量混じる。古墳時代～中世の遺物が出土。

第４層　灰色(5Y4/1)細粒砂・礫混じりシルト。細粒砂、３～10cm大の礫が多量に混じる。

第５層　オリーブ黒色(5Y3/2)粗粒砂混じりシルト。

第６層　黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂・礫混じり粘土質シルト。細粒砂、中礫が少量混じる。酸化鉄が多量に沈着。

第７層　黒褐色(2.5Y3/2)小礫混じり粘土質シルト。小礫が少量混じる。弥生時代の遺物が出土。

Ａ－11地区

第１層　盛土。

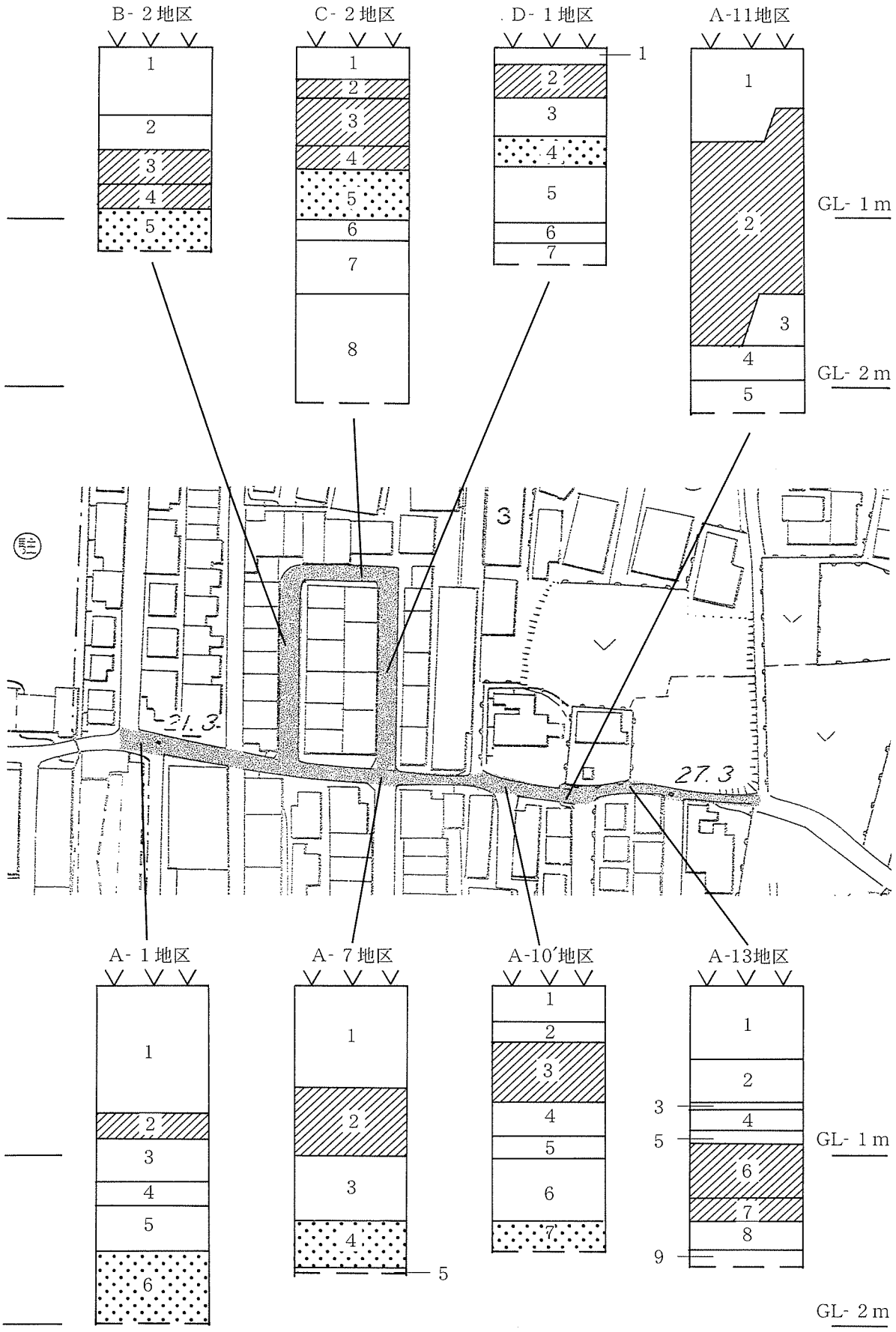
第２層　黒褐色(2.5Y3/2)礫混じり粘土質シルト。小礫、10～30cm大の礫が混じる。古墳時代～中世の遺物が出土。

第３層　灰色(5Y4/1)細粒砂～粗粒砂混じりシルト。

第４層　灰色(5Y4/1)細粒砂～礫混じりシルト。小礫～５cm大の礫混じる。

第５層　オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂混じりシルト。

Ａ－13地区


B- 2地区
C- 2地区
D- 1地区
A-11地区
GL- 1 m
GL- 2 m
21.3
27.3
A- 1地区
A- 7地区
A-10′地区
A-13地区
GL- 1 m
GL- 2 m

土層断面柱状図

第１層　盛土。

第２層　灰色(5Y4/1)細粒砂・礫混じり砂質土。小礫が少量混じる。旧耕土層。

第３層　灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土。床土層。

第４層　灰色(5Y4/1)細粒砂・礫混じりシルト。細粒砂が多量に混じる。中礫混じる。10cm大の礫が少量混じる。酸化鉄が沈着。

第５層　オリーブ黒色(5Y3/2)粗粒砂混じり粘土質シルト。

第６層　灰色(5Y5/1)礫混じりシルト。10～20cm大の礫が混じる。古墳時代～中世の遺物が出土。

第７層　オリーブ黒色(5Y3/2)粗粒砂混じり粘質土。古墳時代～中世の遺物が出土。

第８層　暗オリーブ色(2.5GY3/1)礫混じり粘土質シルト。10～30cm大の礫が多量に混じる。上面で瓦や10～20cm大の礫が散乱していたのを確認した。

第９層　灰色(10Y4/1)シルト混じり細粒砂。

Ｂ－２地区

第１層　盛土。

第２層　灰色(7.5Y4/1)シルト。酸化鉄が沈着。

第３層　黄灰色(2.5Y4/1)小礫～中礫混じり粘質土。酸化鉄が沈着。古墳時代～中世の遺物が出土。

第４層　黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂混じりシルト。古墳時代～中世の遺物が出土。

第５層　黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト。酸化鉄が少量沈着。弥生時代の遺物が出土。

Ｃ－２地区

第１層　盛土。

第２層　オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂混じりシルト。古墳時代～中世の遺物が出土。

第３層　暗緑色(5G3/1)シルト。酸化鉄が沈着。古墳時代～中世の遺物が出土。

第４層　黄灰色(2.5Y4/1)礫混じり粘質土。３～５cm大の礫が混じる。古墳時代～中世の遺物が出土。

第５層　オリーブ黒色(7.5Y3/2)粗粒砂・礫混じりシルト。小礫～中礫が少量混じる。弥生時代の遺物が出土。

第６層　オリーブ黒色(10Y3/1)シルト・礫混じり粗粒砂。小礫が多量に混じる。

第７層　黒色(5Y2/1)粘土質シルト。

第８層　オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト。酸化鉄が沈着。

Ｄ－１地区

第１層　盛土。

第２層　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。炭化物を少量含む。古墳時代～中世の遺物が出土。

第３層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト。酸化鉄が少量沈着。

第４層　黒褐色(2.5Y3/1)礫混じり粘土質シルト。２cm大の礫が少量混じる。酸化鉄が多量に沈着。弥生時代の遺物が出土。

第５層　暗青灰色(10BG3/1)粘土質シルト。

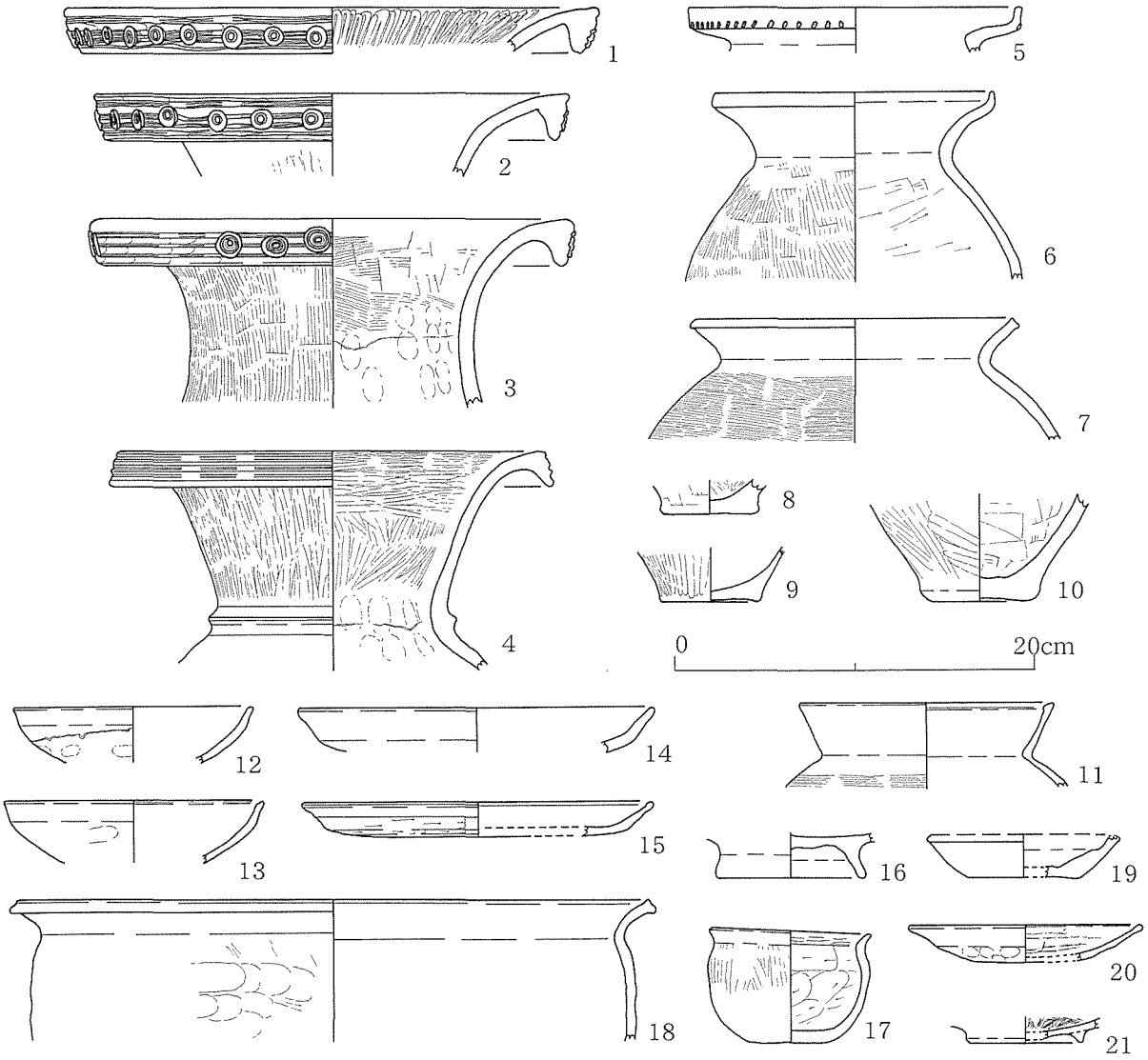
第６層　オリーブ黒色(10Y3/1)シルト・礫混じり粗粒砂。２～３cm大の礫が多量に混じる。

第７層　灰色(10Y4/1)シルト混じり細粒砂～粗粒砂。

3. 出土遺物

今回の調査では、コンテナ15箱に及ぶ瓦のほかに、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、黒色土器や円筒埴輪片が出土した。

1～10は生駒西麓産の弥生土器である。うち1～4は弥生時代後期の広口壷である。1は口径29.0cm、残存高2.6cmを測る。内面には縦方向のヘラミガキ調整が行われ、口縁端部に4条の凹線文と竹管文を有する円形浮文が施されている。竹管文部分には朱がみられる。2は口径26.0cm、残存高4.6cmを測り、口縁端部には4条の凹線文と竹管文を有する円形浮文が施されている。3は口径25.8cm、残存高10.6cmである。内面に横方向のハケ調整(8本/1.4cm以上)と指頭圧痕が、外面には縦方向のハケ調整(10本/1.5cm以上)がみられる。また口縁端部には凹線文3条が施され、さらに二重竹管文を有した円形浮文が3個ずつ4分割で貼り付けられている。4は口径23.0cm、残存高12.5cmである。内面には縦方向ないし横方向のヘラミガキ調整、外面には縦方向のヘラミガキ調整が行われ、口縁端部に3条の凹線文が、頸部に断面三角凸帯が施されている。5の甕は口径18.4cm、残存高2.5cmである。口縁端部は垂直に立ち上がり、ヘラによるキザミ目が施されている。生駒西麓産であることから、吉備系甕を模倣したものと考えられる。6は口径15.4cm、残存高10.5cmを測る。口縁端部はやや垂直に立ち上がる。内面には横方向の板状工具(0.9cm以上)によるナデ調整、外面に縦方向のハケ調整(6本/1.3cm以上)であり、外面に黒斑がみられる。7の甕は口径17.6cm、残存高6.7cmである。外面には横方向のハケ調整(9本/cm)がみられる。弥生時代中期に属する。8～10は底部である。8の甕底部は底部径4.4cm、残存高1.9cmを測る。内面は縦方向のヘラミガキ調整、外面は縦方向の




出土遺物実測図

ハケ調整（２本以上/1.05cm）である。９も甕底部で、底部径5.6cm、残存高3.1cmで、外面は縦方向のヘラミガキ調整である。10は底部径5.2cm、残存高6.0cmで、内面が横方向の板状工具（1.0cm以上）によるナデ調整、外面が縦方向のヘラミガキ調整と思われる。

11～18は土師器である。11は布留式土器の甕である。口径14.0cm、残存高4.8cmを測る。口縁内端部を内側に折り曲げており、外面には横方向のハケ調整（６本/cm）を行っている。12は椀Cである。口径13.0cm、残存高3.1cmを測る。内面・口縁端部は回転ナデ調整、外面はナデ調整で、外面に指頭圧痕、粘土紐つなぎめ痕が残る。13の椀Ｃは口径14.2cm、残存高3.5cmを測る。内面・口縁端部は回転ナデ調整、外面はナデ調整で、外面に指頭圧痕が残る。14は杯Ｃである。口径19.4cm、残存高2.5cmで、内面・口縁端部は回転ナデ調整、外面はナデ調整である。15は口径19.2cm、残存高1.9cmの皿Ａである。内面・口縁端部は回転ナデ調整、外面に横方向のヘラケズリ調整が見られる。一部煤が付着している。12～15は奈良時代前半に属す。16は台付皿である。底部径2.5cm、残存高2.5cmを測る。底部は回転ナデ調整を行っている。平安時代に属する。17は小型壷である。口径は8.8cm、底部径3.8cm、最大器高は6.4cmを測る。内面は横方向の板状工具（1.2cm）によるナデ調整、口縁内端部は横方向のハケ調整（２本以上/cm）、外面は縦方向のハケ調整（４本/1.05cm）のちナデ調整である。生駒西麓産で、奈良時代に属す。18は鍋である。口径28.8cm、残存高7.9cmで、外面に縦方向の板状工具（原体不明）によるナデ調整と指頭圧痕がみられる。

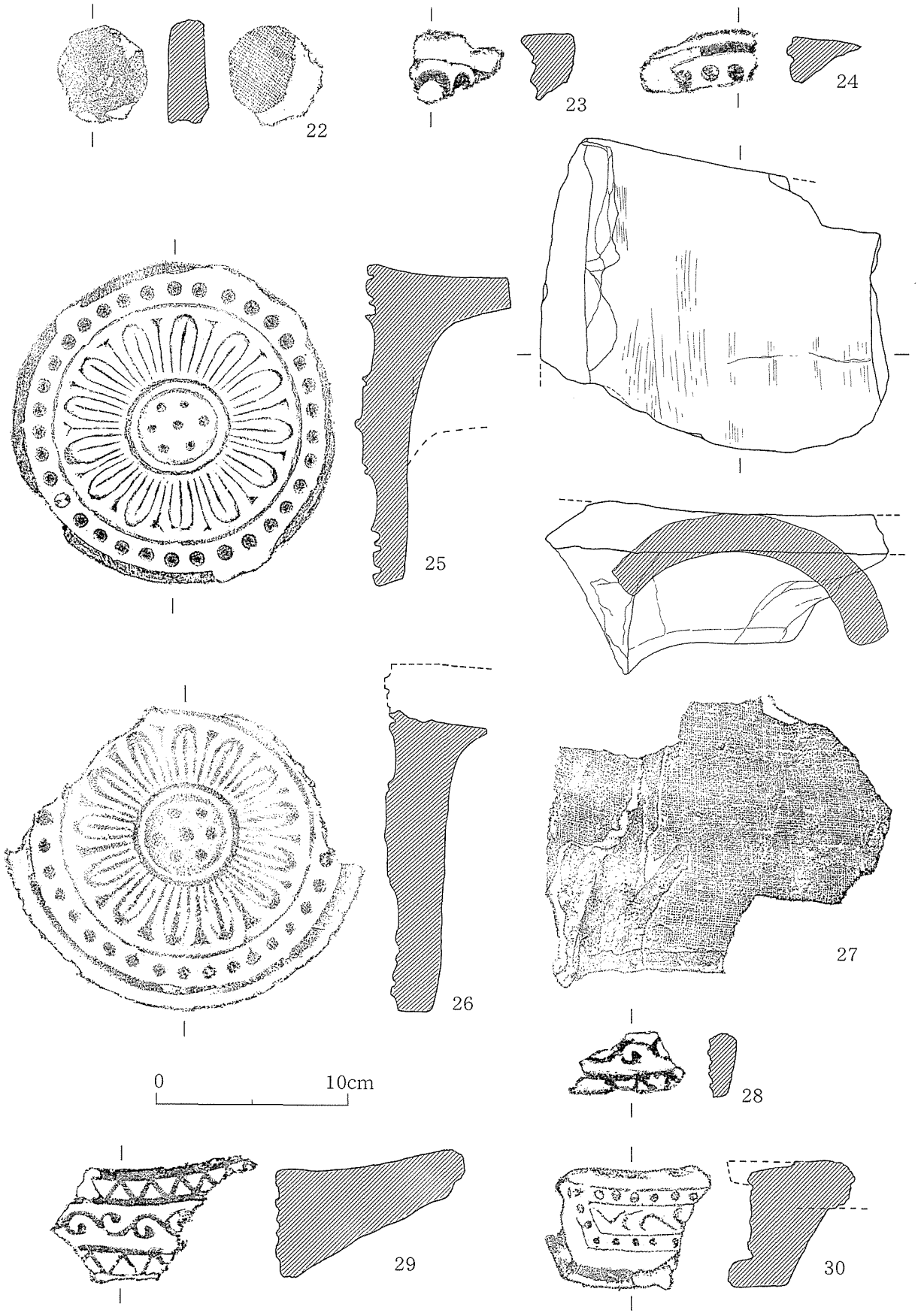
19は須恵器の椀である。口径は10.2cm、底部径6.2cm、器高2.4cmである。内外面は回転ナデ調整、外面底部は工具（原体不明）によるナデ調整である。

20は瓦器皿である。口径12.8cm、残存高は2.1cmを測る。内面は横方向の粗いヘラミガキ、外面に指頭圧痕が残る。21は和泉型の瓦器椀である。底部径は6.2cm、残存高は1.4cmで、内面はやや粗いヘラミガキで、内面底部に密な平行線の暗文がみられる。12世紀後半に属す。

22は土製円板である。直径が5.0cmほど、厚みは2.1cmである。瓦の転用品で、布目痕（８本/cm×11本/cm）が残る。

23～27は軒丸瓦である。23は残存長3.6cm、残存幅4.5cm、厚み2.3cmである。第１・３次調査で出土した中房に１＋6個の蓮子、内区に４葉複弁蓮華文、外区に珠文、外縁内側に鋸歯文を配す軒丸瓦の小片と思われる。河内寺跡出土軒瓦第Ⅲ形式（奈良時代）に属す。24は残存長3.0cm、残存幅5.5cm、厚み4.0cmである。外区幅は2.1cm以上で珠文をめぐらす。瓦当面が外縁より一回りほど大きい。25は瓦当径が16.7cm、厚さが1.7cmである。中央に１＋６個の蓮子を入れ、外側には圏線をめぐらした子房に13葉有稜単弁蓮華文を配す。中房径4.0cm、弁区径12.8cm、弁幅1.4cm。外区幅は1.9cmで、34個の珠文がめぐる。26は瓦当径18.0cmほど、瓦当厚2.7cmである。25と同様、13葉有稜単弁蓮華文に珠文をめぐらす。中房径4.3cm、弁区径12.9cm、弁幅1.3cm、外区幅1.7cm。25に比べ彫が浅く線が太いこと、また25にない珠文の傷が26に見られることから、25より後につくられたと思われる。また、瓦当面は外縁より一回りほど大きい。25・26は河内寺跡出土軒瓦第Ⅱ形式（飛鳥時代後期）に属する。27は丸瓦部である。残存長17.9cm、厚み2.7cmである。内面に布目痕（８本/cm×９本/cm）が残る。板状工具（原体1.5cm以上）による横方向のナデ調整である。縦方向に粘土紐つなぎ目痕がみられる。瓦当との接合部は斜め方向に削っており、凹面には接合粘土痕が残る。

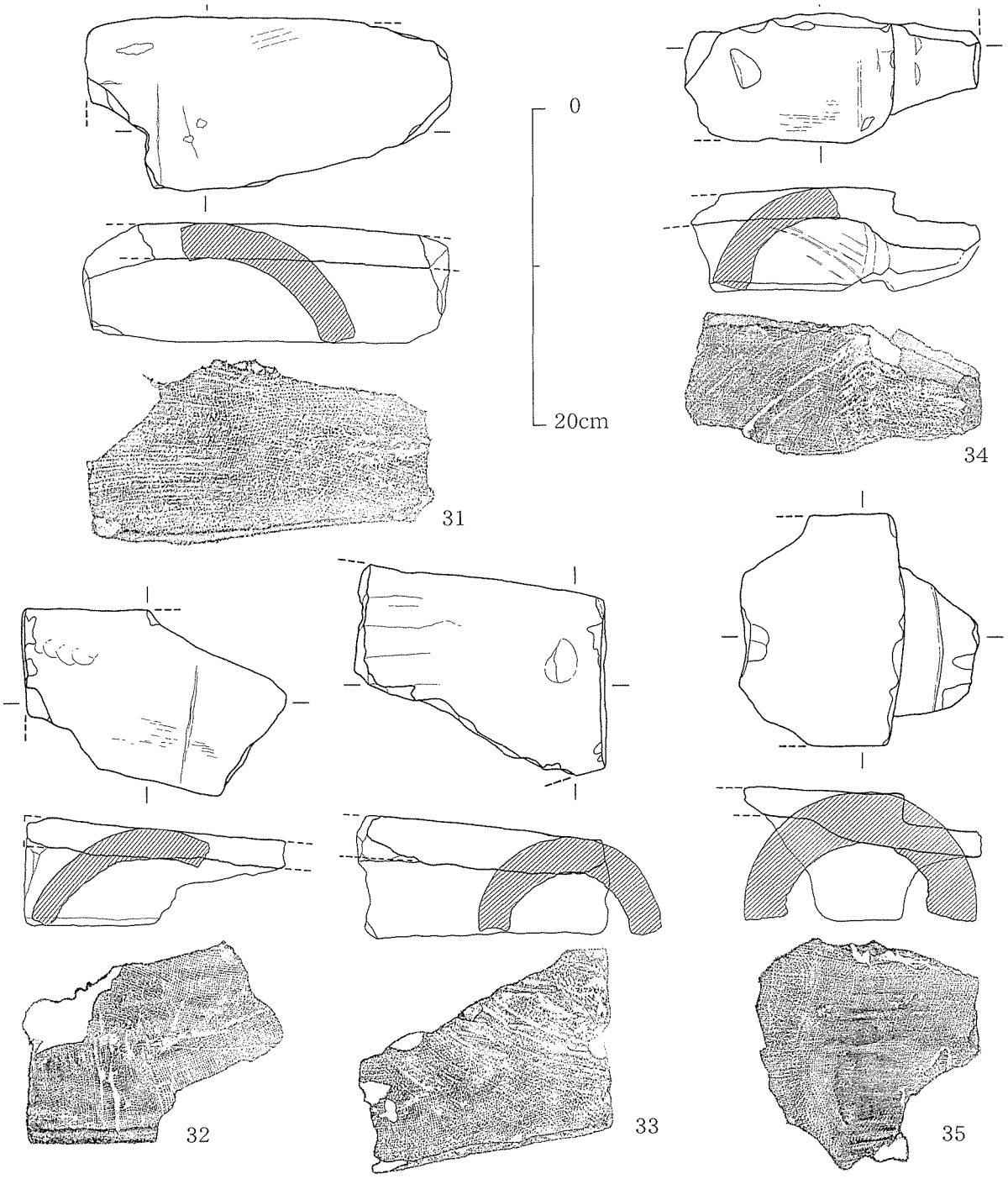
28～30は軒平瓦である。28は残存長3.2cm、残存幅5.5cm、厚み1.5cmである。内区に唐草文、下外区には鋸歯文を施す。内区幅は2.0cm以上、下外区幅は1.0cm以上を測る。29は残存長9.9cm、残存幅9.0cm、厚さ2.5cmである。緩やかな曲線顎で、瓦当厚は5.4cm以上を測る。内区に唐草文を配し、上下外区に鋸歯文をめぐらす。内区幅2.2cm、上外区幅1.9cm、下外区幅1.5cm以上である。凹面




出土遺物実測図

に布目痕(９本/cm×９本/cm)が残り、一部ナデ消している。28･29は河内寺跡出土軒瓦第Ⅲ形式(奈良時代)に属する。30はＡ－11地区北側の空き地から採集した参考資料である。段顎式で、残存長5.6cm、残存幅は7.8cm、瓦当厚6.6cmである。内区に中心飾りを持つ唐草文を配し、上下左右の外区に直径0.6cmの珠文をめぐらす。内区幅1.6cm、上外区幅1.05cm、下外区幅0.85cm、脇区幅0.8cmを測る。河内寺跡出土軒瓦第Ⅴ形式(鎌倉時代)に属する。

31～35は丸瓦である。丸瓦は今回の調査で182点出土した。うち玉縁式丸瓦は32点出土している。31の残存長は23.0cm、厚さは2.2cmである。内面に布目痕(６本/cm×６本/cm)と糸切痕が残る。32は残存長16.3cm、厚さは1.7cmである。内面に布目痕(８本/cm×８本/cm)が残り、外面は縄目タタ




出土遺物実測図

キののちナデによる調整を行っている。外面に粘土紐つなぎ目痕が残る。33は残存長15.0cm、厚さは2.3cmである。内面に布目痕(10本/cm×８本/cm)と糸切痕が残り、外面は板状工具(２cm以上)によるナデ調整が行われている。成形時の分割裁断面がみられる。34は玉縁式で、残存高18.2cm、厚さ1.9cm、玉縁長5.4cmである。内面に布目痕(10本/cm×８本/cm)と糸切痕が残り、外面は縄目タタキののちナデによる調整を行っている。35も玉縁式で、残存高14.5cm、厚さ3.2cm、玉縁長4.9cmである。内面に布目痕(10本/cm×８本/cm)が残る。また図化しなかったが、玉縁部と筒部の境を指ナデによる沈線で表現した玉縁瓦も１点出土した。

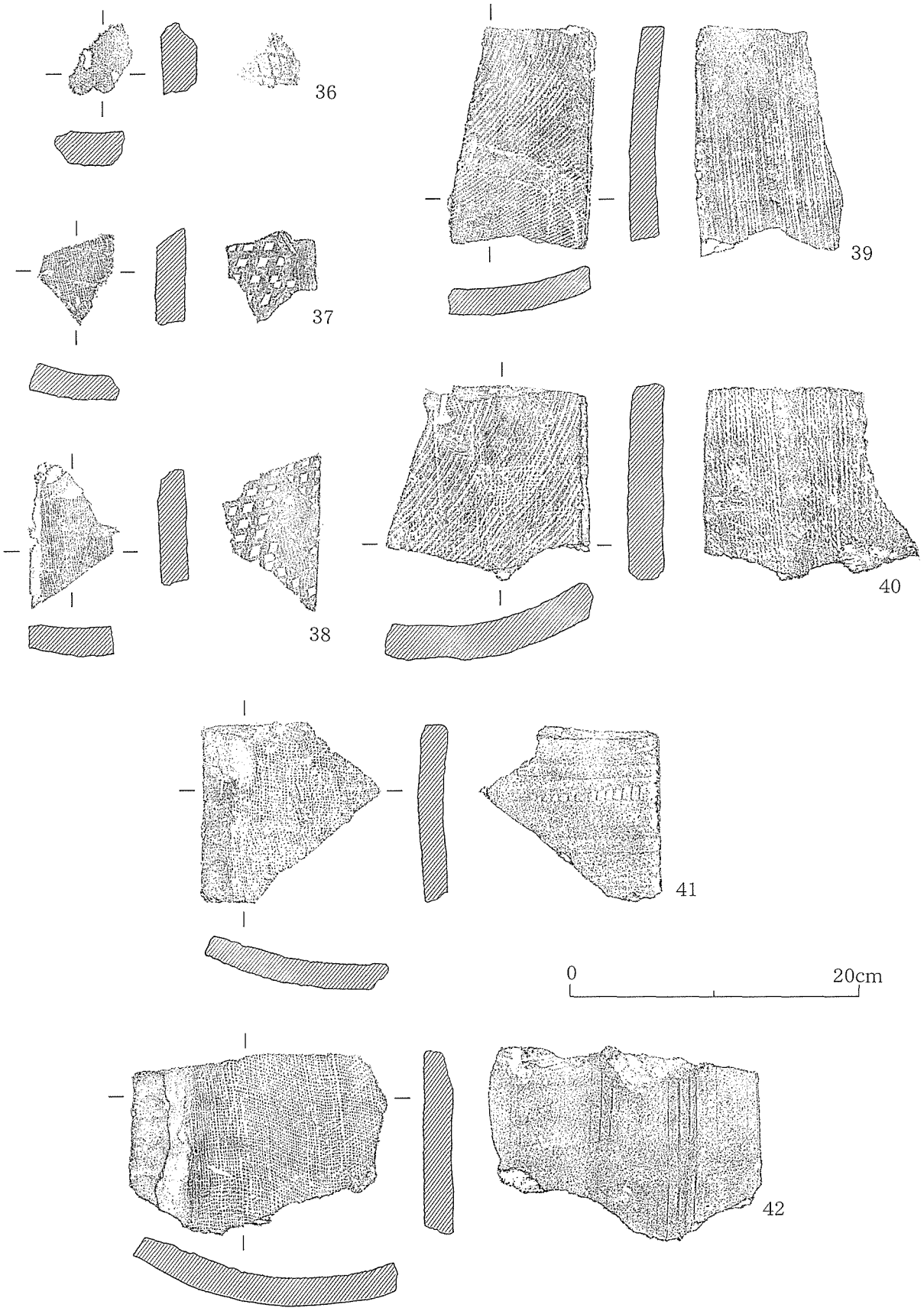
36～45は平瓦である。平瓦は今回の調査で867点出土した。大きく分けるとＡタイプ(凹面布目痕、凸面斜格子状タタキ)、B1タイプ(凹面布目痕、凸面縄目タタキ、ともにナデ消しあり)、B2タイプ(凹面布目痕・糸切痕、凸面縄目タタキ、ともにナデ消し)、Ｃタイプ(凹面布目痕、凸面平行線状タタキのちヘラ状工具によるナデ消し)、Ｄタイプ(その他)に分けられる。しかしあくまで細片による分類であり、さらに細かく分類できる可能性は高い。

Ａタイプに属するのは36～38である。36は残存長5.0cm、残存幅4.8cm、厚みは1.5cmである。凹面に布目痕(６本/cm×７本/cm)が、凸面には斜格子状タタキがみられる。37は残存長5.6cm、残存幅6.0cm、厚みは2.0cmである。凹面に布目痕(11本/cm×８本/cm)が残る。凸面は縄目タタキをしたのちにナデ消して斜格子状タタキを行っている。側面はヘラケズリである。38は残存長10.8cm、残存幅6.8cm、厚みは1.9cmである。凹面に布目痕(11本/cm×8本/cm)が残る。凸面は縄目タタキをしたのちにナデ消して斜格子状タタキを行っている。いずれも生駒西麓産である。

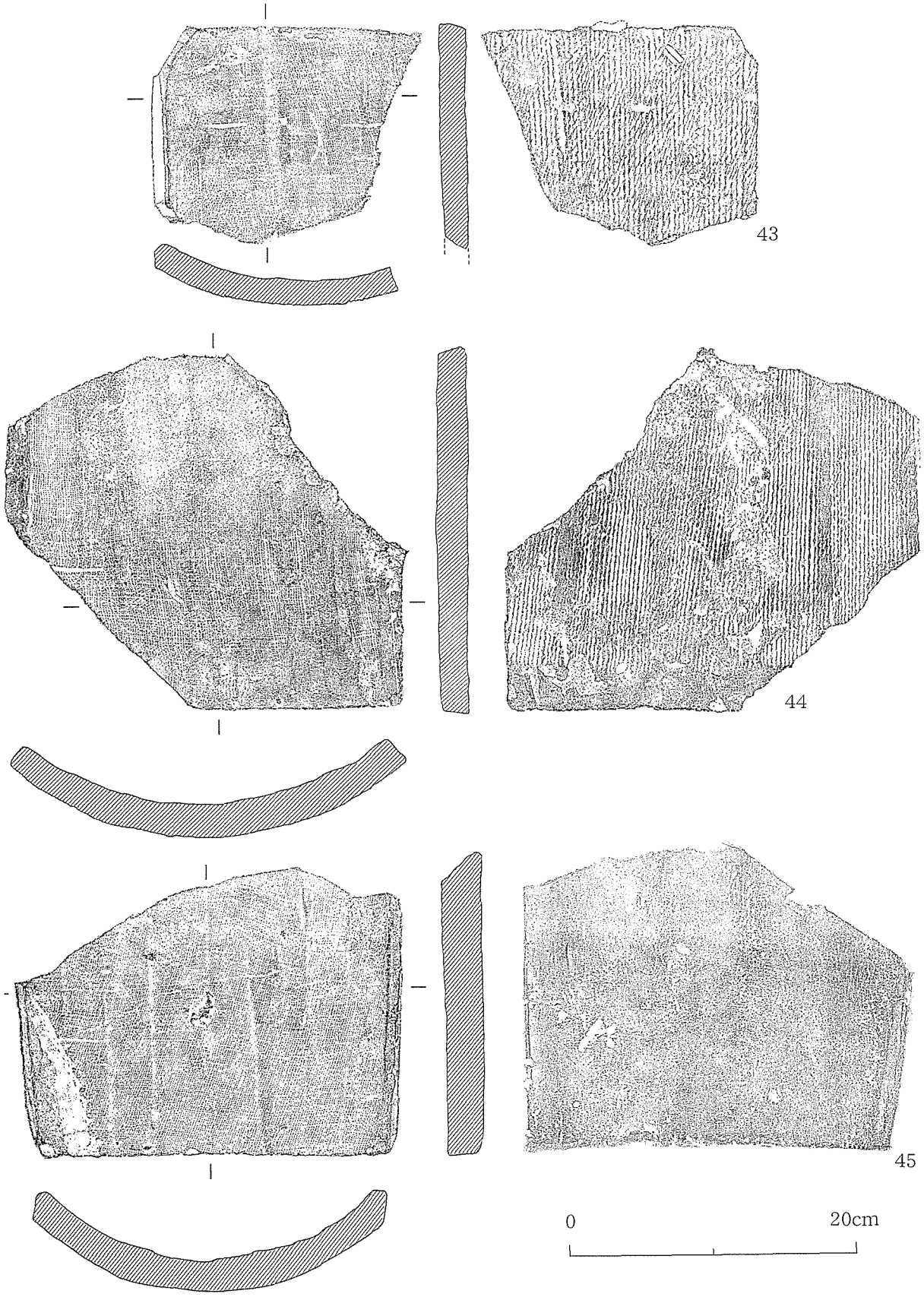
Ｂ１タイプに属するのは43～45である。このタイプの瓦が最も多く、全体の85％を占めている。縄目タタキはほとんどが側面に対し平行(縦方向)に行っているが、若干斜め方向にクロスして縄目タタキを行ったものもみられる。43は残存長15.6cm、残存幅17.6cm、厚さ1.9cmである。凹面は布目痕(10本/cm×８本/cm)、模骨痕、粘土紐つなぎ目痕が残る。一部ナデ消されている。凸面は縦方向の縄目タタキが行われている。側面はヘラケズリ調整で、凹面側部は面取りされ、側面の両端を斜めに切り落としている。生駒西麓産。44は残存長25.5cm、幅27.4cm、厚み2.3cmである。凹面は布目痕(10本/cm×７～８本/cm)と模骨痕、粘土つなぎ目痕が残り、一部縦方向にナデ消している。凸面は縦方向の縄目タタキ(17本/5.8cm以上)が行われている。側面・端面はヘラケズリ調整が行われている。生駒西麓産で、粘土紐桶巻き作りよる。45は残存長21.2 cm、幅24.4cm、厚み2.1cmである。凹面は布目痕(11本/cm×８本/cm)と模骨痕、粘土紐巻上げ痕が残る。凸面は縄目タタキののち一部ナデ消しで、特に端部の縄目は20cmほどナデ消している。側面・端面はヘラケズリ調整で、面取りが行われている。

39・40はB2タイプに属する。このタイプの瓦は全体の３％を占めている。39は残存長16.1cm、残存幅10.1cm、厚さ1.9cmである。凹面は布目痕(12本/cm×12本/cm)と糸切り痕が残る。凸面は縦方向の縄目タタキである。側面・端面はヘラケズリ調整で、面取りが行われている。凸面に離れ砂が付着している。40は残存長13.7cm、残存幅14.9cm、厚さ2.5cmである。凹面は布目痕(４本/cm×５本/cm)と糸切り痕が残る。凸面は縦方向の縄目タタキである。側面・端面はヘラケズリ調整で、面取りが行われている。生駒西麓産。

41・42はCタイプに属する。このタイプが最も少なく、３点のみである。41は残存長12.6cm、残存幅12.6cm、厚さ1.9cmである。凹面は布目痕(７本/cm×７本/cm)が残り、側部は２cmほどナデ消している。凸面は平行線のタタキを横方向のヘラ状工具によるナデ調整で消している。側面・端面はヘラケズリ調整で、面取りが行われている。42は残存長12.8cm、残存幅18.4cm、厚さ2.2cmであ




出土遺物実測図




出土遺物実測図

る。凹面は布目痕(6本/cm×7本/cm)が残り、側部は3.9cmほど縦方向にヘラ状工具でナデ消している。凸面は平行線のタタキをナデ消している。側面はヘラケズリ調整である。生駒西麓産。

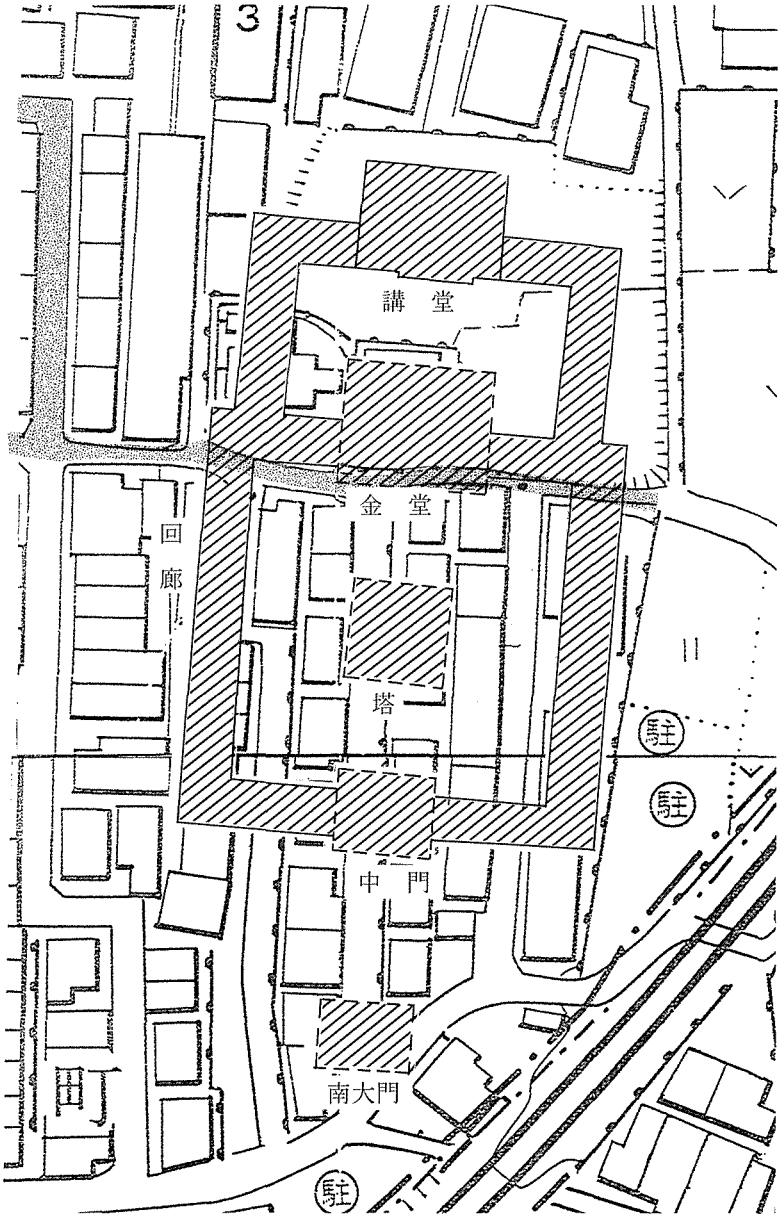
このほかDタイプに分類したものとしては、凸面に横方向のハケ状の調整が行われたもの、凹凸面にともにナデ調整のものなどがある。また多くの平瓦は厚さが約2～3cmであったが、厚さ1cm前後の瓦も20点ほど出土した。

4. まとめ

今回、A地区の中程から東側にかけて(A－10′地区～A－13地区周辺)、河内寺に使用したと思われる瓦が大量に出土する層を確認した。礫を多量に含み、瓦器なども出土していることから中世以降の整地層と思われる。この整地層は調査地全体に見られることから、中世に当所で大規模な整地が行われたと考えられる。また瓦が多量に出土したA－10′地区～A－13地区周辺は、これまでの調査から推定復原されている金堂跡の隣接部分である。今回、金堂跡もしくは回廊に関する遺構は検出できなかったが、瓦が集中して出土することからこの周辺に何らかの寺院関連施設があった可能性がさらに高まったと思われる。

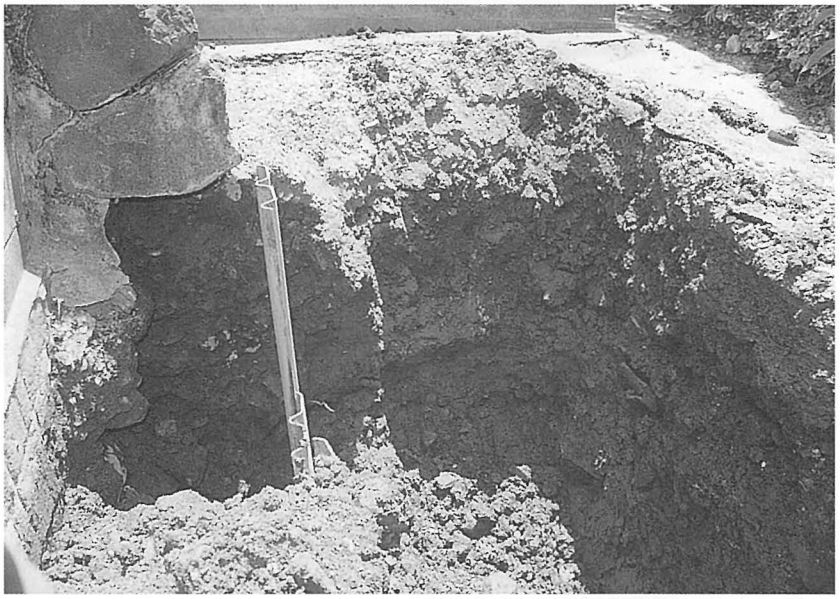
古墳時代の包含層は確認できなかったが、中世の整地層からは古墳時代の土師器や須恵器の小片が出土している。A－1地区北東隣接部分では、古墳の周溝と思われる溝が検出され、船形埴輪や家形埴輪などが出土しており、小型方墳の存在する可能性がある。残念ながら今回の調査では、古墳に関する遺構は確認できなかったが、円筒埴輪片が出土していることから、当調査区周辺に古墳時代の遺構が存在した可能性が考えられる。

また今回、弥生時代後期の包含層が確認できた。調査区中央でややまとまって出土しており、弥生時代にこの周辺に集落が存在した可能性がある。当遺跡では弥生時代後期から比較的継続して集落等が存在したと思われる。



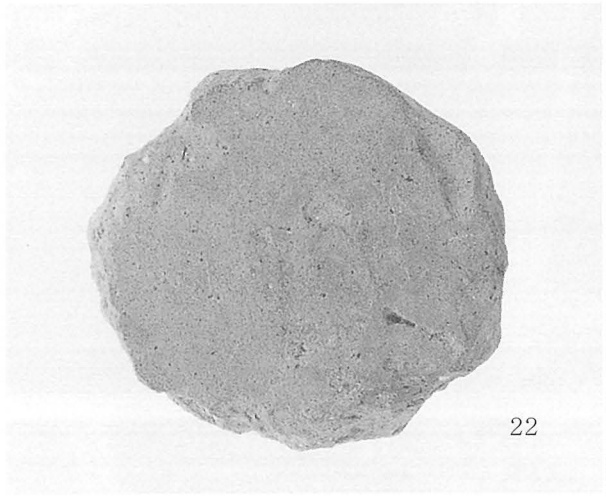

河内寺跡伽藍推定復原図（1/1000）

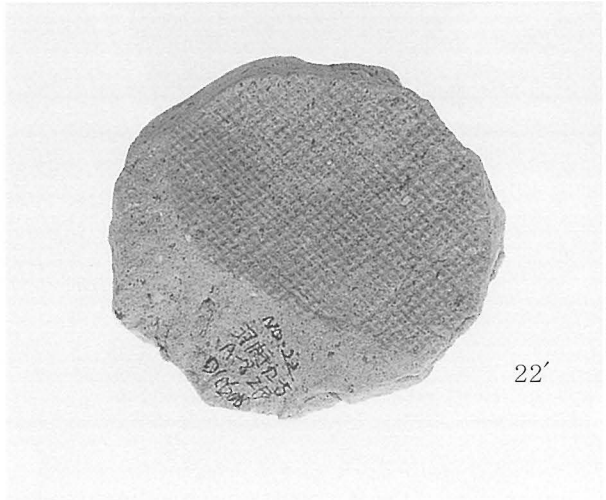
D－１地区土層断面



A－11地区土層断面

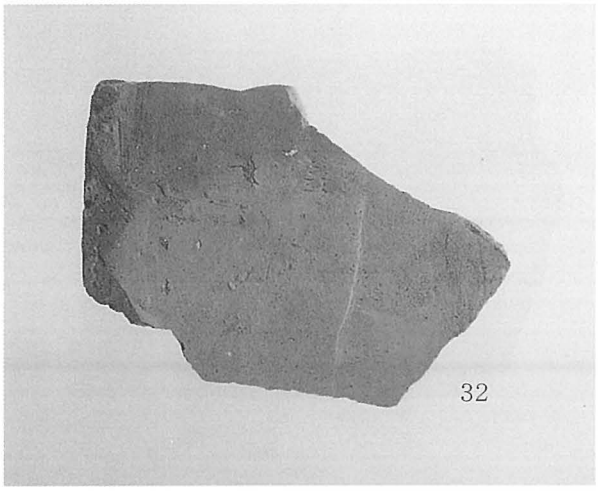
A－13地区土層断面

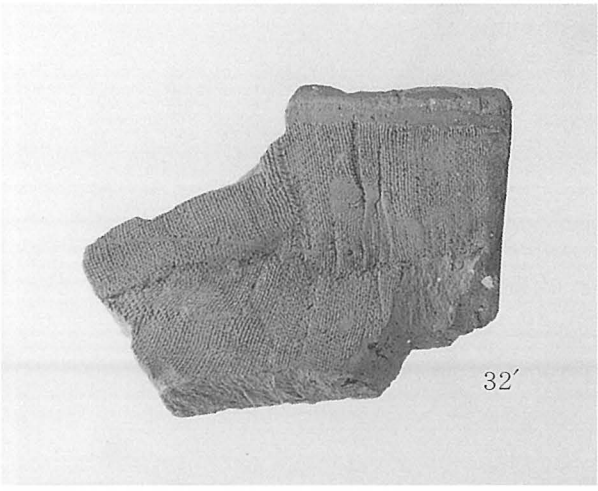


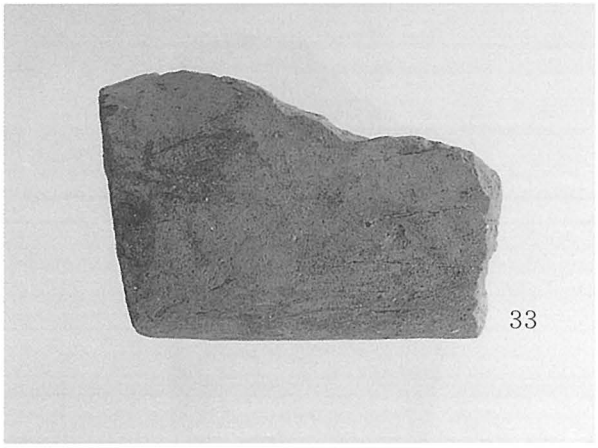



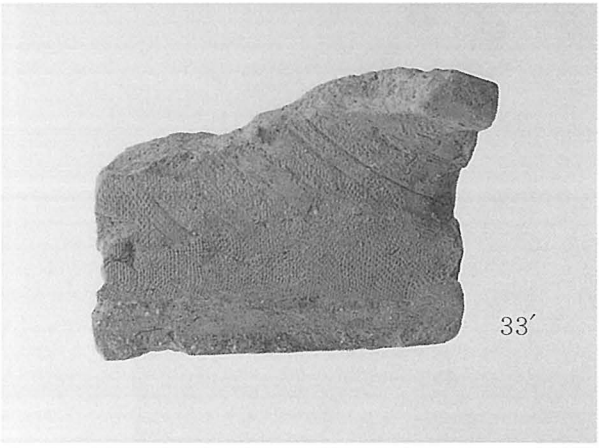
出土遺物（弥生土器・土師器・土製円板・軒丸瓦）

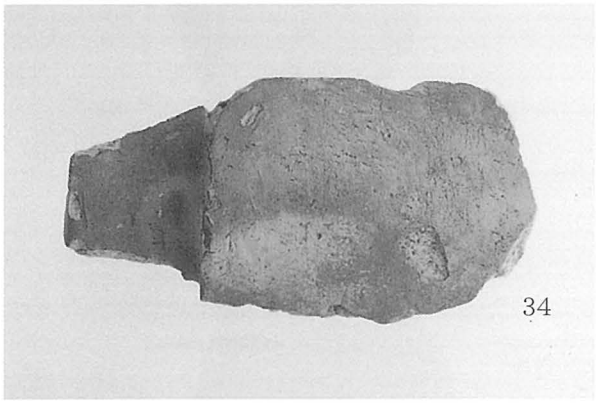
出土遺物（軒平瓦・軒丸瓦・丸瓦）

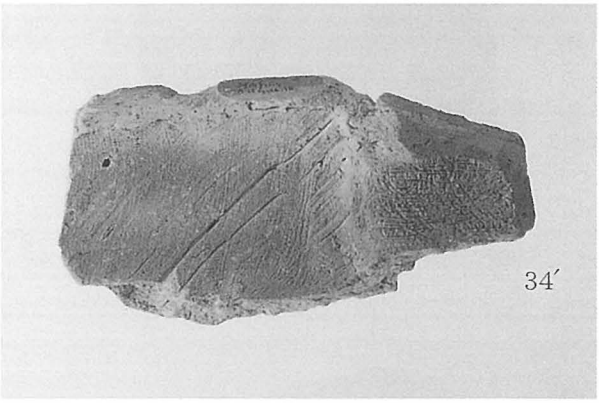


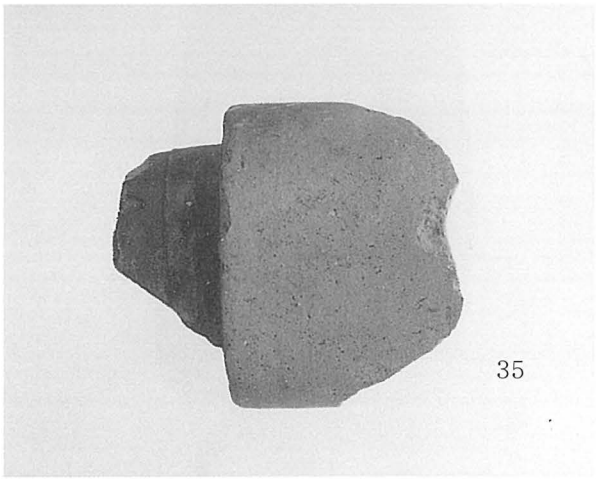



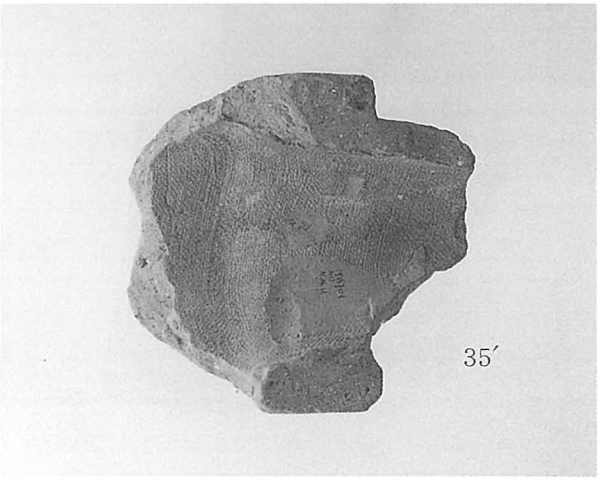



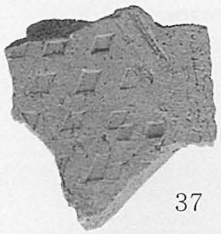




出土遺物（丸瓦）

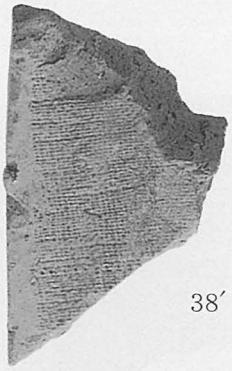
36

36′


37

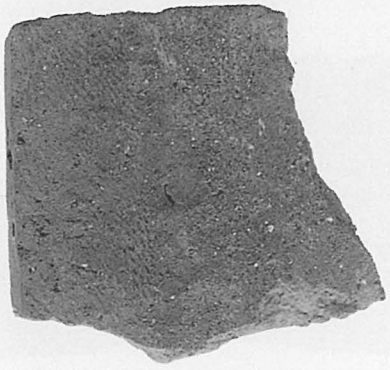
37′

38


38′

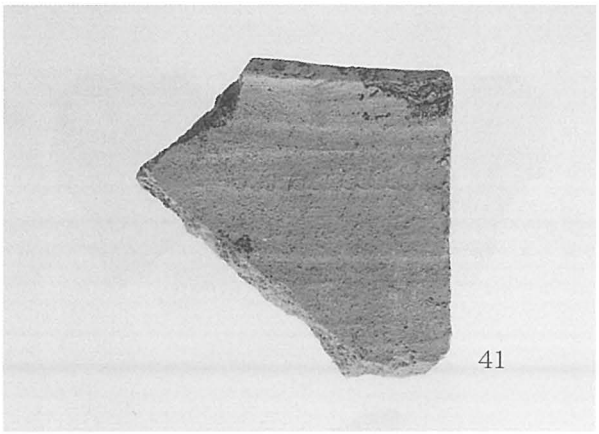
39

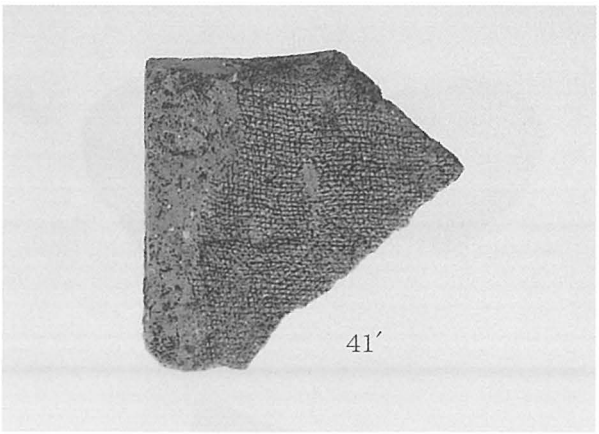
39′

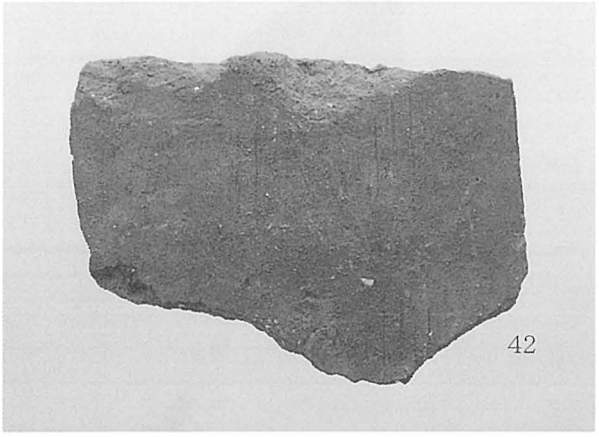

40

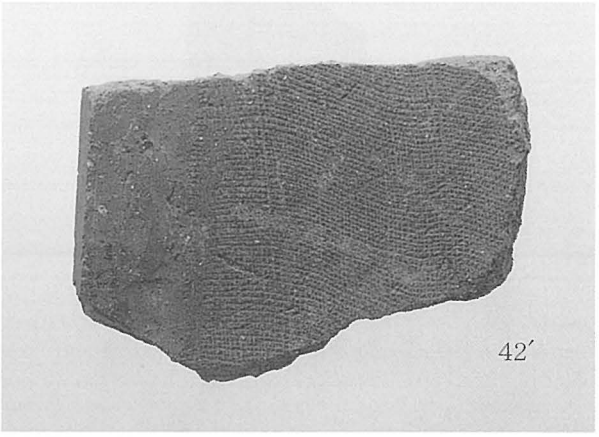
40′

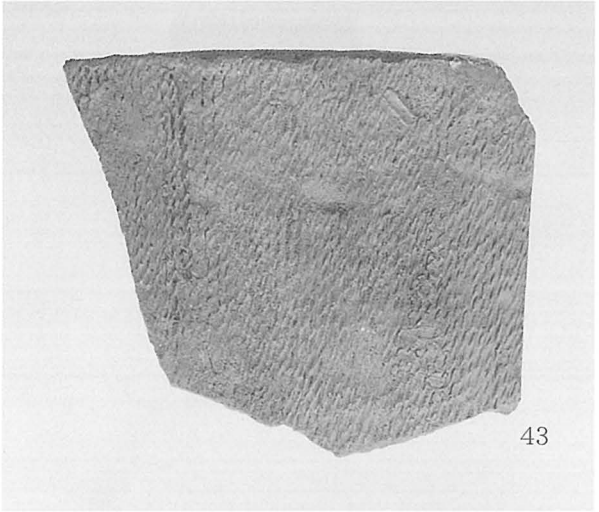
出土遺物（平瓦）

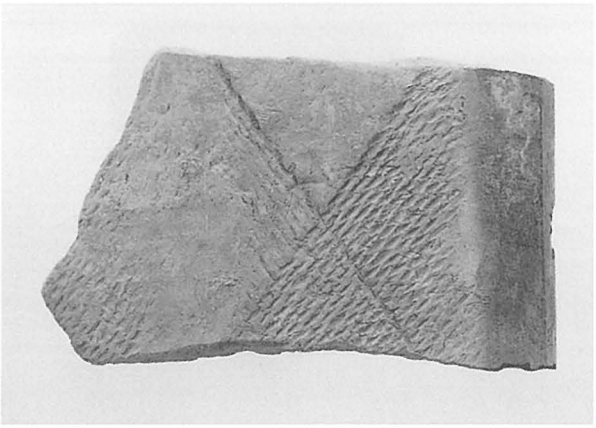


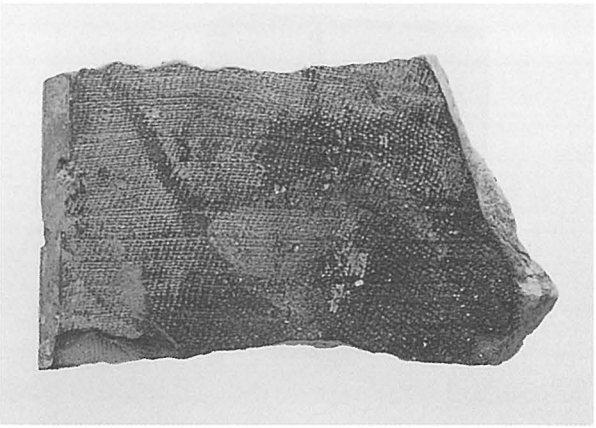



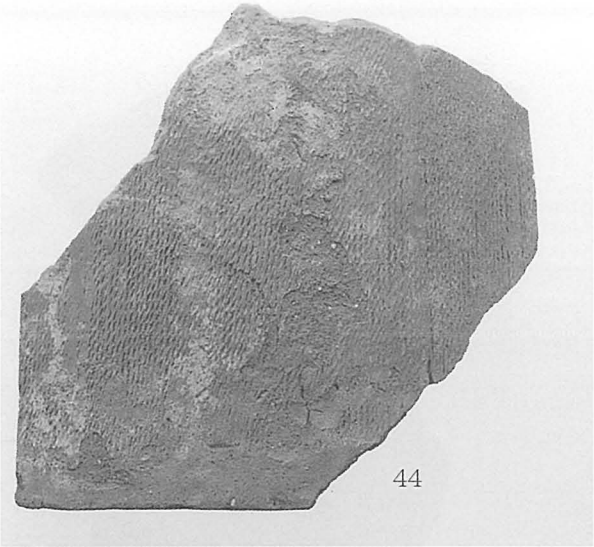



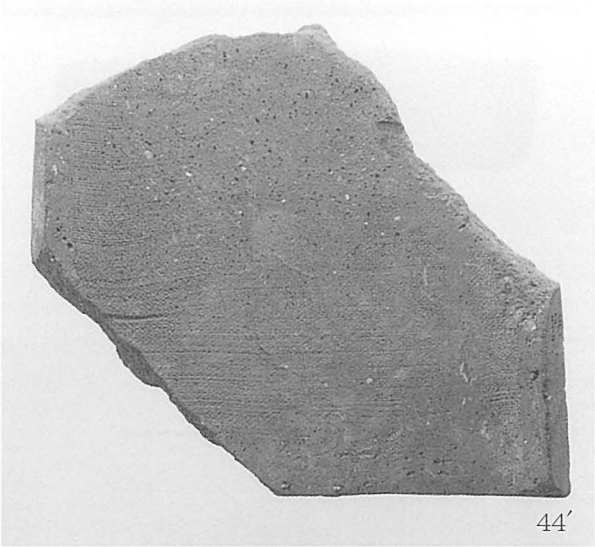



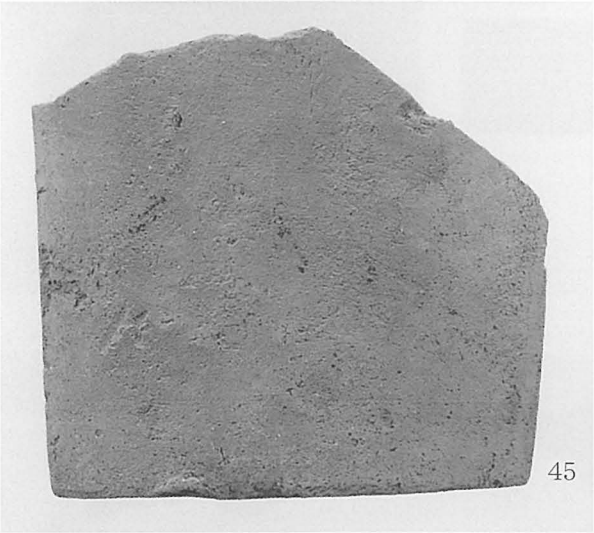




出土遺物（平瓦）

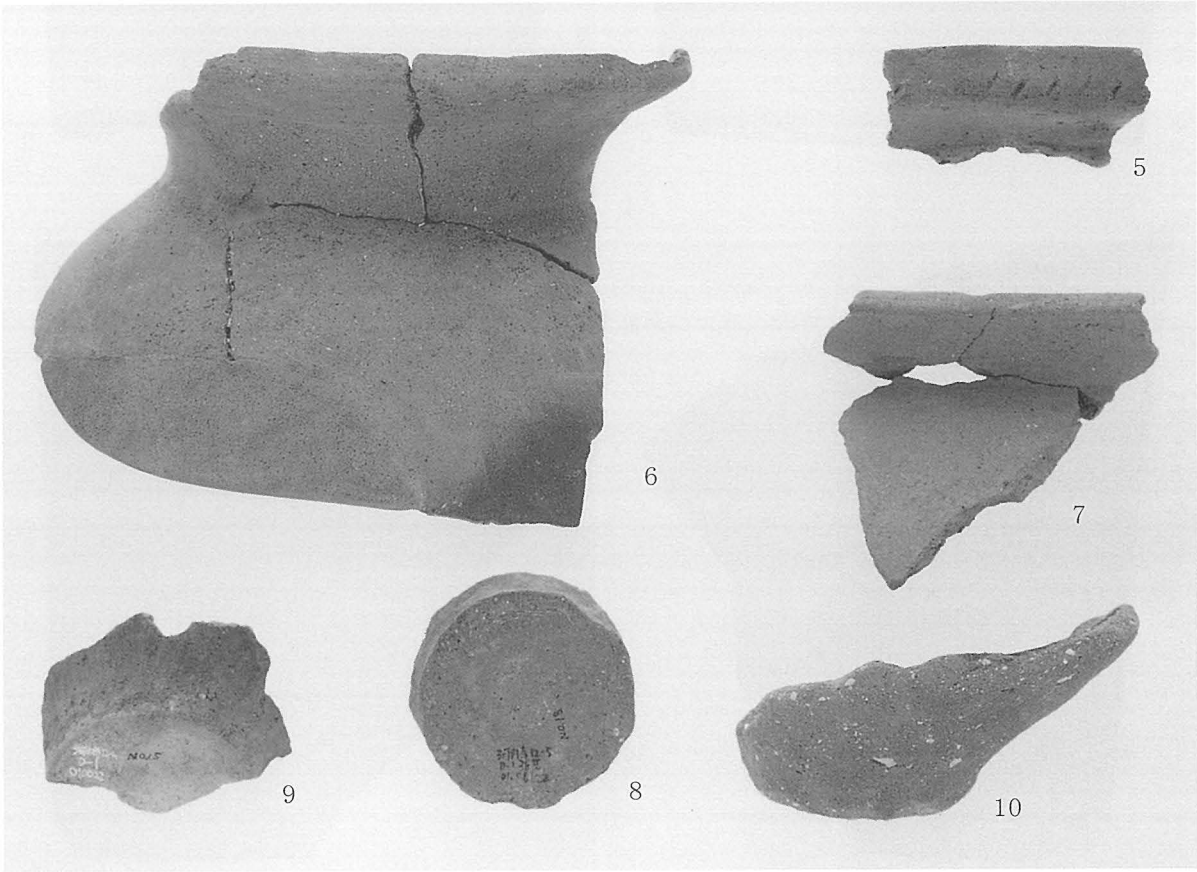


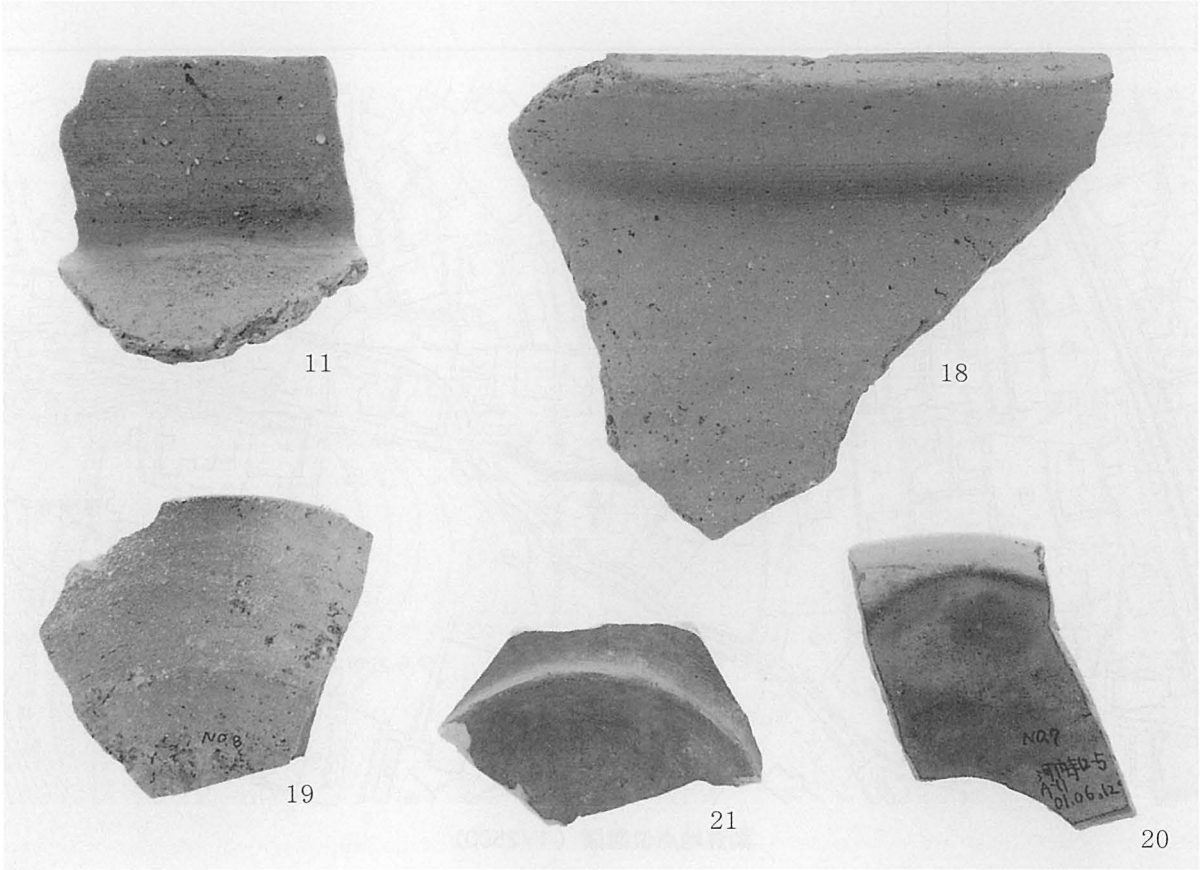
出土遺物（平瓦）

出土遺物（弥生土器）




出土遺物（弥生土器）

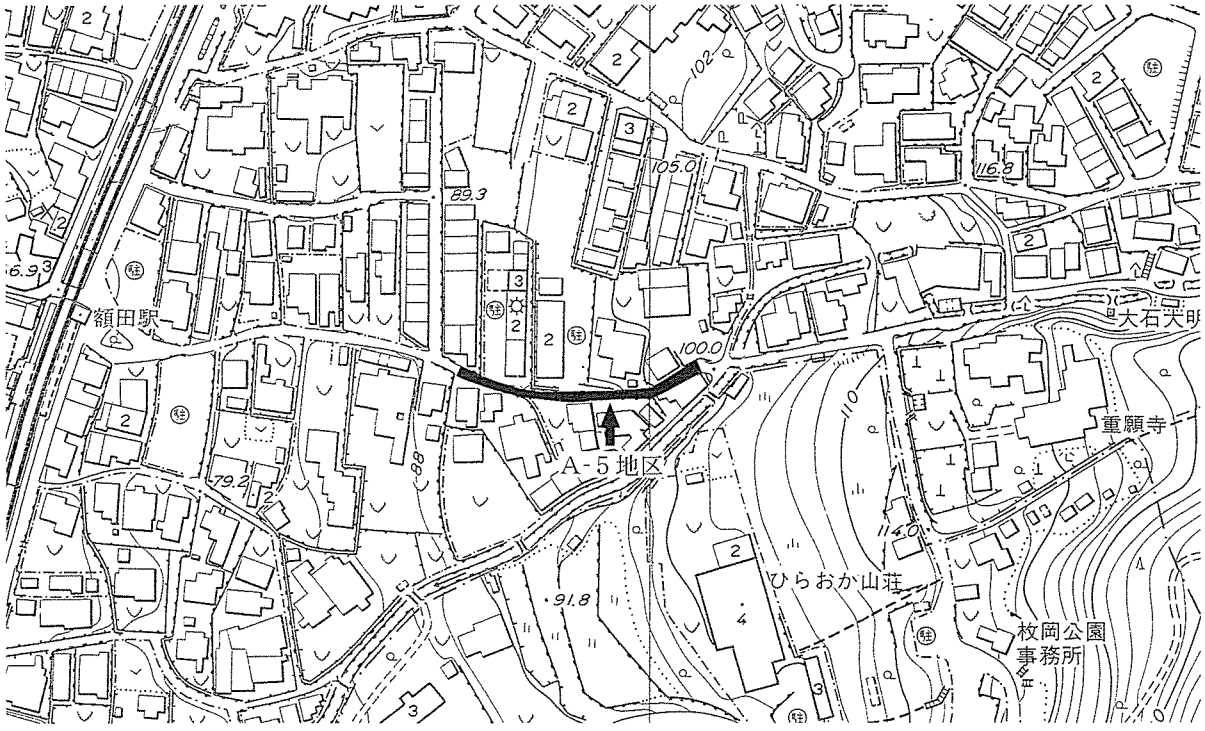
出土遺物（土師器）



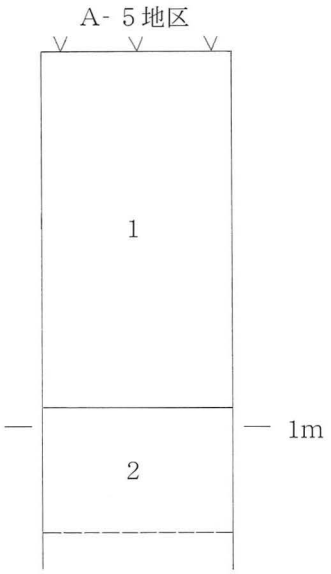

出土遺物（土器師・須恵器・瓦器）

# 第７章　みかん山古墳群の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第12－１工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市山手町 |
| 3 | 調 査 面 積 | 68㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年４月３日～５月24日（延べ12日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線額田駅の東である。当地点はみかん山古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ81mの間であり、開削工法である。 |



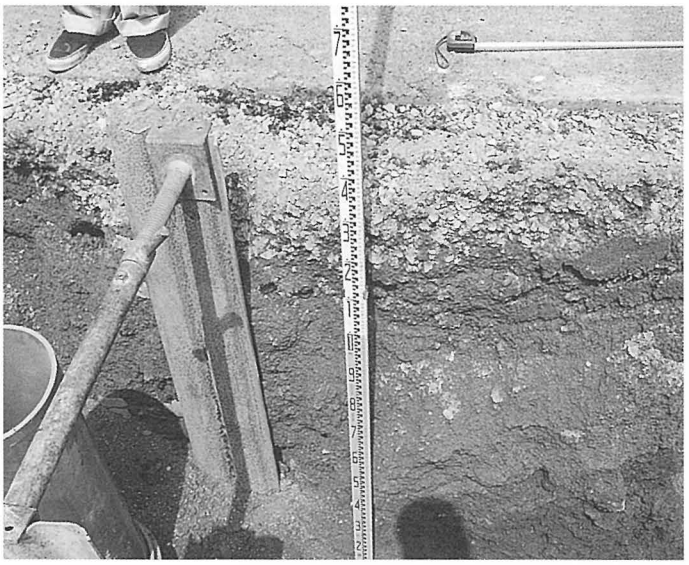

調査地点位置図（１/2500）




土層断面柱状図

調査地遠景

掘削状況



土層断面

1. 調査の概要

Ａ－５地区の層序

第１層　盛土。

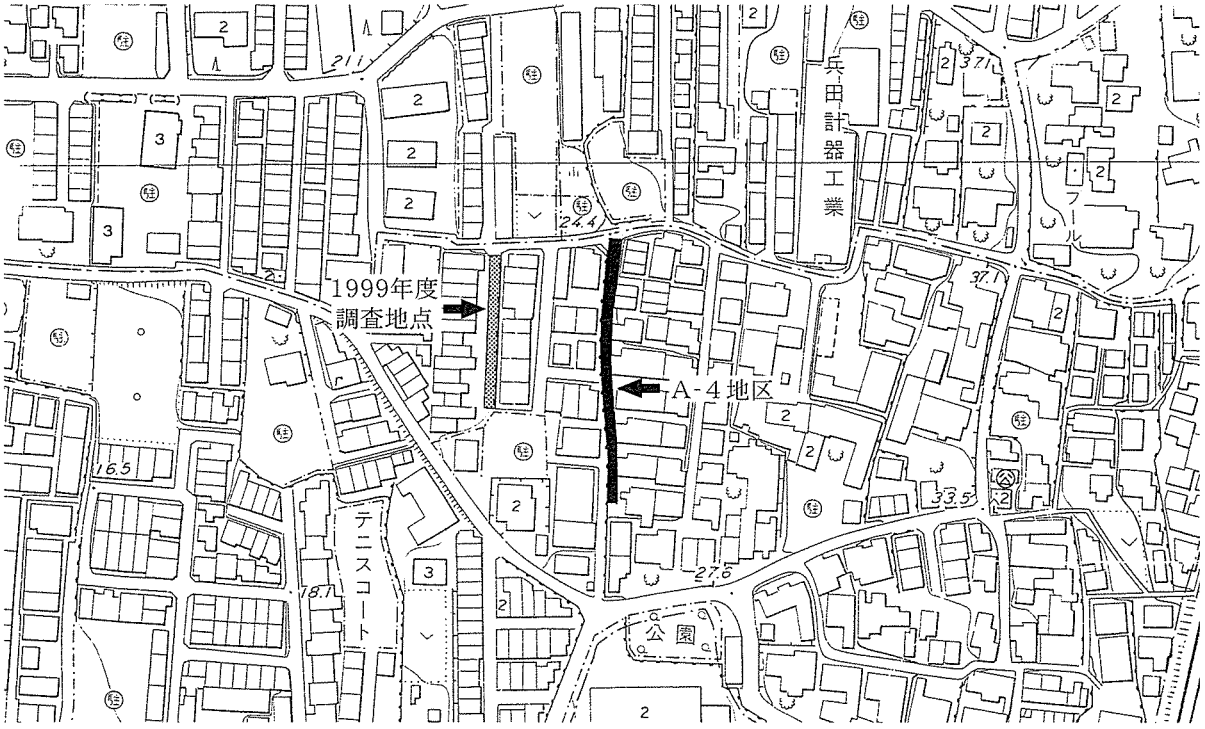
第２層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)礫混じり粘質土。

2. まとめ

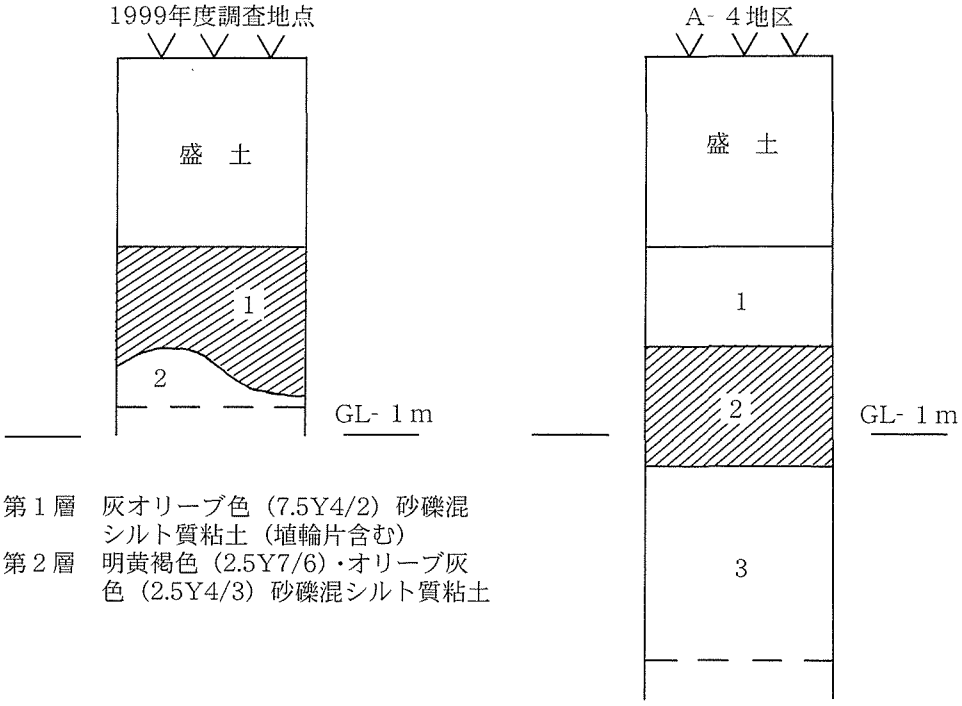
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

# 第８章　孤塚（きつねづか）遺跡の第３次調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第202工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市喜里川町 |
| 3 | 調 査 面 積 | 122㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年３月１日～３月19日（延べ12日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 木村健明 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は縄手東小学校の北である。当地点は孤塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約1.5mで長さ122mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（１/2500）




**土層断面柱状図**

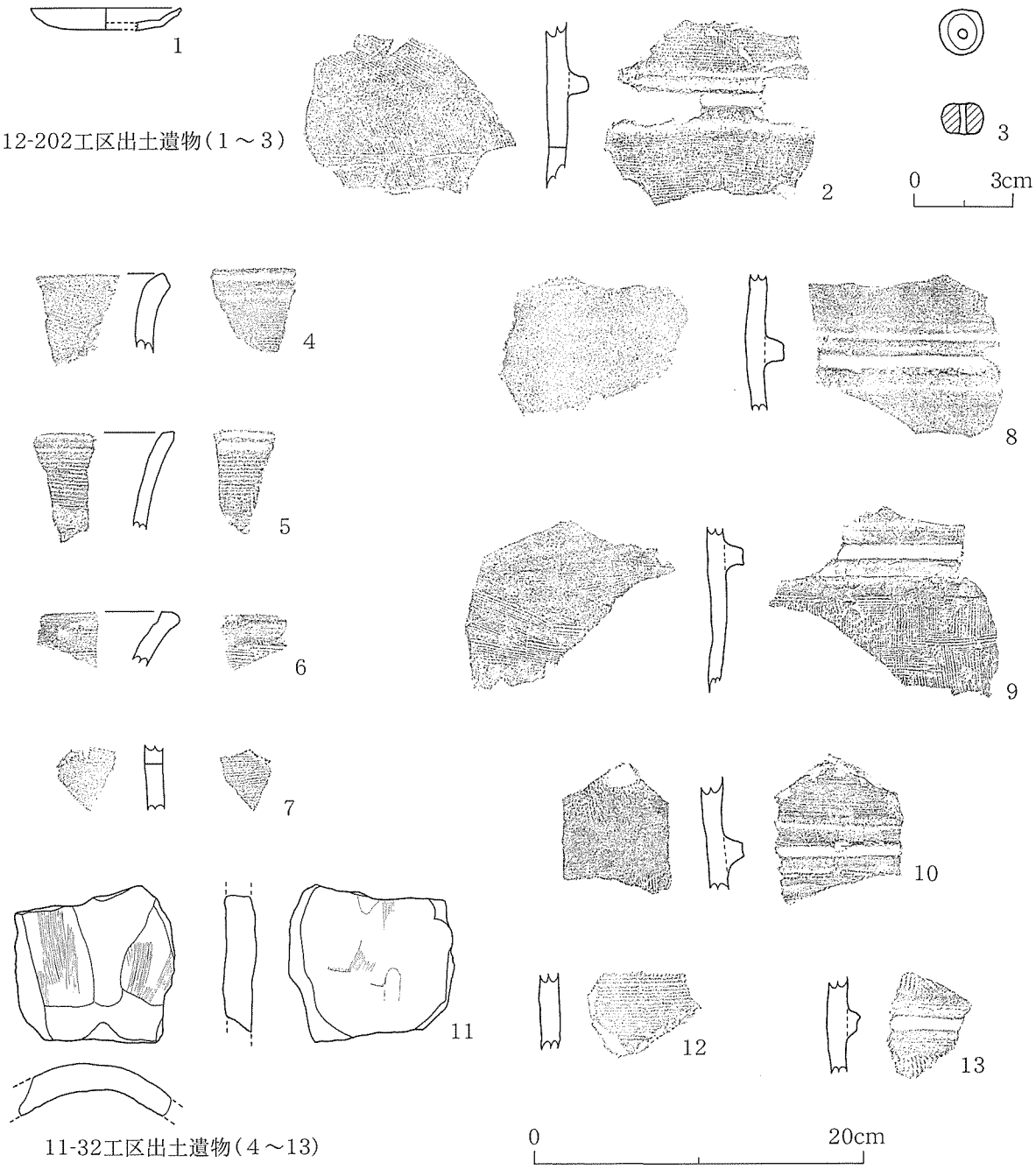
1. 調査の概要

孤塚遺跡の周辺には様々な遺跡が存在する。調査区南側には皿池遺跡や河内寺跡が近接し、更に南には山畑古墳群・縄手遺跡などがあり、東には枚岡神社が位置する。北には鬼塚遺跡、西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡などが存在する。

調査地は生駒山麓の傾斜が急になり始める地点であり、標高24m付近に位置する南北方向の工区である。工事は南側から行われた。工事の都合上、断面図は１ヶ所しか取ることができなかったが他の地点もほぼ同じ堆積である。遺構は確認できなかったが、地表下１m付近に包含層が存在することが確認できた。古墳時代と中世の遺物が出土している。その内、ガラス小玉と埴輪が出土したことは特筆される。今回確認できたのは各１点だけであるが、1999年度に西へ15m離れた地点で立会調査が行われ、その時に埴輪が若干出土している。この調査での埴輪も参考資料として、この機会にあわせて報告することとしたい。

2. 出土遺物

図の１～３が今回の出土遺物、４～13が1999年度の出土遺物である。１は土師皿である。図化できた中世の遺物はこの１点のみであるが他にも写真図版にあるように瓦器椀なども出土している。
３はガラス製小玉で濃青色を呈する。直径0.7～0.8cm、孔の径は0.2cmである。２・４～10・12・13は円筒埴輪である。表面の色調は黄色いもの（２・７・９）と赤いもの（４～６・８・10～13）の２種類が認められる。２と６は須恵質焼成で、他は全て土師質焼成である。２と７には円形透かし孔が一部残存している。タガの断面形態は２・８・９・10が台形であり、13がM字状を呈している。４～６は口縁部である。器面調整は13以外にはヨコハケが認められる。13はタテハケと斜め方向のハ



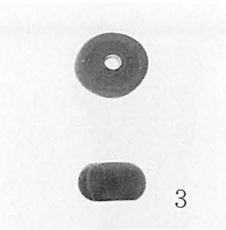

**出土遺物実測図**

ケのみが認められるが、小片のためヨコハケの有無は断定できない。9はヨコハケ、タテハケ、ヨコハケの順に施されていることが確認できる。最初のヨコハケの前にタテハケが施されたと考えられることから、外面調整は4回行われたのであろうか。破片であるため、これがこの部分に限られるものかどうかは定かではない。11は形象埴輪の可能性も考えられるもので、剥離している部分が多いが、外面にはハケ調整がなされる。

13以外は川西編年のⅣ期、13はⅣ～Ⅴ期のものでいずれも5世紀後半の範疇に収まるものである。

3. まとめ

東大阪市域で最も古い古墳は4世紀末に比定されるえのき塚古墳があり、中期に入ると5世紀前半とされる塚山古墳・客坊山3号墳があり、他に段上古墳群、舳古墳、皿池古墳、大賀世古墳群、戎山

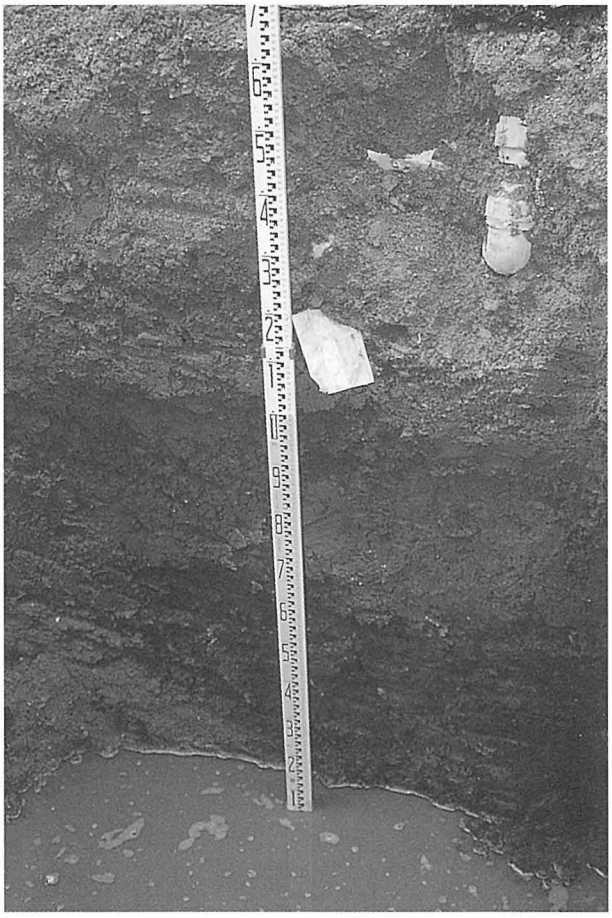



ガラス製小玉

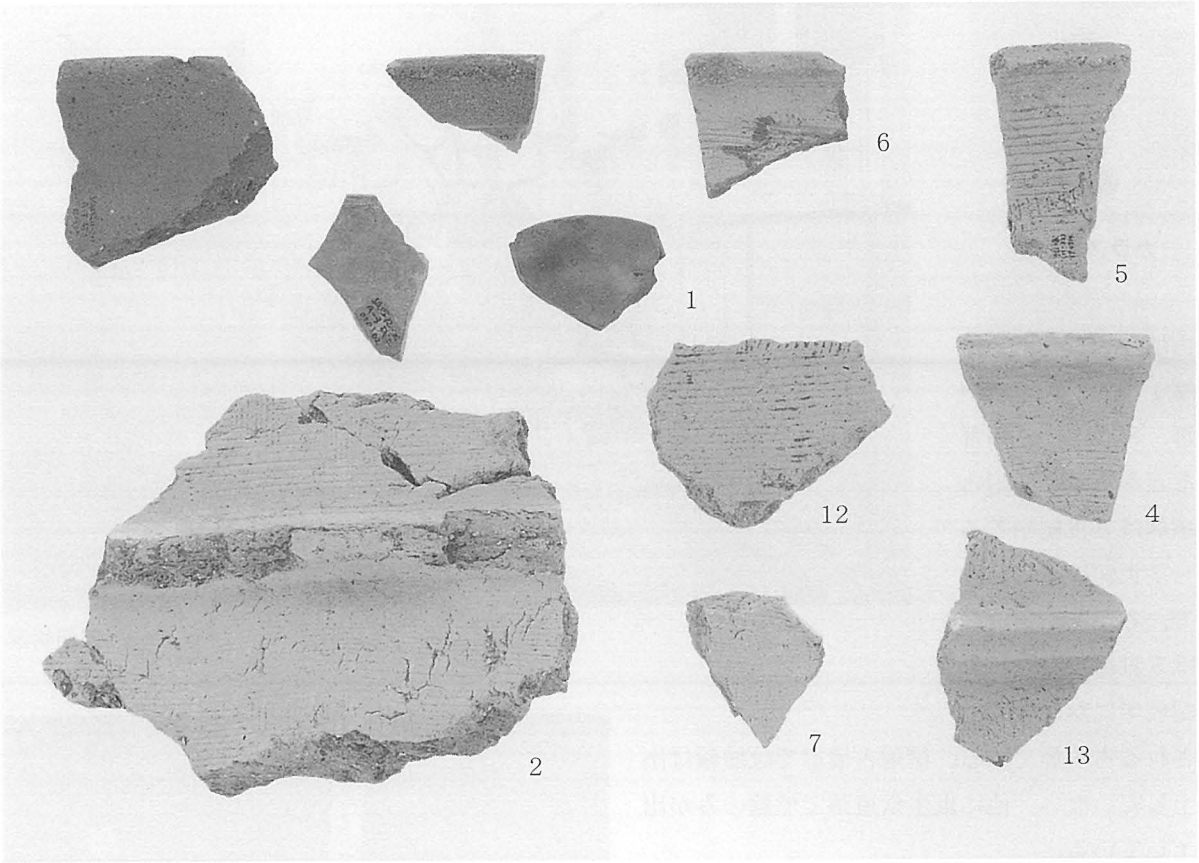
掘削状況

古墳、山賀古墳、巨摩１号墳、植附古墳群、みかん山古墳群などがある。植附古墳群は５世紀中ごろ～７世紀後半にかけて、みかん山古墳群は５世紀後半～７世紀前半にかけて築造される古墳群である。植附古墳群では埴輪は出土していない。他に瓜生堂遺跡で埴輪のみが出土している。

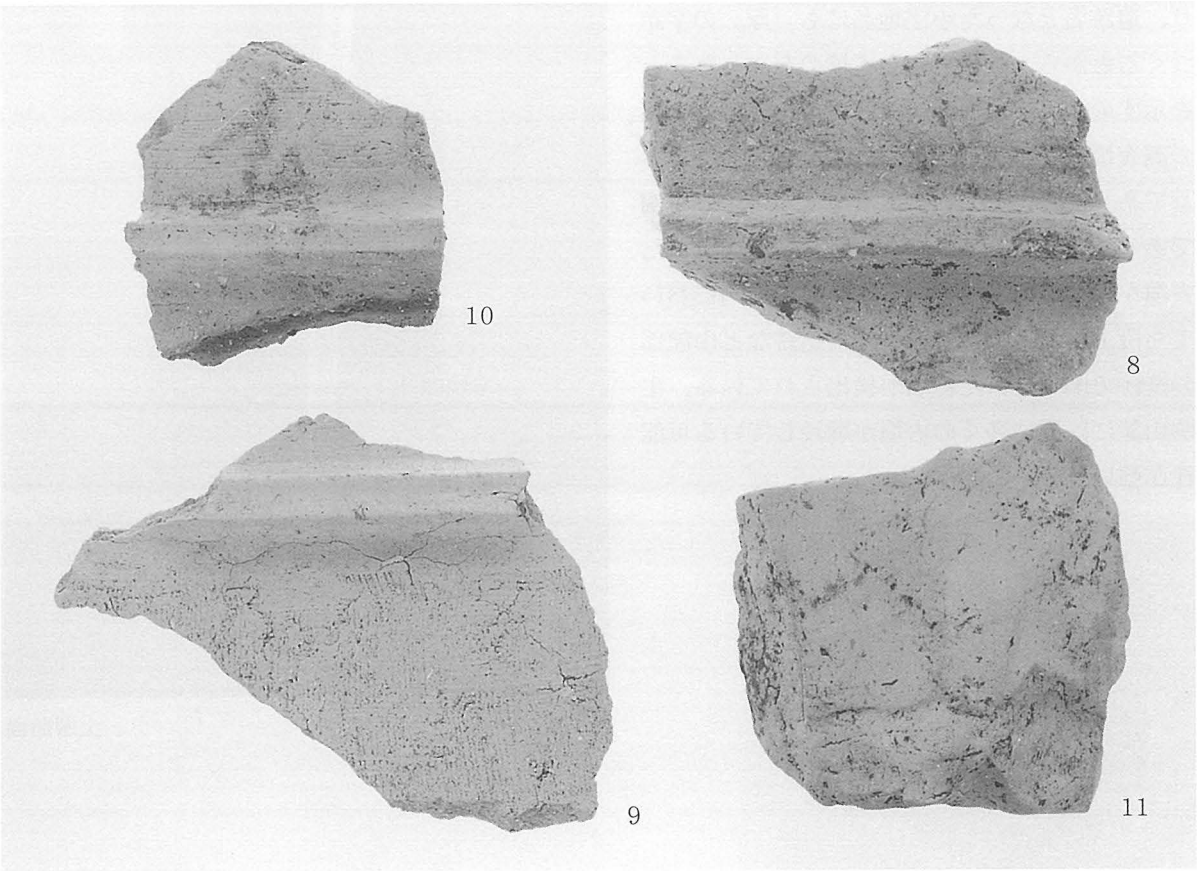
今回の調査で埴輪とガラス小玉が出土しており、遺跡名となった小字地名にも「塚」の字がつくことから、削平された古墳の存在したことを示すのかもしれない。前回の調査地点と今回の調査地点との距離は15mであるが、古墳が１基であったのか２基以上の群をなすのかは不明である。最近、各地の調査で削平され埋没した古墳が多数検出されており、東大阪市内においても段上遺跡・皿池遺跡・植附遺跡など山麓部の遺跡で削平された古墳が検出されている。生駒山麓には更に多くの古墳が埋没している可能性が強い。



土層断面




出土遺物（土師器・須恵器・瓦器・埴輪）

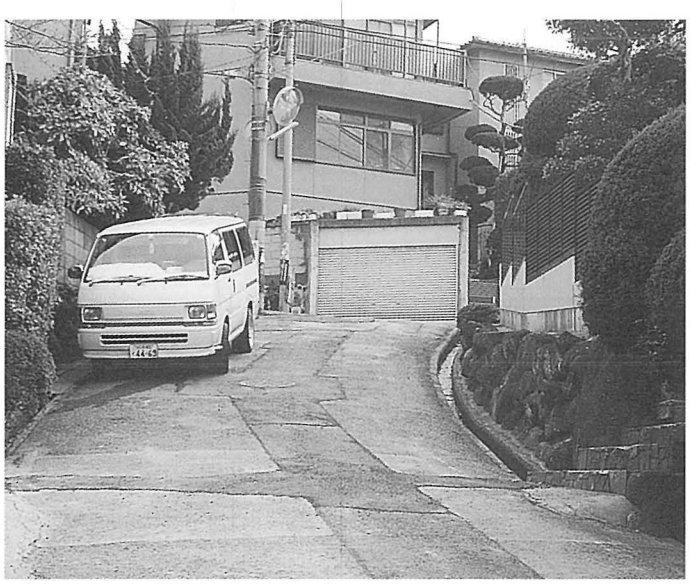



出土遺物（埴輪）

# 第９章　神並（こうなみ）古墳群の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第12－２工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調査地点 | 東大阪市山手町 |
| 3 | 調査面積 | 97㎡ |
| 4 | 調査期間 | 平成13年１月11日～２月27日（延べ14日） |
| 5 | 報告担当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線額田駅の北東である。当地点は神並古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ110mの間であり、開削工法である。 |

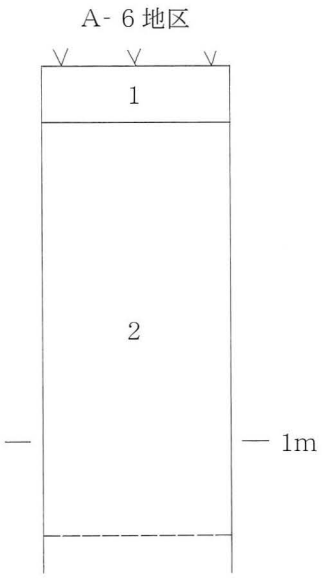
調査地点位置図（１/2500）



調査地遠景

掘削状況

土層断面




土層断面柱状図

1. 調査の概要

A－6地区の層序

第1層　盛土。

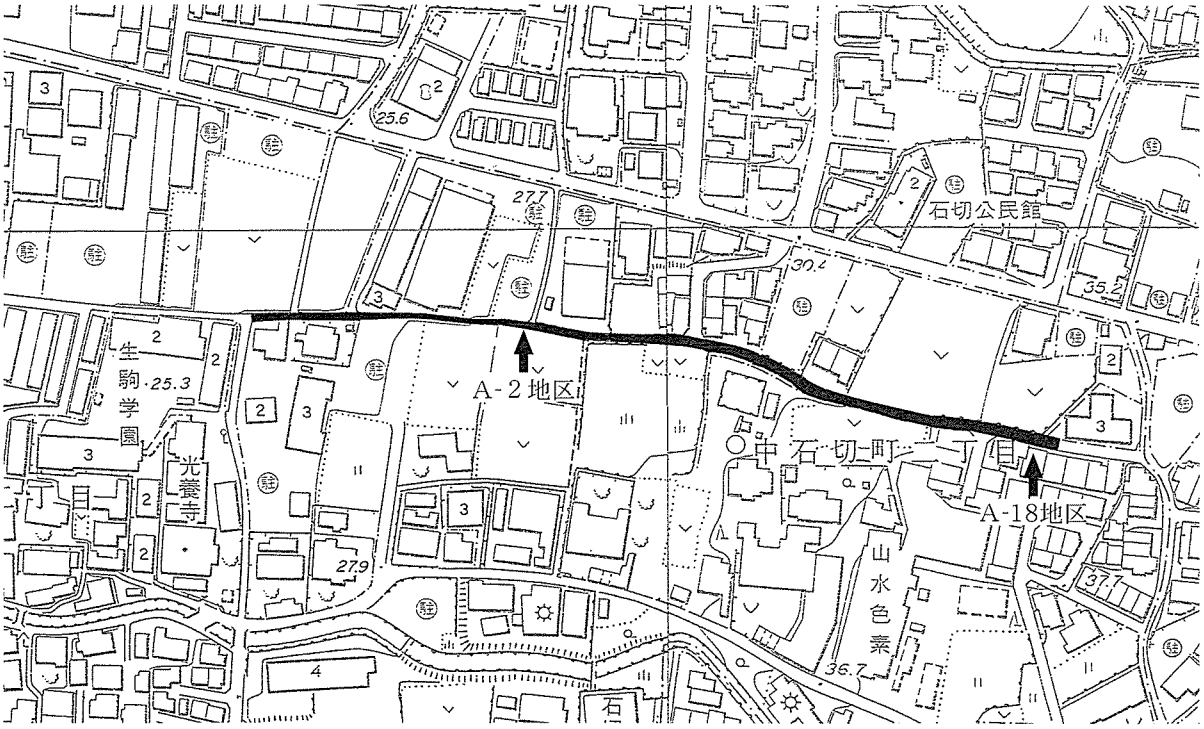
第2層　明黄褐色(10YR6/8)中礫混じりシルト。

2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

# 第10章　辻子谷遺跡の調査

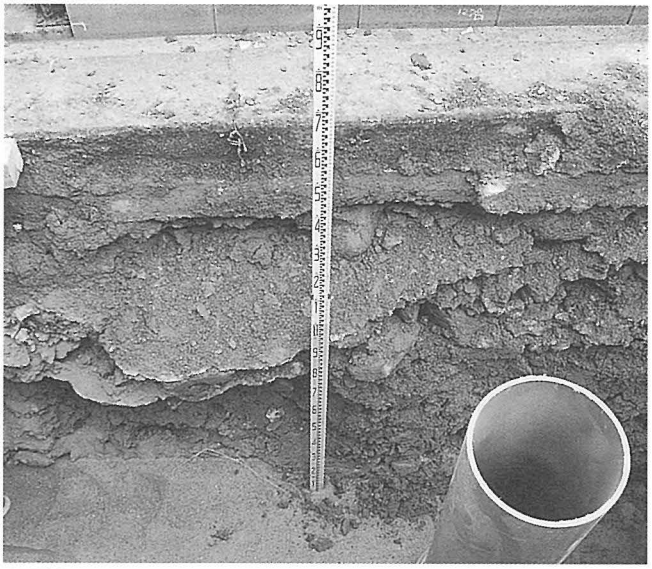
| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第３工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市中石切町２丁目 |
| 3 | 調 査 面 積 | 273㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年１月22日～２月26日（延べ12日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は東大阪市立石切幼稚園の北である。当地点は辻子谷遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ321mの間であり、開削工法である。 |



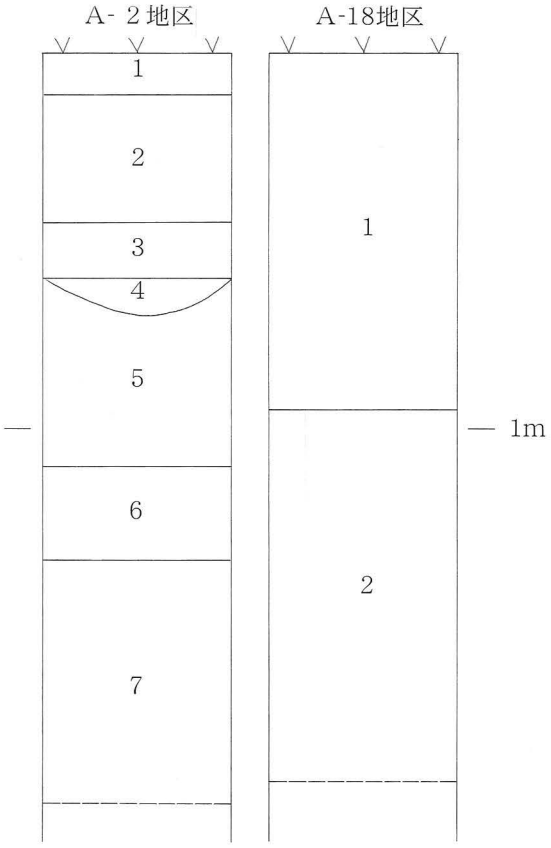

調査地点位置図（1/2500）

調査地遠景

掘削状況



土層断面




土層断面柱状図

1. 調査の概要

A－2地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂質土。

第3層　灰色(7.5Y4/1)砂質土。

第4層　暗オリーブ灰色(5GY4/1)粗粒砂。

第5層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中礫混じりシルト。

第6層　黒色(2.5Y2/1)粘質土。

第7層　灰色(10Y4/1)シルト。

A－18地区の層序

第1層　盛土。

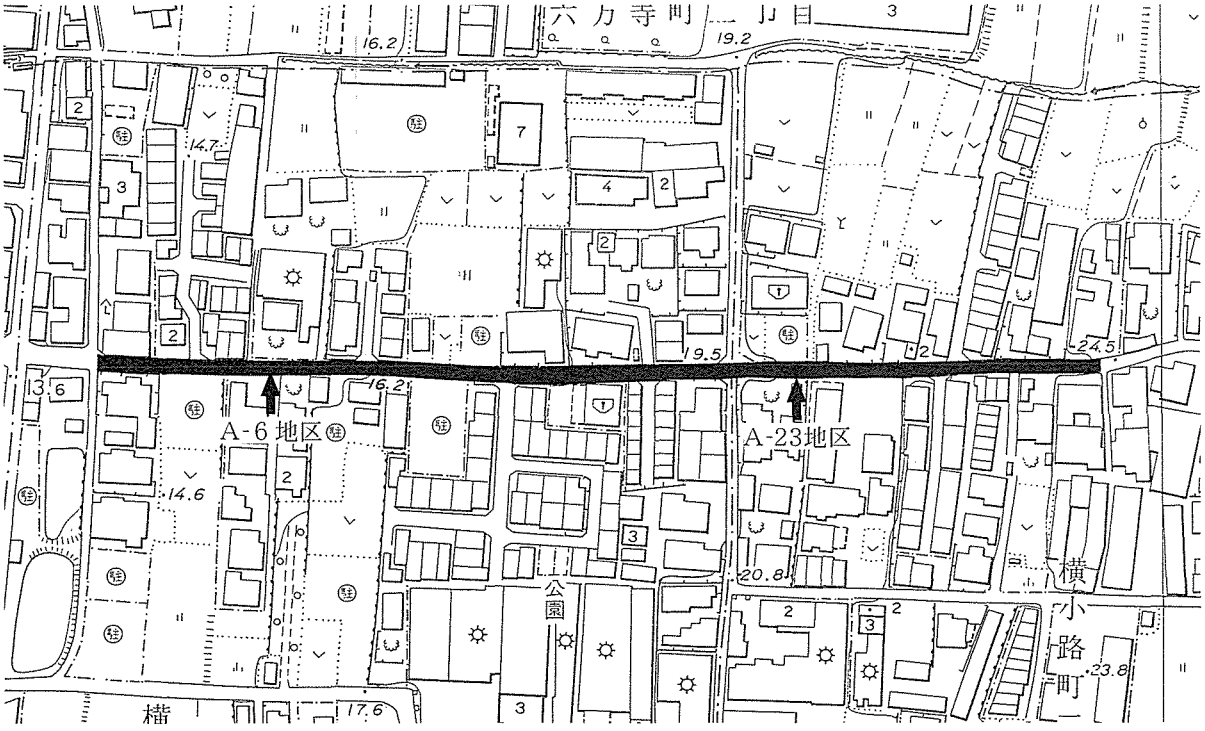
第2層　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土。

2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

# 第11章　馬場川（ばばがわ）遺跡の調査

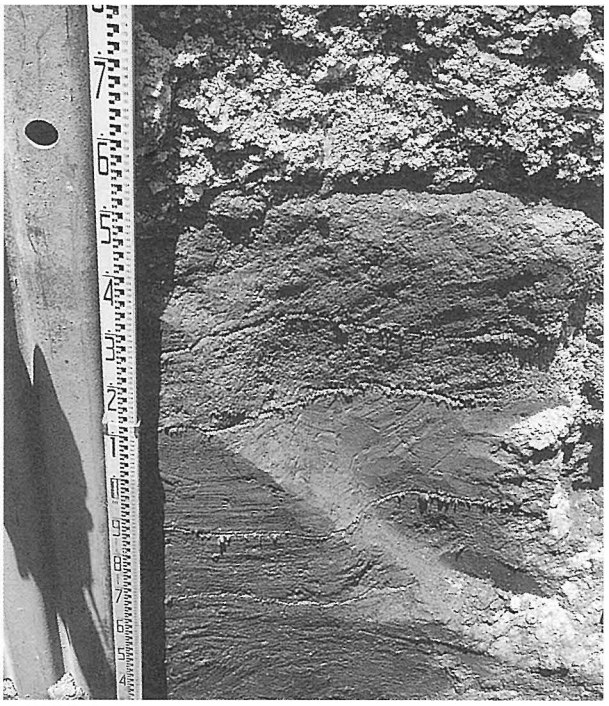
| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第37工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市横小路町3丁目 |
| 3 | 調 査 面 積 | 287㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年６月４日～７月25日（延べ32日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は縄手南小学校の南である。当地点は馬場川遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ338mの間であり、開削工法である。 |



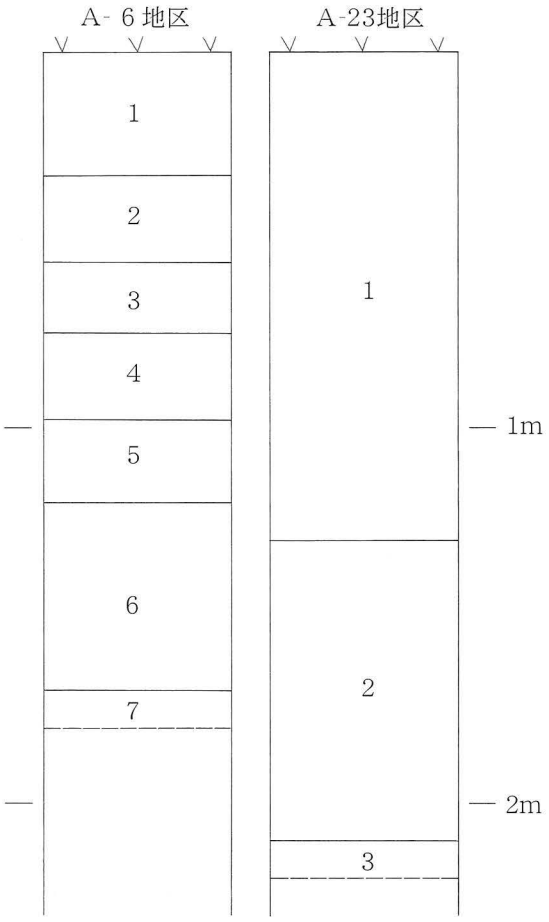

調査地点位置図（1/2500）

調査地遠景

掘削状況



土層断面




土層断面柱状図

1. 調査の概要

A－6地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗褐色(10YR3/3)中粒砂。

第3層　黒褐色(2.5Y3/2)砂混じりシルト。

第4層　黒褐色(2.5Y3/1)砂混じりシルト。

第5層　黒褐色(2.5Y3/1)細礫混じりシルト。

第6層　オリーブ黒色(7.5Y3/1) 細礫混じりシルト。

第7層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト混じり細～中粒砂。

A－23地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)中～粗粒砂。

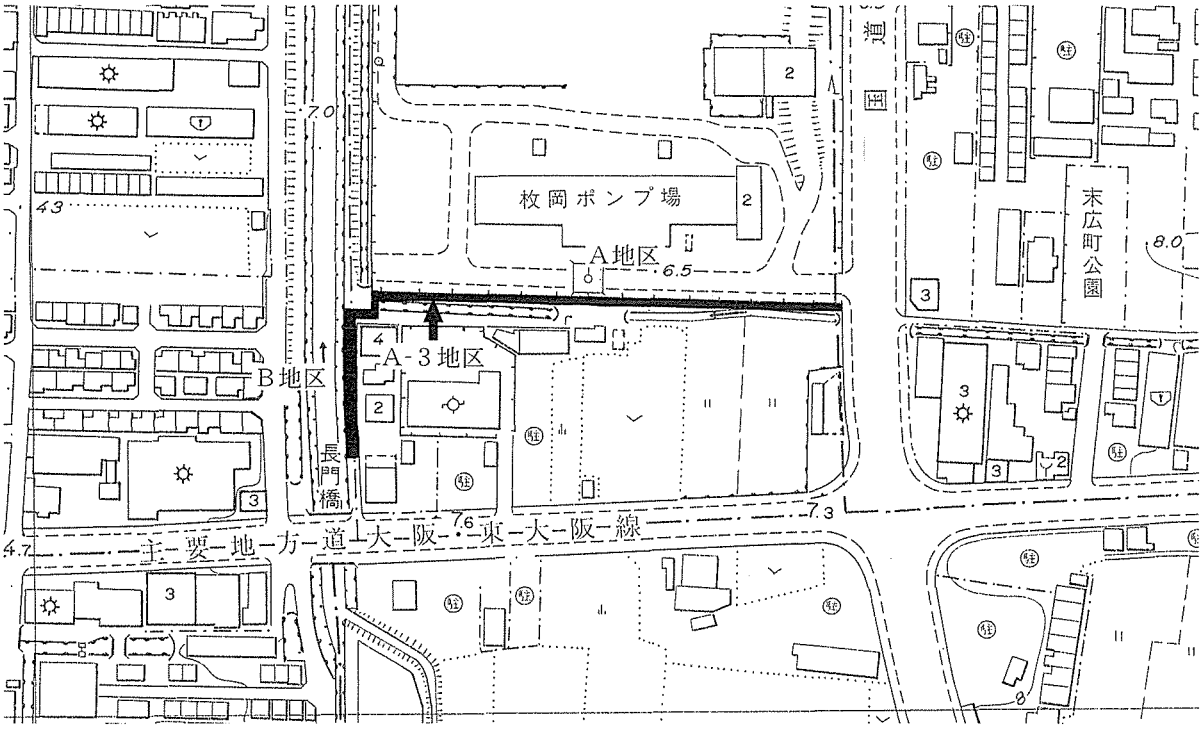
第3層　暗緑灰色(7.5GY3/1)細粒砂。

2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

# 第12章　北鳥（きたとんのいけ）池遺跡の調査

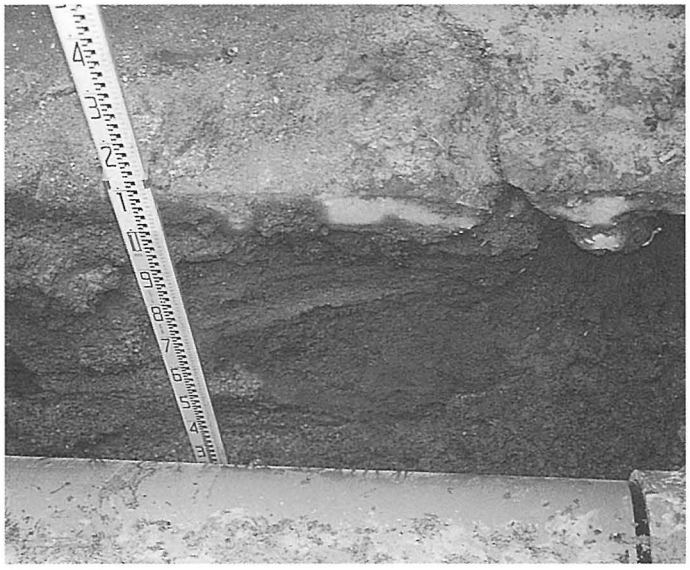
| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第13工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調査地点 | 東大阪市若草町 |
| 3 | 調査面積 | 198㎡ |
| 4 | 調査期間 | 平成13年１月30日～３月７日（延べ９日） |
| 5 | 報告担当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪東大阪線の北で外環状線（国道170号線）と恩智川の間に位置する。当地点は北鳥池遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.7～1.1mで長さ233mの間であり、開削工法である。 |



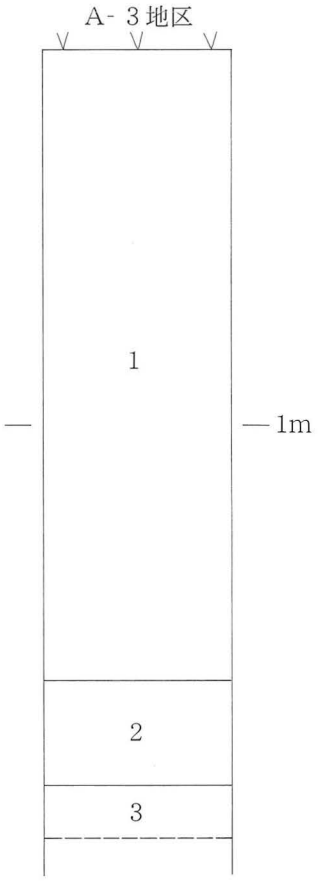

調査地点位置図（1/2500）

調査地遠景

掘削状況



土層断面




土層断面柱状図

1. 調査の概要

A－3地区の層序

第1層　盛土。

第2層　灰オリーブ色(7.5Y4/2)粗粒砂。

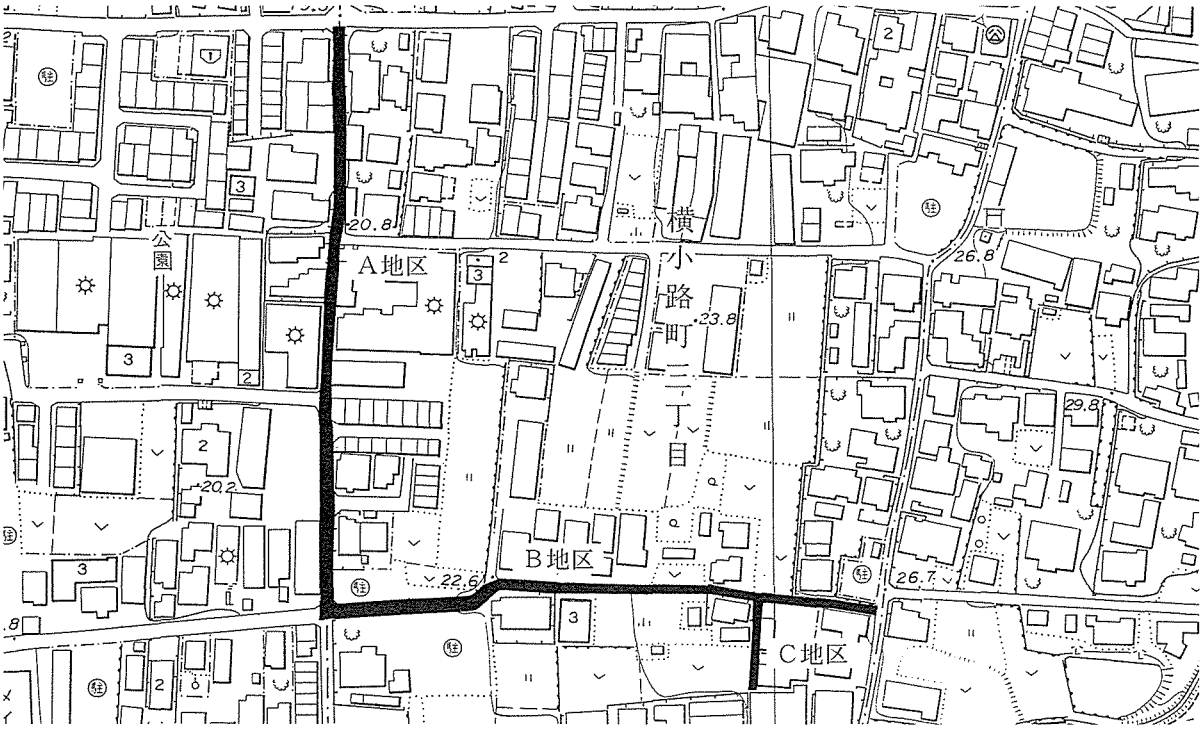
第3層　灰色(7.5Y4/1)砂質土。

2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。また、調査地の西側半分は、工事掘削深度が盛土内で納まった。

# 第13章　馬場川（ばばがわ）遺跡の第12次調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第20工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市横小路町3丁目 |
| 3 | 調 査 面 積 | 279㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年５月１日～10月12日（延べ84日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 岩間俊之 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は旧国道170号線の東である。当地点は馬場川遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ328mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（1/2500）

1. 調査の概要

A－1地区の層序

第1層　盛土。

第2層　灰色(7.5Y4/1)シルト混じり中～細粒砂。細礫を含む。

第3層　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト混じり細粒砂。粗粒砂を含む。

第4層　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混じり中～細粒砂。

第5層　暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混じり中～細粒砂。

第6層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂～シルト。粗粒砂を含む。

第7層　オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂～シルト。

A－6地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト。粗粒砂を若干含む。弥生～古墳時代の遺物が出土した。

第3層　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。粗粒砂～細礫を若干含む。

第4層　黒褐色(10YR3/1)粗粒砂。細礫を若干含む。

第5層　暗緑灰色(10GY3/1)細粒砂。

A－18地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒色(5Y2/1)粘土質シルト。細礫を若干含む。出土状況及びB地区の調査の結果、第2層は上下に分層することが可能であると考えられるため、便宜上、点線により、弥生後期の遺物包含層と、縄文晩期の遺物包含層に分けることにした。

B－2地区の層序

第1層　盛土。

第2層　にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～シルト。

第3層　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混じり中粒砂。細礫を含む。弥生～古墳時代の遺物が出土した。

第4層　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じり粗～中粒砂。

第5層　暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト混じり粗～中粒砂。

第6層　黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト。縄文時代晩期の遺物包含層である。

B－5地区の層序

第1層　盛土。

第2層　灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂～シルト。

第3層　暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂～シルト。

第4層　黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂～シルト。

第5層　オリーブ黒色(5Y2/2)シルト～細粒砂。

第6層　黒色(N2/)中～細粒砂混じり粘土質シルト。鉄分が沈着する。弥生時代後期の遺物包含層である。

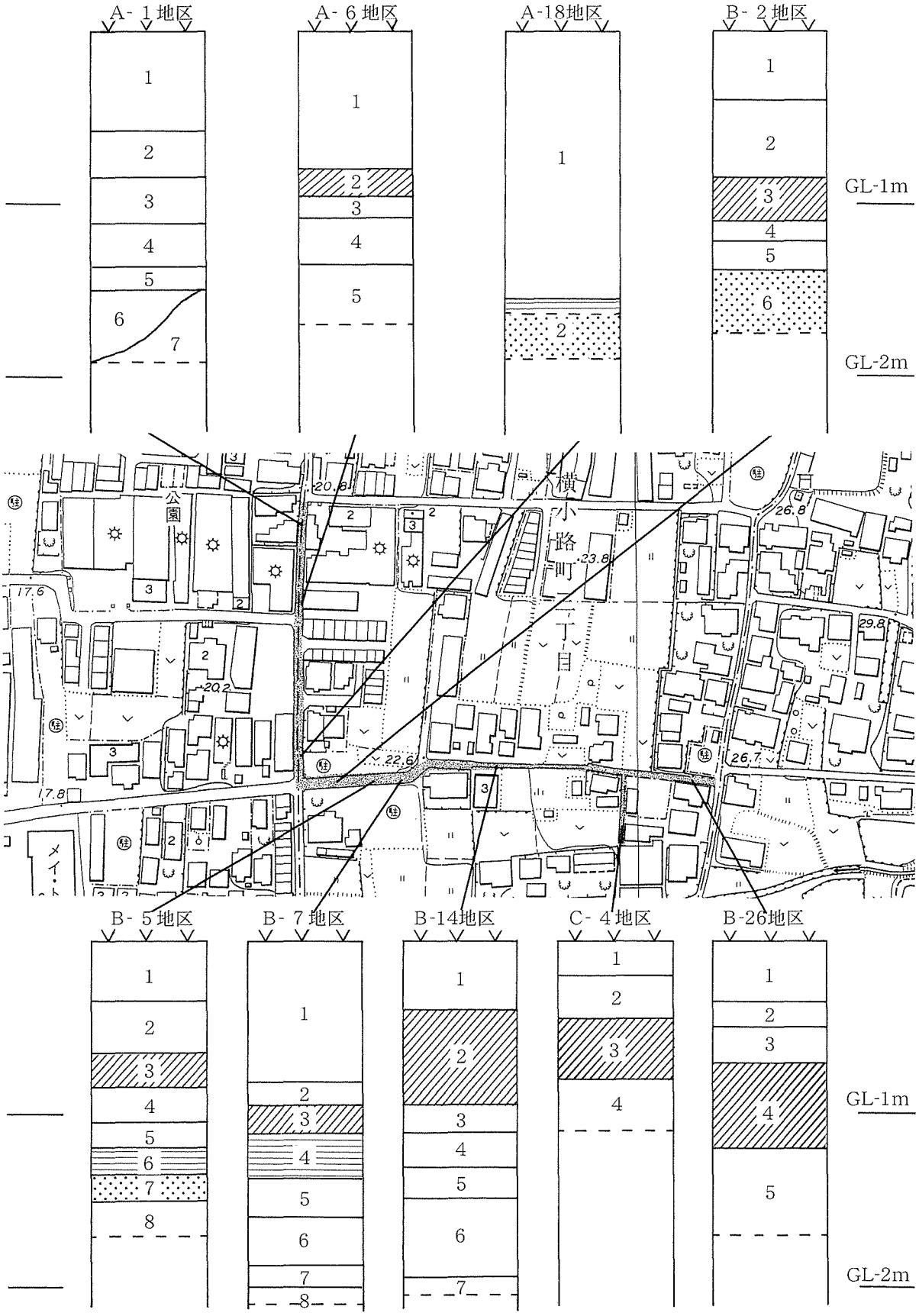
第7層　黒色(N1.5/)細粒砂混じり粘土質シルト。縄文時代晩期の遺物包含層である。

第8層　黒色(10Y2/1)細粒砂混じり粘土質シルト。

B－7地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂混じり粘質土。細礫を若干含む。


A- 1地区
A- 6地区
A-18地区
B- 2地区
GL-1m
GL-2m
公園
横小路町
丁目
B- 5地区
B- 7地区
B-14地区
C- 4地区
B-26地区
GL-1m
GL-2m

土層断面柱状図

第３層　黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混じり粘質土。弥生～古墳時代の遺物が出土。

第４層　黒色(5Y2/1)細粒砂混じり粘土質シルト。中礫を若干含む。弥生時代後期の遺物包含層である。

第５層　黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト。細粒砂を若干含む。縄文時代晩期の遺物包含層である。

第６層　黒色(7.5Y2/1)粘土質シルトに、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土質シルトが若干混じる。

第７層　黒色(5Y2/1)細粒砂混じり粘土質シルト。細礫を含む。

第８層　黒色(7.5Y2/1)細礫～中粒砂混じりシルト。

Ｂ－14地区の層序

第１層　盛土。

第２層　灰黄褐色(10YR4/2)細礫混じり中粒砂。弥生～古墳時代の遺物が出土した。

第３層　暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂。

第４層　黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂～細礫。

第５層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)細～中粒砂。下部に鉄分が沈着する。

第６層　黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂。

第７層　黄灰色(2.5Y4/1)細礫混じり中粒砂。

Ｃ－４地区の層序

第１層　盛土。

第２層　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混じり中～細粒砂。細礫を含む。

第３層　黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト。古墳～弥生時代の遺物が出土した。

第４層　黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂混じり粘土質シルト。

Ｂ－26地区の層序

第１層　盛土。

第２層　灰オリーブ色(5Y4/2)シルト混じり細～中粒砂。

第３層　黄灰色(2.5Y4/1)シルト混じり細粒砂。にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトが混じる。

第４層　黒褐色(2.5Y3/2)細礫混じり粘土質シルト。炭化物が混じる。弥生～古墳時代の遺物が出土した。

第５層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト混じり粗粒砂。５cm大の礫を多く含む。

2. 出土遺物

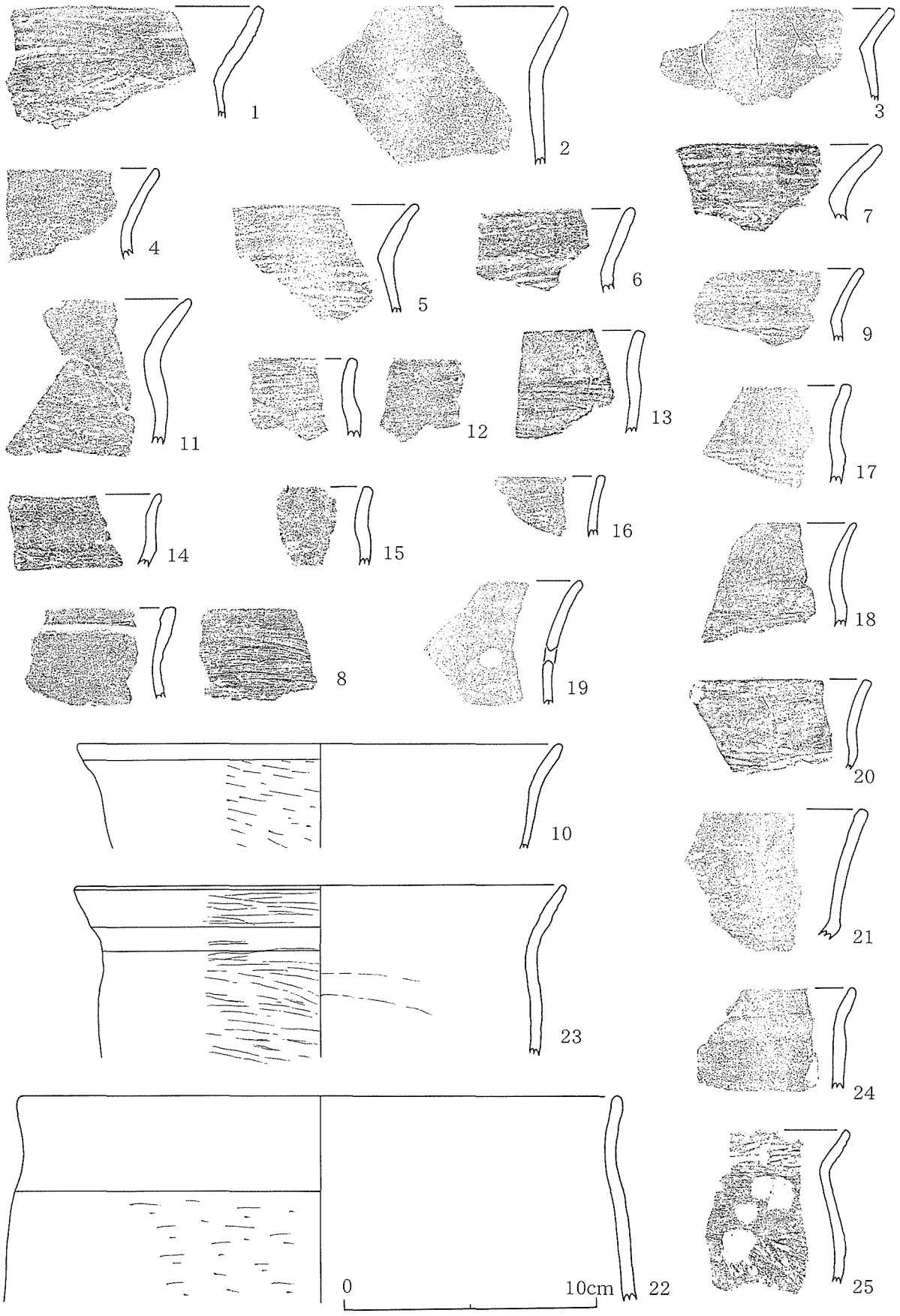
出土遺物には縄文土器、石製品、弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、中世の瓦などがある。出土総数はコンテナで約５箱あり、そのうち図化しえたものは118点である。以下概要を述べる。

縄文土器

今回出土した縄文土器は、晩期前半～中頃のものが中心である。時期を明記していないものは同時期のものである。また、土器はほとんどが生駒西麓産であるため、搬入品のみを文末に記す。

深鉢　１～10は口縁部が外反し、体部、口縁部が二枚貝条痕、巻貝調整またはケズリによって調整されているものである。１、２、８は口縁端部に面を持ち、３～７、９、10は丸くおさめる。８は巻貝調整が施され、口縁部内面に段をもつ。５、６、９、10は口縁部の調整後、軽いナデ調整をおこなう。

11～22は外反する口縁部を強いナデによって調整し、二枚貝条痕またはケズリによって調整された胴部との境を明瞭にしているものである。ナデ調整の幅が広いもの（11、17～22）と、狭いもの（12～15）の二種に大別することができる。口縁部のナデ調整が広く施されるものに比べ、狭く施される




出土遺物実測図

ものが外反度が緩く、口縁端部に面をもつ傾向がみられる。19は修繕孔がみられる。21は肩部の屈曲が強いことから、粗製浅鉢の可能性もある。22は体部外面をケズリ調整後、部分的にナデ調整をおこなう。

23～31は外反する口縁部を、二枚貝条痕またはケズリによって調整し、頸部にナデを施し、胴部と口縁部との境を明瞭にしているものである。ナデの幅が広いもの（23～25、31）と、狭いもの（26～30）があり、狭いものには30を除き、強く深いナデを施す。25はナデ調整が口縁部と胴部との境を作り出しているだけでなく、胴部に広く及ぶ。30は内面が屈曲しているにもかかわらず、外面は胴部からほぼ直線ぎみに立ち上がっており、口縁部との境はわずかにナデがみられるだけである。31は搬入品である。

32は口縁部が内傾し、ほぼ直線に立ち上がる。外面に二枚貝調整をおこない、口縁端部を丸くおさめる。

33～43は屈曲がなく、砲弾形を呈する。外面は二枚貝条痕、ケズリによる調整をおこなう。33、35、39は口縁端部に面をもち、他は丸くおさめる。33、34は口縁部にナデを施す。

浅鉢　44～49は外傾し、長く伸びる口縁部をもつ。口縁端部は上部に屈曲させ、丸くおさめる。外側面に水平に巡る１条の沈線を施すもの（45、46）、薄手であるもの（47）、面を持ち、瘤状の突起を貼り付けるもの（49）がある。50は口縁部が「く」字状に屈曲し、端部を肥厚させ抉りを加える。51は肥厚した口縁端部に突起を貼り付け、突起部と口縁端部との間に沈線を施し、境を明瞭にする。52は体部と口縁部の境に段を設ける。口縁部は内弯し、口縁端部に面をもつ。体部に設けた段と口縁端部との間に、５条の沈線を巡らせる。波状口縁になる可能性がある。53、54は外反する短い口縁部をもつ。注口土器の可能性があるが、細片であるため、断定することができなかった。47、49は粗製、その他はいわゆる黒色磨研土器である。

55、56は椀形を呈する。55は体部外面をケズリ調整、口縁端部をナデ調整する。56は全面にケズリ調整をおこなうが、外面の一部に粘土紐の接合痕を残す。

57～61は口縁部に１～２条の沈線を施す。57、59、60は内面に１条の沈線がみられる。

61～72は２～４条の沈線を施す体部である。73は段を持つ部位にハケメに近い調整を施す。75は３条の沈線の間に縦にヘラ状の工具による沈線を施し、格子状に施文する。76は肩部に爪もしくはヘラ状の工具による刻目を施文する。77は口縁端部に単節縄文を施し、沈線によって、胴部との境を作り出す。後期の土器である。78は突帯をもつ。突帯にはD字形の刻目を施す。晩期後半の土器である。57、59、78は搬入品である。

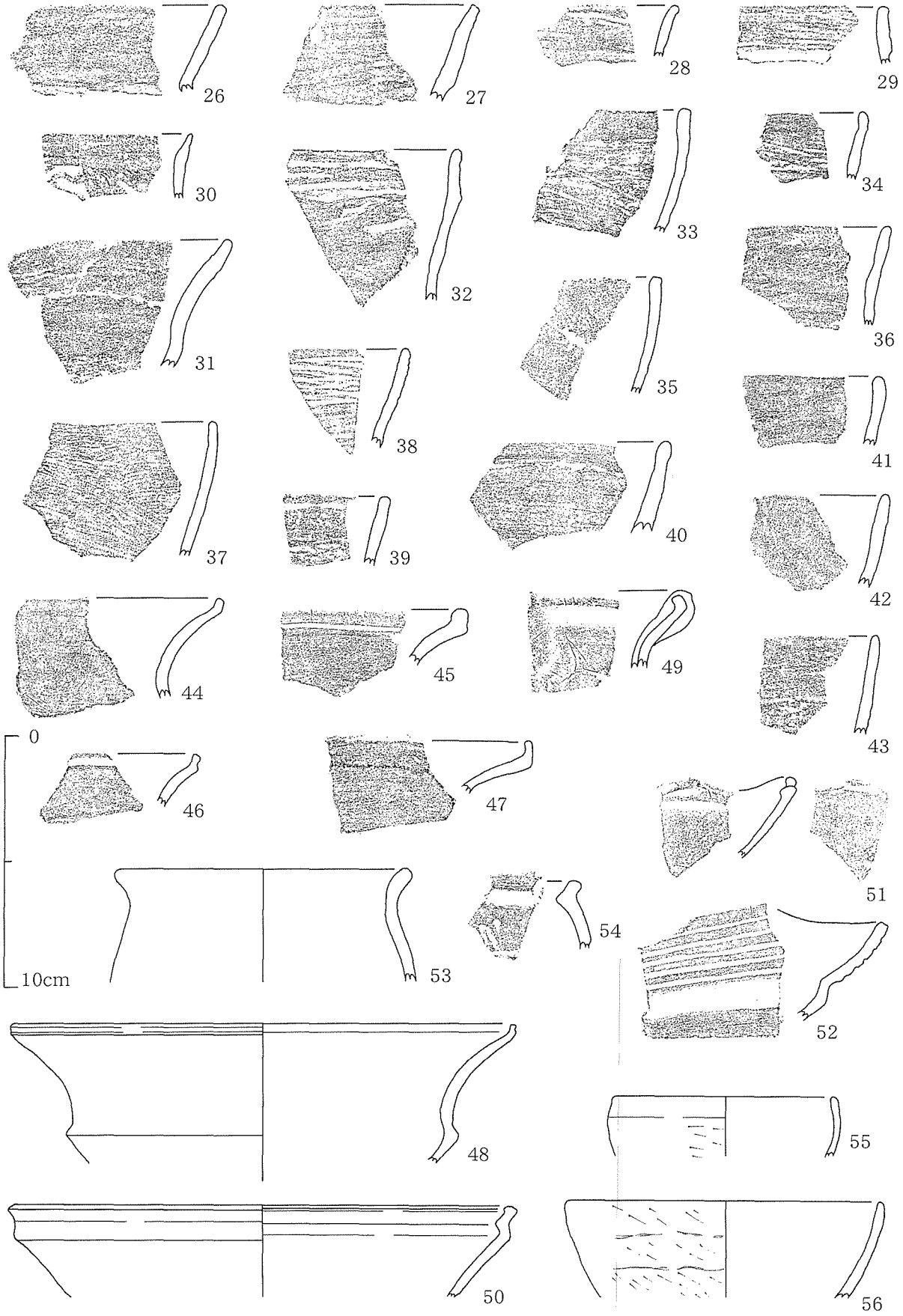
79～90は底部である。79は丸底であり、底部がわずかに凹む。80～84、88～90は凹底である。胴部側面はケズリまたは二枚貝条痕によって調整され、底部をナデによって仕上げる。85、86は浅い凹底を呈する。87は粘土板を二枚重ねた厚い底面をもつ。

石製品

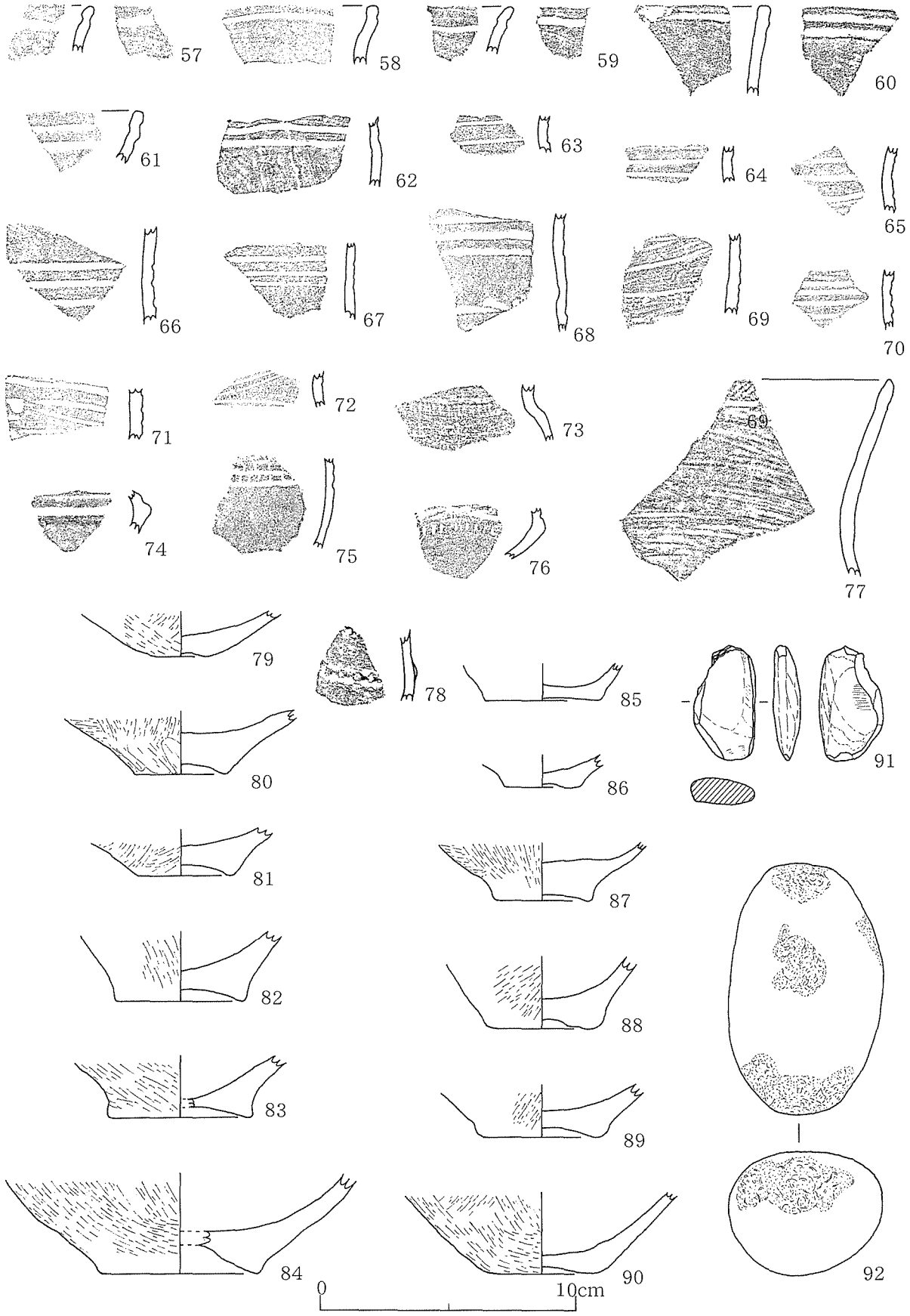
91は扁平磨製石斧である。蛇紋岩製（材質は筆者の肉眼観察による。以下同様。）で、基部、側面はともに欠損する。側面、平面ともよく磨かれており、側面に稜をつくる。刃部は使用に伴うとおもわれる痕跡を残す。92は敲打具である。材質はいわゆる生駒石で、最大長13.3cm、最大幅8.1cm、最大厚6.6cmを測る。重量は1,060gである。河原石を転用した可能性が高い。頂部と側面に打撃痕をもつ。

土師器

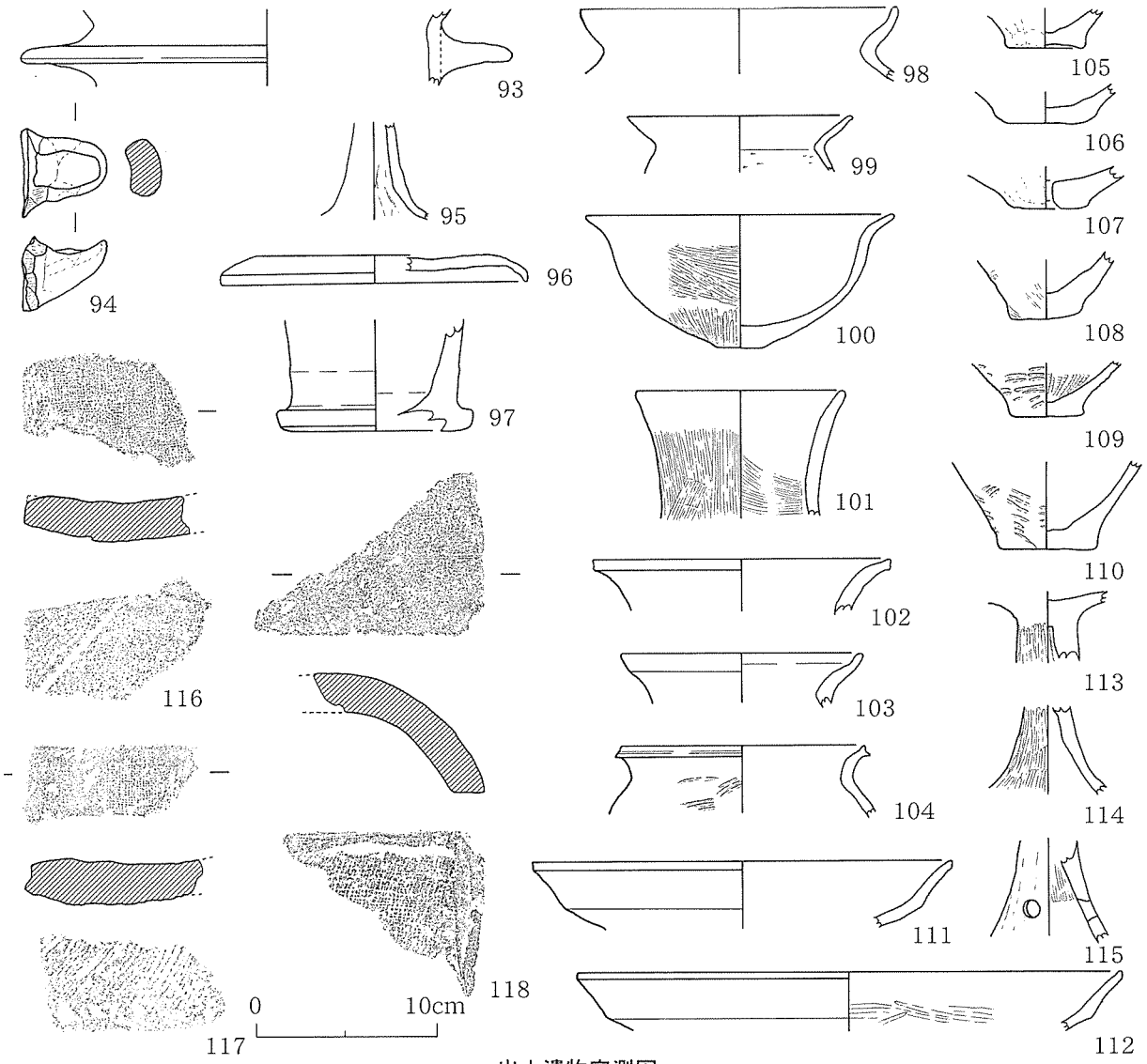
93は羽釜である。断面がU字形の鍔が水平に付く。94は把手である。95は高杯脚部である。


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
49
51
52
53
54
48
50
55
56
0
10cm

出土遺物実測図


57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
69
74
75
76
77
79
78
85
91
80
86
81
87
82
88
83
89
84
90
92
0
10cm

出土遺物実測図




出土遺物実測図

須恵器

96は杯蓋である。天井部は欠損する。ややくぼんだ天井部から緩やかに内弯し、口縁端部はさらに下方に屈曲する。97は捏鉢である。直線的に外側に開く体部をもつ。底部は欠損する。

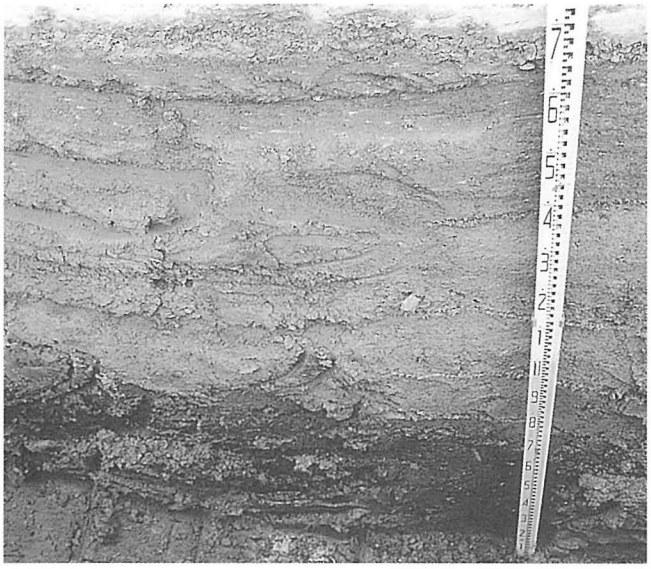
古式土師器

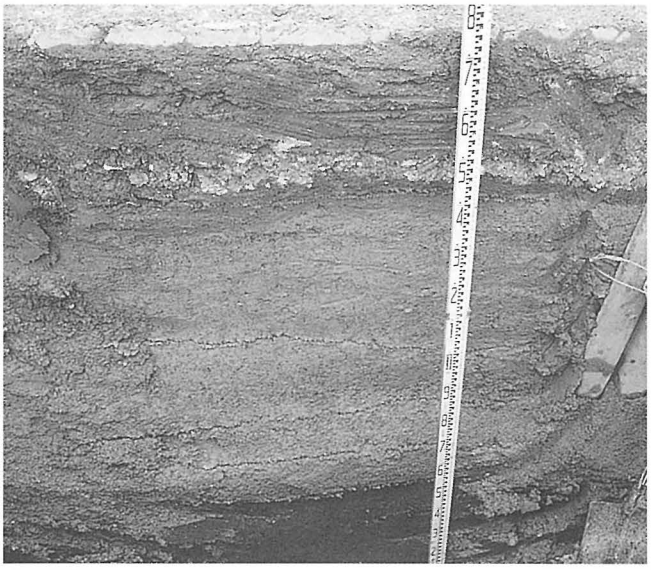
98、99は甕である。98は受口状の口縁をもち、端部は丸くおさめる。99はいわゆる布留式甕である。100は庄内式鉢である。ゆるやかに外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。体部内面と口縁部はナデ調整し、体部外面上半は斜め方向、下半は縦方向にヘラミガキ調整する。

弥生土器

101は長頸壷の口頸部である。やや外傾気味に直口し、端部を丸くおさめる。頸部外面は縦方向に原体数が7本/cmのハケメ調整し、内面は横方向に原体数が7本/cmのハケメ調整する。102は広口壷である。口縁端部に面をもつ。103、104は甕である。103は受口状の口縁をもつ。104は口縁端面に擬凹線を残す。105～110は底部である。107は穿孔する。109、110の体部外面はタタキ調整する。110はタタキの後、ナデによって調整する。111～115は高杯である。111、112は杯部である。口縁部が短く外反し、端部に面をもつ。111は内外面を横ナデ調整する。112は外面に横ナデ調整、内面

調査地遠景


土層断面


土層断面

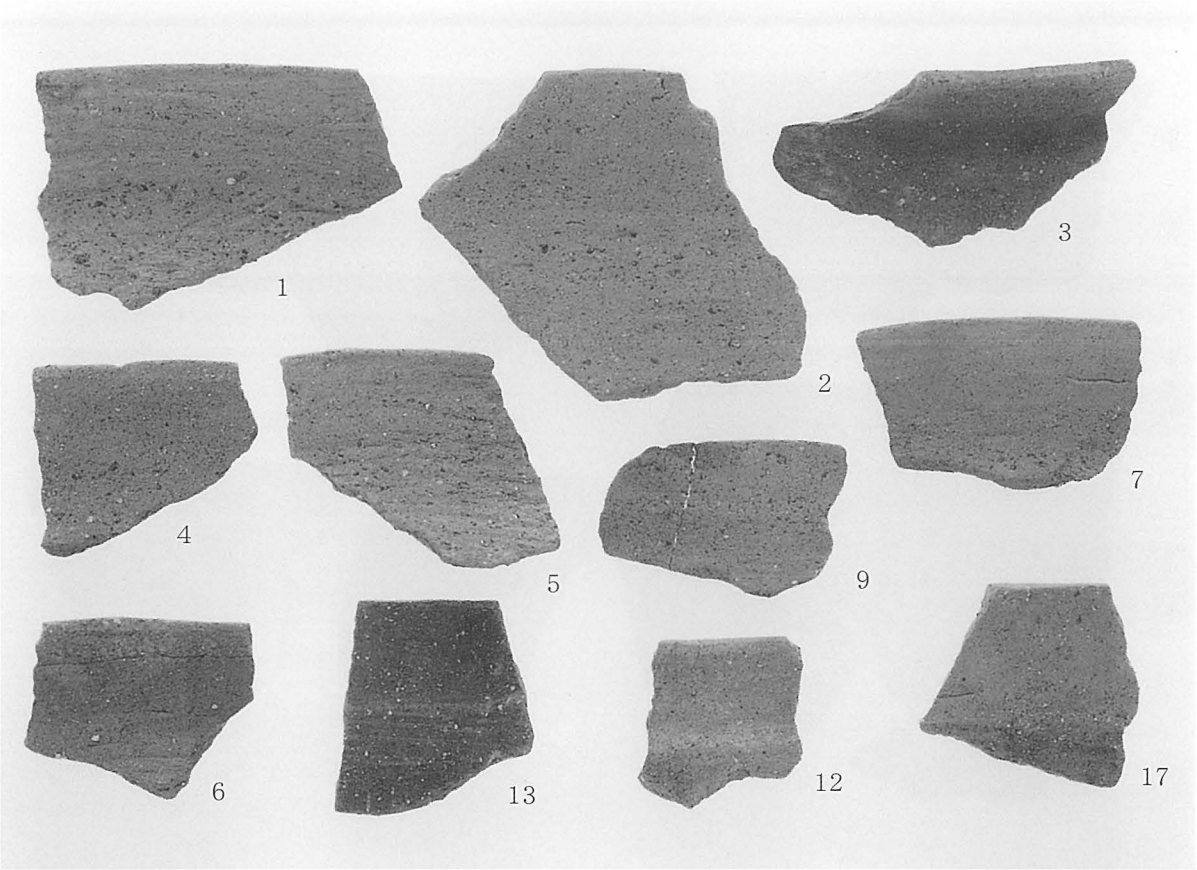
に横方向のヘラミガキ調整する。113～115は脚部である。脚柱部は中空である。115は円孔を穿つ。113、114は縦方向にヘラミガキ調整する。115は縦方向にナデ調整する。高杯は古式土師器の可能性もある。

瓦　116、117は平瓦である。凹面に8本/cm四方の布目痕を残し、側面にヘラケズリ調整する。凸面は縄目叩き調整する。118は丸瓦である。凹面に5本/cm四方の布目痕を残し、側面にヘラケズリ調整する。凸面はナデ調整する。

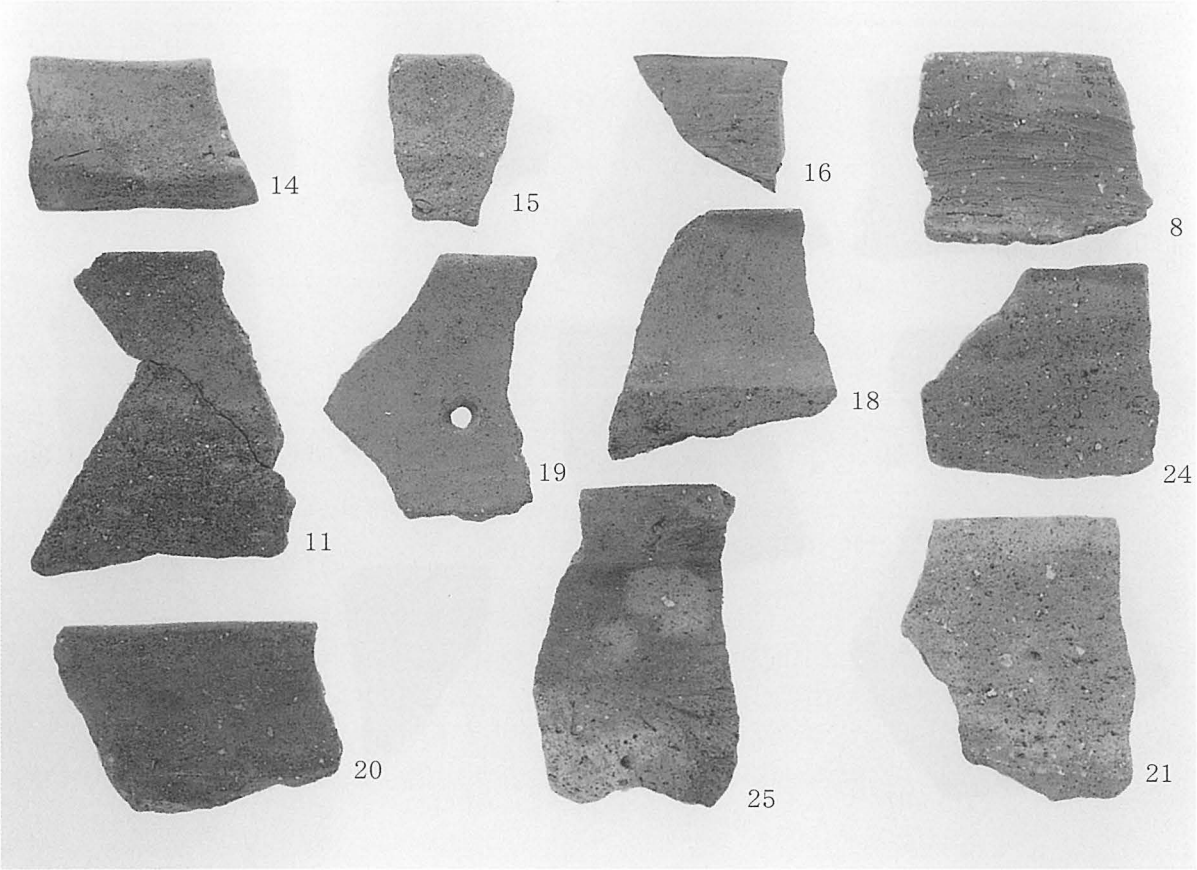
3. まとめ

今回の調査は、11次調査の東端より延長する形で行われ、A－18～B－14地区には縄文晩期の包含層と、それを削平する弥生後期の包含層が確認された。B－14地区より東部においては後世の河川によって削平され、包含層は確認されなかった。

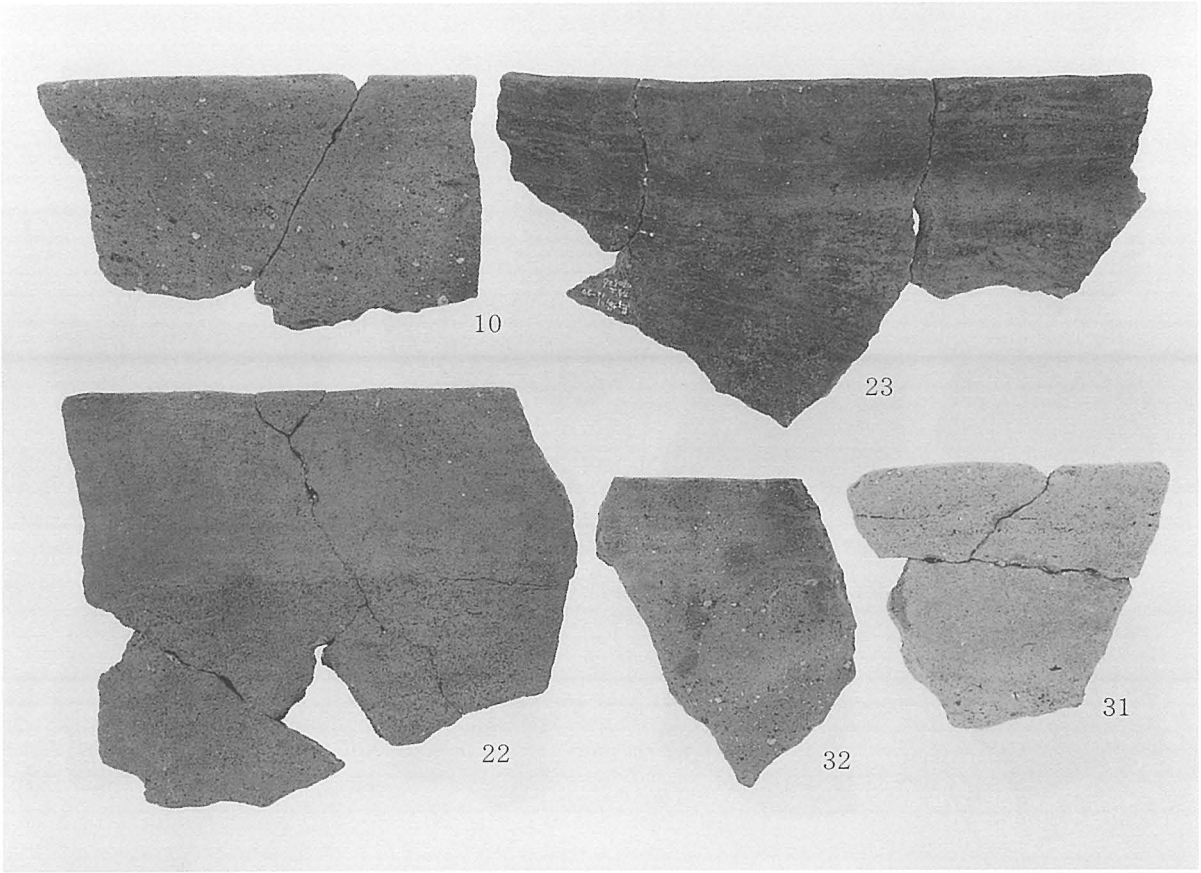
この工事が下水工事に伴う立会であることと、幅が1m程度であることから、遺構の有無は確認出来なかった。また、掘削による混入品の可能性を無視出来ない状態であったが、縄文晩期の遺物包含層は、そのほとんどが滋賀里Ⅱ～Ⅲb（篠原式古段階）に該当すると思われる。今回掲載した晩期の縄文土器は、Ⅲa式の基準とされる頸部に横ナデをおこない口縁部と体部の境を画する深鉢、また二枚貝条痕の比率が高いことから、Ⅲa期がピークである可能性が高い。この状況はこの包含層検出地点から北方約100mにおいておこなわれた7、8次調査に近い。今回の調査成果より考えると、滋賀里Ⅱ～Ⅲbの時期の集落が広範囲に広がっていると思われる。



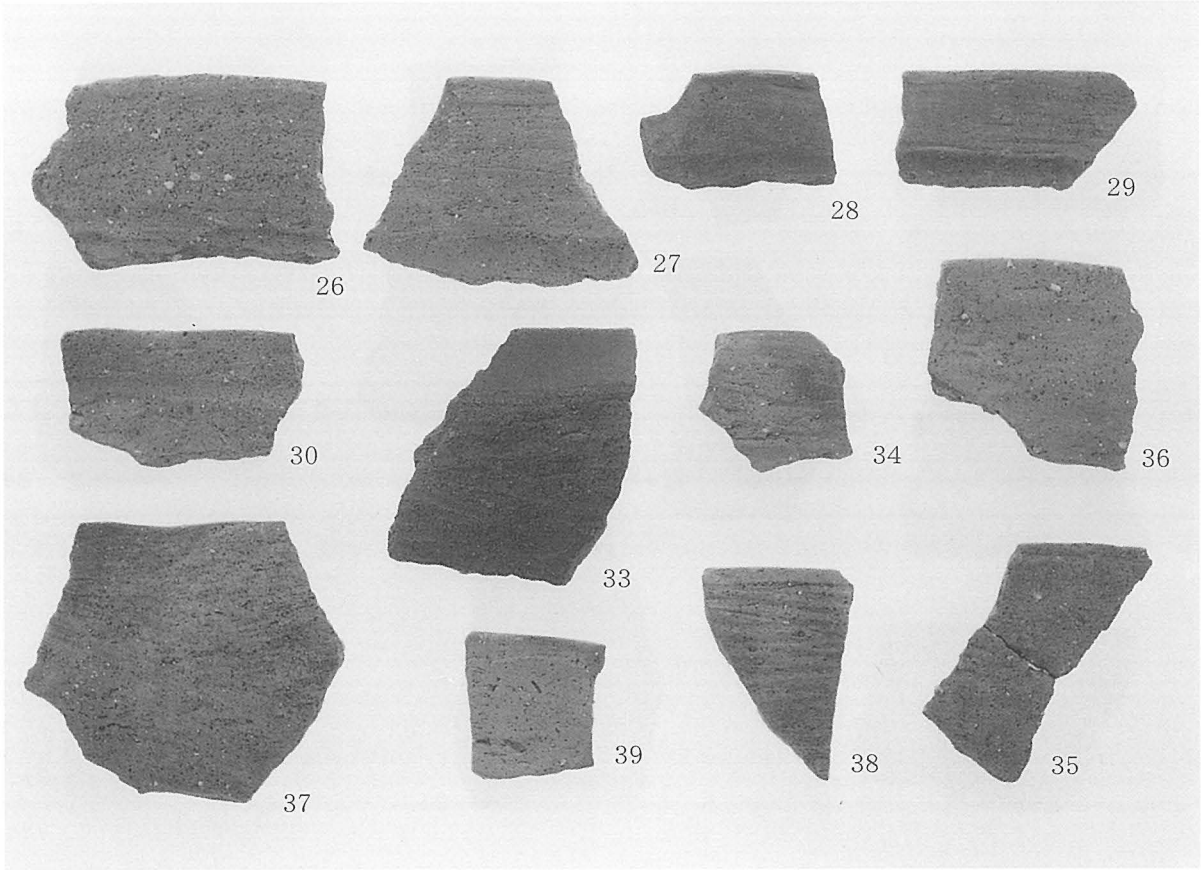

出土遺物（縄文土器）



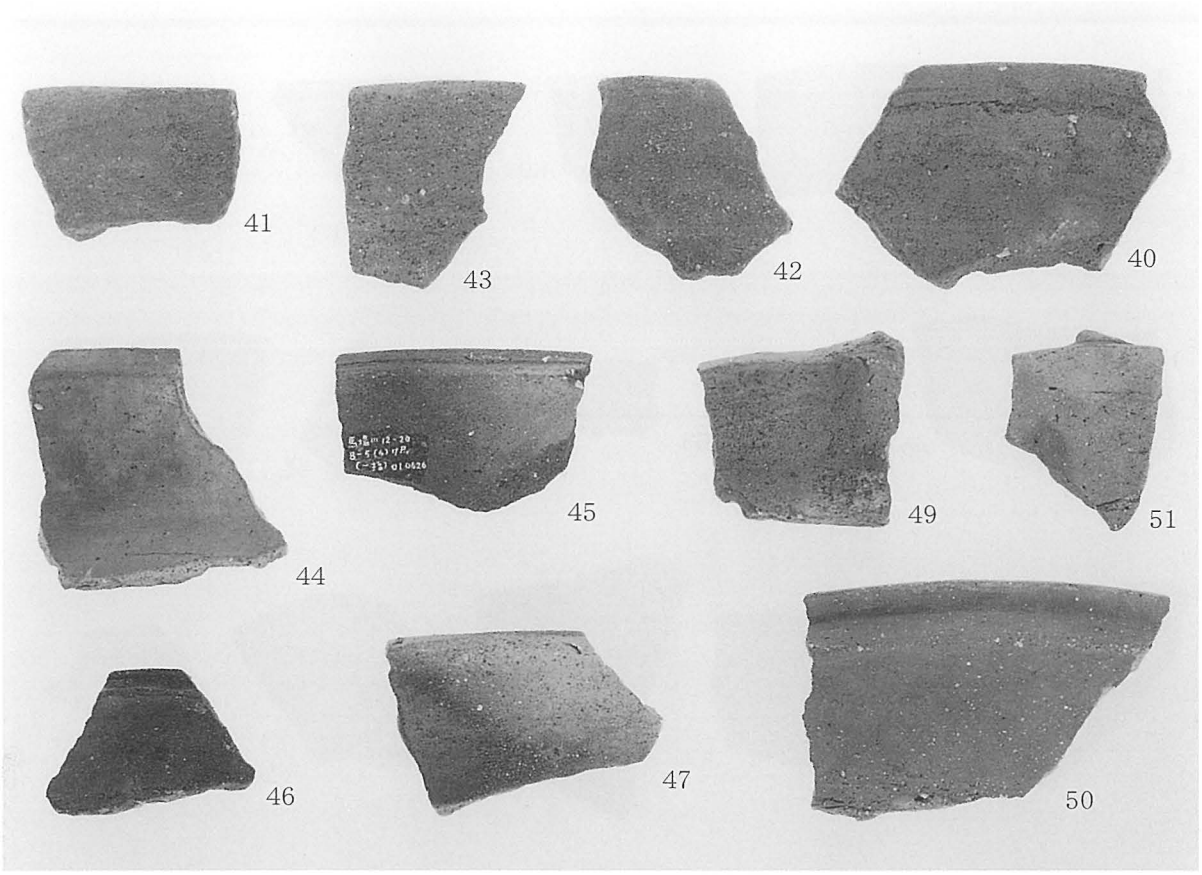

出土遺物（縄文土器）



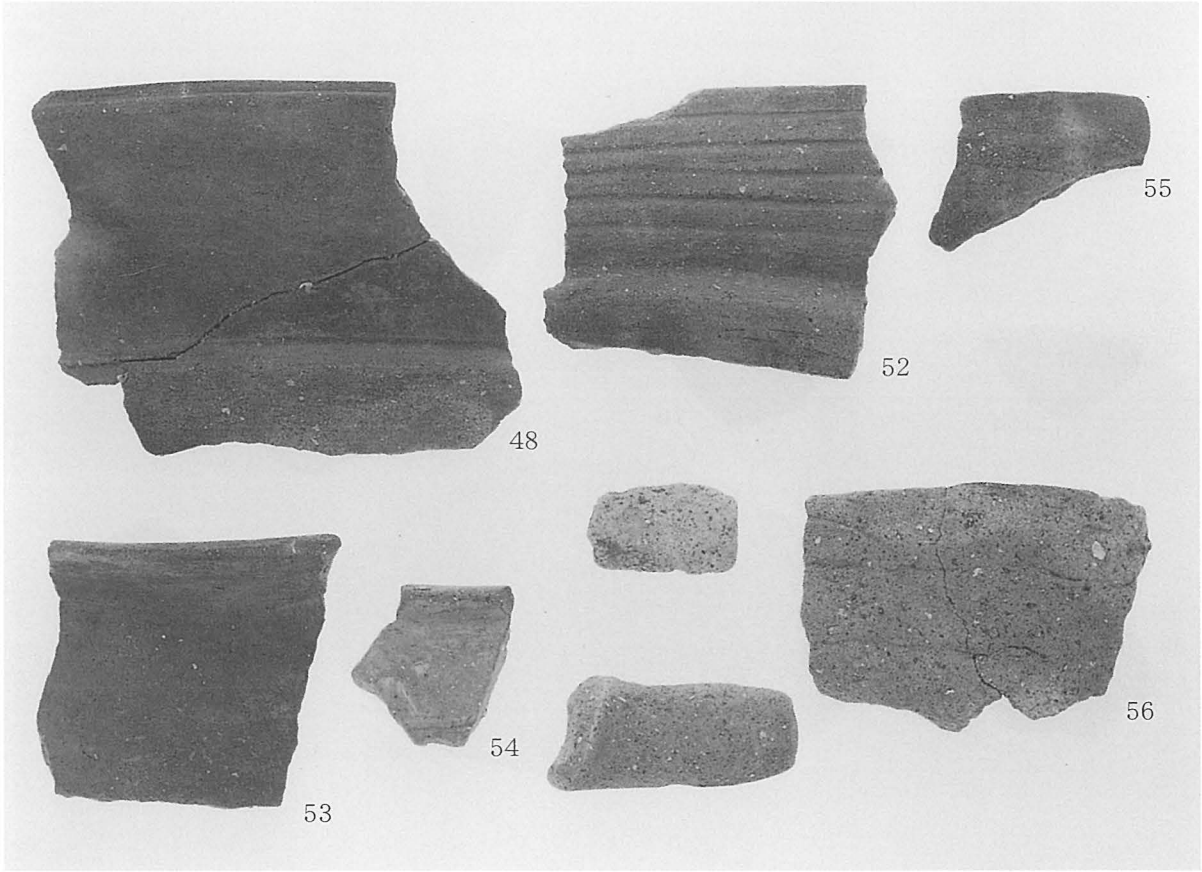

出土遺物（縄文土器）



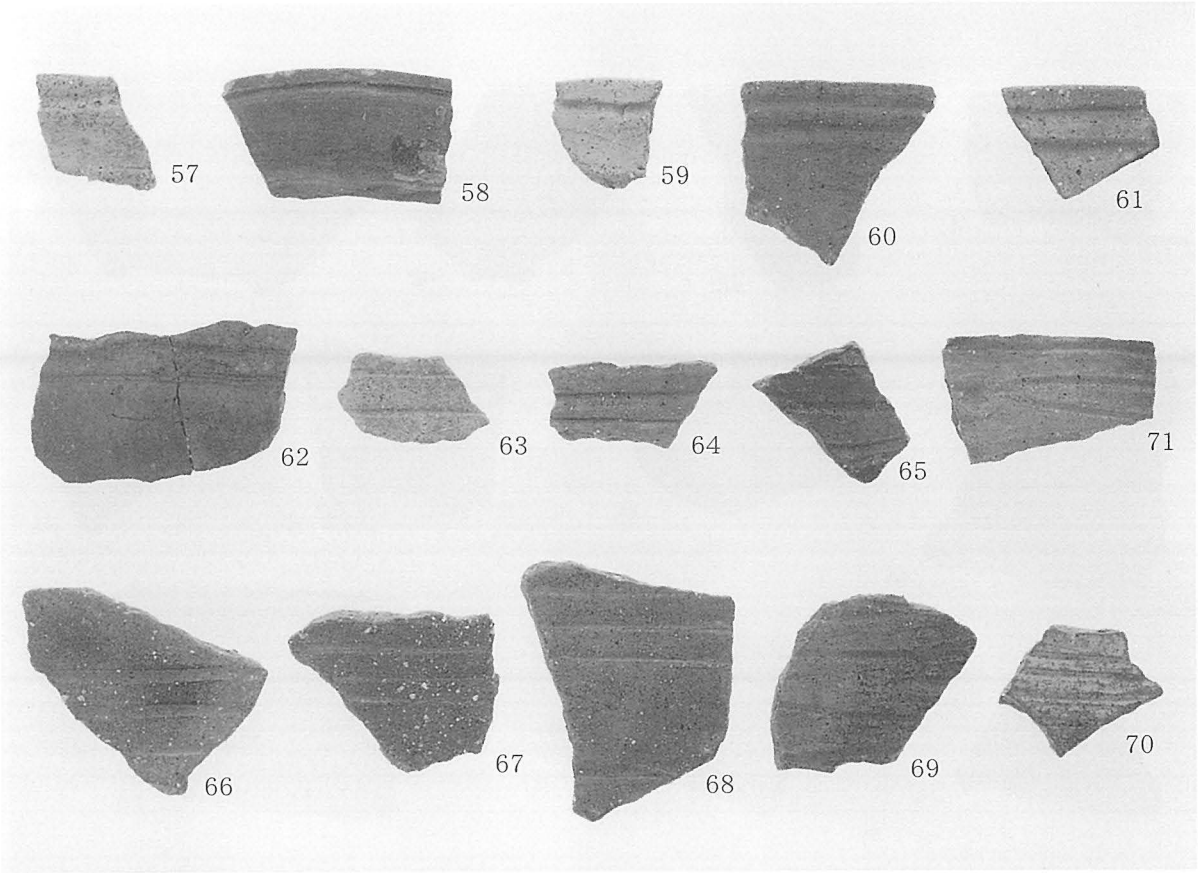

出土遺物（縄文土器）



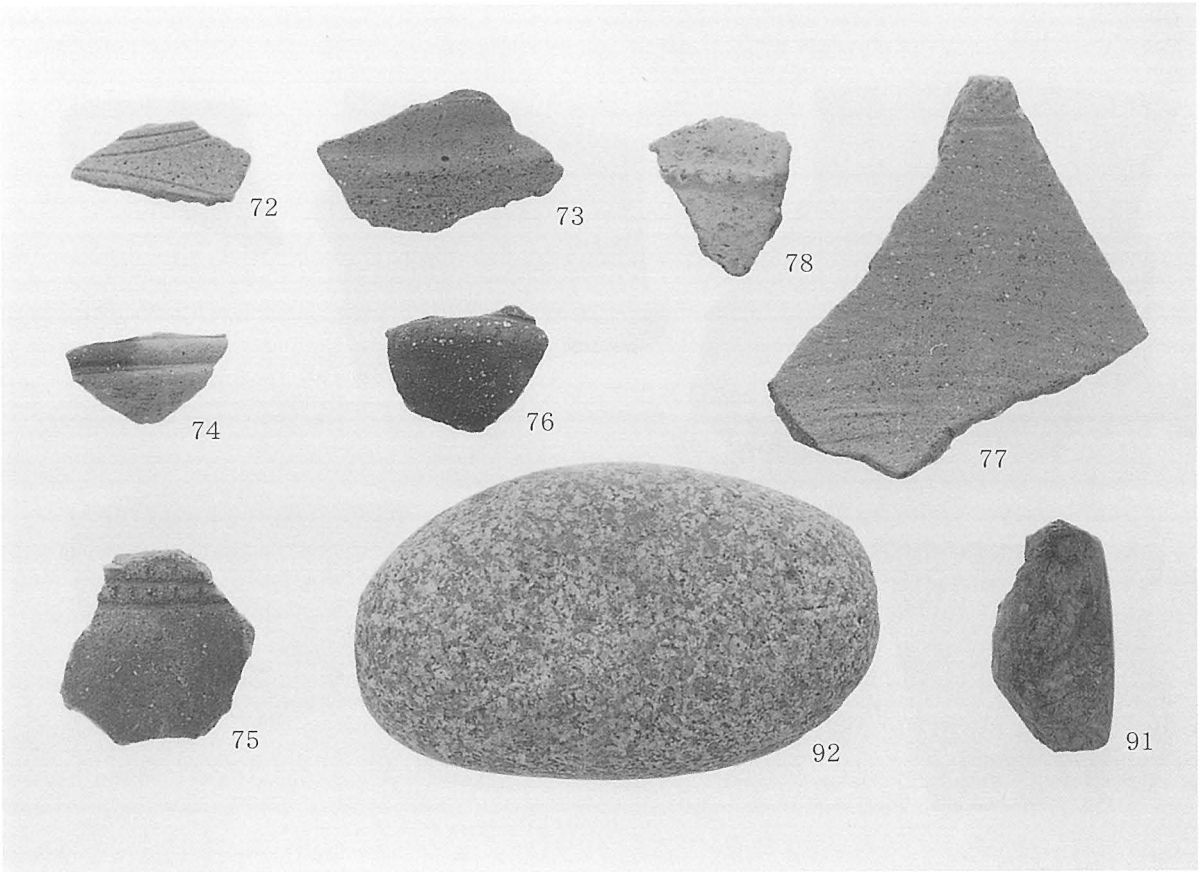

出土遺物（縄文土器）



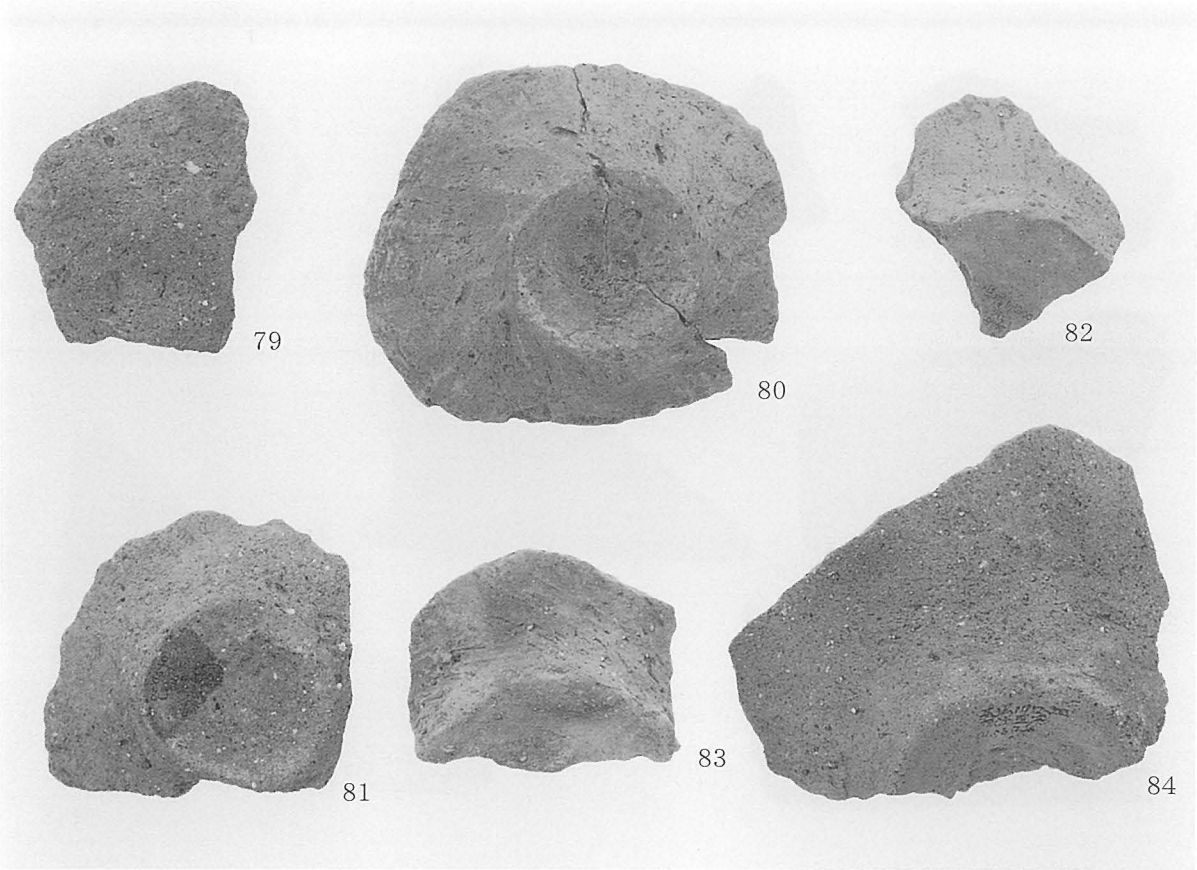

出土遺物（縄文土器）



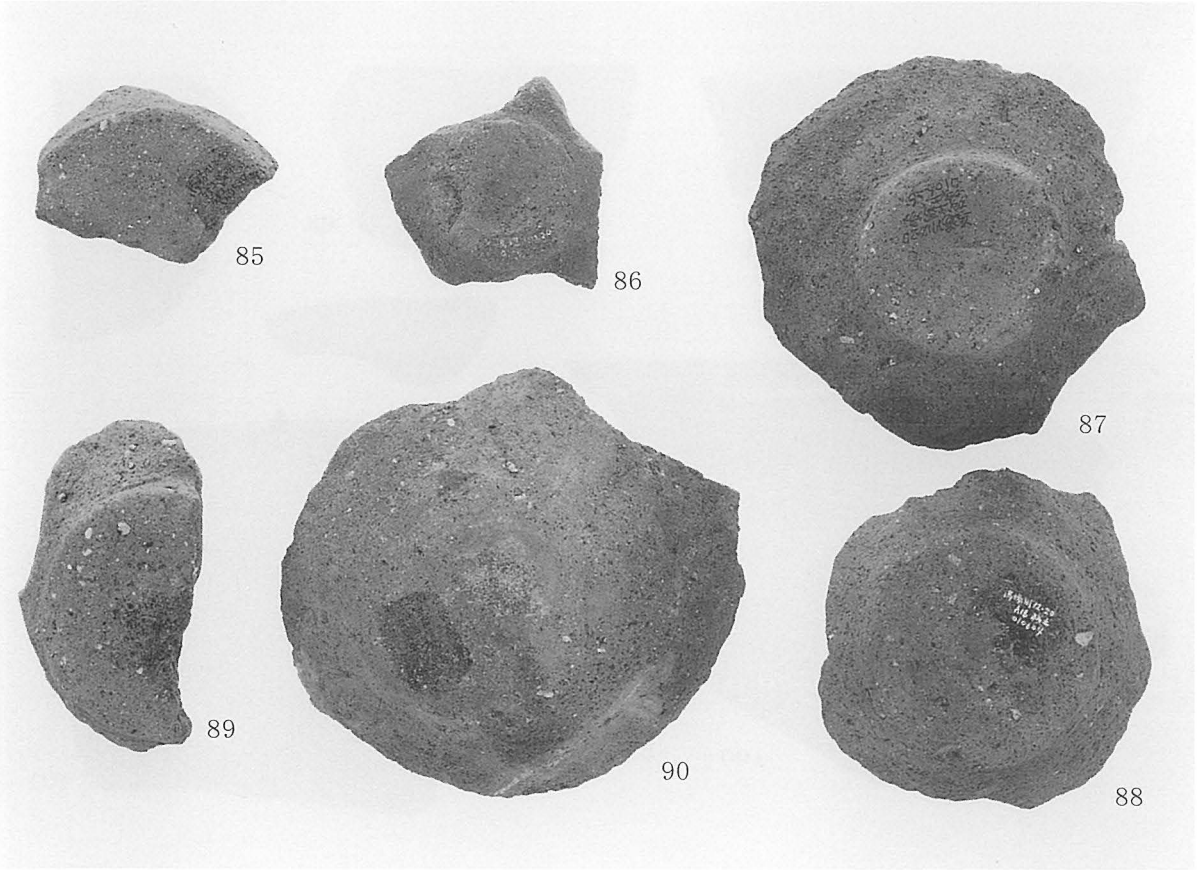

出土遺物（縄文土器）



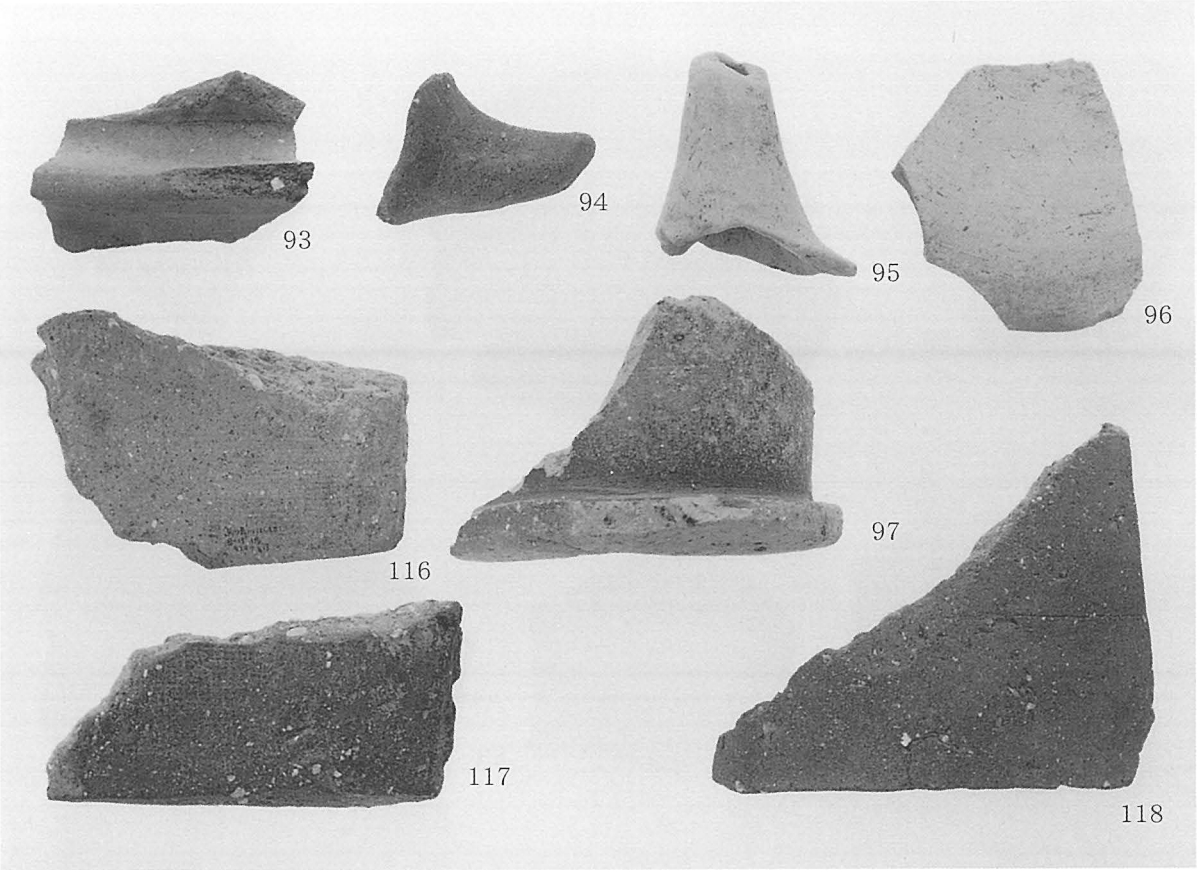

出土遺物（縄文土器・磨製石斧・敲打具）



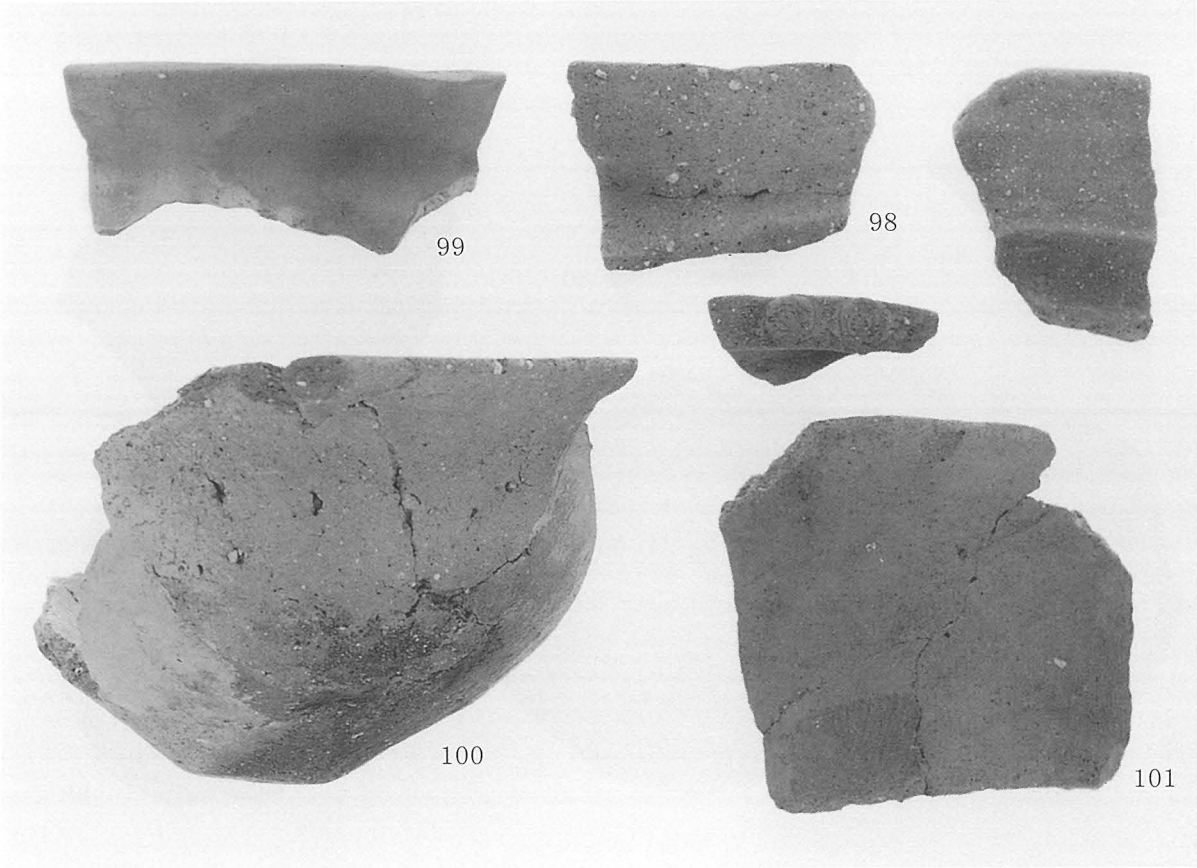

出土遺物（縄文土器）



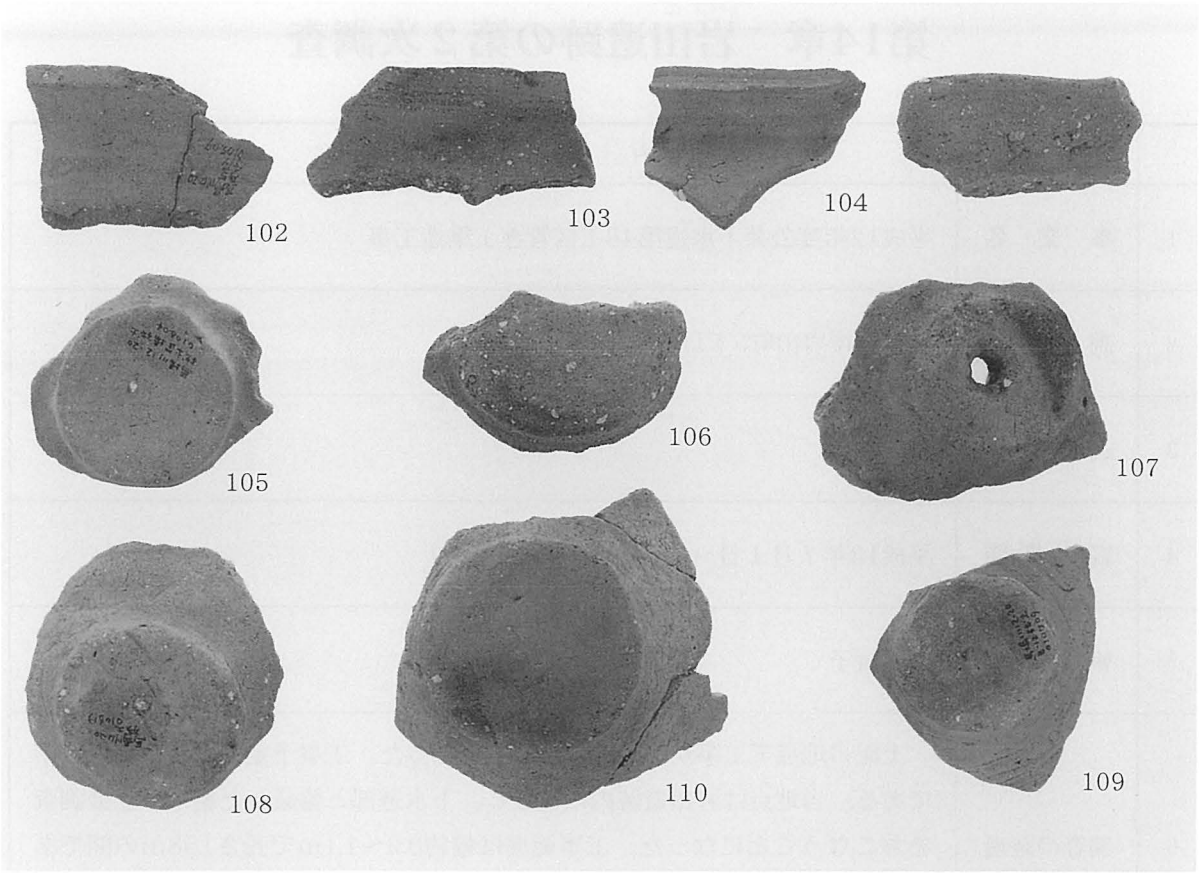

出土遺物（縄文土器）



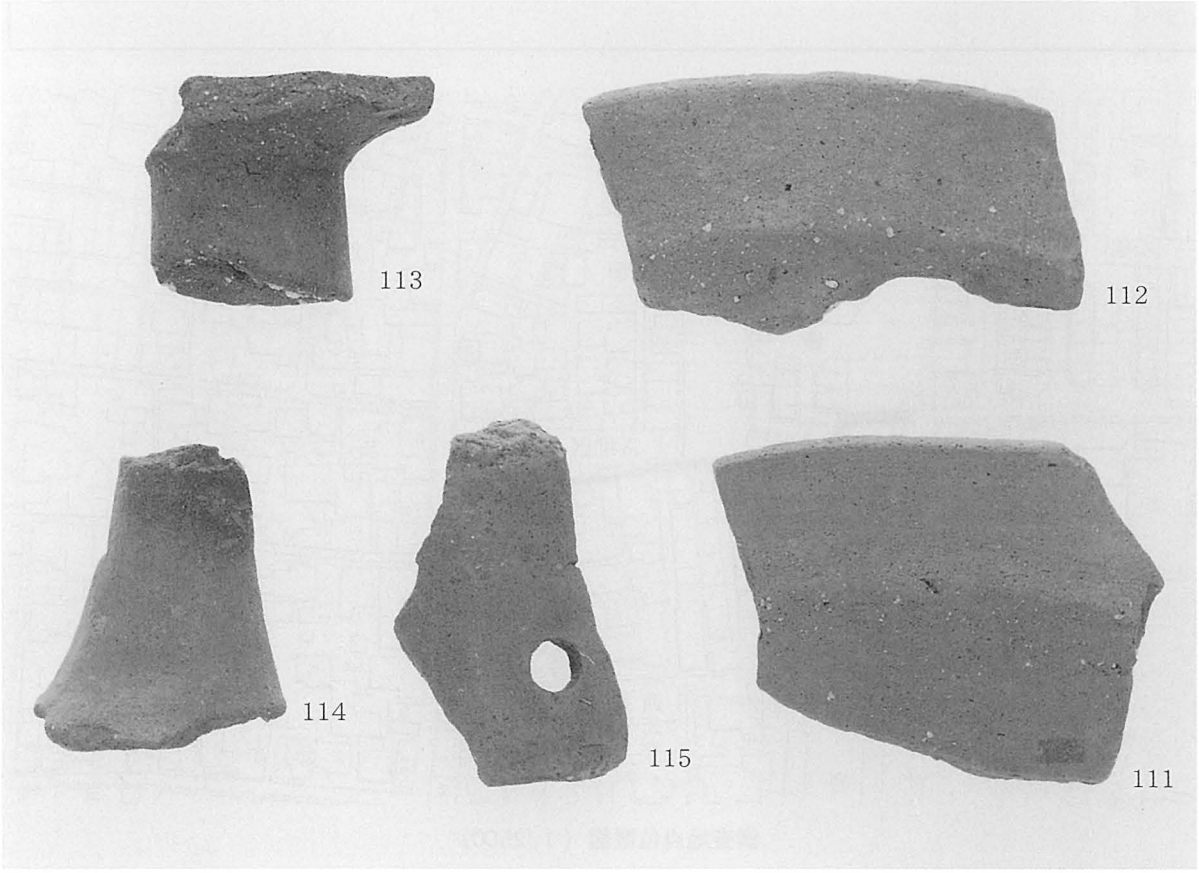

出土遺物（土師器・須恵器・瓦）




出土遺物（弥生土器・土師器）



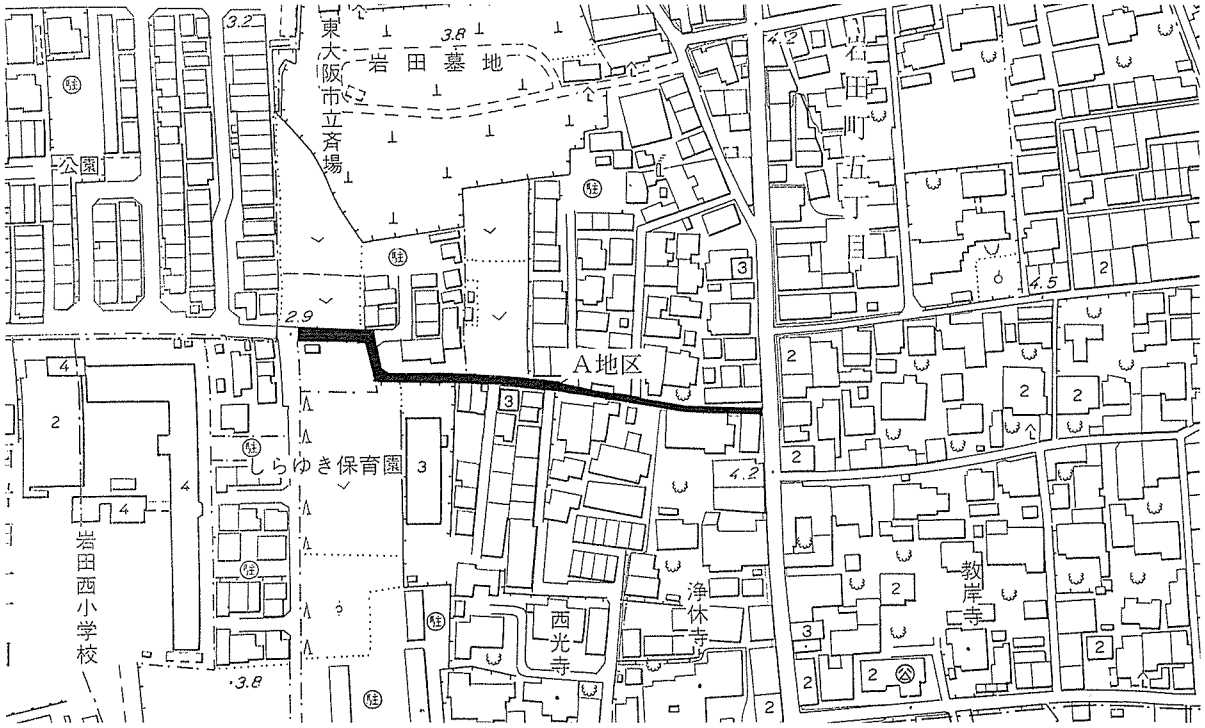

出土遺物（弥生土器）




出土遺物（弥生土器・土師器）

# 第14章　岩田（いわた）遺跡の第２次調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第48工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市岩田町5丁目 |
| 3 | 調 査 面 積 | 159㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年７月１日～９月25日（延べ36日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 吉田綾子 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は岩田墓地の南である。当地点は岩田遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9～1.1mで長さ158mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（１/2500）

1. 調査の概要

調査地は用水路を掘り下げて工事が行われたため、ほとんど撹乱であり、包含層の確認はできなかった。しかしながら調査地中ほど（A－9地区付近）で中世～近世と思われる井戸を検出した。直径0.5m以上、高さ1.5mほどの桶組の井戸である。桶1段のみ確認し、底面は確認していないため、さらに続く可能性がある。井戸内から土師器、瓦器などの細片が出土している。また、井戸の東側で、瓦器、土師器が出土する土坑も確認した。

2. 層序

A－26地区

第1層　盛土及び撹乱。

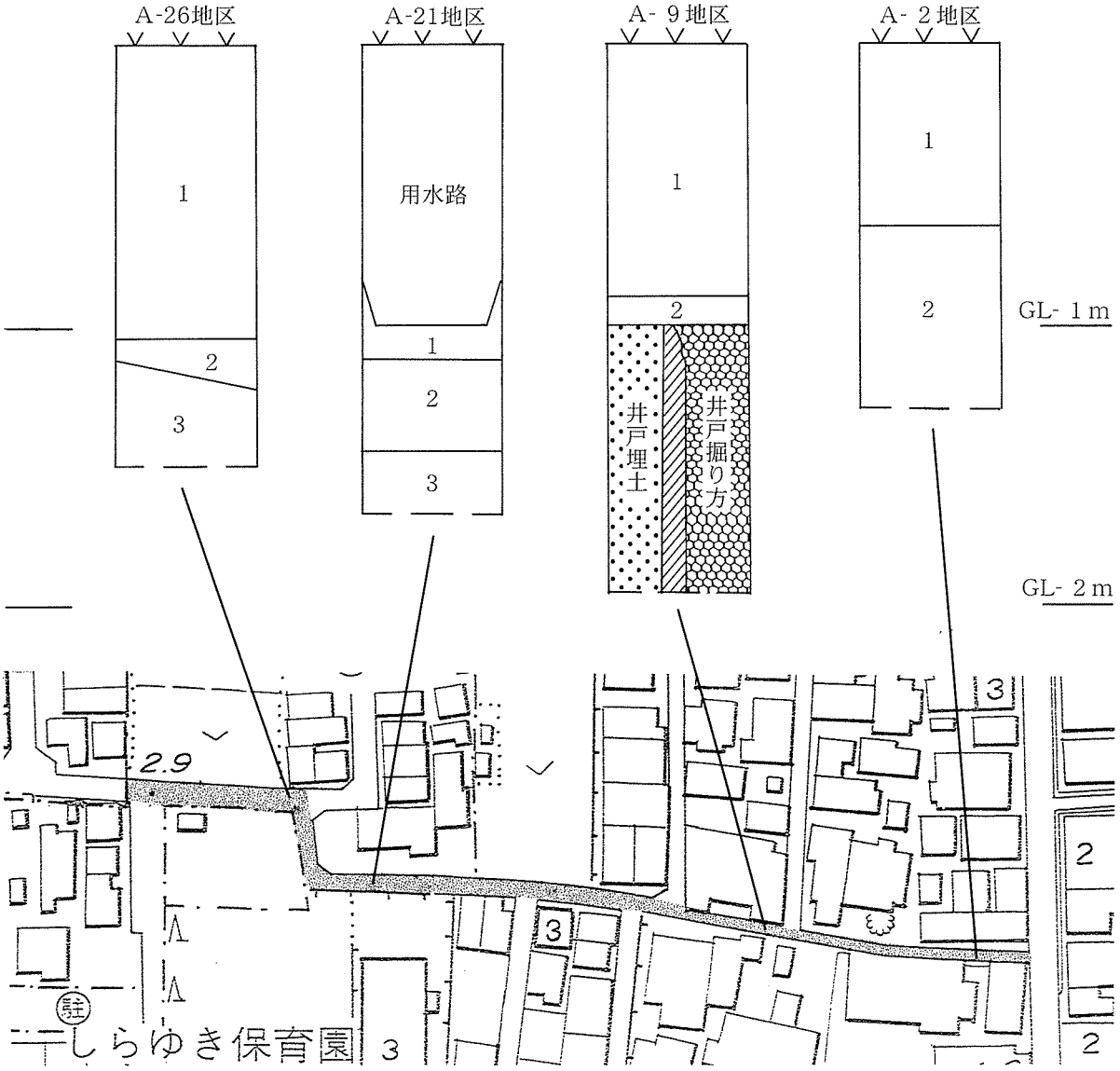
第2層　暗緑灰色(7.5GY4/1)細粒砂。

第3層　暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土質シルト。植物遺体を含む。

A－21地区

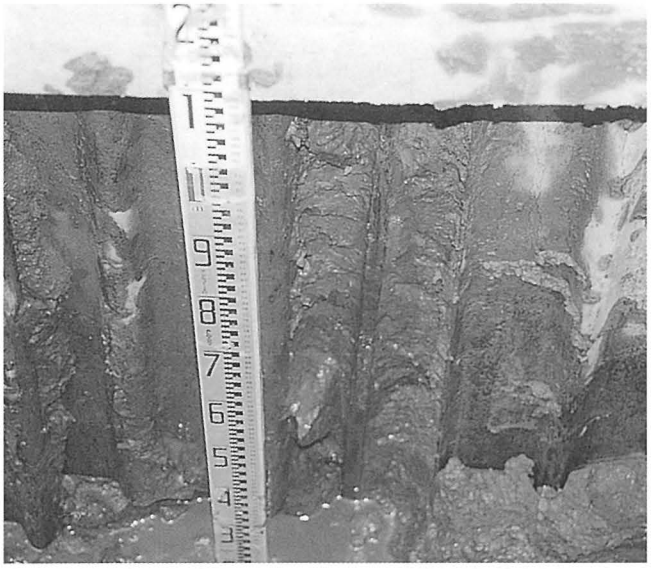
第1層　撹乱。

第2層　暗青灰色(5BG4/1)シルト。植物遺体を含む。




土層断面柱状図

調査地遠景



Ａ－９地区土層断面

Ａ－９地区井戸検出状況

第３層　暗青灰色(5BG4/1)細粒砂混じり粘土質シルト。

Ａ－９地区

第１層　盛土及び撹乱。

第２層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂混じり粘土質シルト。粗粒砂が少量混じる。

井戸埋土　灰色(7.5Y4/1)細粒砂混じり粘土質シルト。細粒砂が少量混じる。

井戸掘り方　灰色(10Y4/1)粗粒砂混じりシルト。粗粒砂が多量に混じる。

Ａ－２地区

第１層　盛土及び撹乱。

第２層　暗緑灰色(7.5GY3/1)粗粒砂混じりシルト。粗粒砂が少量混じる。

3. 出土遺物

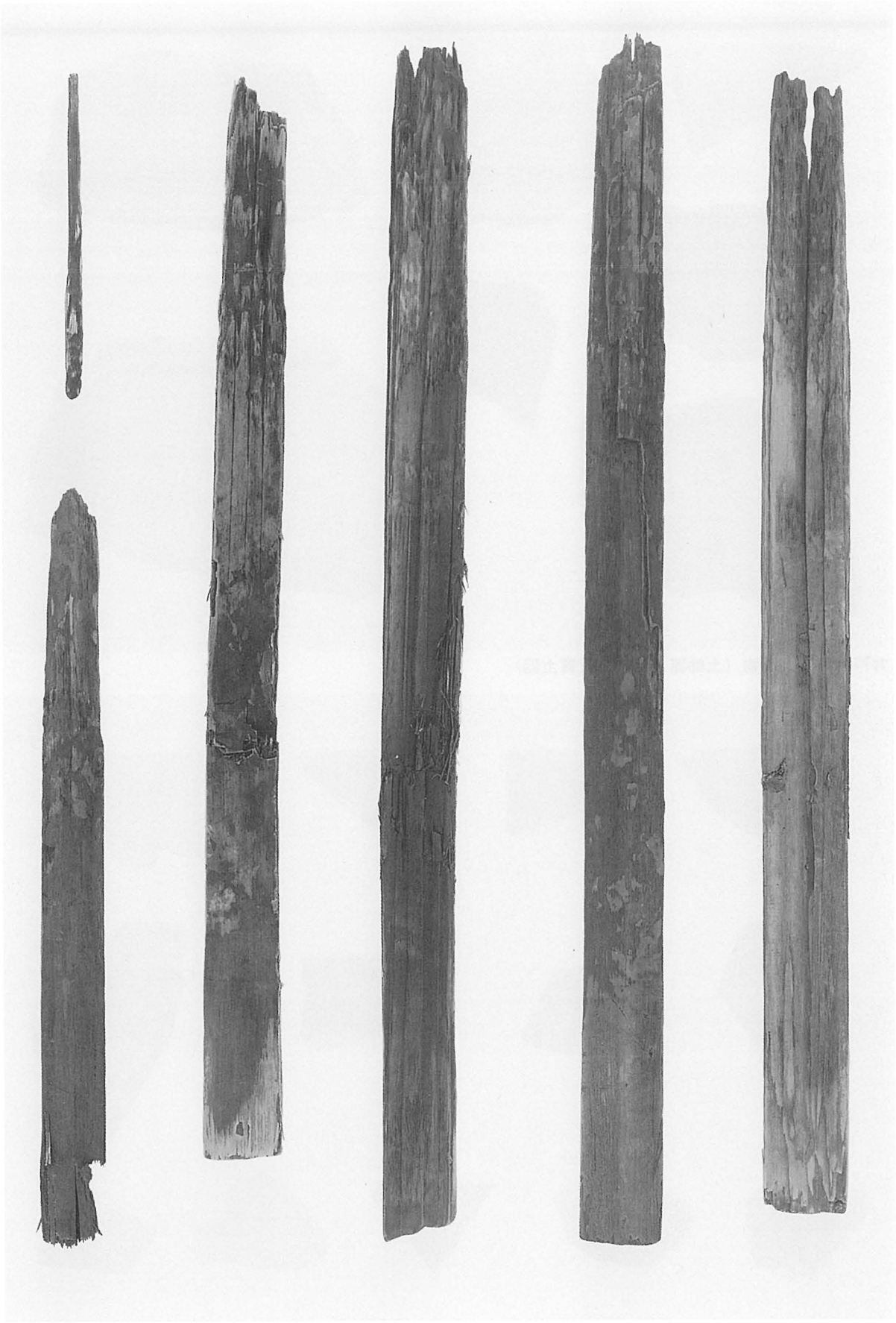
極わずかではあるが、土師器・瓦器・瓦質土器などが出土している。井戸掘り方からは瓦器椀口縁部、土師皿などが、井戸枠内からは瓦質土器、土師器羽釜などが出土している。いずれも中世に属する。

4. まとめ

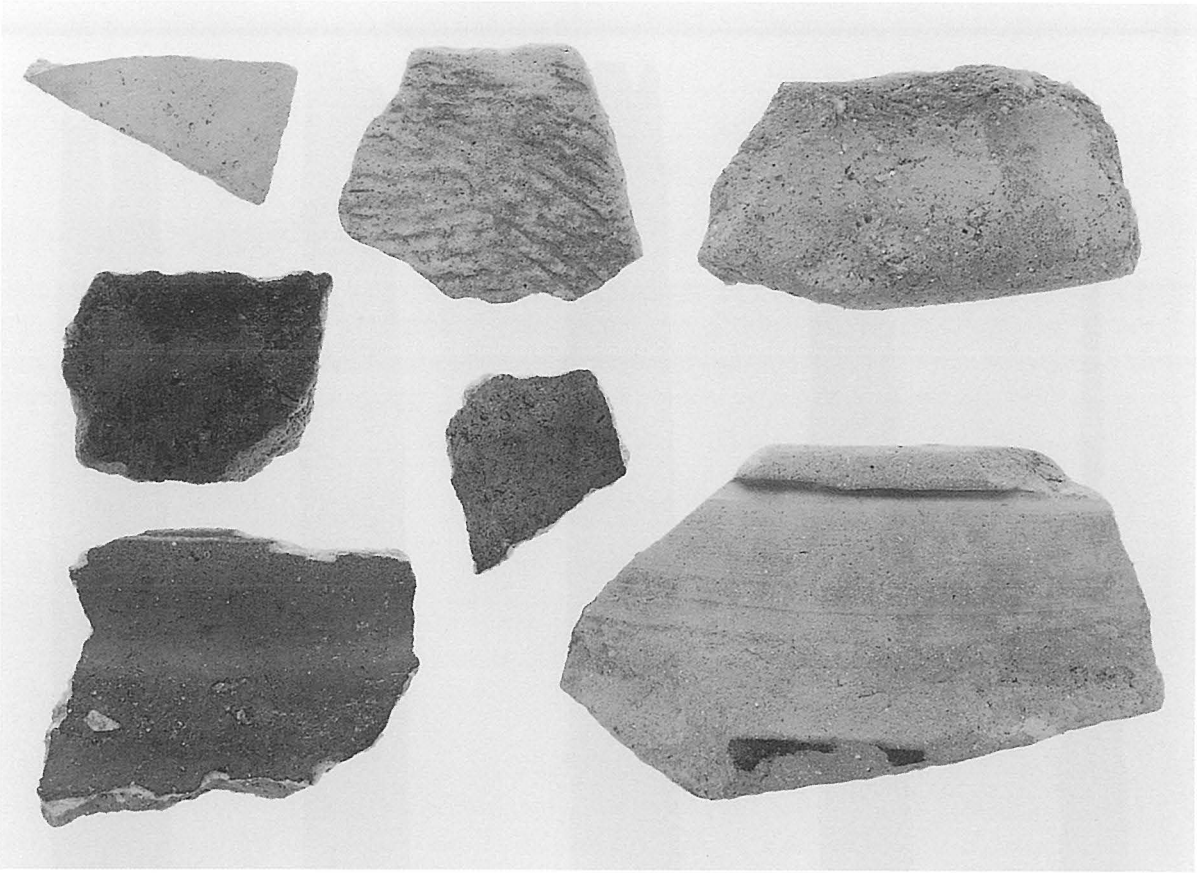
当調査地から南西約170mほどのところで行われた第１次調査では、平安時代後期の遺構が検出され、鎌倉時代中期～後期の土器などが出土している。今回の調査では包含層の確認はできなかったが、中世～近世と思われる遺構を確認することができた。

当遺跡の南西には瓜生堂遺跡が位置し、平安時代末～室町時代には村が継続して広範囲で営まれていたことが確認されており、当調査地から約500m南西のところでは平安時代後期～室町時代に存在した瓜生堂廃寺の基壇が検出されている。また南に位置する若江遺跡には室町時代、若江城が存在した。

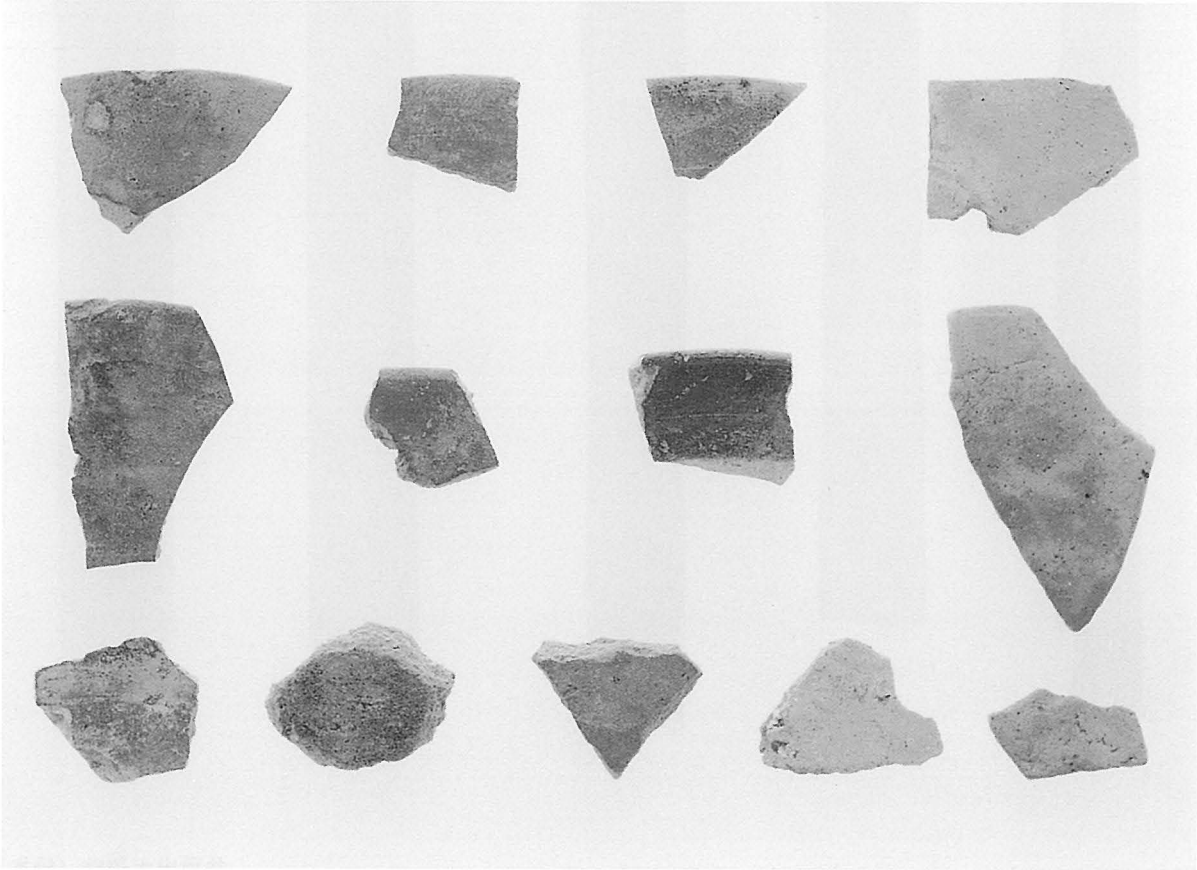
これらのことから当遺跡周辺は、中世において河内の中心地であり、当遺跡においても人の営みがあったと考えられる。今後の調査成果を期待したい。



井戸出土遺物（枠木）



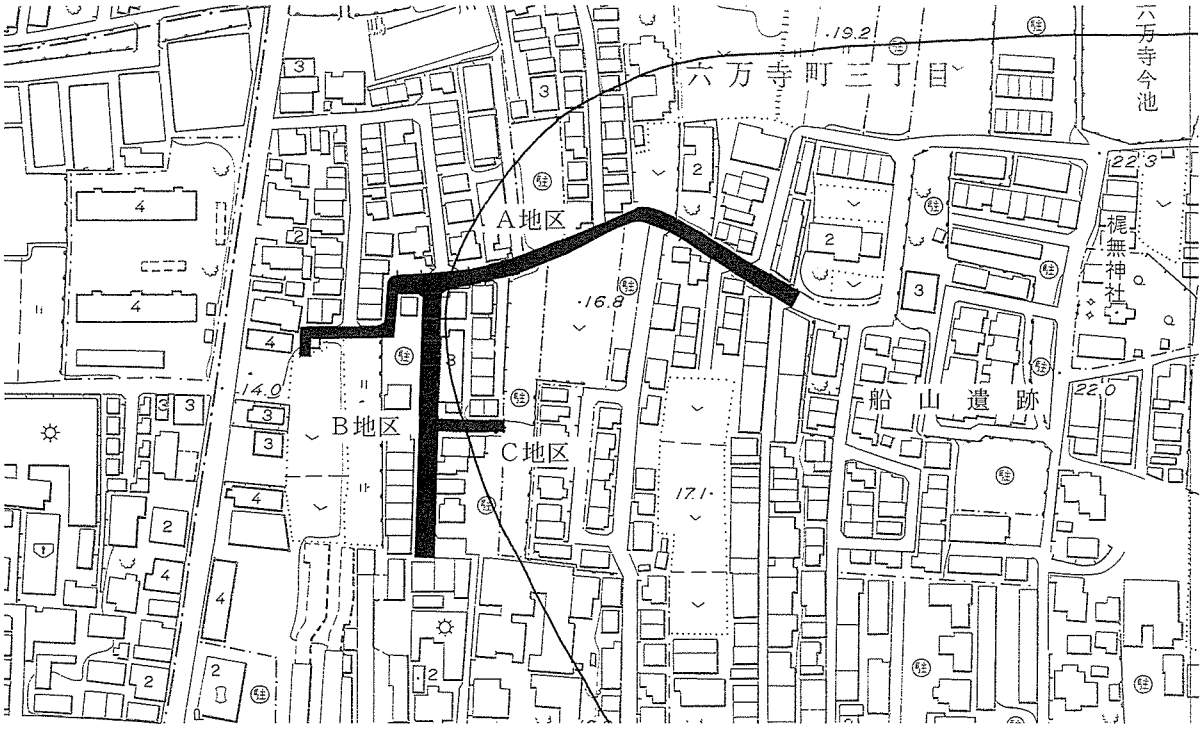
井戸枠内出土遺物（土師器・瓦器・瓦質土器）



井戸掘り方出土遺物（土師器・瓦器）

# 第15章　船山（ふなやま）遺跡の第５次調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第26工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調査地点 | 東大阪市六万寺町3丁目 |
| 3 | 調査面積 | 104㎡ |
| 4 | 調査期間 | 平成13年３月19日～６月21日（延べ49日） |
| 5 | 報告担当 | 吉田綾子 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は旧国道170号線の東である。当地点は船山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ123mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（1/2500）

1. 調査の概要

調査は便宜上Ａ～Ｃ地区に分け、行った。Ａ地区の西側一部とＢ・Ｃ地区は遺跡範囲外であったが、遺物が出土するなどしたため引き続き調査を行った。

調査地全体で中世及び古墳時代の遺物包含層を確認した。特に古墳時代の包含層はA地区の中ほど(Ａ－14～25地区)で遺物量が多くなる。Ａ－29地区では木樋溝を検出した。溝は長さ１m以上、幅27cm以上、深さ15cmである。木樋は幅11cm、厚さ２cmの底板に、幅２cm、高さ４～５cmの側板をのせ、幅11cm、厚さ２cmの天井板を釘留めしている。木樋内から土師器片が出土した。またＡ地区では耕作に伴うと思われる溝や桶組の井戸なども検出することができた。中世～近世に属する遺構と思われる。

2. 層序

Ａ－３地区

第１層　盛土。

第２層　暗黄灰色(2.5Y4/2)粗粒砂・小礫混じりシルト質細粒砂。古墳時代～中世の遺物が出土。

第３層　黒褐色(10YR3/1)小礫混じりシルト質細粒砂。古墳時代～中世の遺物が出土。

第４層　黒褐色(2.5Y3/1)小礫～中礫混じり細粒砂～中粒砂質シルト。酸化鉄、マンガンが沈着。

第５層　黒褐色(2.5Y3/1)小礫～中礫混じり粗粒砂。酸化鉄、マンガンが沈着。古墳時代の遺物が出土。

第６層　黒褐色(10YR3/1)小礫～中礫混じりシルト質細粒砂。

第７層　黒色(7.5Y2/1)小礫混じりシルト質細粒砂。

Ａ－14地区

第１層　盛土。

第２層　暗褐色(10YR3/3)砂質土。黄灰色(2.5Y4/1)砂質土が混じる。旧耕土層。

第３層　黄灰色(2.5Y4/1)砂質土。暗褐色(10YR3/3)砂質土が混じる。旧耕土層。古墳時代～中世の遺物が出土。

第４層　黒褐色(10YR3/1)小礫混じり粘質土。小礫が少量混じる。上面でピットを検出。

第５層　緑黒色(10G2/1)細粒砂混じりシルト。細粒砂が少量混じる。古墳時代の遺物が出土。

第６層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂～小礫混じりシルト。細粒砂～小礫が多量に混じる。

第７層　灰色(7.5Y4/1)小礫混じり細粒砂～粗粒砂。小礫が少量混じる。

第８層　灰色(7.5Y4/1)粗粒砂混じり細粒砂。粗粒砂が少量混じる。

ピット　黄灰色(2.5Y4/1)砂質土。暗褐色(10YR3/3)砂質土が混じる。第4層上面で検出。中世の遺物出土。

Ａ－25地区

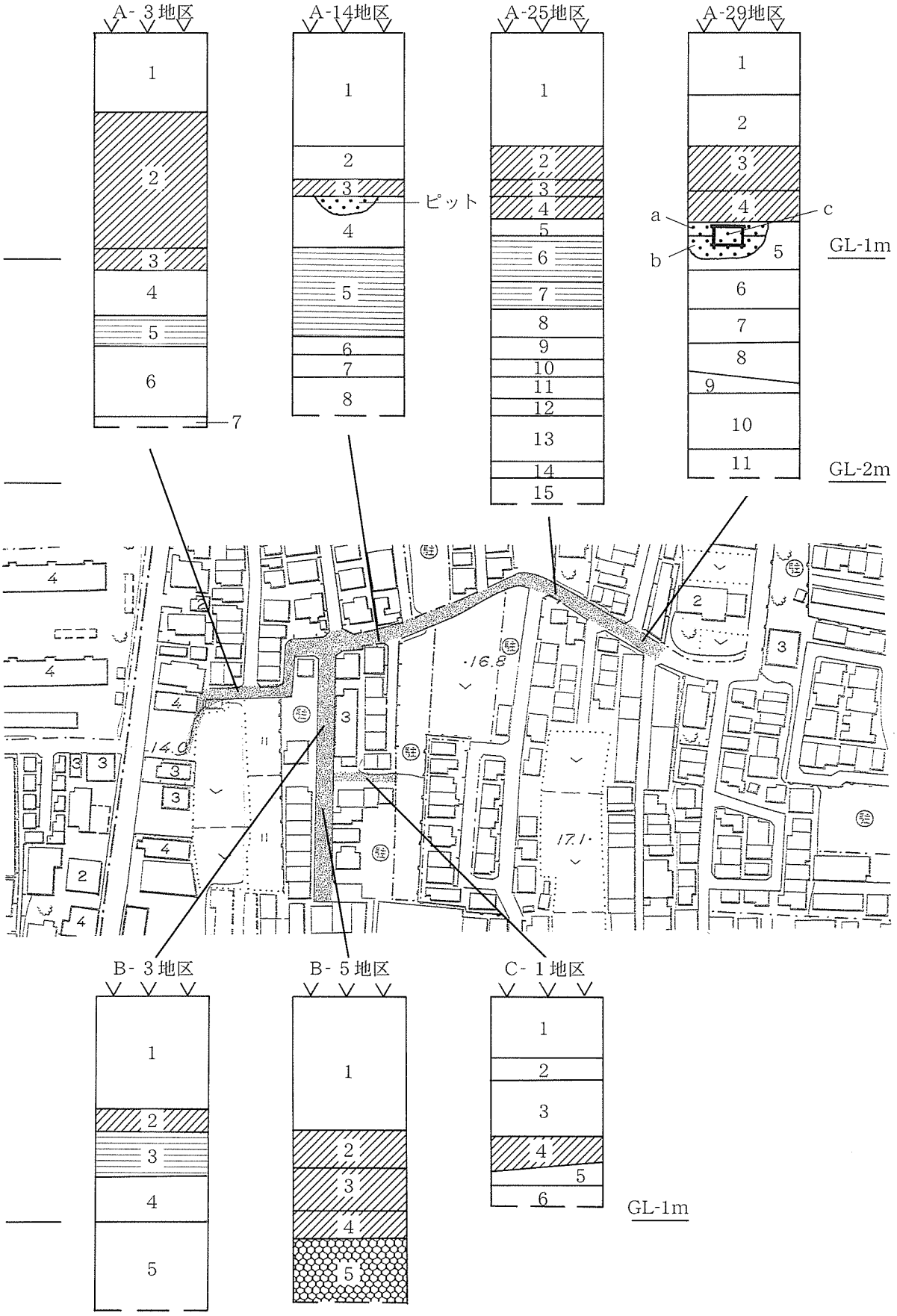
第１層　盛土。

第２層　黒褐色(10YR3/1)小礫混じり砂質土。小礫が少量混じる。旧耕土層。弥生時代～中世の遺物が出土。

第３層　黄灰色(2.5Y4/1)小礫混じり砂質土。小礫が少量混じる。酸化鉄が沈着。旧床土層。弥生時代～中世の遺物が出土。

第４層　オリーブ黒色(5Y3/2)粗粒砂～小礫混じり粘質土。粗粒砂～小礫が少量混じる。旧耕土層。中世の遺物が出土。

第５層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土。




土層断面柱状図

第６層　オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂～小礫混じりシルト。弥生時代～古墳時代の遺物が出土。

第７層　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト・小礫～中礫混じり粗粒砂。シルト、小礫～中礫は少量混じる。弥生時代～古墳時代の遺物が出土。

第８層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂～小礫。

第９層　灰色(10Y4/1)細粒砂～小礫。

第10層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂。

第11層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト混じり細粒砂。

第12層　灰色(10Y4/1)細粒砂～小礫。

第13層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト混じり細粒砂。

第14層　黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト。

第15層　黒色(5Y2/1)粘土質シルト。

Ａ－29地区

第１層　盛土。

第２層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中礫混じりシルト質中粒砂～粗粒砂。

第３層　黒褐色(2.5Y3/1)極粗粒砂～小礫混じりシルト質細粒砂～中粒砂。マンガンが少量沈着。旧耕土層。弥生時代～中世の遺物が出土。

第４層　オリーブ黒色(5Y3/1)小礫混じりシルト質中粒砂。黒褐色(2.5Y3/1)小礫～中礫混じり粘質土がブロック状に混じる。弥生時代～中世の遺物が出土。

第５層　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト・小礫～中礫混じり粗粒砂～細粒砂。上面で木樋溝を検出。

第６層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト・小礫混じり中粒砂。

第７層　オリーブ黒色(7.5Y3/2)粗粒砂～中粒砂。

第８層　灰色(5Y4/1)シルト混じり細粒砂～粗粒砂。

第９層　灰色(7.5Y4/1)シルト混じり細粒砂～粗粒砂。

第10層　黒色(2.5Y2/1)シルト。

第11層　黒色(7.5Y2/1)小礫混じりシルト。

木樋溝ａ　オリーブ黒色(7.5Y3/1)小礫混じり細粒砂～中粒砂質シルト。

ｂ　オリーブ黒色(5Y3/2)小礫混じり細粒砂～中粒砂質シルト。

ｃ　オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂混じりシルト質粘土。底板直上面では中粒砂～粗粒砂が１mmほど堆積していた。

Ｂ－３地区

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/1)中礫混じり砂質土。弥生時代～中世の遺物が出土。

第３層　暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)礫混じり粘質土。0.5cm～４cm大の礫が混じる。弥生時代～古墳時代の遺物が出土。

第４層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)中礫混じり砂質土。中礫が多量に混じる。

第５層　褐色(10YR4/4)中礫混じり砂質土。中礫が多量に混じる。

Ｂ－５地区

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/1)小礫から中礫混じり粘質土。弥生時代～中世の遺物が出土。

第３層　暗オリーブ灰色(5GY4/1)小礫から中礫混じり砂質土。中礫が多量に混じる。弥生時代～

中世の遺物が出土。

第４層　黒褐色(2.5Y3/1)小礫～中礫混じり粘質土。中礫が多量に混じる。弥生時代～中世の遺物出土。

第５層　黒色(10YR1.7/1)粗粒砂～中礫混じりシルト。弥生時代の遺物が出土。

C－１地区

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂～小礫混じり粘質土。

第３層　暗オリーブ灰色(5GY3/1)粗粒砂～小礫混じり粘質土。

第４層　オリーブ黒色(5GY2/1)粗粒砂～小礫混じり砂質土。弥生時代～中世の遺物が出土。

第５層　オリーブ黒色(5Y2/2)粗粒砂～小礫混じり粘質土。

第６層　黒褐色(10YR2/2)小礫混じり砂質土。小礫を多量に含む。

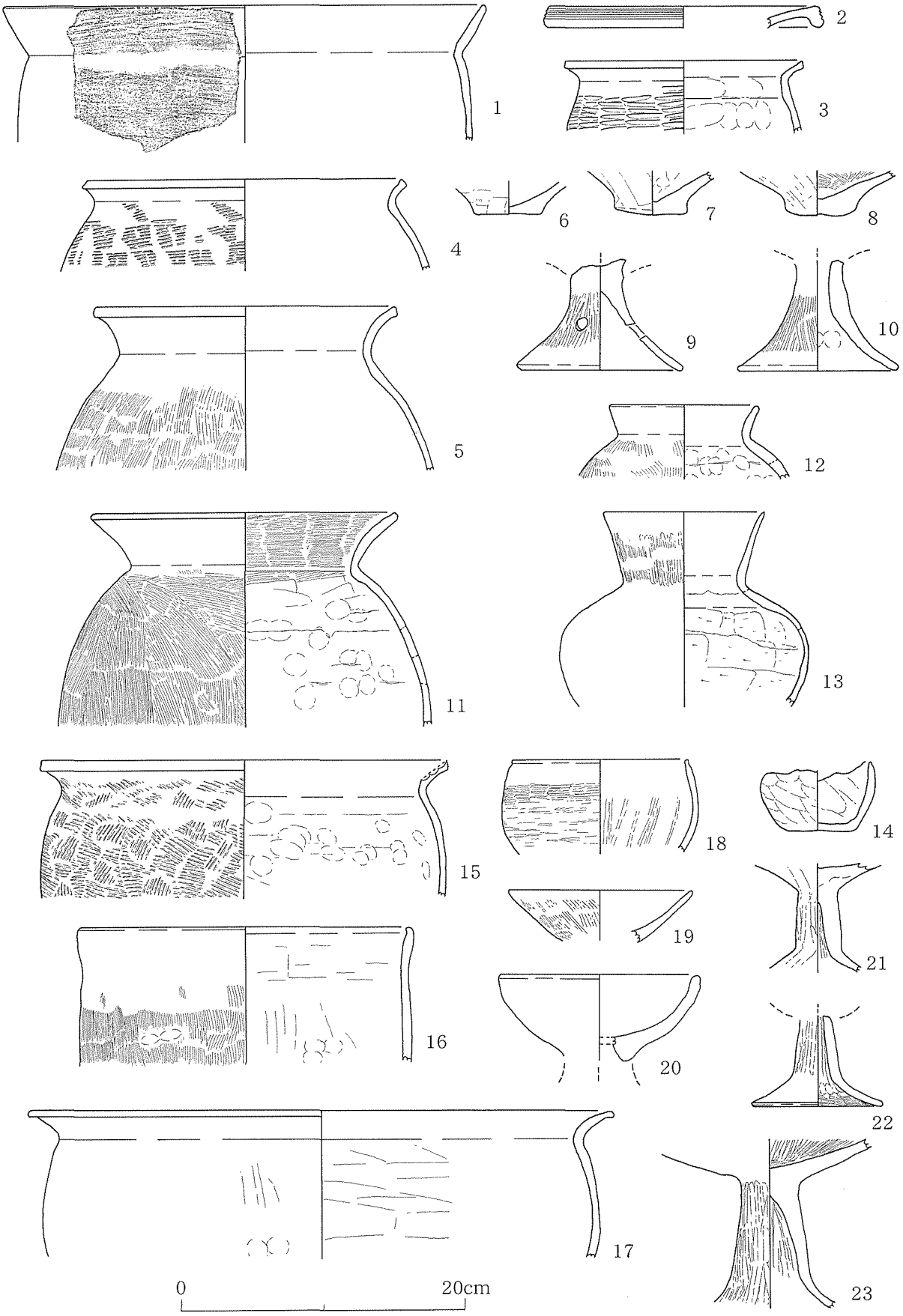
3. 出土遺物

今回の調査では縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、韓式系土器、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦などが出土した。

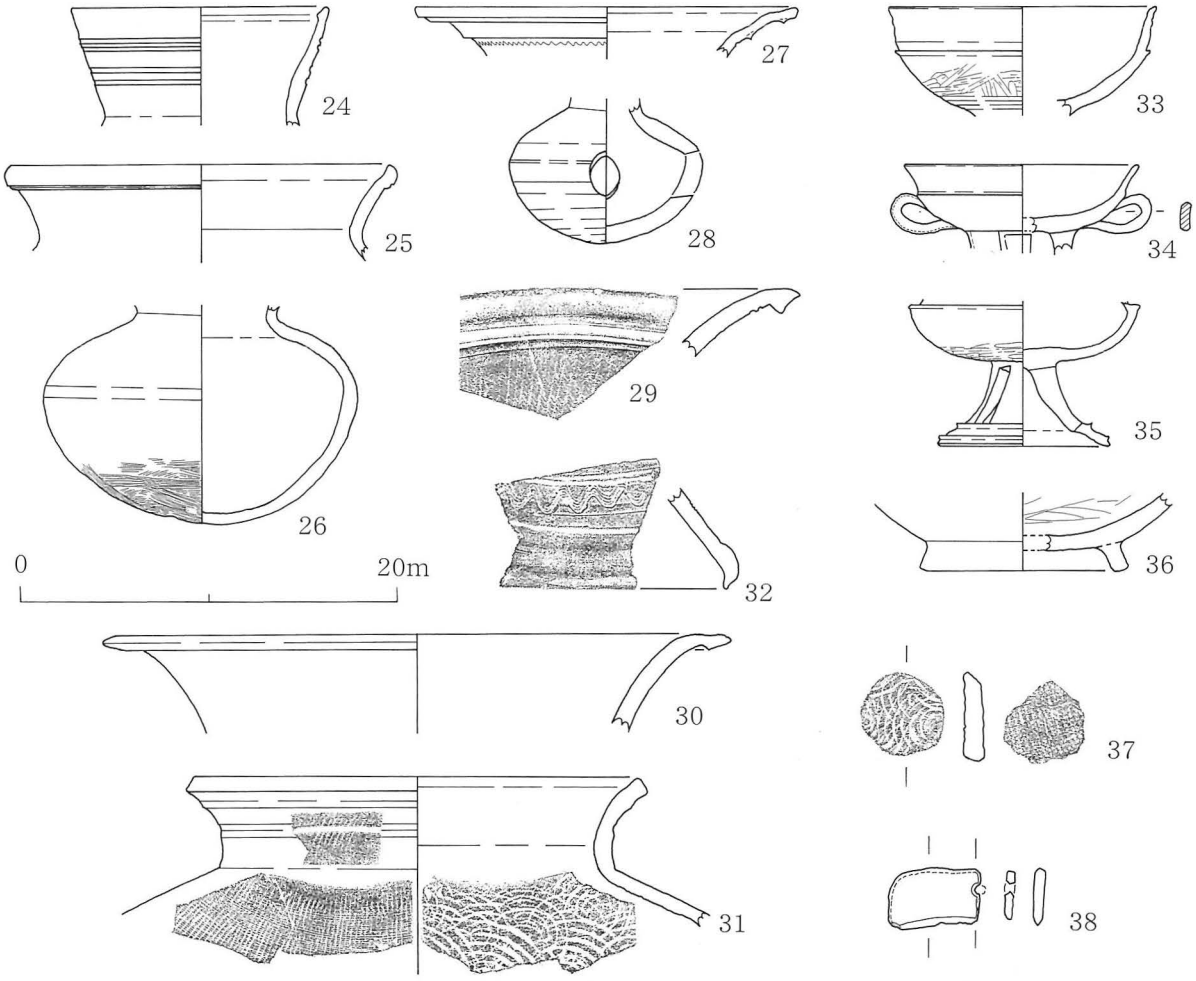
１は縄文土器の深鉢である。口径33.2cm、残存高9.7cmを測る。内面は横方向のナデ調整である。外面は口縁部から体部にかけて二枚貝殻条痕、くびれ部がナデ調整、体部が横方向のケズリ調整(原体不明)である。滋賀里Ⅲa型式に属す。生駒西麓産。

２～10は弥生土器で、３と９のみ非生駒西麓産である。弥生時代中期～後期に属す。２は広口壷で、口径18.6cm、残存高1.5cmである。口縁端部に凹線文を３条施す。３は口径16.6cm、残存高5.2cmの甕で、内面に横方向のユビナデ調整、外面はタタキを施す。４は口径22.4cm、残存高6.5cmの甕である。外面はタタキののちにナデ消している。５は口径21.0cm、残存高11.6cmの甕で、外面は縦方向のハケ調整(６本/cm)を行う。６は底部径4.4cm、残存高2.4cmの甕底部で、内面に横方向の板状工具(1.3cm)によるナデ調整で、外面には縦方向の工具痕(1.2cm以上)が残る。７は底部径4.5cm、残存高3.1cmの底部である。内面に縦方向の工具痕(1.4cm)、外面にも縦方向の工具痕(原体不明)が残る。８の壷底部は底部径2.8cm、残存高3.2cmを測る。内面は横方向のハケ調整(６本/1.7cm以上)で、外面に縦方向の工具痕(原体不明)が残る。９の高杯は、底部径11.2cm、高さ7.9cmを測る。外面は縦方向のヘラミガキ調整で、円形透かしを３ヶ所ゆうする。10は底部径11.0cm、残存高7.8cmの高杯で、外面に縦方向のハケ調整(６本/cm)を行う。

11は土師器の甕である。口径21.0cm、残存高15.2cmで、内面に横方向のハケ調整(7本/cm)と横方向のナデ調整であり、指頭圧痕が残る。外面は縦方向のハケ調整(7～８本/cm)である。生駒西麓産。12は土師器小型壷で、口径10.2cm、残存高5.2cmを測る。内面に指頭圧痕が残る。外面は縦方向のハケ調整(５～６本/cm)ののち、一部横方向のユビナデ調整を行っている。生駒西麓産。13も土師器小型壷で、口径は11.2cm、残存高は13.8cmを測る。内面には横方向の板状工具(1.8cm以上)による強めのナデ調整で、外面頸部に縦方向の細かいヘラミガキ調整がみられる。14は手捏土器である。底部径は4.3cm、器高は4.9cmを測る。生駒西麓産。16は土師器甑で、口径は23.2cm、残存高は9.8cmを測る。内面は横方向と縦方向の板状工具(原体不明)によるナデ調整で、外面は縦方向のハケ調整(６本/cm)と横方向の板状工具(原体不明)によるナデ調整を行う。17は土師器の鍋である。口径40.6cm、残存高10.1cmを測り、外面に縦方向の工具痕が残る。18は口径12.3cm、残存高6.7cmの土師器小型鉢である。内面は縦方向のヘラミガキ調整、外面は横方向のヘラミガキ調整である。19～23は土師器高杯である。19の杯部は、口径13.0cm、残存高3.6cmを測り、外面に縦方向のハケ調整(４～５本/cm)




出土遺物実測図

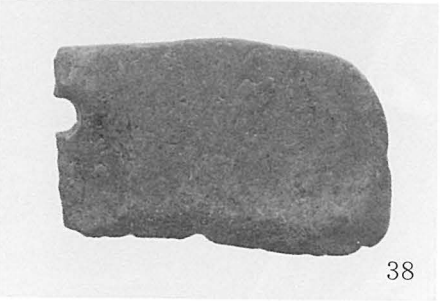



出土遺物実測図

を行う。生駒西麓産。20の杯部は口径13.9cm、残存高6.1cmを測る。風化のため内外面の調整は不明。21は脚柱径が3.0cm、残存高が7.8cmを測り、内面にシボリ目、外面に縦方向のヘラミガキ調整がみられる。22の脚部は底部径が8.8cm、残存高が6.4cmである。内面にシボリ目と横方向のハケ調整(9本以上/1.8cm)が、外面に縦方向のヘラミガキ調整がみられる。生駒西麓産。23は残存高12.0cmで、杯部内面は縦方向の、内面底部は横方向のヘラミガキ調整である。脚柱部内面にシボリ目、外面に縦方向のヘラミガキ調整がみられる。

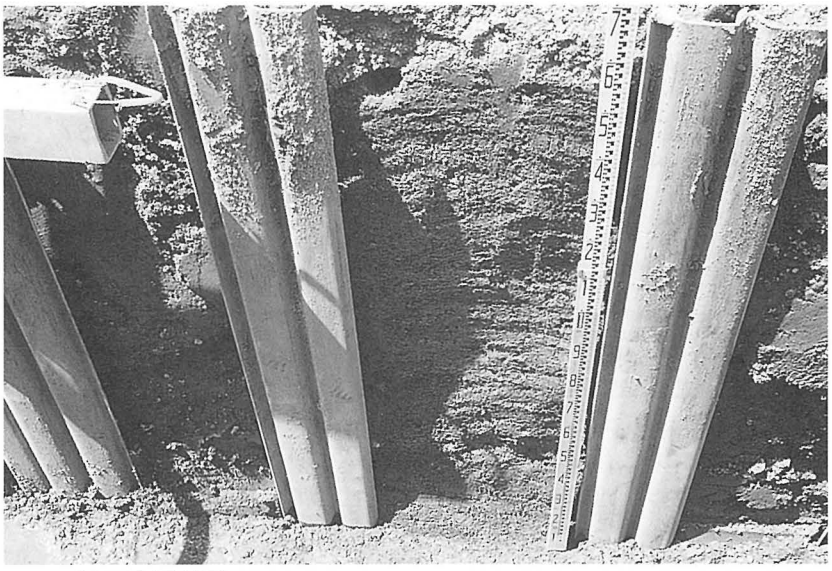
15は韓式系土器の甕もしくは鉢と思われる。口径29.8cm、残存高8.7cmで、内面は横方向のナデ調整、外面は横方向に平行線状のタタキを行ったのち一部同原体による縦方向のタタキを行っている。このほか、格子状・縄蓆状のタタキを施した破片が出土している。

24～36は須恵器である。24は長頸壷で、口径は13.4cm、残存高6.3cmを測る。頸部に4条の沈線を巡らす。25は短頸




出土遺物（土製円板・石庖丁）

作業風景



Ａ－３地区土層断面

Ａ－25地区土層断面

壷で、口径20.0cm、残存高5.2cmを測る。26の壷は最大胴部径が16.5cm、残存高は11.7cmで、外面底部は横方向のハケ調整（８本/cm）である。内面底部と外面に自然釉が、底部に溶解物が付着している。27は瓿である。口径20.0cm、残存高2.7cmを測り、2条の三角凸帯とヘラ描波状文を施している。28の瓿は、最大胴部径10.2cm、残存高は7.7cmで、回転ヘラケズリ調整と回転ナデ調整を行う。ロクロの回転方向は時計回り。29～31は甕である。29は残存高3.7cmで、口縁端部直下に凸帯文をゆうし、沈線２条と櫛描き波状文（36本/3.3cm以上）を施す。初期須恵器である。30は口径31.8cm、残存高5.3cmを測り、内面に自然釉が付着する。31は口径23.2cm、残存高7.8cmである。頸部には三角凸帯が施され、内面に同心円状のタタキが、外面に平行タタキとカキメがみられる。32は器台脚部と思われる初期須恵器である。残存高は5.2cmで、櫛描波状文（５本/0.6cm）を施す。

33～35は初期須恵器の高杯である。33は口径14.0cm、残存高5.8cmである。外面に凹線によってできた凸帯を有し、回転ナデ調整と不定方向のヘラケズリ調整、回転ヘラケズリ調整を行う。回転方向は反時計回りである。34は口径が12.2cm、残存高が5.7cm

を測る。把手を２ヶ所、透かしを４ヶ所ゆうし、脚部に面取りが見られる。35は底部径8.8cm、残存高7.8cmで、透かしを３ヶ所、裾部に三角凸帯を2条施している。36は高台付き壷底部である。底部径は5.4cmで、残存高は4.2cm。内面は横方向の板状工具(0.7cm以上）によるナデ調整、外面は回転ナデ調整である。平安時代に属す。

37は土製円板である。直径4.4cm、厚さ1.1cmを測り、同心円状のタタキと格子状のタタキが残る。須恵器甕の転用品である。

38は磨製石庖丁である。長方形を呈し、長さ4.8cm、幅3.2cm、厚さ0.6cm、重さ17.92ｇを測る。紐孔は回転穿孔による。両刃で、刃こぼれがみられる。緑泥片岩製。

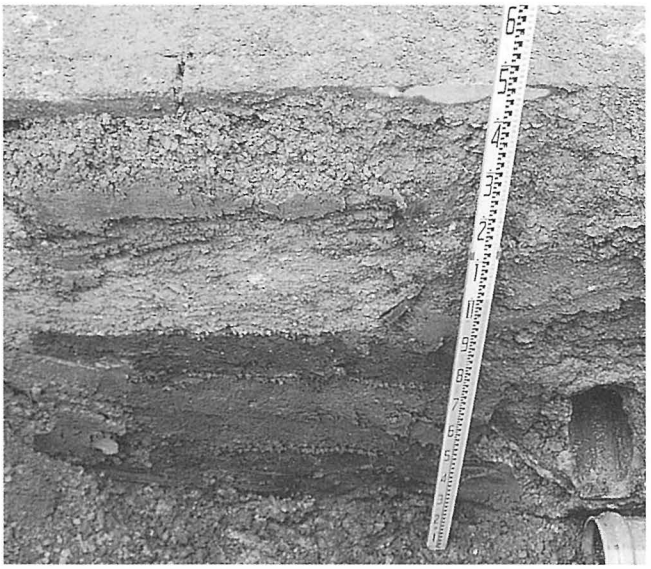
4. まとめ

当遺跡ではこれまでに、弥生時代～中世の遺構・遺物が確認されている。また第１・３次調査では縄文時代後期及び晩期の土器も出土しており、当遺跡が縄文時代まで遡る可能性がある。

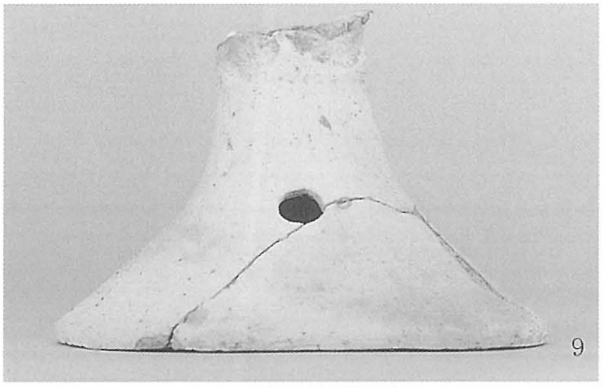
今回の調査地はＡ地区の西側とＢ・Ｃ地区が遺跡範囲外であったが、弥生時代～古墳時代の土器が多く出土した。この弥生時代～古墳時代の土器が多く出土する層は、これまでの調査で中世の整地層と確認され、鎌倉時代以降に広範囲で耕地拡大を目的とした整地作業が行われたためと考えられている。しかしながらA地区において古墳時代の遺物包含層が確認できたことから、遺跡北西部では古墳時代の遺構が残存する可能性がある。またＢ－５地区で弥生時代の遺物包含層を確認した。第３次調査では弥生時代後期の遺物包含層が確認されている。今回出土した弥生土器が中期に属すものが多いことから、弥生時代中期の遺物包含層も存在すると思われる。

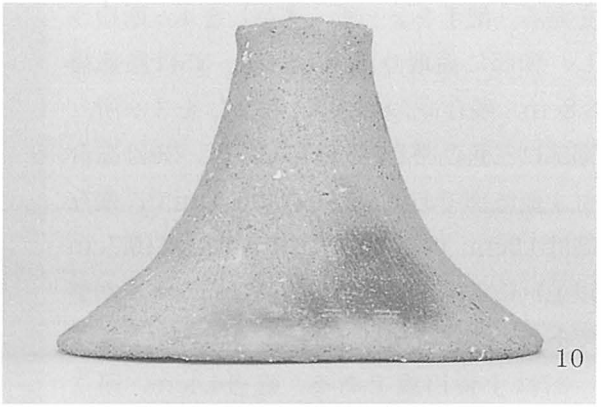
Ａ－29地区土層断面

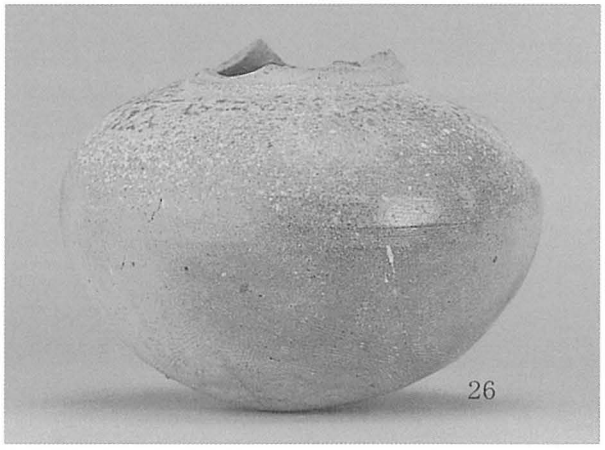
Ａ－29地区木樋検出状況

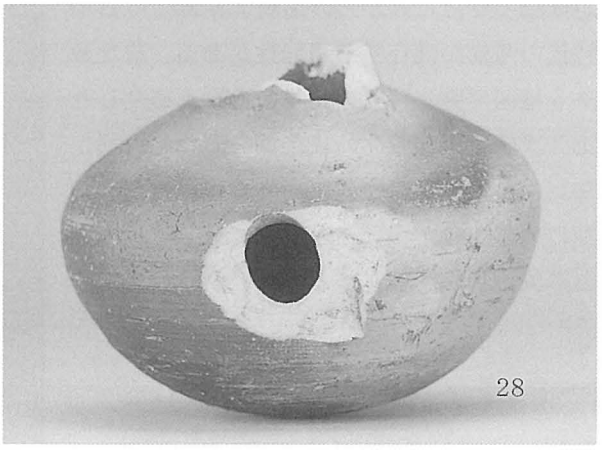


Ｂ－５地区土層断面

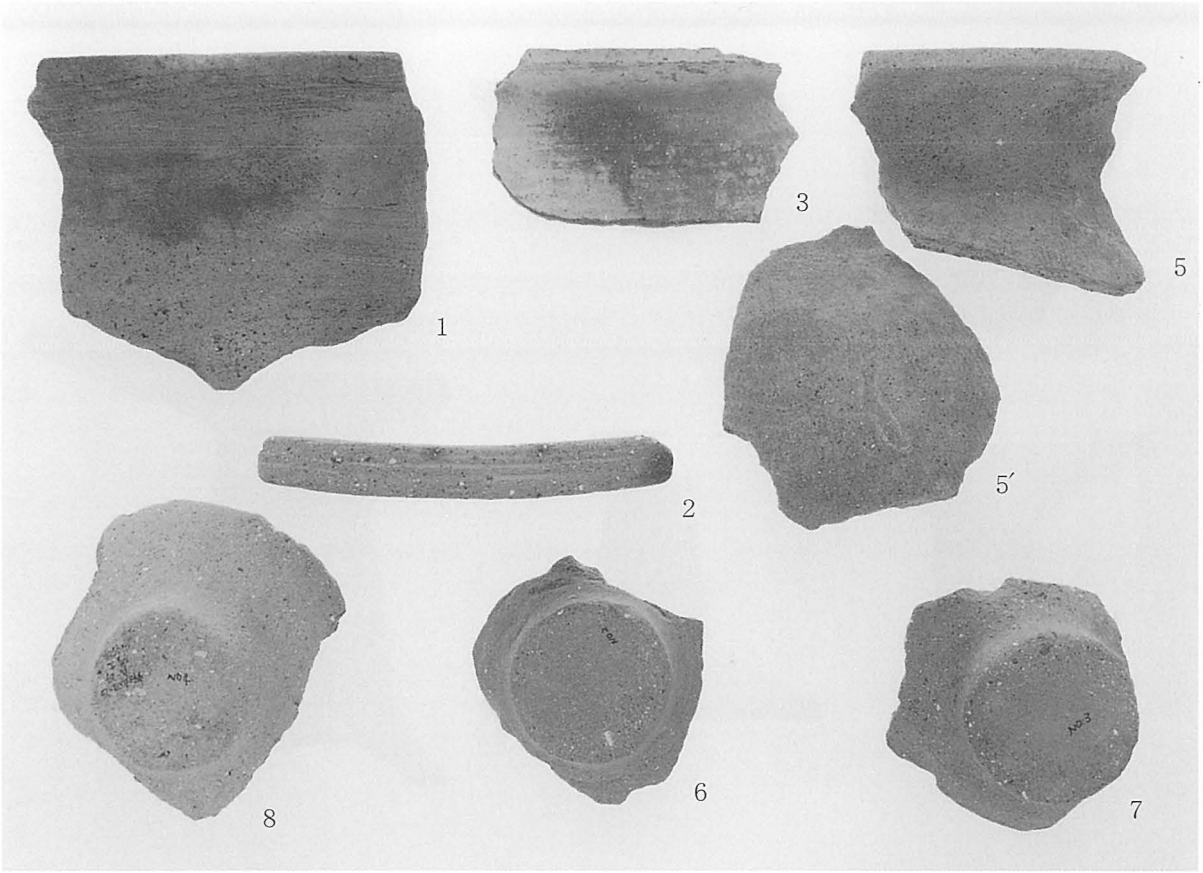


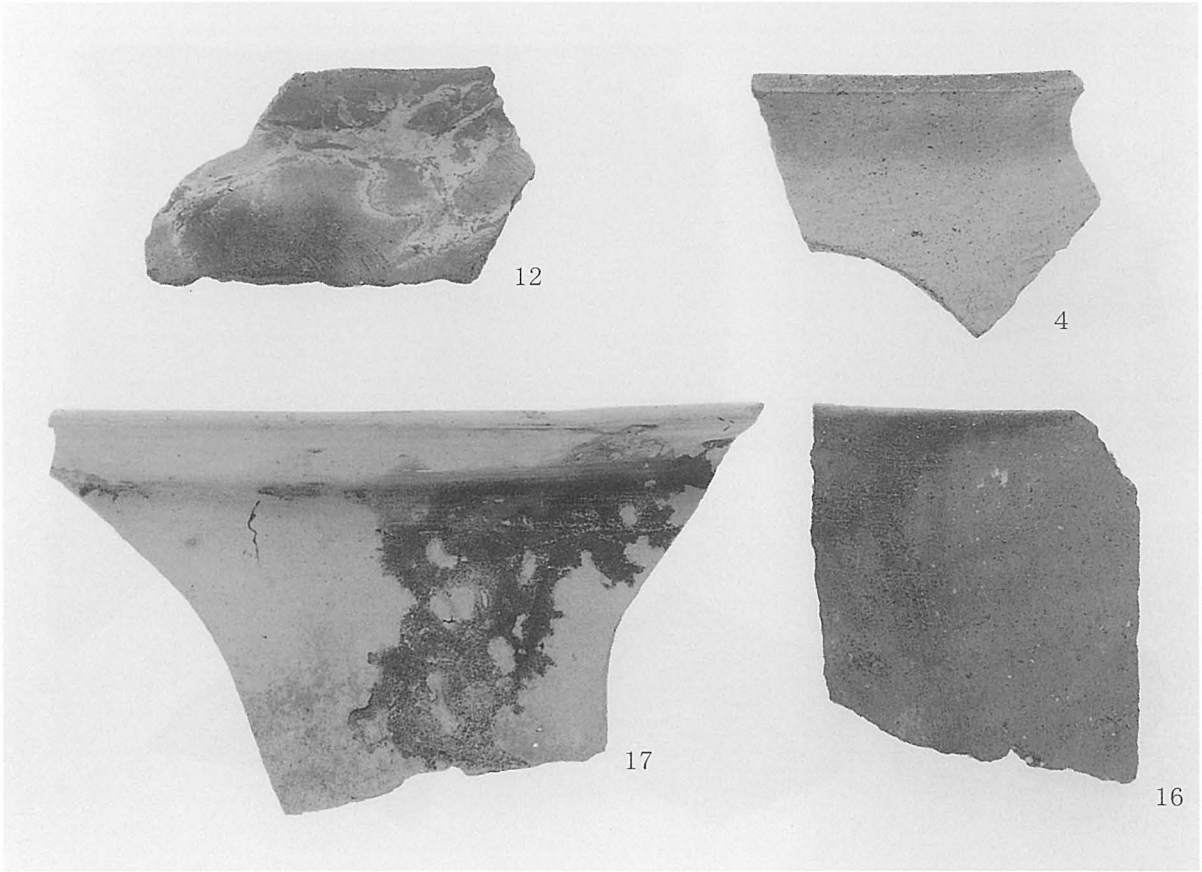


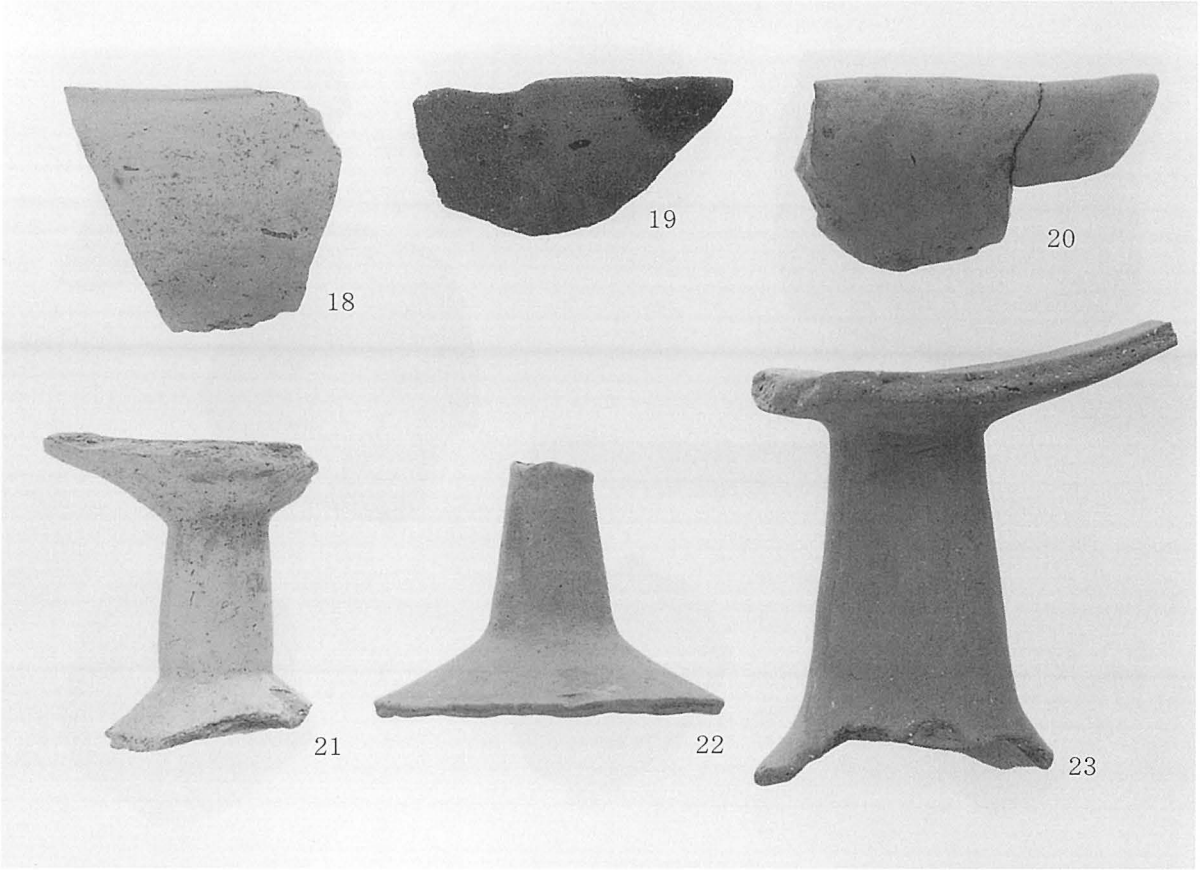

出土遺物（弥生土器・土師器・須恵器）




出土遺物（縄文土器・弥生土器）

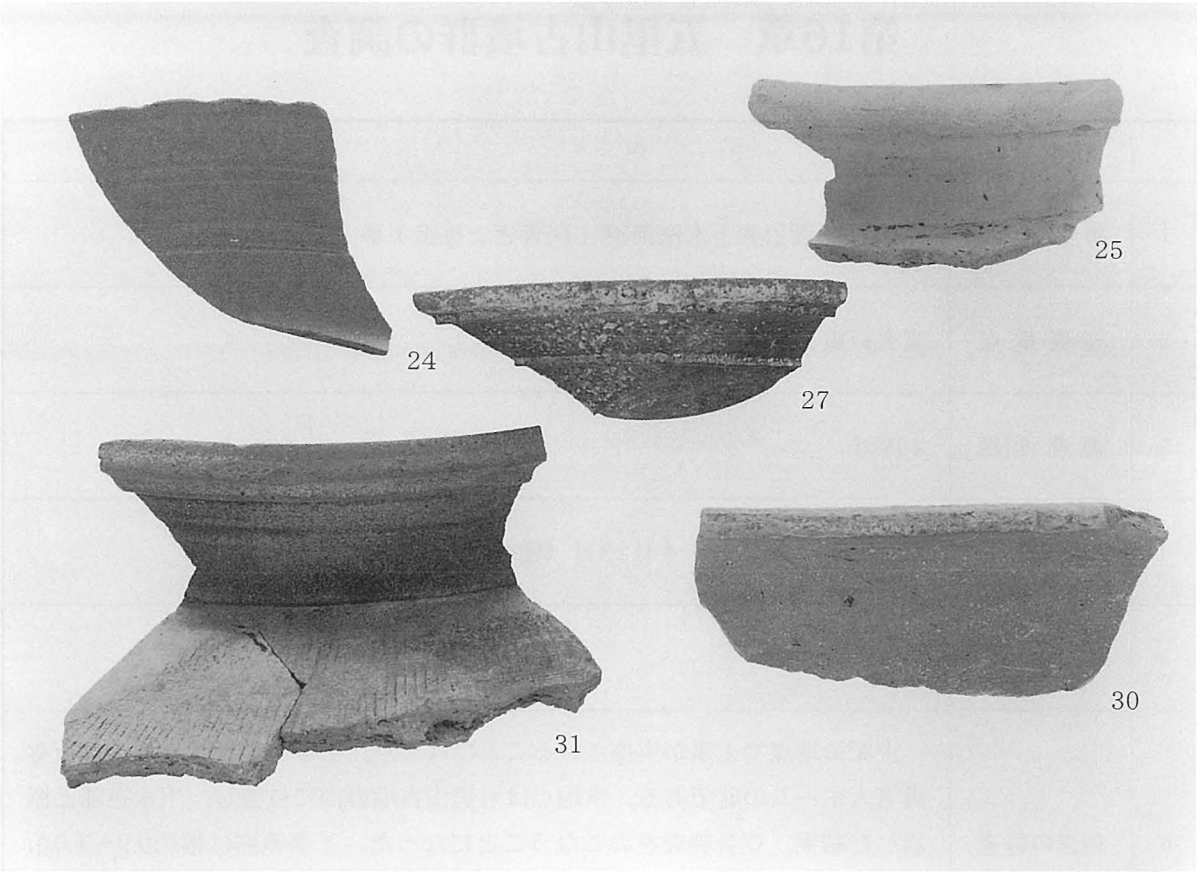



出土遺物（弥生土器・土師器）

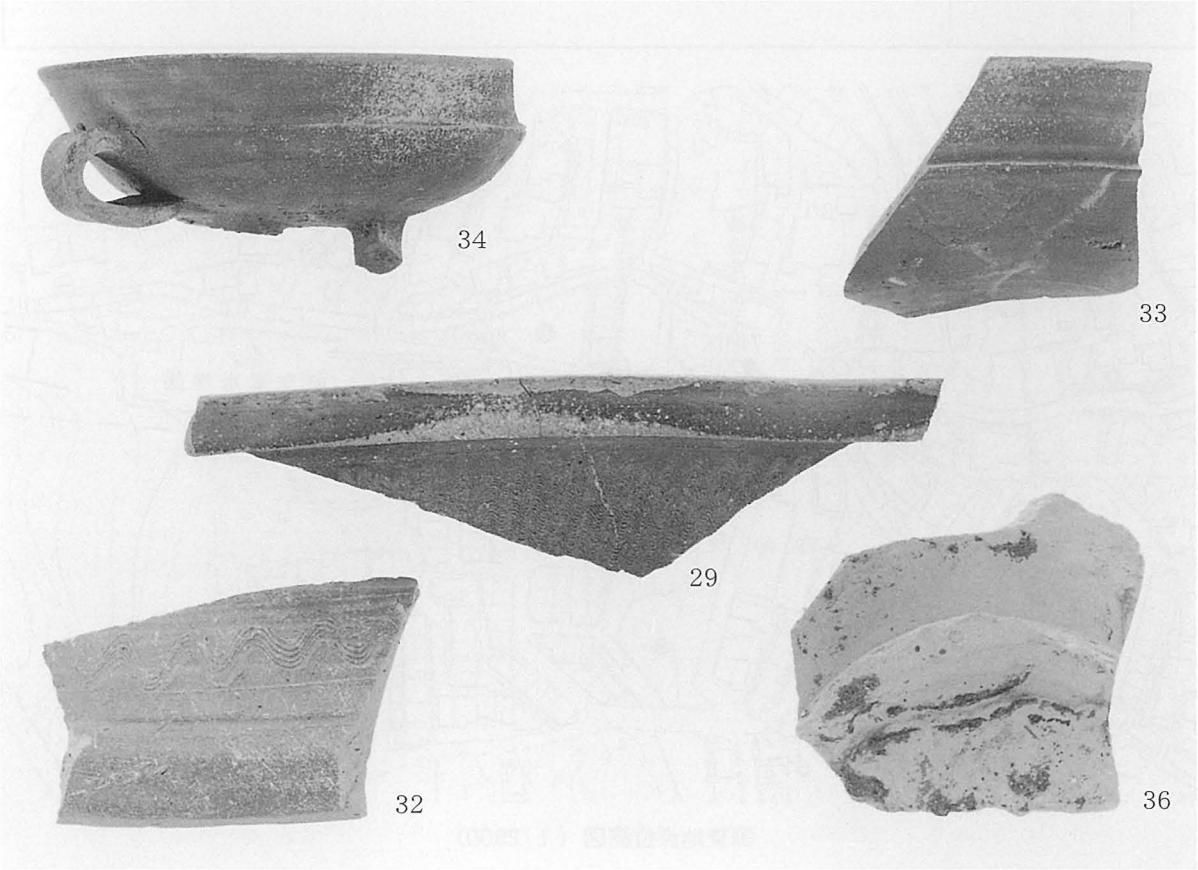



出土遺物（土師器）

出土遺物（韓式系土器）



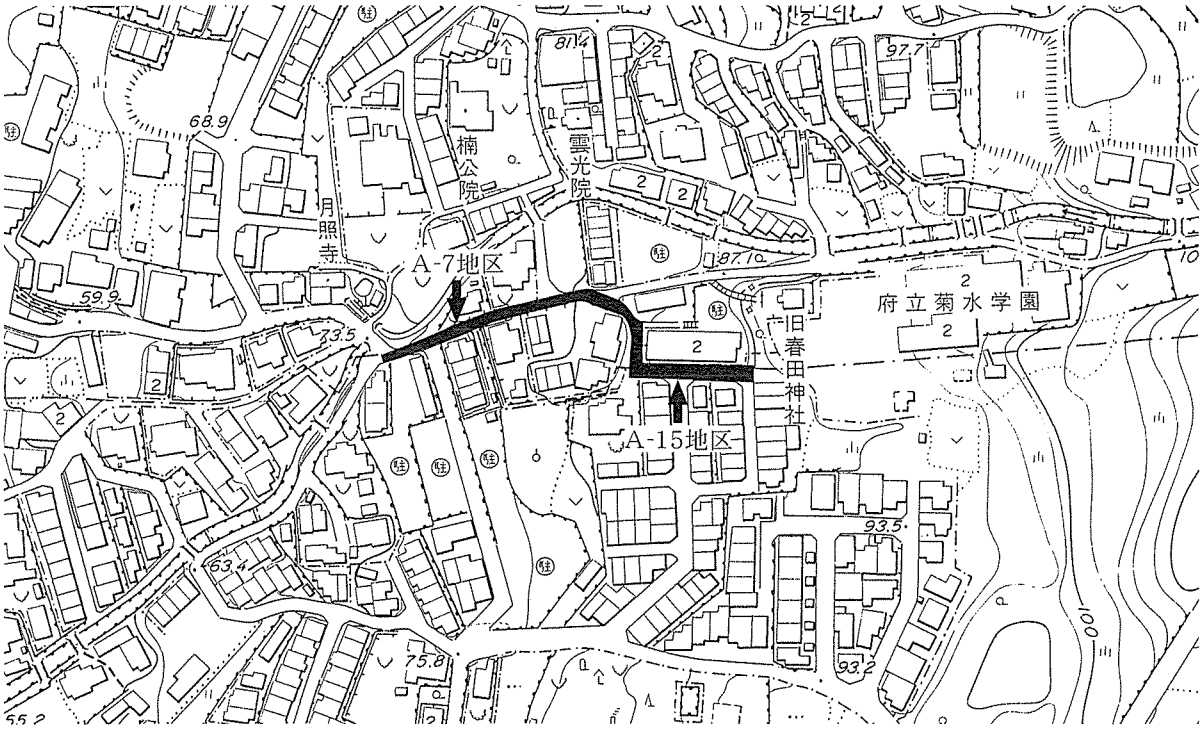

出土遺物（須恵器）



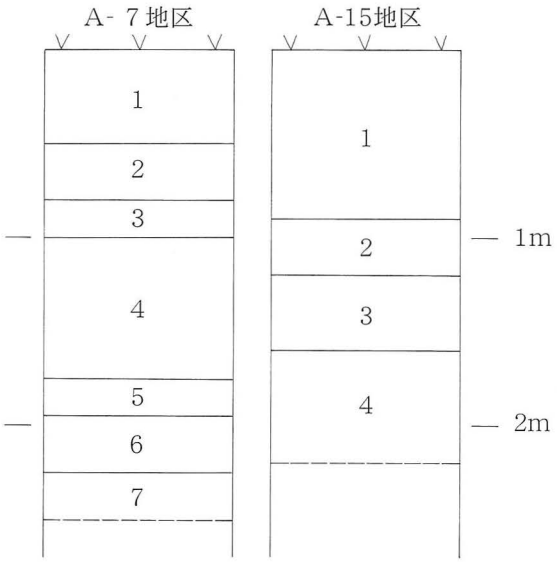

出土遺物（須恵器）

# 第16章　五里山（ごりやま）古墳群の調査

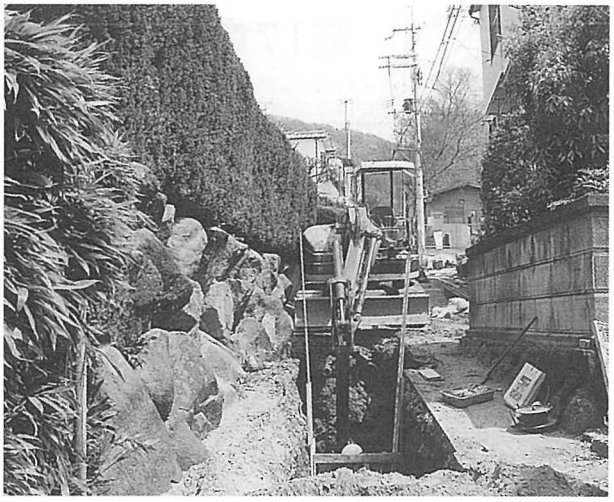
| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第38工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市上六万寺町 |
| 3 | 調 査 面 積 | 248㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年４月３日～４月28日（延べ14日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は府立東大阪養護老人ホームの北である。当地点は五里山古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9～1.0mで長さ276mの間であり、開削工法である。 |



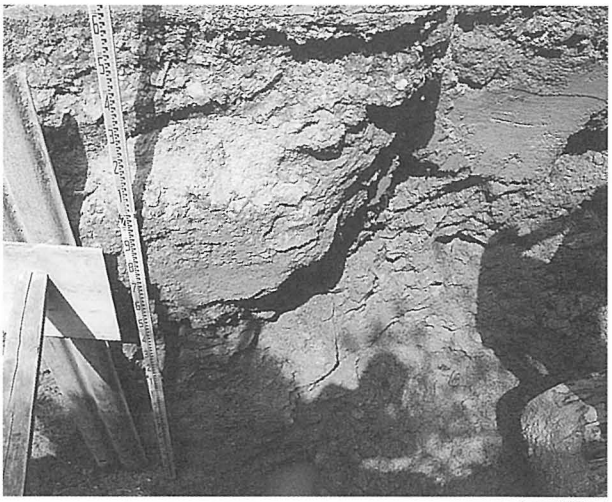

調査地点位置図（1/2500）



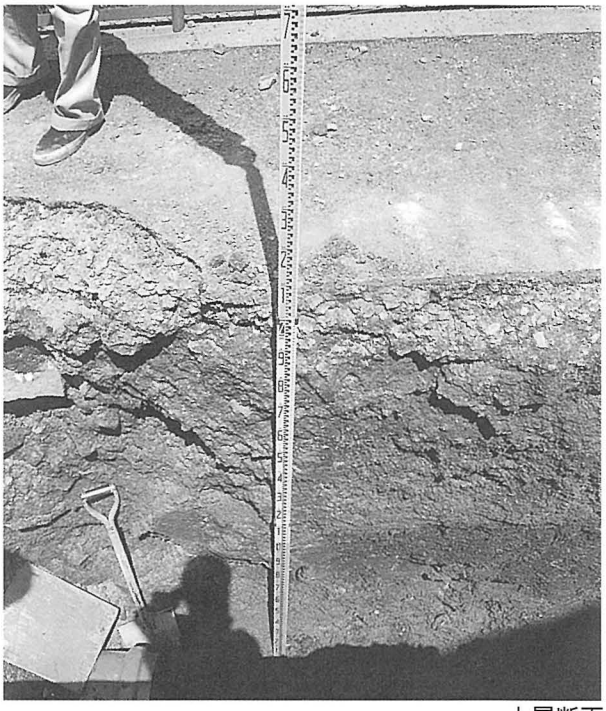

土層断面柱状図



掘削状況



土層断面



土層断面

1. 調査の概要

A－7地区の層序

第1層　盛土。

第2層　褐色(10YR4/4)細～中礫混じり土。

第3層　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト。

第4層　明褐色(7.5YR5/6)細～大礫混じり土。

第5層　にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫～細粒砂混じりシルト。

第6層　黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂。

第7層　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質細粒砂。

A－15地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗褐色(10YR3/3)粘質土。

第3層　黒褐色(10YR3/2)礫混じり粘土。

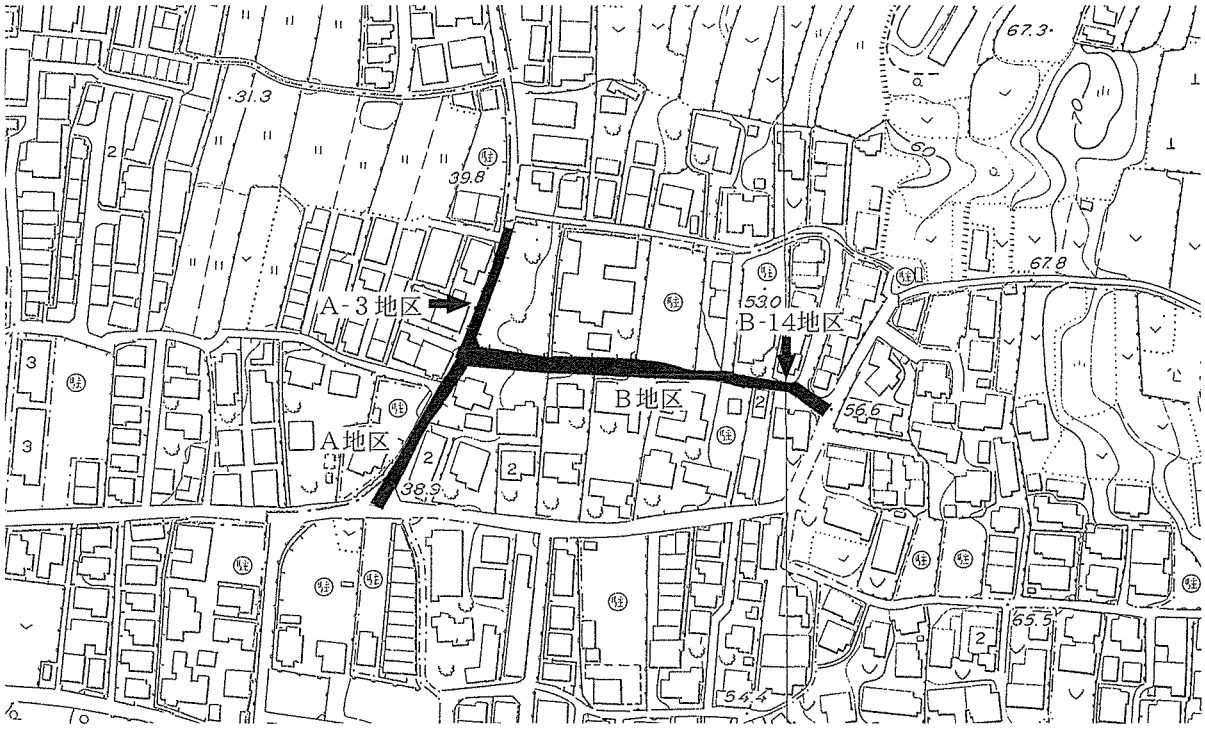
第4層　褐色(7.5YR4/6)細粒砂～小礫。

2. まとめ

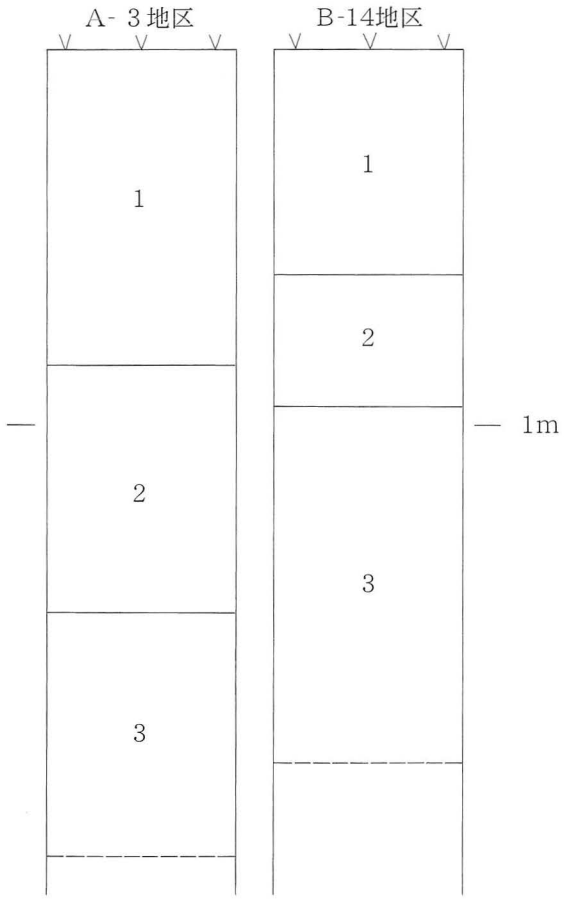
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

# 第17章　山畑（やまはた）古墳群・遺跡の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第11工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調査地点 | 東大阪市上四条町 |
| 3 | 調査面積 | 154㎡ |
| 4 | 調査期間 | 平成13年５月11日～７月19日（延べ33日） |
| 5 | 報告担当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は山畑遺跡・古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ182mの間であり、開削工法である。 |



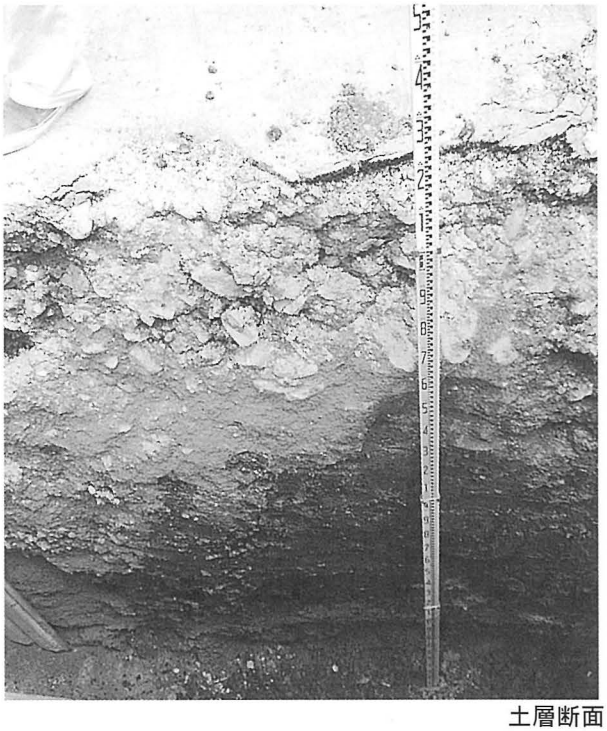

調査地点位置図（1/2500）




土層断面柱状図

掘削状況

土層断面



土層断面

1. 調査の概要

A－3地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒褐色(10YR2/2)礫混じり粘土質シルト。

第3層　黒褐色(2.5Y3/1)礫混じり粘土質シルト。

B－14地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒褐色(10YR2/3)礫混じり粘土質シルト。

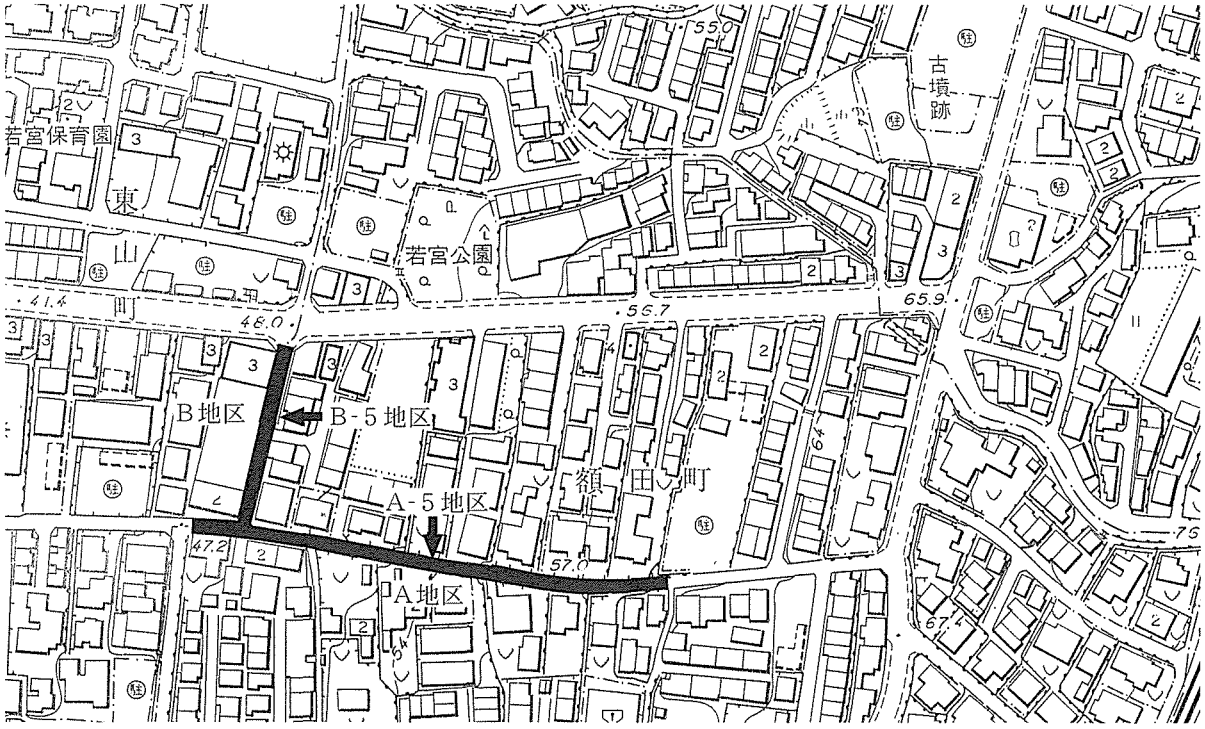
第3層　にぶい黄色(2.5Y6/4)礫混じりシルト。

2. まとめ

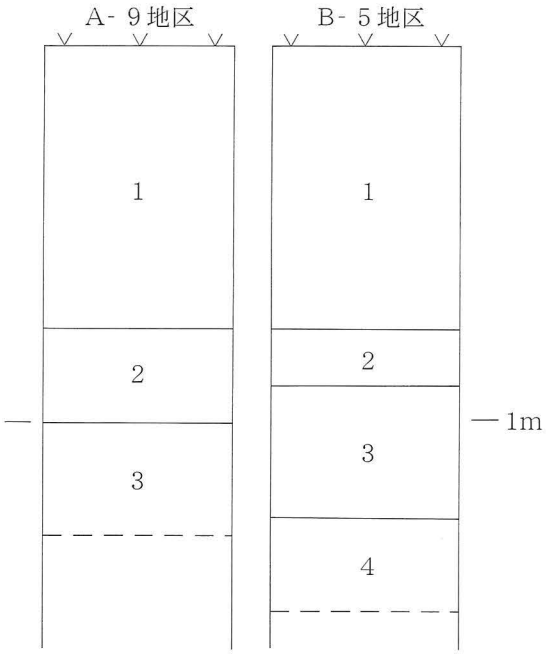
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

# 第18章　若宮古墳群（わかみや）の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第27工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市額田町997～1125地先 |
| 3 | 調 査 面 積 | 258㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年８月23日～12月３日（延べ28日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は国道308号線の南である。当地点は若宮古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9～1.0mで長さ296mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（1/2500）




土層断面柱状図

調査地遠景

土層断面

土層断面

1. 調査の概要

A－9地区の層序

第1層　盛土。

第2層　褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト。

第3層　黒色(5Y2/1)礫混じり粘土質シルト。

B－5地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)礫混じり粘土質シルト。

第3層　暗灰黄色(2.5Y5/2)小～中礫混じり粘土質シルト。

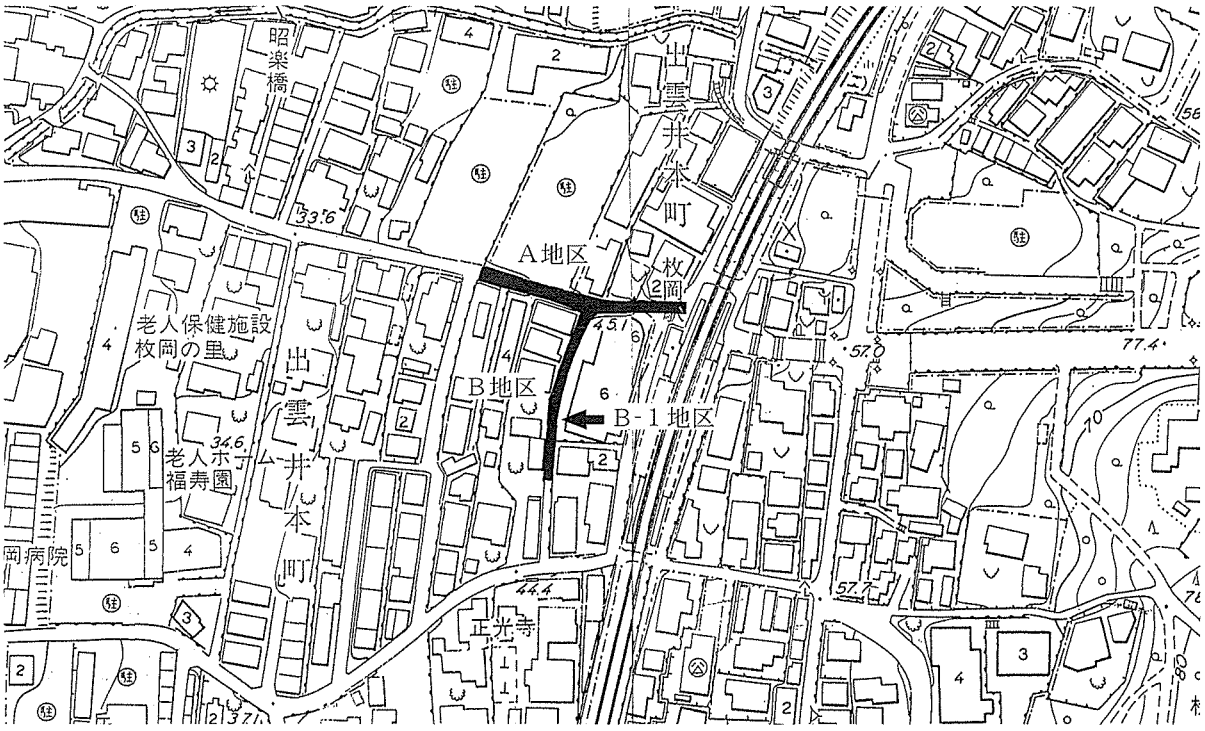
第4層　暗灰黄色(2.5Y5/2)小礫混じり粘土質シルト。

2. まとめ

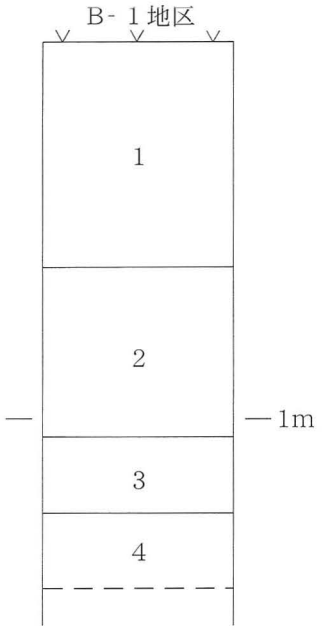
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

# 第19章　出雲井（いずもい）遺跡群の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第２工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調査地点 | 東大阪市出雲井本町304～424地先 |
| 3 | 調査面積 | 104㎡ |
| 4 | 調査期間 | 平成13年９月26日～11月19日（延べ12日） |
| 5 | 報告担当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線枚岡駅の西である。当地点は出雲井遺跡群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ122mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（1/2500）




土層断面柱状図

1. 調査の概要

Ｂ－１地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト。

第３層　黒褐色(2.5Y3/1)小礫混じり粘土質シルト。

第４層　オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂混じり粘土質シルト。

2. まとめ

立会調査を実施した結果、Ｂ－１地区の第２・３層で中世期の土師器・瓦器などが少量出土した。遺物は二次堆積と考えられる。

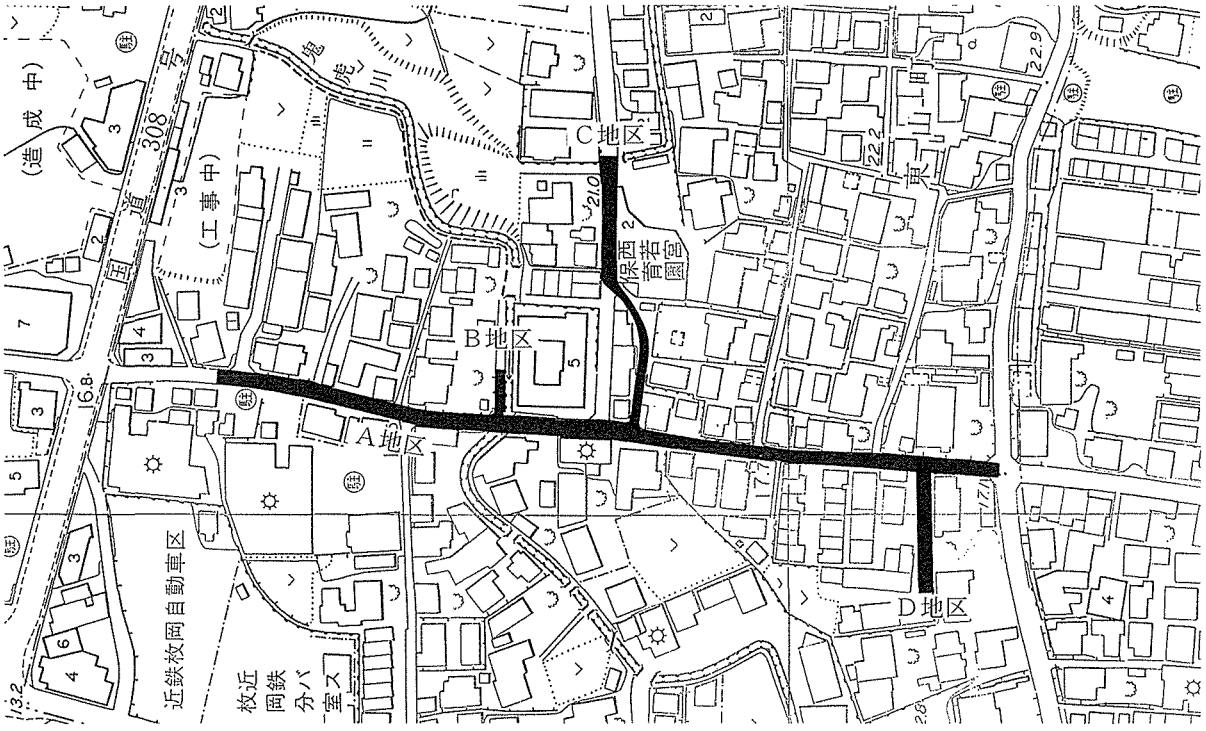
調査地遠景

掘削状況

土層断面

# 第20章　舳古墳群第２次・西ノ辻遺跡第46次他の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第６工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調査地点 | 東大阪市東山町917～1059地先・736～1248地先 |
| 3 | 調査面積 | 397㎡ |
| 4 | 調査期間 | 平成13年６月11日～11月15日（延べ57日） |
| 5 | 報告担当 | 吉田綾子 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は旧国道170号線より東、308号線より南である。当地点は舳古墳群・西ノ辻遺跡・東高野街道内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ453mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（1/2500）

1. 調査の概要

調査は便宜上Ａ～Ｄ地区に分けて行った。Ａ地区は東高野街道上に位置し、Ａ・Ｂ・Ｄ地区とＣ地区の西側一部が西ノ辻遺跡、残りＣ地区が舳古墳群に位置する。

Ａ－４地区周辺で古墳時代～平安時代、弥生時代後期の遺物包含層を確認した。堆積状況から谷筋内のものと思われる。またＣ－５地区周辺で中世と考えられるピットを検出した。また古墳時代の遺物包含層を確認した。これはＣ－21地区周辺でも確認できた。

2. 層序

Ａ－３地区

第１層　盛土及び撹乱。

第２層　黒色(10Y2/1)粗粒砂・小礫～中礫混じりシルト。酸化鉄が沈着。古墳時代～平安時代の遺物が出土。谷筋内埋土。

第３層　オリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルト。酸化鉄が沈着。古墳時代～平安時代の遺物が出土。谷筋内埋土。

第４層　灰オリーブ色(5Y4/2)中礫混じり粘土質シルト。谷筋内埋土。

第５層　オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂～小礫混じり粘土質シルト。粗粒砂～小礫が多量に混じる。谷筋内埋土。

第６層　黒色(5Y2/1)粗粒砂。谷筋内埋土。

第７層　オリーブ黒色(5Y3/1)小礫混じり粗粒砂。谷筋内埋土。

第８層　オリーブ黄色(5Y6/3)粘土質シルト。地山層。

Ａ－４地区

第１層　盛土及び撹乱。

第２層　黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂・小礫～中礫混じり粘土質シルト。小礫～中礫が少量混じる。酸化鉄が少量沈着。炭化物を含む。古墳時代～平安時代の遺物が出土。谷筋内埋土。

第３層　黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂混じり粘土質シルト。酸化鉄が少量沈着。古墳時代～平安時代の遺物が出土。谷筋内埋土。

第４層　灰色(5Y4/1)小礫～中礫混じり粘土質シルト。谷筋内埋土。

第５層　灰色(7.5Y4/1)小礫混じり粘土質シルト。炭化物を含む。弥生時代の遺物が出土。谷筋内埋土。

Ｃ－21地区

第１層　盛土及び撹乱。

第２層　暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト。古墳時代の遺物が出土。

第３層　オリーブ黒色(7.5Y3/2)細粒砂質シルト。灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質シルトがブロック状に混じる。

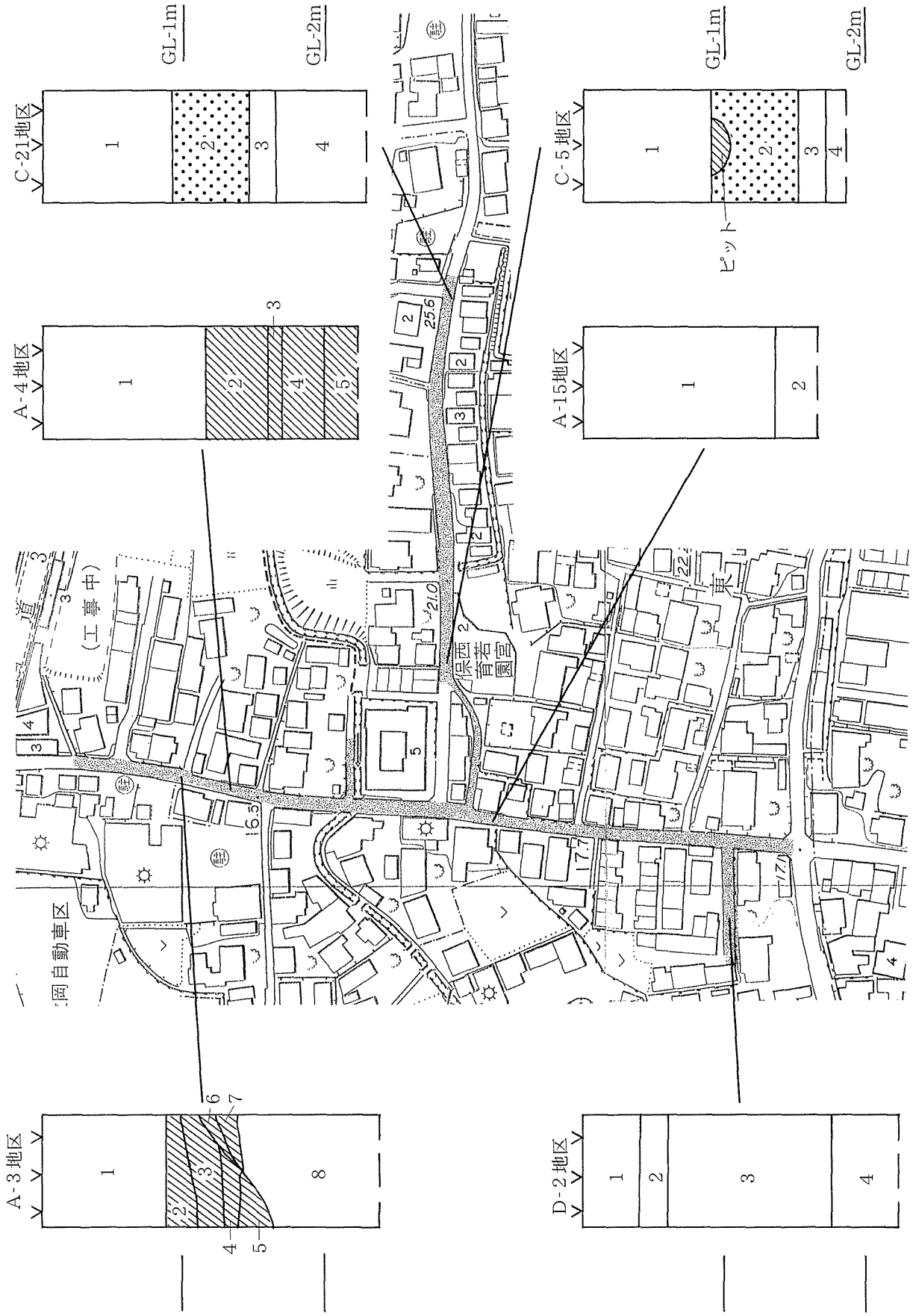
第４層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土質シルト。酸化鉄が沈着。

Ｃ－５地区

第１層　盛土及び撹乱。

第２層　暗灰黄色(2.5Y4/2)礫混じり粘土質シルト。にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトがブロック状に混じる。１cm～５cm大の礫が少量混じる。酸化鉄が沈着。古墳時代の遺物が出土。上面でピットを検出。

第３層　オリーブ黒色(10Y3/1)小礫～中礫混じりシルト。中礫が少量混じる。




土層断面柱状図

第４層　灰色(7.5Y4/1)細粒砂混じり粘土質シルト。植物遺体を少量含む。

ピット　第2層上面で検出。黄灰色(2.5Y4/1)小礫混じり粘土質シルト。酸化鉄が少量沈着。炭化物を少量含む。

Ａ－15地区

第１層　盛土及び撹乱。

第２層　オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂・礫混じりシルト。２cm～５cm大の礫が混じる。

Ｄ－２地区

第１層　盛土。

第２層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)小礫混じり粘土質シルト。小礫が多量に混じる。

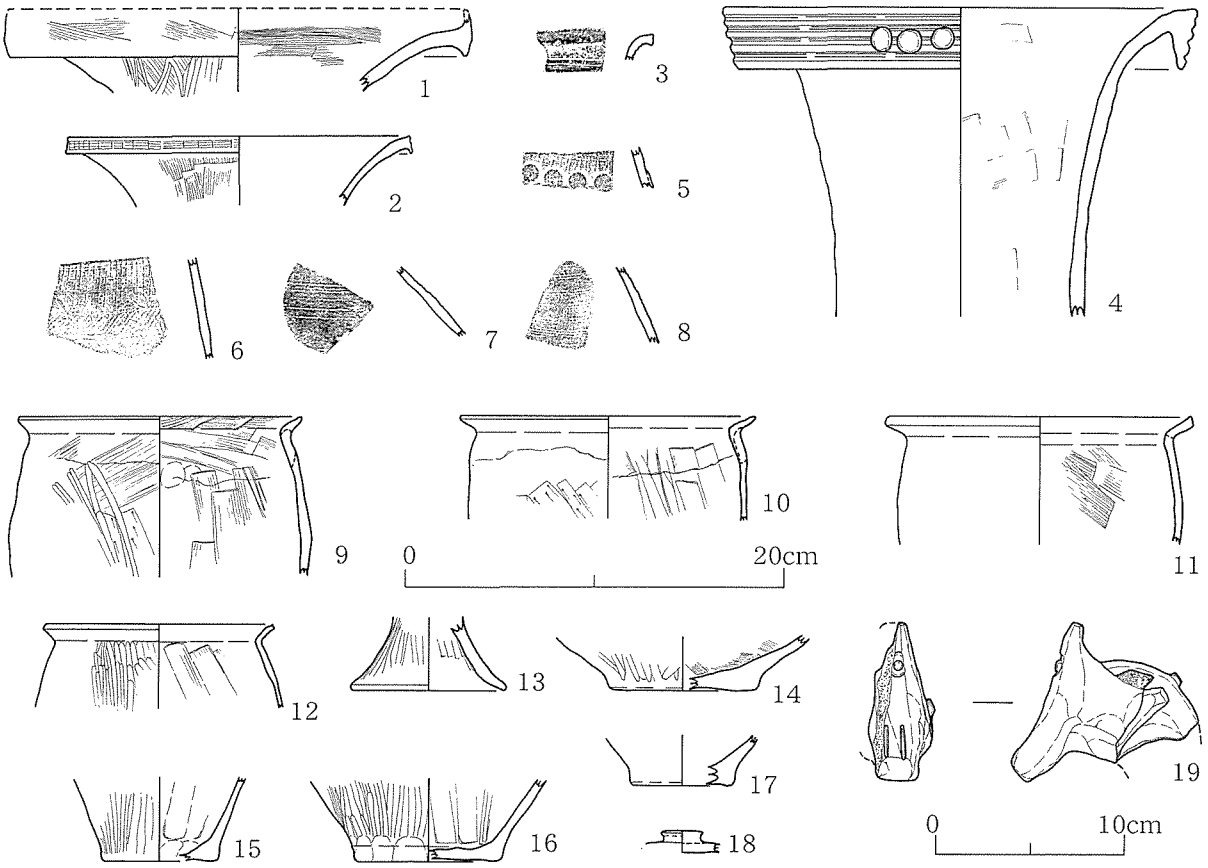
第３層　オリーブ灰色(10Y4/2)シルト混じり細粒砂～小礫。地山層。

第４層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト混じり粗粒砂。風化した２cm～５cm大の礫が多量に混じる。

3. 出土遺物

今回の調査地からは弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器などが出土した。多くはＡ－３・４地区周辺の谷筋内埋土から出土したものである。

１～８は弥生土器の壷である。1は広口壷で、口径24.0cm、残存高は4.2cmを測る。内外面に横方向のハケ調整(８本/cm)が、外面頸部には縦方向のヘラミガキ調整がみられる。２も広口壷で、口径は18.0cm、残存高は3.7cmである。外面に縦方向のハケ調整(12本/1.5cm)が見られ、口縁端部に櫛描簾状文(3本/0.5cm)が施されている。３は残存高が1.4cmで、櫛描直線文(３～４本/0.9cm)が施されている。４は口径24.0cm、残存高16.4cmを測る広口壷である。口縁端部に４条の凹線文と円形浮文が施されている。５は体部に櫛描簾状文(8本/cm)と円形浮文を施している。内面は横方向のハケ調




出土遺物実測図

出土遺物（土馬）

整もしくは板状工具によるナデ調整と思われる（原体幅2.0cmほど）。6は同一原体（16本/1.6cm）による櫛描簾状文と櫛描列点文が施されている。7は櫛描直線文（6本/2.0cm）を施す。8は直線文（2本/cm）が7条以上施されており、一部に赤色顔料が付着している。

9～12は弥生土器の甕である。9は口径15.0cm、残存高8.5cmを測る。内面に板状工具（1.1cm）によるナデ調整と指頭圧痕がみられる。外面に縦方向のヘラケズリ調整（原体0.6cm以上）と横方向の板状工具（原体不明）によるナデ調整ののち縦方向のヘラミガキ調整を行う。10は口径15.6cm、残存高5.5cmで、内面は板状工具（原体1.3cm）によるナデ調整、外面が縦方向のヘラケズリ調整（原体1.3cm）である。11は口径16.0cm、残存高は6.8cmを測る。内面は横方向のハケ調整（12～14本/1.8cm）で、外面に黒斑がみられる。12は口径12.0cm、残存高は4.4cmで、内面は縦方向の板状工具（原体1.2cm）によるナデ調整で、外面には縦方向のヘラミガキ調整と黒斑がみられる。

13は弥生土器高杯脚部である。底部径は8.0cm、残存高は3.9cmである。内面に縦方向の板状工具（0.7cm以上）によるナデ調整、外面には縦方向のヘラミガキ調整である。

14～17は弥生土器底部である。14は壷底部で、底部径7.4cm、残存高2.9cmを測る。内面に横方向のハケ調整（8本/cm）、外面に縦方向のヘラミガキ調整と黒斑がみられる。15は甕底部である。底部径6.0cm、残存高4.4cmで、外面は縦方向のヘラミガキ調整である。16は底部径7.4cm、残存高4.4cmを測る。内面に縦方向の板状工具（1.2cm以上）のナデ調整、外面に縦方向のヘラミガキ調整を行う。17は底部径5.2cm、残存高2.7cmを測り、調整は風化のため不明瞭である。

これらの弥生土器は2を除くすべてが生駒西麓産である。また、4や17のように弥生時代後期に属するものもあるが、ほとんどが弥生時代中期に属す。

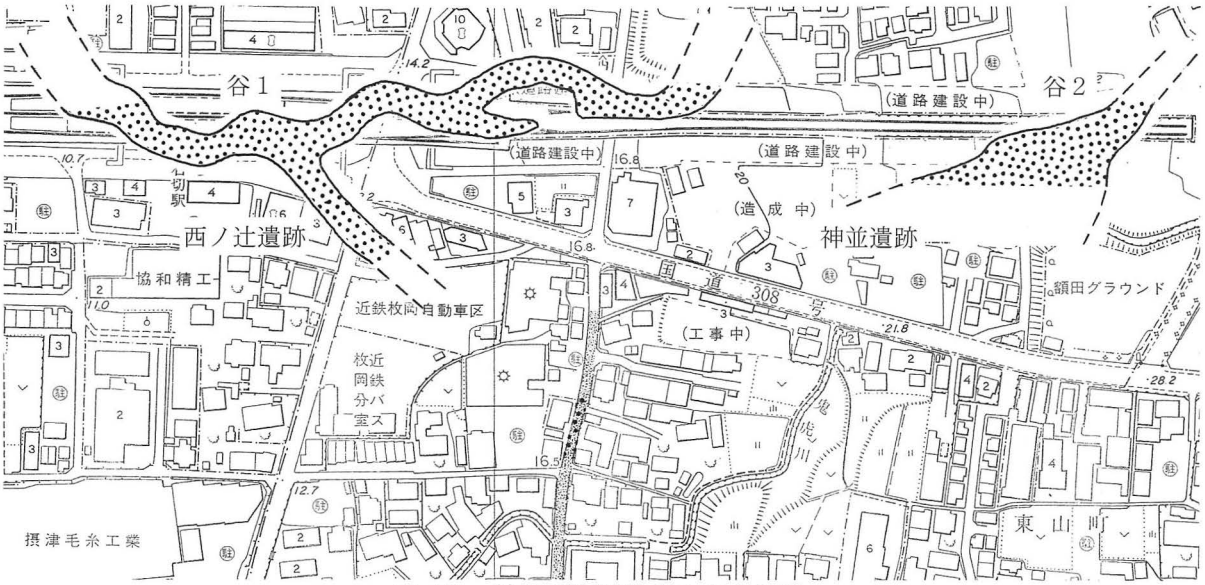
18は土師器杯蓋である。つまみはボタン状を呈し、つまみ径は2.2cm、残存高は1.2cmを測る。

19は土馬の頭部である。竹管文で目を、ヘラ状工具で鼻を、粘土紐を折り込むように貼り付けることで手綱を表現している。また板状工具によるナデ調整でやや明確な稜をゆうする。残存長5.1cm、残存高4.2cm、厚さ1.7cmを測る。

18・19は奈良時代に属する。

4. まとめ

今回の調査地は、東高野街道、西ノ辻遺跡、舳古墳群の3遺跡に渡るものであった。残念ながら東高野街道関係の遺構・遺物は検出できなかったが、A－3・4地区周辺で弥生時代中期～平安時代の遺物が出土する谷筋を検出した。これは西ノ辻遺跡第5次調査で検出された谷1、もしくは神並遺跡で検出された谷2の続きと考えられる。



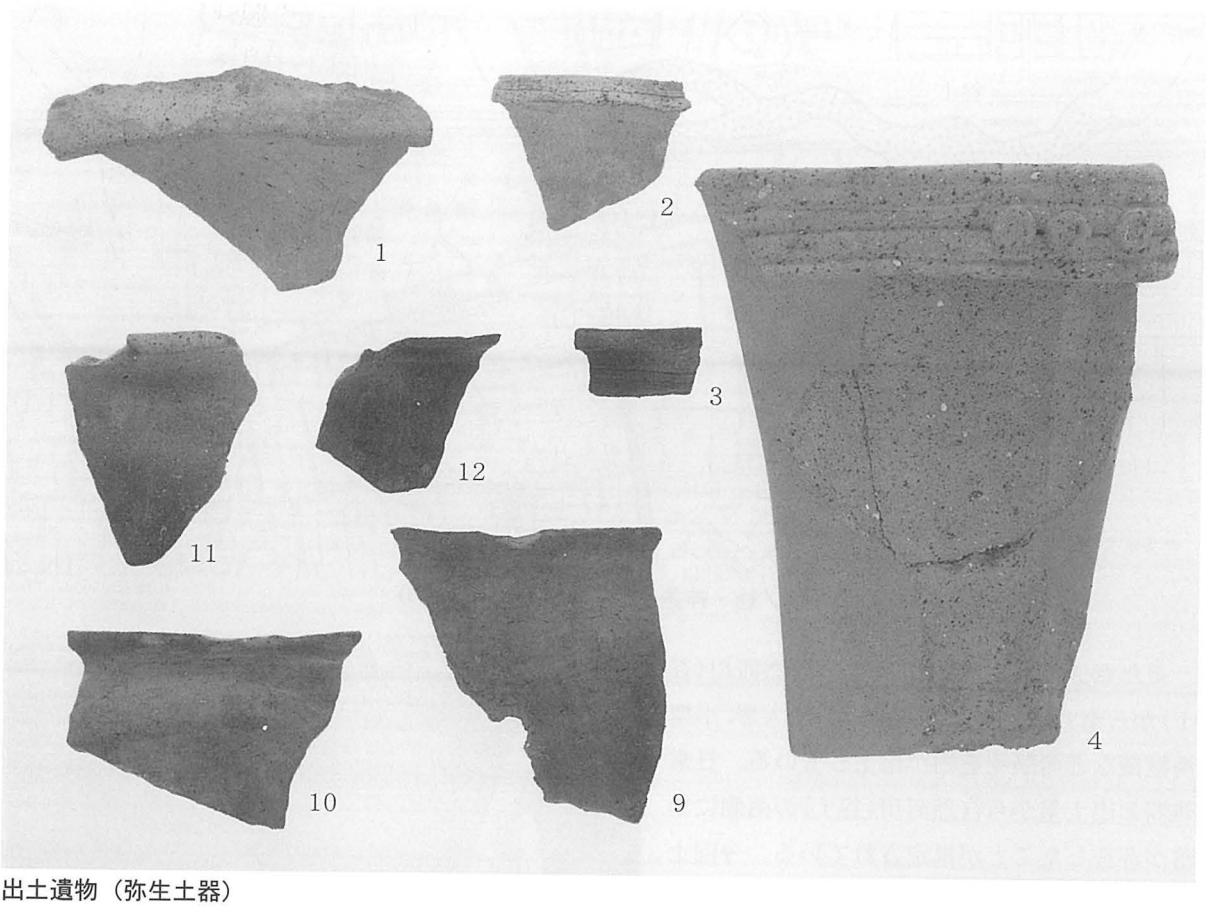

西ノ辻・神並遺跡谷模式図（1/3500）

また西ノ辻第22次調査では、自然河川(谷1)から奈良時代中頃の竈セットや人形、小型海獣鏡などの祭祀遺物が出土している。日常雑器の出土量から自然河川(谷1)の南側に集落が存在したことが推定されている。今回土馬が出土した地点はこの自然河川(谷1)の南側に位置し、当時の集落が東側に伸びていた可能性を示すものと思われる。

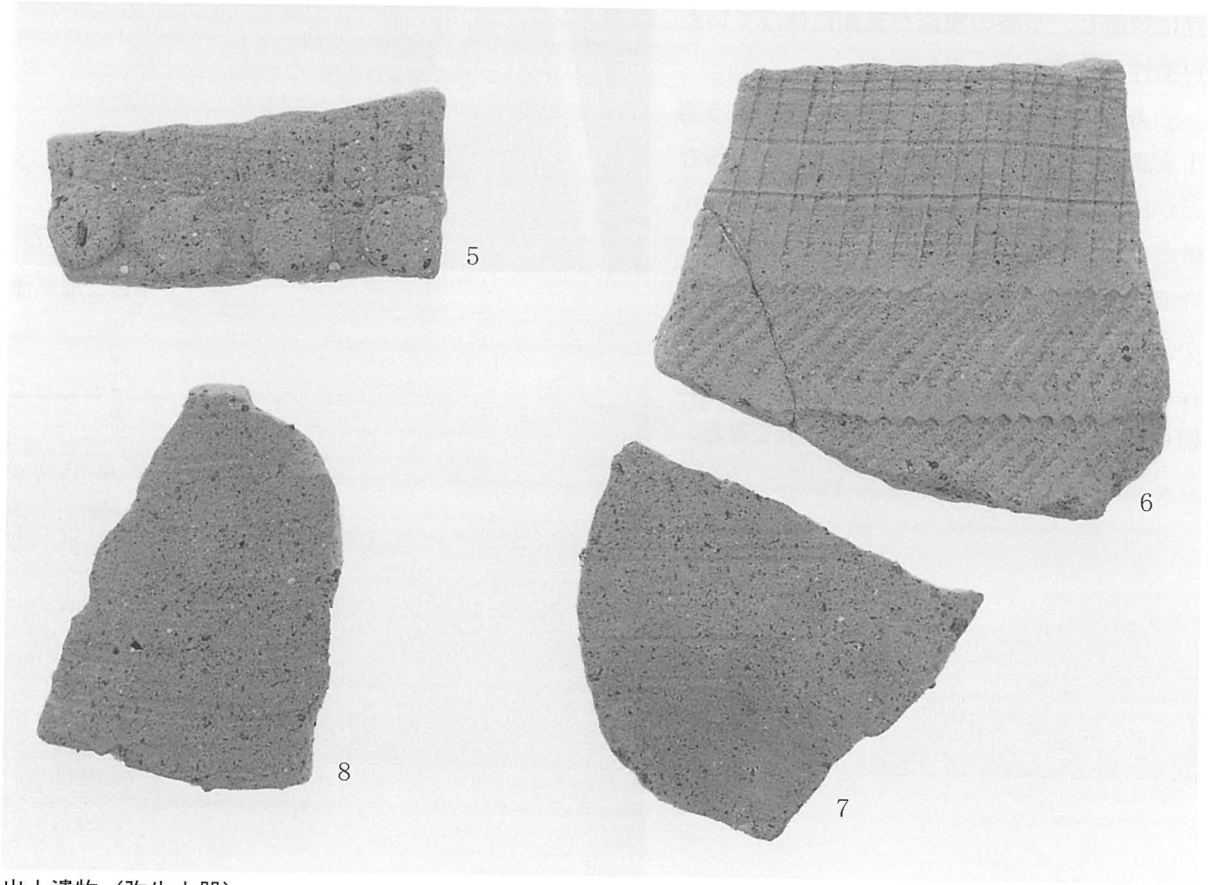
一方、舳古墳群はC－14地区に北接する第1次調査地で円筒埴輪片や須恵器、土師器などが出土する周濠が検出され、推定径約12mほどの円墳の存在が確認されたのみである。今回、Cラインの東西端で古墳時代の包含層が確認できた。残念ながら埴輪片など古墳の存在を示す遺物は出土しなかったが、周辺に何らかの遺構が存在する可能性が出てきた。

A－4地区土層断面

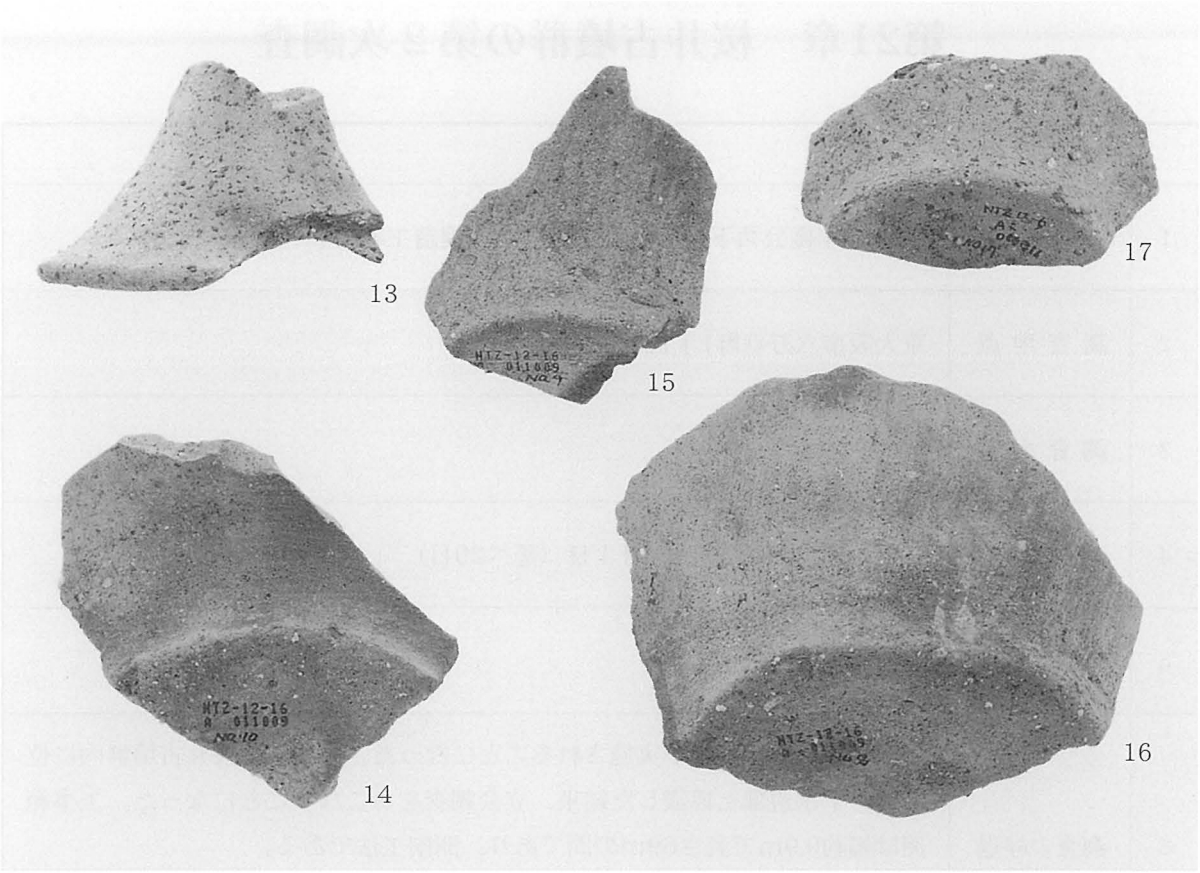
C－5地区土層断面




出土遺物（弥生土器）




出土遺物（弥生土器）

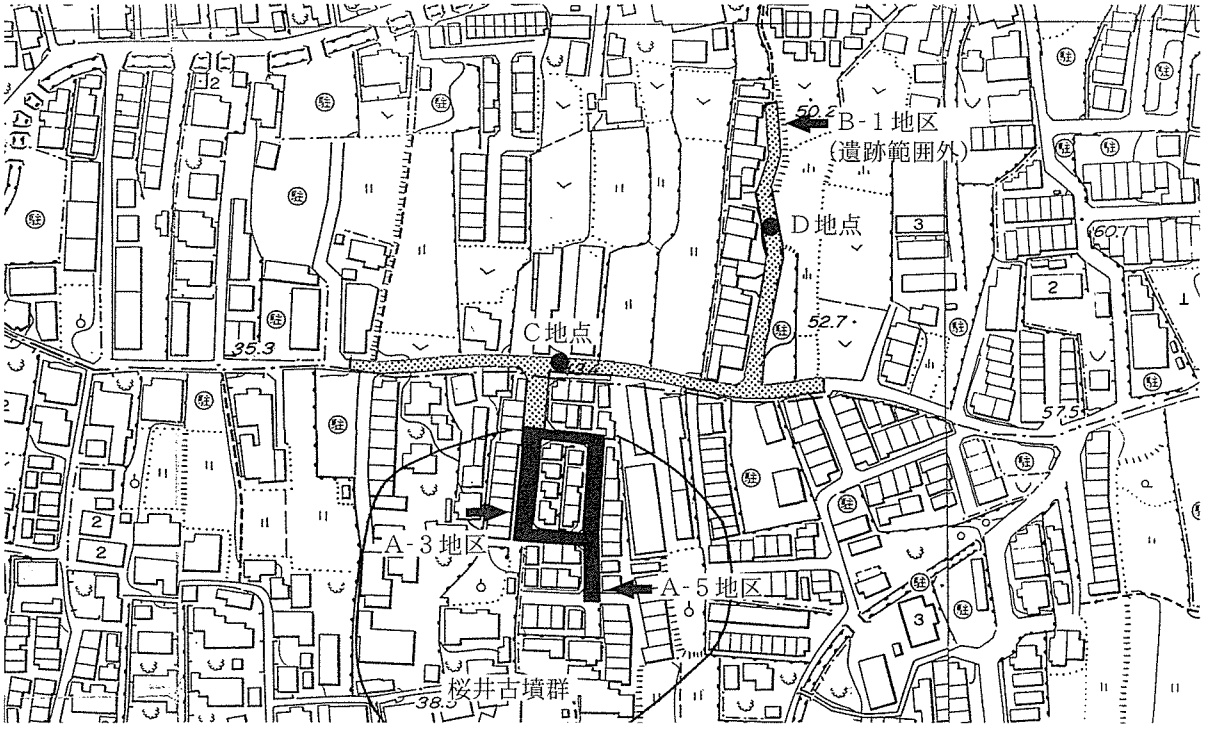



出土遺物（弥生土器）

出土遺物（土師器・須恵器・製塩土器）

# 第21章　桜井（さくらい）古墳群の第２次調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第31工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市六万寺町1丁目949～957 |
| 3 | 調 査 面 積 | 59㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年７月17日～11月１日（延べ29日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は桜井古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ69mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（１/2500）

1. 調査の概要

工事は遺跡内と遺跡外でおこなわれた。遺跡内は立会調査を実施したが遺構、遺物は検出できなかった。遺跡外は調査の対象外であった。工事実施中に業者より連絡があり、C・D地点で遺物らしきものを採集したので取りに来てほしい旨の連絡があった。早々に現地に赴いたが工事は終了しており、状況を確認することはできなかった。工事関係者の話によるとD地点では地表下1mに既設ガス管があり、その下の黒色粘土層より遺物を採集したとのことであった。また、D地点よりすぐ南では大きな石が2個あったとの情報も得られた。C地点の状況は不明である。

A－3地区の層序

第1層　盛土。

第2層　旧耕土。

第3層　床土。

第4層　灰黄褐色(10YR4/2)中礫混じり細～粗粒砂。

第5層　暗褐色(10YR3/4)細～中礫混じり細～中粒砂。

第6層　暗褐色(10YR3/3)細～中礫混じり細～中粒砂。

A－5地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ黒色(7.5Y3/2)小礫混じり粘質土。

第3層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)小～中礫混じり粘質土。

B－1地区の層序

第1層　盛土。

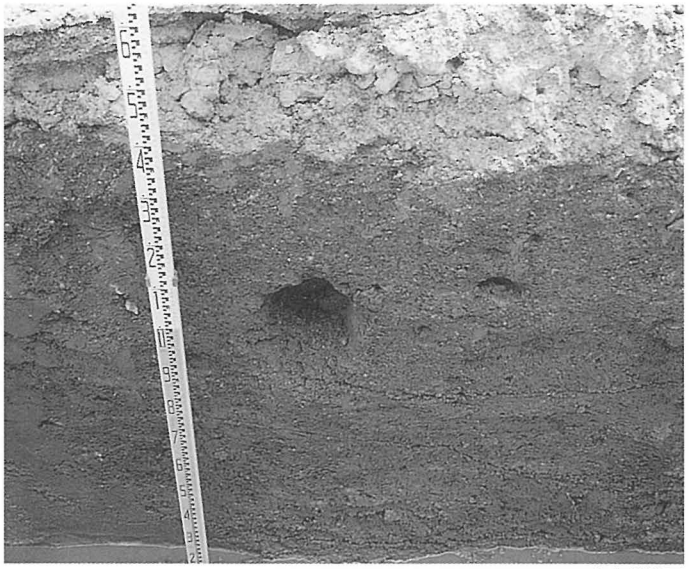
第2層　黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂混じりシルト。

第3層　オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂混じりシルト。

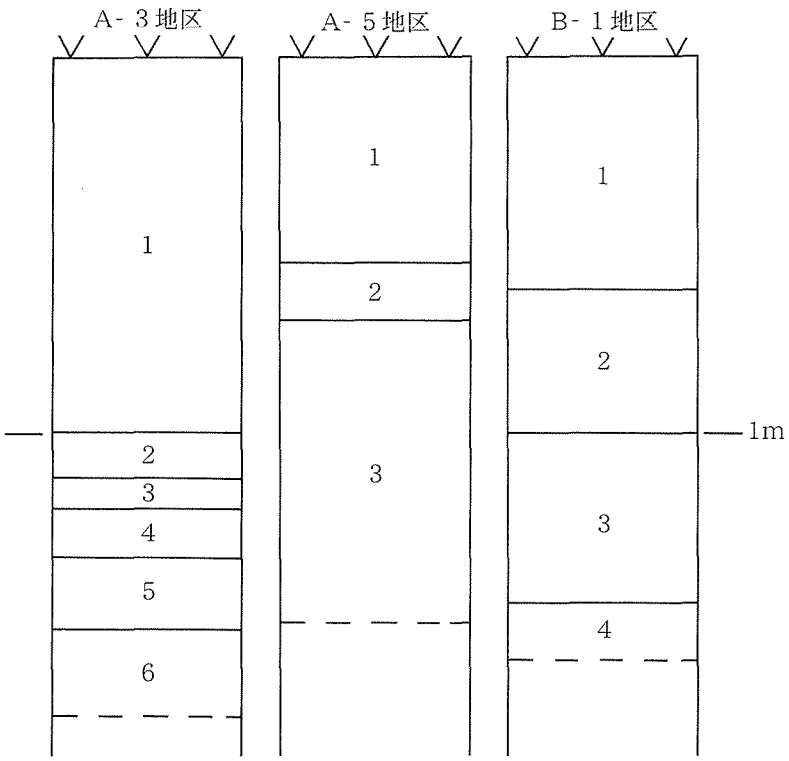
第4層　オリーブ黒色(5Y3/2)シルト混じり細粒砂。

調査地遠景

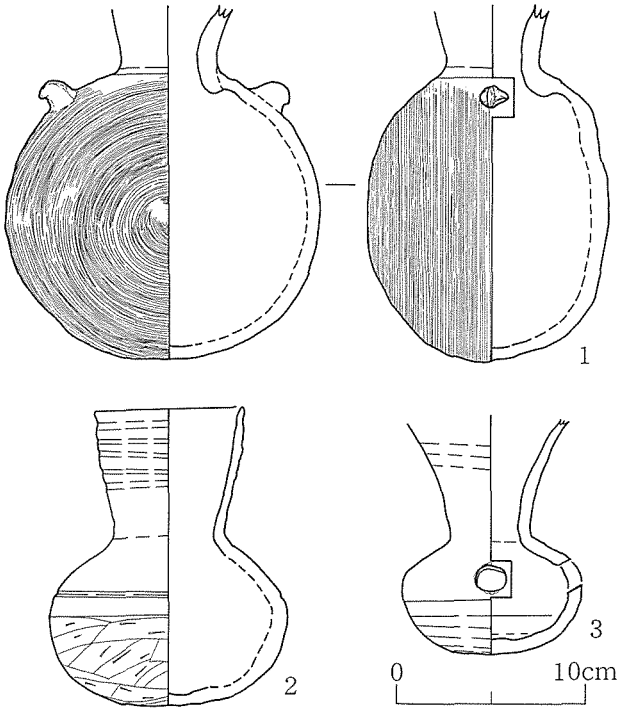
掘削状況



土層断面




土層断面柱状図




出土遺物実測図

2. 出土遺物

古墳時代の須恵器が出土した。器種は提瓶・直口壺・瓹がある。

１は提瓶であり、口縁部を欠損する。底部は丸底を呈する。体部は一面が直線的であり、反対面がやや膨らむ扁平な土器である。口頸部はやや外上方へ伸びる。肩部にＪ字形を呈する耳が付く。体部外面はカキメ調整する。内面は調整法不明。口頸部内外面は回転ナデ調整する。肩部と口頸部の境の内面には接合時の段が明瞭に残る。焼成は硬質であり、色調は暗灰色を呈する。Ｃ地点より採集。

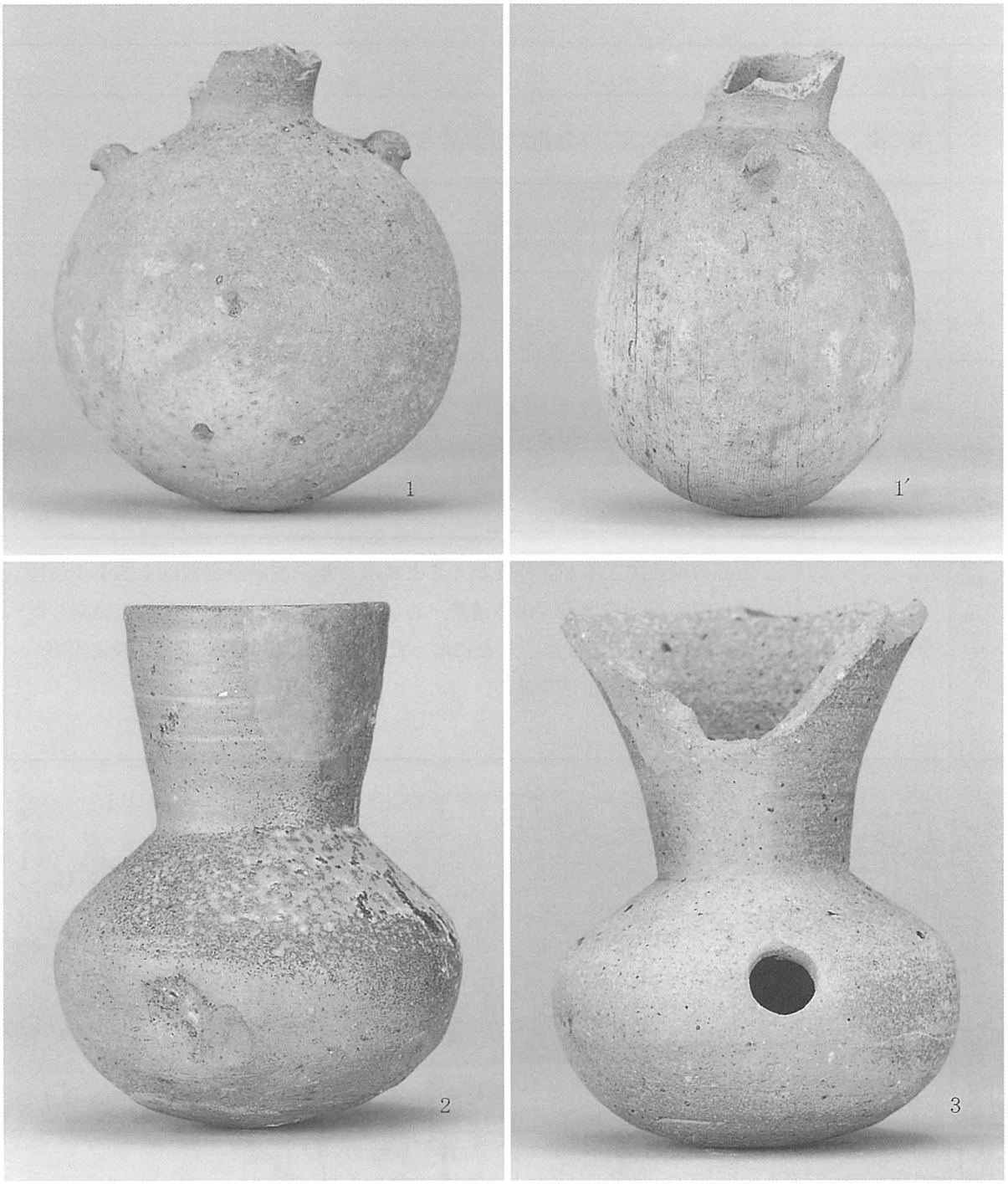
２は直口壺であり、口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。底部は丸底を呈し、体部がやや扁球である。口頸部は外上方へ長く伸びる。口縁端部は丸く終わる。体部外面に1条、口頸部外面に５条の凹線文を施す。体部上半の外面と口頸部内外面は回転ナデ調整する。体部下半の外面は回転を利用しないヘラケズリ調整する。体部内面は調整法不明。内外面に自然釉が付着する。焼成は硬質であり、色調は暗青灰色を呈する。Ｃ地点より採集。

３は瓹であり、口縁部を欠損する。底部は丸底を呈し、体部はがやや扁球である。口頸部は外反しながら、長く外上方へ伸びる。体部の中位よりやや上に斜めの円孔を穿つ。体部上半の外面と口頸部内外面は回転ナデ調整する。体部下半の外面は回転ヘラケズリ調整する。体部内面は調整法不明。焼成は硬質であり、色調は淡黄灰色を呈する。Ｄ地点より採集。

3. まとめ

今回、工事を実施した業者の協力によって遺跡外であるＣ・Ｄ地点の２ヶ所で古墳時代の遺物を採集することができた。Ｃ地点のものは須恵器の瓹であり、Ｄ地点のものは須恵器の提瓶と直口壺である。いずれも完形にちかい資料であり、古墳などによく副葬されるものである。遺物の時期は６世紀後半と思われる。出土遺物や採集地点の状況などから考えるとＤ地点周辺には古墳が存在する可能性

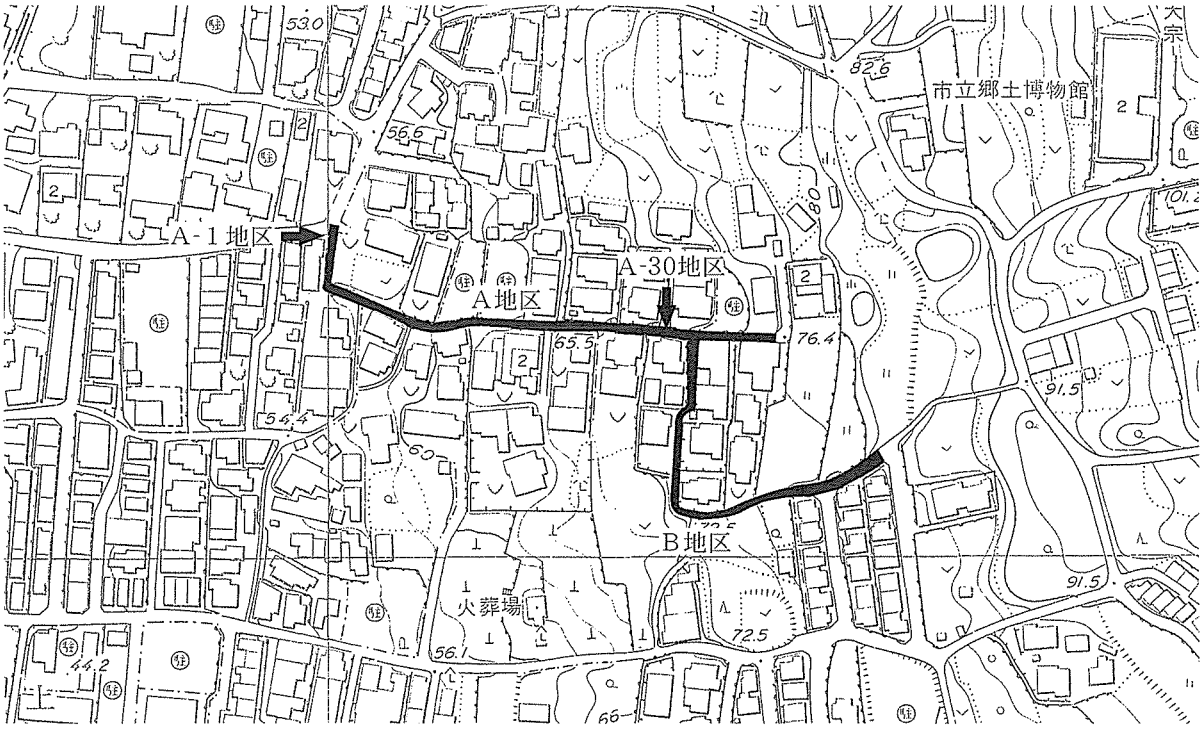
が高い。桜井古墳群の範囲も採集地点まで拡張する必要がある。



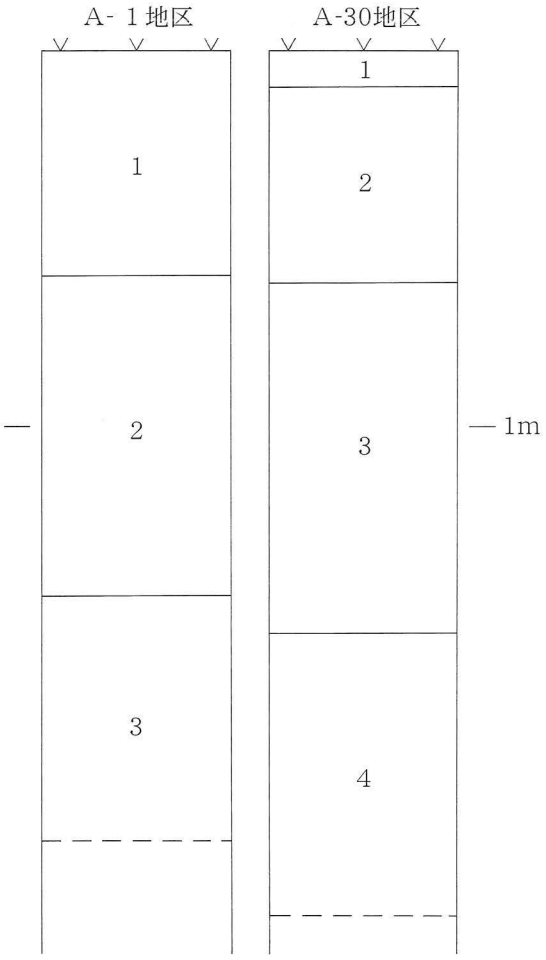

出土遺物（須恵器）

# 第22章　山畑（やまはた）遺跡・古墳群の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第23工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市上四条町1693～2063 |
| 3 | 調 査 面 積 | 268㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年５月28日～10月12日（延べ57日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は上四条小学校の北東である。当地点は山畑遺跡・古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ320mの間であり、開削工法である。 |



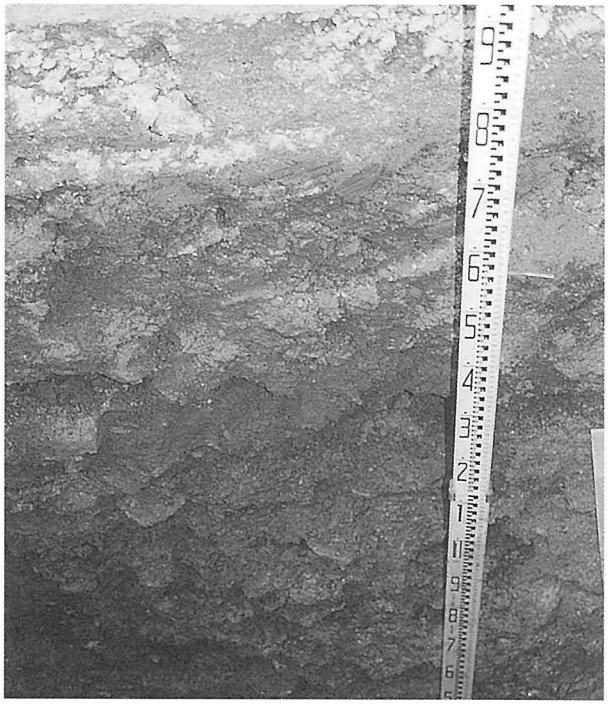

調査地点位置図（1/2500）




土層断面柱状図

調査地遠景

掘削状況



土層断面

1. 調査の概要

Ａ－１地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(10YR3/2)小礫混じり粘土質シルト。

第３層　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト。

Ａ－30地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト。

第３層　暗灰黄色(2.5Y4/2)礫混じり粘土質シルト。

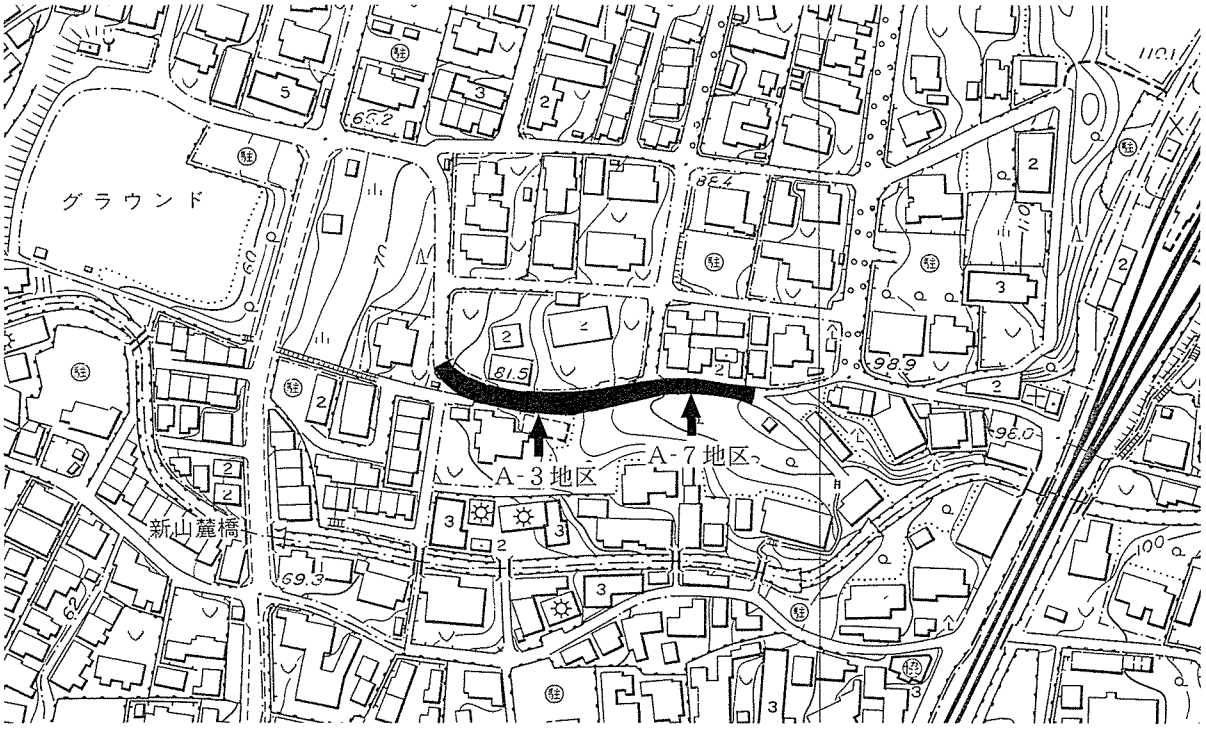
第４層　暗緑灰色(10GY4/1)礫混じり粘土質シルト。

2. まとめ

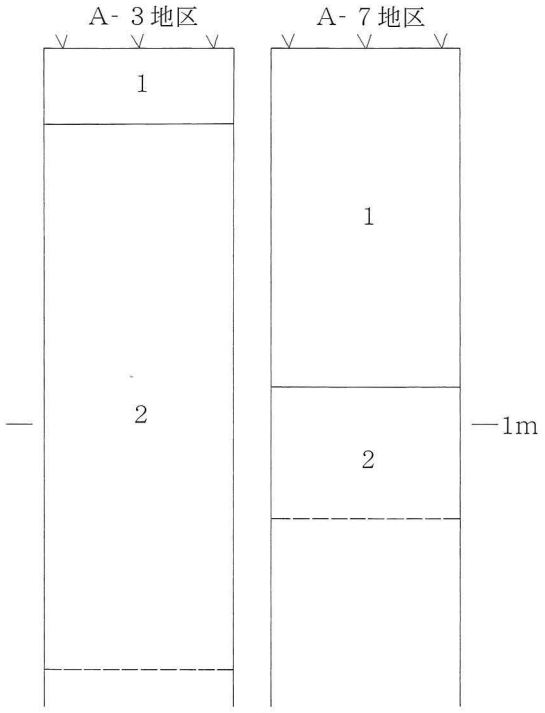
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

# 第23章　千手寺山遺跡の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第45工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市東石切町4丁目363 |
| 3 | 調 査 面 積 | 80㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年９月６日～10月２日（延べ９日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は千手寺山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ95mの間であり、開削工法である。 |

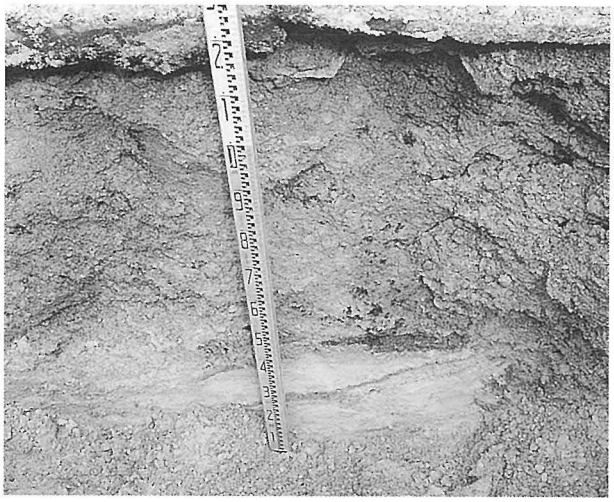



調査地点位置図（1/2500）




土層断面柱状図

調査地遠景



土層断面

土層断面

1. 調査の概要

Ａ－３地区の層序

第１層　盛土。

第２層　明褐色(7.5YR5/8)シルト。

Ａ－７地区の層序

第１層　盛土。

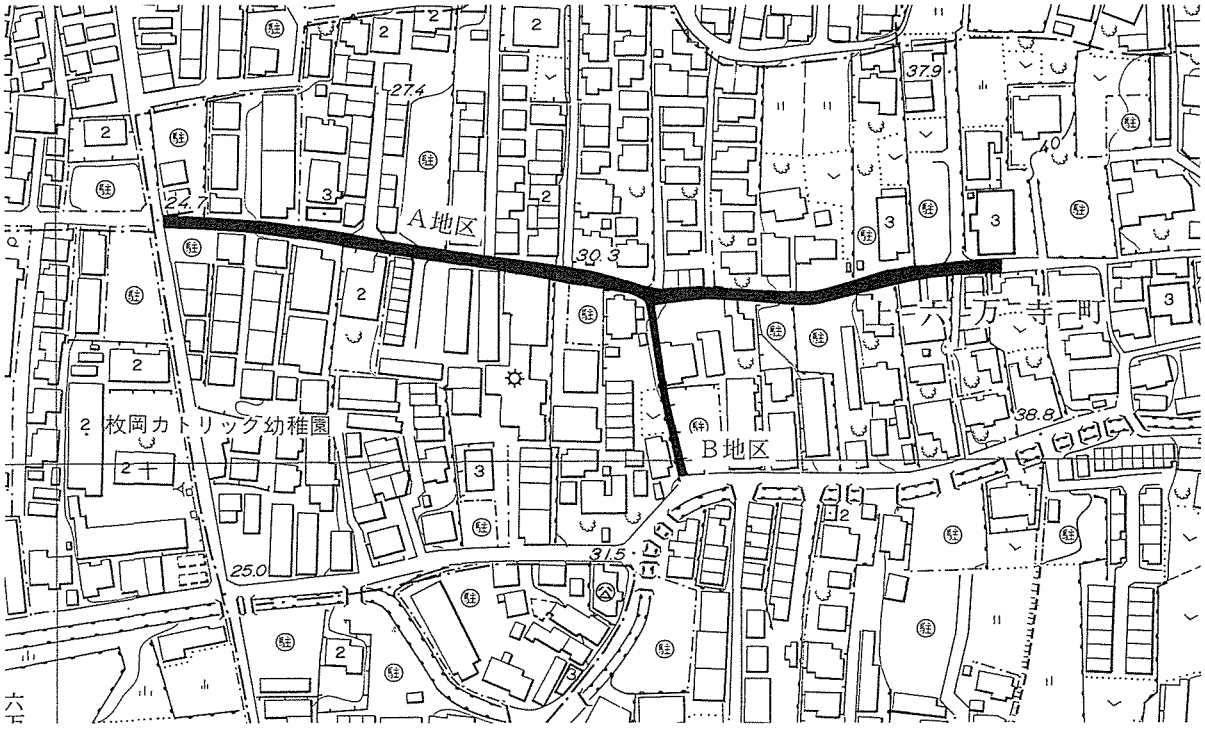
第２層　淡黄色(2.5Y8/4)シルト。

2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

# 第24章　上六万寺遺跡（かみろくまんじ）の第６次調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第29工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調査地点 | 東大阪市上六万寺町1394～1940地先 |
| 3 | 調査面積 | 352㎡ |
| 4 | 調査期間 | 平成13年８月17日～10月12日（延べ29日） |
| 5 | 報告担当 | 岩間俊之 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は縄手中学校の東である。当地点は上六万寺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ415mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（1/2500）

1. 調査の概要

A－1地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂混じりシルト。細礫～5cm大の礫を若干含む。

第3a層　オリーブ黒色(7.5Y3/2)中礫混じり粘土質シルト。炭化物を若干含む。中世の遺物が出土。

第3b層　オリーブ黒色（7.5Y3/2）中礫混じり粘土質シルト。10～20cm大の礫を多く含む。3a層よりやや粘性高い。古墳時代の遺物が出土。

第4層　灰色(10Y4/1)粗粒砂。3cm大の礫を多く含む。

A－8地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂混じりシルト。細礫を若干含む。炭化物を含む。鉄分が沈着。

第3層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト混じり細粒砂。細礫を含む。

A－10地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黄灰色(2.5Y4/1)シルト混じり細礫。鉄分が多く沈着。

第3層　黒褐色(2.5Y3/2)シルト混じり粗粒砂。鉄分が若干沈着。

第4層　黒褐色(10YR3/2)シルト混じり粗粒砂。細～中礫を多く含む。

第5層　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト混じり細粒砂。

第6層　黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂混じりシルト。30～50cm大の礫を多く含む。

A－16地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒色(7.5Y2/1)細粒砂混じりシルト。細～中礫を含む。

第3層　黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂混じりシルト。細～中礫を含む。古墳時代の遺物が出土。

第4層　黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂混じり粘土質シルト。3～5cm大の礫を多く含む。古墳時代の遺物が出土。

第5層　灰色(5Y6/1)細礫混じり粗粒砂。30～50cm大の礫を含む。

A－17地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。古墳時代の遺物が出土。

第3層　灰色(5Y4/1)細～粗粒砂混じりシルト。上面において溝状の遺構を検出。古墳時代の遺物が出土。

第4層　灰色(5Y6/1)細礫混じり粗粒砂。30～50cm大の礫を含む。

A－18地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒褐色(2.5Y3/2)シルト。10～30cm大の礫を多く含む。

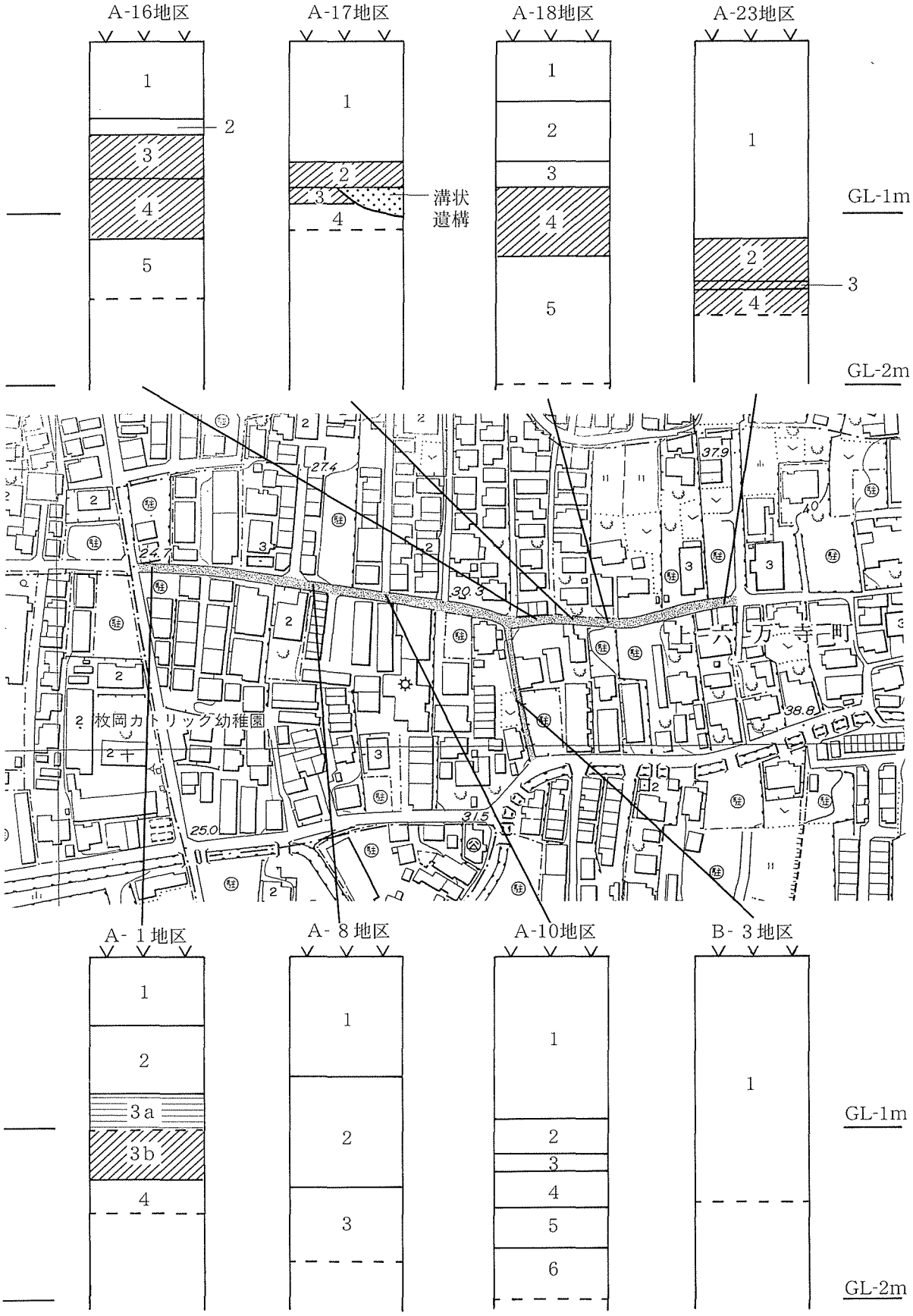
第3層　暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂混じりシルト。細～中礫を含む。

第4層　黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混じり粘土質シルト。古墳時代の遺物が出土。

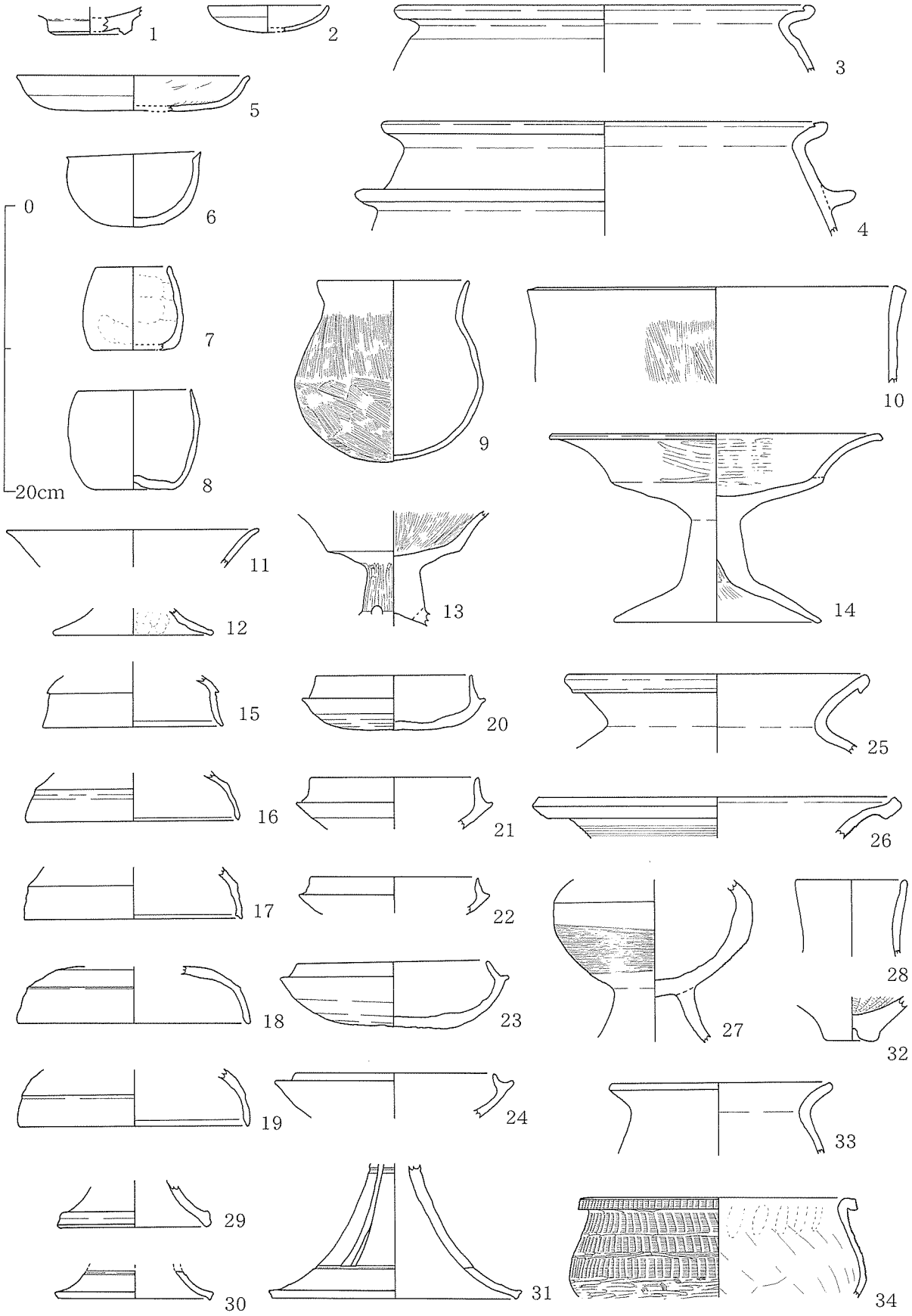
第5層　灰色(5Y6/1)細礫混じり粗粒砂。30～50cm大の礫を含む。

A－23地区の層序

第1層　盛土及び撹乱。


A-16地区
A-17地区
A-18地区
A-23地区
溝状
遺構
GL-1m
GL-2m
枚岡カトリック幼稚園
上六万寺町
A- 1地区
A- 8地区
A-10地区
B- 3地区
GL-1m
GL-2m

土層断面柱状図


1
2
3
5
4
0
6
7
9
10
8
20cm
11
13
14
12
15
20
25
16
21
26
17
22
28
18
23
27
32
19
24
33
29
30
31
34

出土遺物実測図

第２層　オリーブ黒色(10Y3/1)細～中礫混じりシルト。古墳時代の遺物が出土。

第３層　オリーブ黒色(5Y3/1)中礫混じり粘土質シルト。古墳時代の遺物が出土。

第４層　暗緑灰色(7.5GY3/1)細～粗粒砂混じり粘土質シルト。古墳時代の遺物が出土。

Ｂ－３地区の層序

第１層　盛土及び撹乱。

2. 出土遺物

出土遺物には中世～奈良時代の白磁・土師器、古墳時代の土師器・須恵器、弥生土器、瓦などがある。出土総数はコンテナで約２箱あり、そのうち図化しえたものは38点である。以下概要を述べる。

奈良～中世期の土器

白磁碗　１は白磁碗の底部である。内面に釉がかかる。11世紀中葉～12世紀初頭である。底径は4.8cmを測る。

土師器　２は小皿である。口径は8.4cmを測る。３、４は羽釜であり、口縁部は内傾しながら立って外折し、短く内側に折り返す。口縁端部は丸くおさめる。３の口径は28.4cmを測る。４は口縁部直下に断面がU字形を呈する鍔がつく。鍔はやや上向きにつく。口径は30.4cmを測る。５は皿である。内面に放射状の暗文を施し、側面は横方向のヘラミガキ調整する。

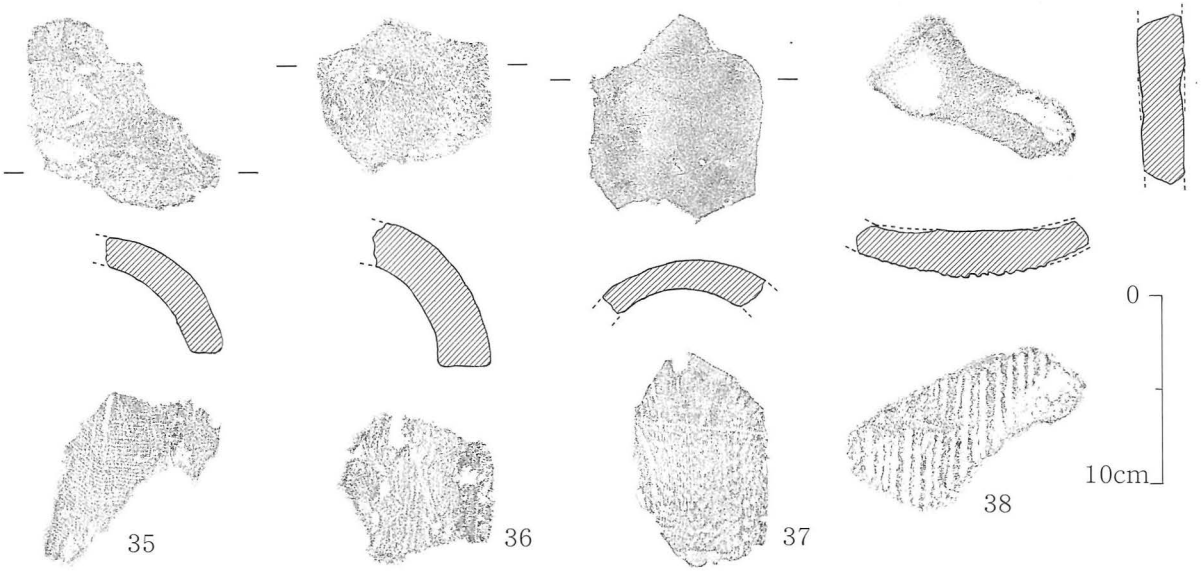
古墳時代の土器

土師器　６、７、８は鉢である。６は小型である。丸底で口縁端部を上方につまみ上げる。風化のため調整法は不明である。口径は9.4cmを測る。７、８は手捏ねであり、口縁端部は不均一に上方につまみ上げて終わる。７は内外面の一部に指頭圧痕が残る。９は甕である。口頸部を外傾ぎみに直立させ、端部は丸くおさめる。体部上半は縦方向、下半は斜めから横方向に、原体数が７～８本/cmのハケメ調整をおこなう。10は甑である。口縁部は体部から厚みを増しながら直立し、端部に面をもたせる。体部は縦方向に５～６本/cmハケメ調整をおこなう。いずれも古墳時代後半の遺物と考えられる。11～14は高杯である。11は杯部である。内外面にナデ調整をおこなう。12は裾部である。風化により調整法は不明である。13、14は古式土師器である。13は杯部外面をナデ調整、内面は縦方向にヘラミガキ調整をおこなう。脚柱部は中実で円孔を穿ち、外面に縦方向のヘラミガキ調整をおこなう。杯部と脚柱部との間には接合痕がみられる。14は口縁部が大きく外反し、屈曲部を中位にもつ。内外面に粗いヘラミガキ調整を横方向におこなう。脚部はラッパ状に開き、脚柱部上端は中実である。外面にナデ調整をおこなう。７～10、13、14は生駒西麓産である。

須恵器　15～19は杯蓋である。受部は短く、口縁部は丸くおさめる。15は口縁部がやや外反する。稜は短い。口径は12.5cmを測る。16～19は形骸化した稜が付される。20～24は杯身である。20～21は立ち上がりが比較的長く、わずかに内傾する。22～24は立ち上がりが短い。29～31は高杯脚部である。29、30は短脚であり、31はいわゆる長脚二段透かしである。細い基部から直下に下りながら外反し、端部で屈曲させ段をなす。体部には二段に渡って長方形の透かし窓を三方向に刻む。25、26は甕である。26はゆるやかに外反する口頸部を有し、端部は肥厚させ、丸く仕上げる。口頸部外面にカキメを施す。27は台付き壷である。体部の器壁は厚い。外面体部下半にカキメを施す。28は壷の口頸部である。古墳時代中頃～後半の遺物である。

弥生時代の土器

後期の土器　32は底部である。内面は原体数が３～４本/cmのハケメ調整し、放射状に巡らせる。外面は未調整である。底面は凹む。33は甕である。口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。口径は15.2cmを測る。




出土遺物実測図

中期の土器　34は鉢である。最大径が体部下半にあり、内湾する体部と短く外反する口縁をもつ。端面と体部に簾状文を施し、胴部中央は扇形文を施文後、ヘラミガキ調整によって消す。口径は18.2cmを測る。いずれも生駒西麓産である。

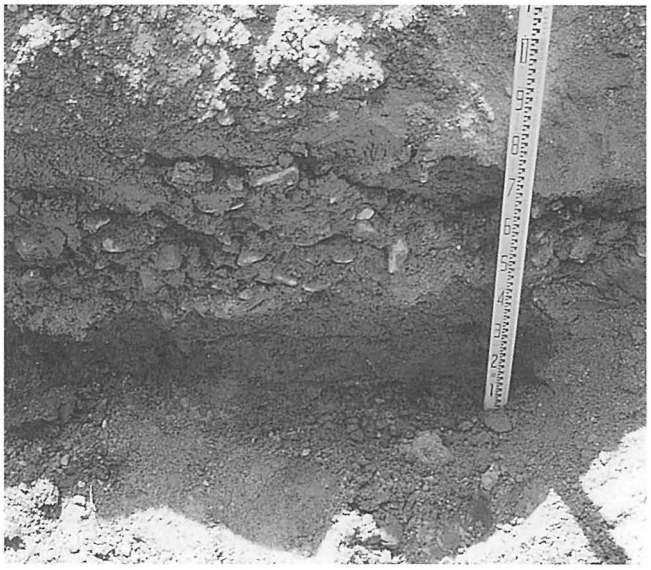
瓦

35、36、37は丸瓦である。35、36は凹面に6本/cm四方の布目痕を残し、凸面はナデ調整する。37は凹面に8本/cm四方の布目痕を残し、凸面はナデ調整する。38は平瓦。凹面に8本/cm四方の布目痕を残し、凸面は縄目叩き調整をおこなう。古代の瓦である。35、36は生駒西麓産である。

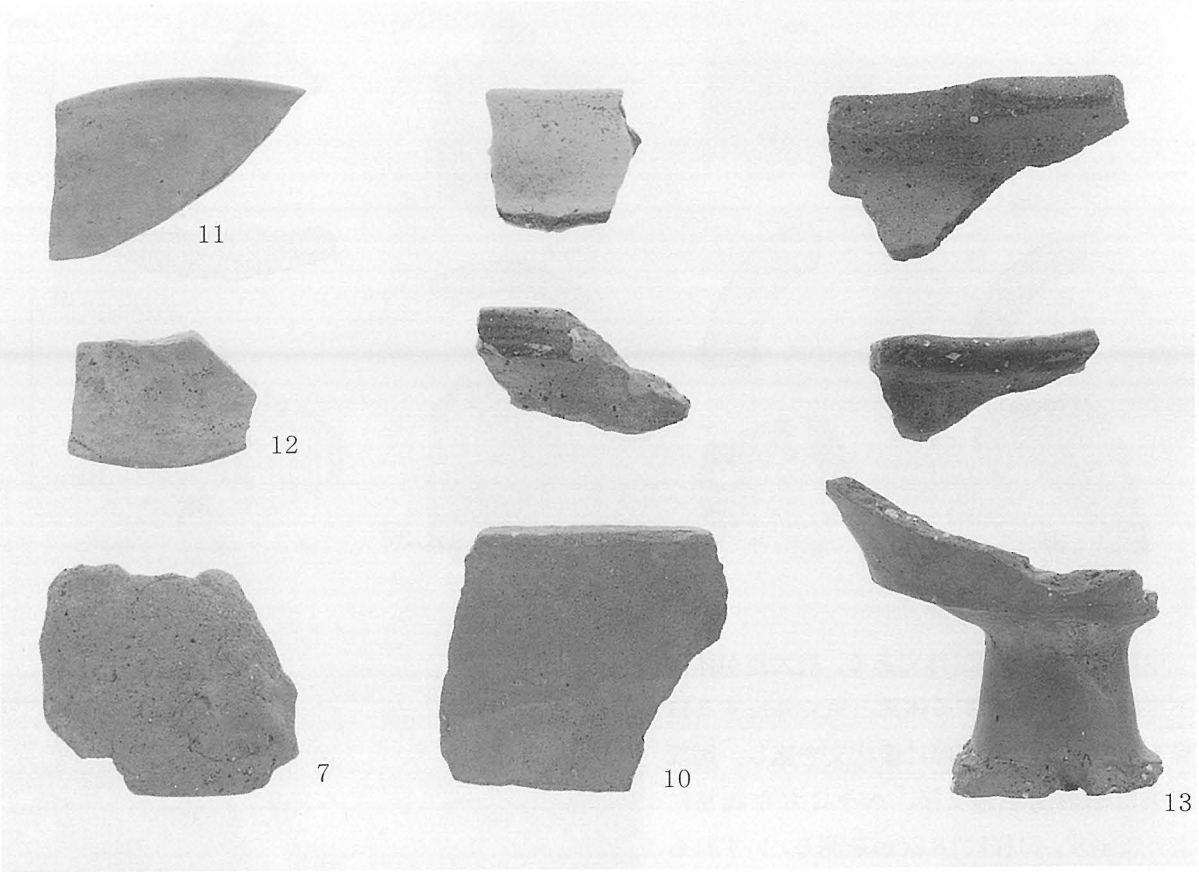
3. まとめ

今回の調査では、A－16地区より西側とA－18地区より東側からは、明確な遺物包含層を検出することが出来なかった。しかし、A－16～18地区では古墳時代の土器が多く出土した。さらに、A－17地区では溝状の遺構も検出した。以上のことより、古墳時代の遺構、遺物の多くはA－16～18地区に集中していると考えられる。

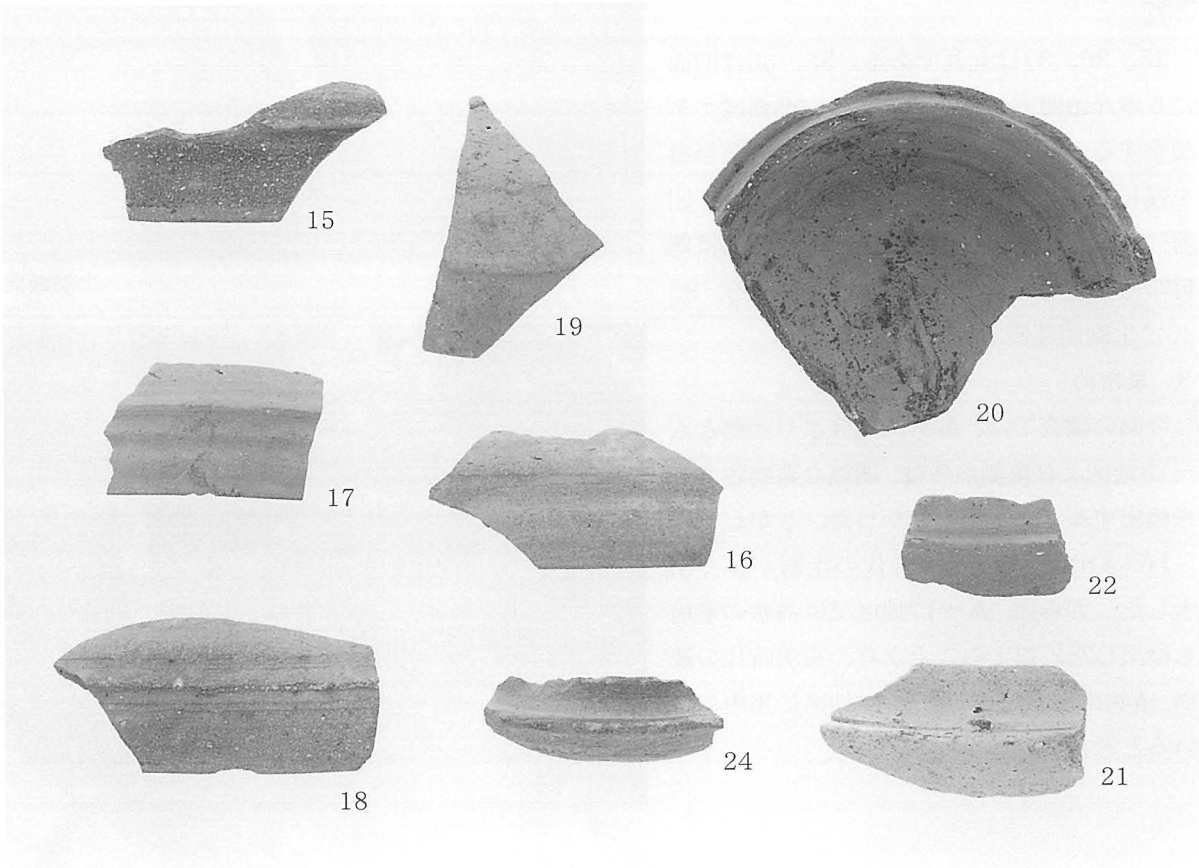
土層断面



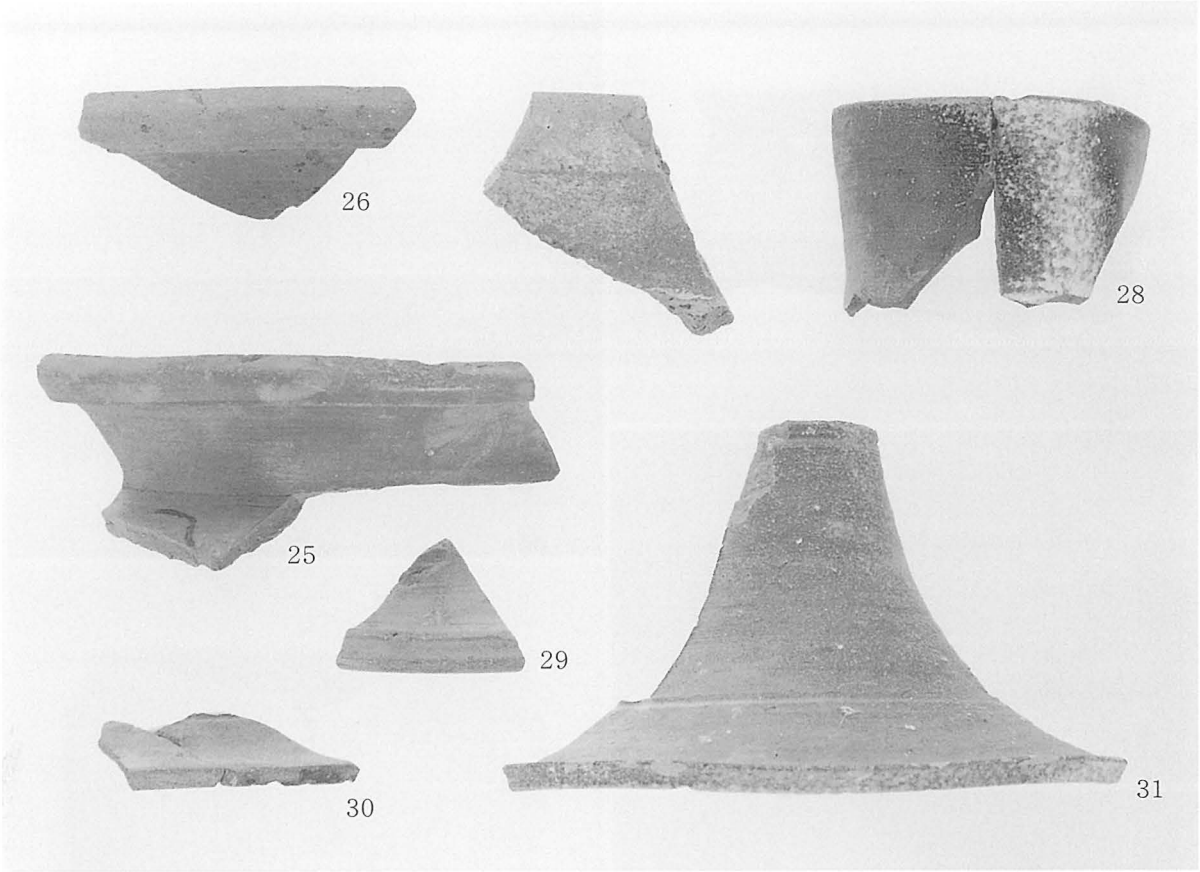
土層断面



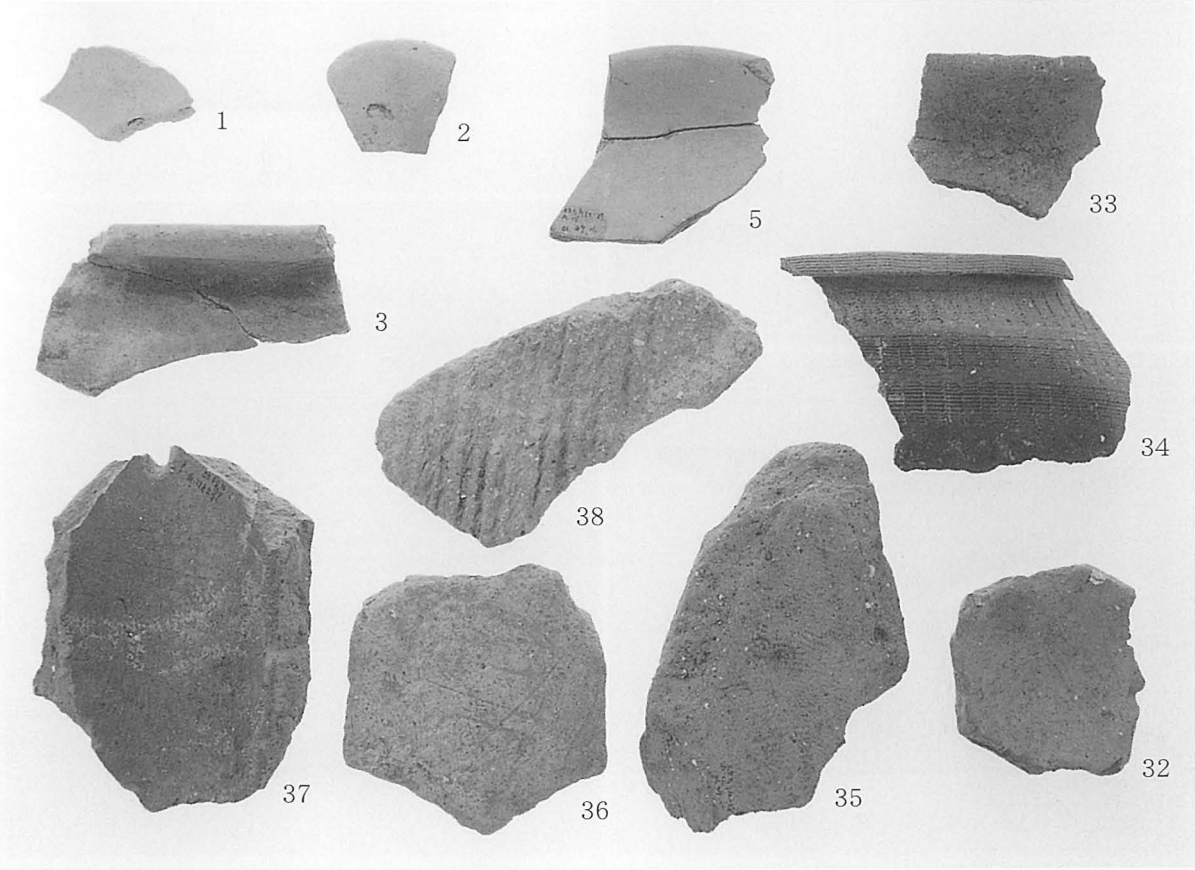

出土遺物（土師器）



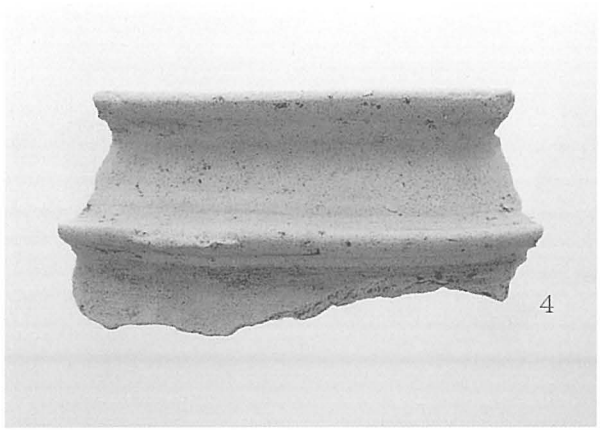

出土遺物（須恵器）

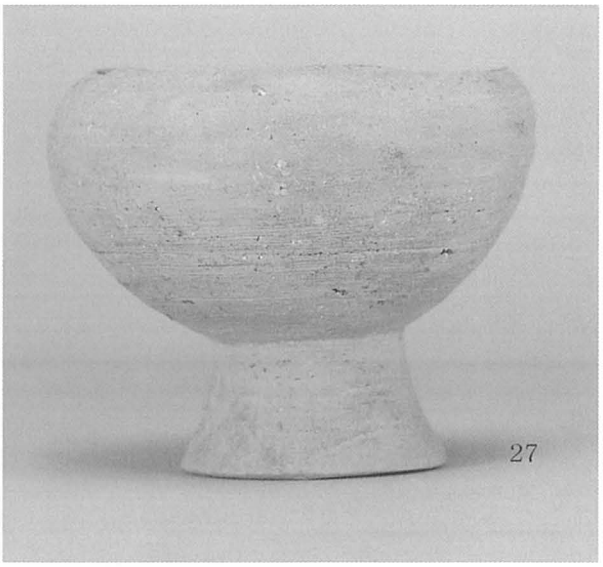



出土遺物（須恵器）




出土遺物（白磁・土師器・弥生土器・瓦）

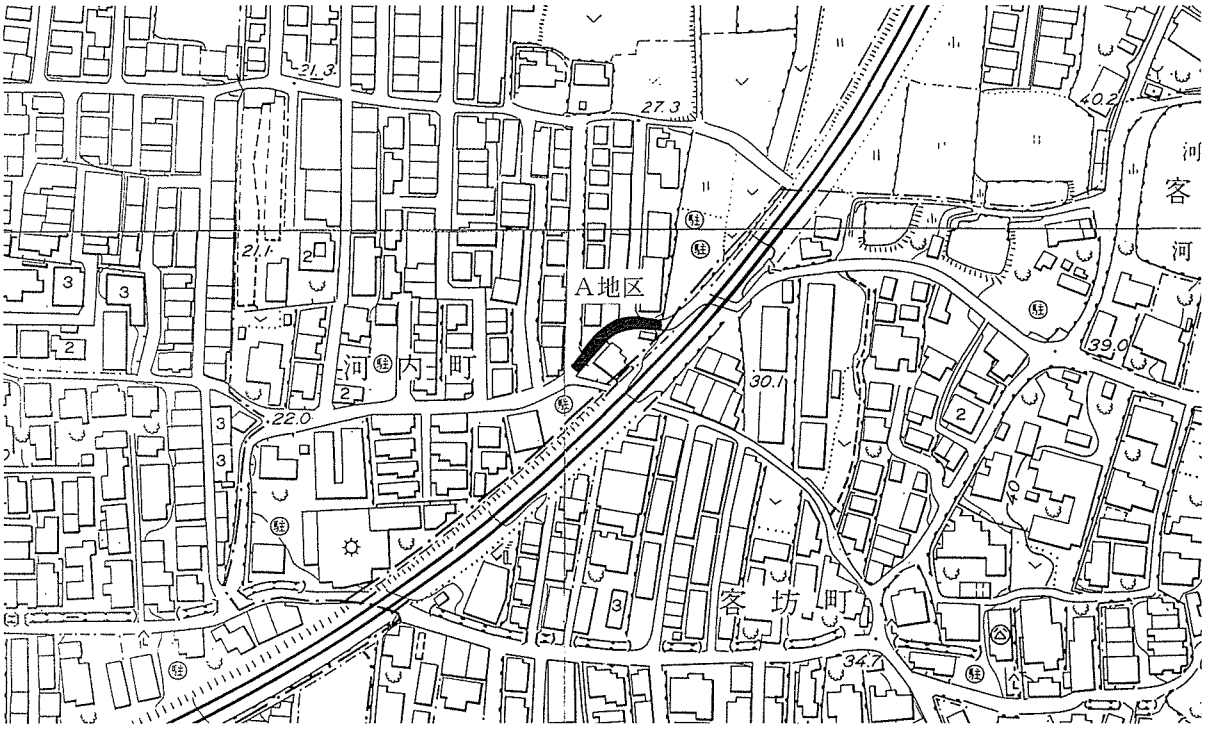




出土遺物（土師器・須恵器）

# 第25章　河内寺跡（かわちでら）の第10次調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成12年度公共下水道第47工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調 査 地 点 | 東大阪市河内町669～685 |
| 3 | 調 査 面 積 | 33㎡ |
| 4 | 調 査 期 間 | 平成13年10月30日～11月26日（延べ16日） |
| 5 | 報 告 担 当 | 吉田綾子 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は河内寺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ39mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（1/2500）

1. 調査の概要

調査は順次西側より行った。遺跡範囲はＡラインの東側一部であったが、遺跡範囲に隣接したところで工事が行われたため、立会調査を行った。

結果、調査区東側(Ａ－17地区～Ａ－19地区周辺)で土師器、須恵器、瓦などが出土する遺物包含層を確認した。西側(Ａ－1周辺)でも須恵器、瓦器などが出土したが、明確な遺物包含層とは言いがたく、おそらく川もしくは谷筋内の遺物と思われる。

2. 層序

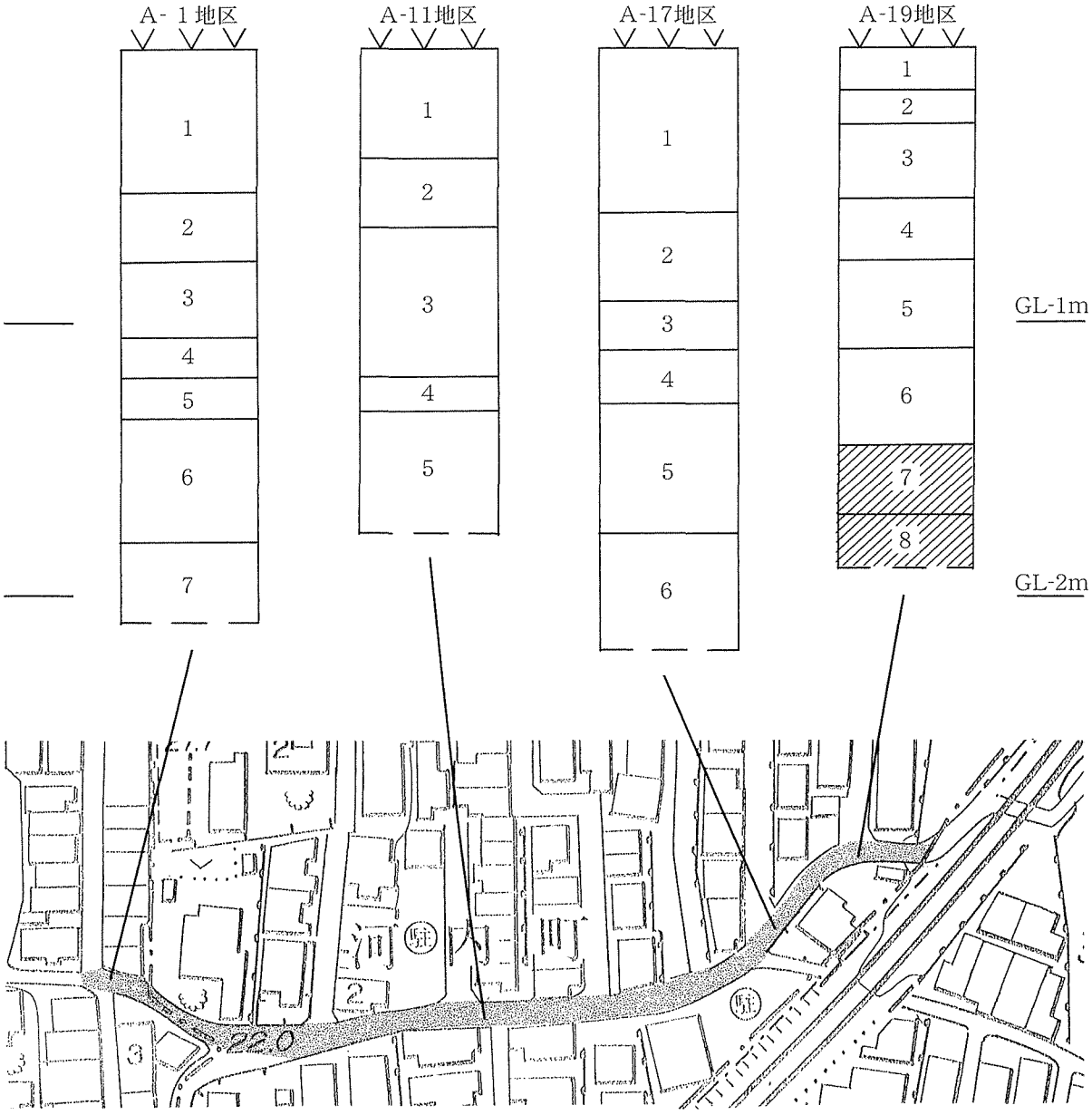
Ａ－１地区

第１層　盛土。

第２層　灰色(10Y4/1)小礫混じり粘土質シルト。小礫が少量混じる。

第３層　灰色(10Y5/1)礫混じり粗粒砂。小礫と10cm大の礫が多量に混じる。

第４層　褐灰色(10YR4/1)シルト混じり細粒砂。




土層断面柱状図

第５層　黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混じり粘土質シルト。酸化鉄が沈着。

第６層　黒色(5Y2/1)粘土質シルト。

第７層　黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト。小礫～中礫がブロック状に混じる。

Ａ－11地区

第１層　盛土。

第２層　灰色(5Y6/1)細粒砂混じり粘土質シルト。５cm～20cm大の礫が少量混じる。酸化鉄が沈着。

第３層　灰色(5Y5/1)礫混じり粗粒砂。２cm～10cm大の礫が多量に混じる。

第４層　灰色(10Y4/1)中礫混じり粗粒砂。

第５層　黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト。古墳時代～中世の遺物がわずかに出土。

Ａ－17地区

第１層　盛土。

第２層　褐灰色(10YR4/1)中礫混じり粗粒砂。10cm～20cm大の礫が多量に混じる。

第３層　暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混じり砂質土。古墳時代～中世の遺物がわずかに出土。

第４層　黄灰色(2.5Y4/1)中礫混じり粗粒砂。５cm～10cm大の礫が多量に混じる。

第５層　暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり砂質土。酸化鉄が沈着。

第６層　黒褐色(2.5Y3/2)中礫混じり粘土質シルト。50cm～70cm大の礫が混じる。

Ａ－19地区

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/2)小礫混じり粘質土。

第３層　暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘質土。中礫～３cm大の礫が混じる。

第４層　暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂・礫混じり粘質土。粗粒砂、２cm～10cm大の礫が少量混じる。

第５層　灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂～礫混じりシルト。細粒砂～粗粒砂、５cm～20cm大の礫がじる。

第６層　灰オリーブ色(5Y5/2)礫混じり細粒砂～粗砂。灰オリーブ色(5Y5/2)粘土質シルトがブロック状に少量混じる。５cm～20cm大の礫が多量に混じる。

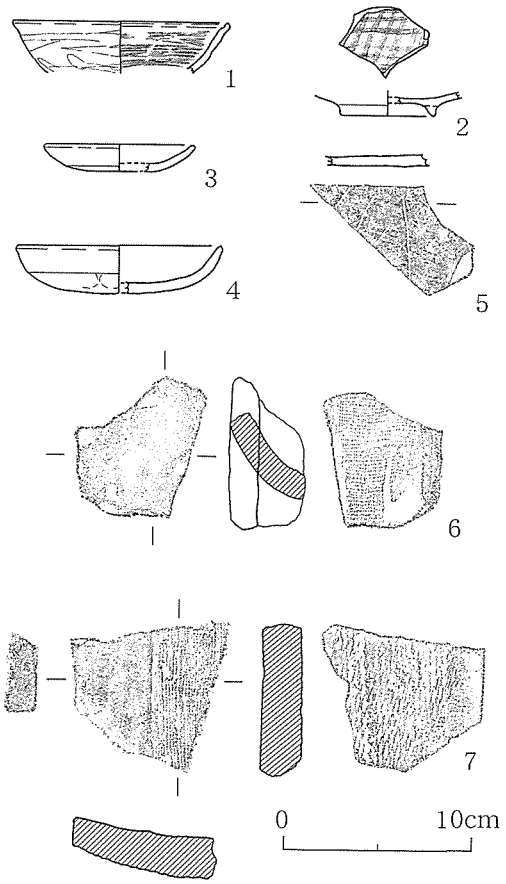
第７層　灰オリーブ色(5Y4/2)礫混じり粘土質シルト。５cm大の礫が少量混じる。酸化鉄が少量沈着。古墳時代～中世の遺物が出土。

第８層　オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト。５cm大の礫が少量混じる。古墳時代～中世の遺物が出土。

3. 出土遺物

調査地から瓦器、黒色土器、須恵器、土師器、瓦などが出土した。

１は大和型の瓦器椀である。口径11.2cm、残存高は




出土遺物実測図

Ａ－１地区土層断面

Ａ－19地区土層断面

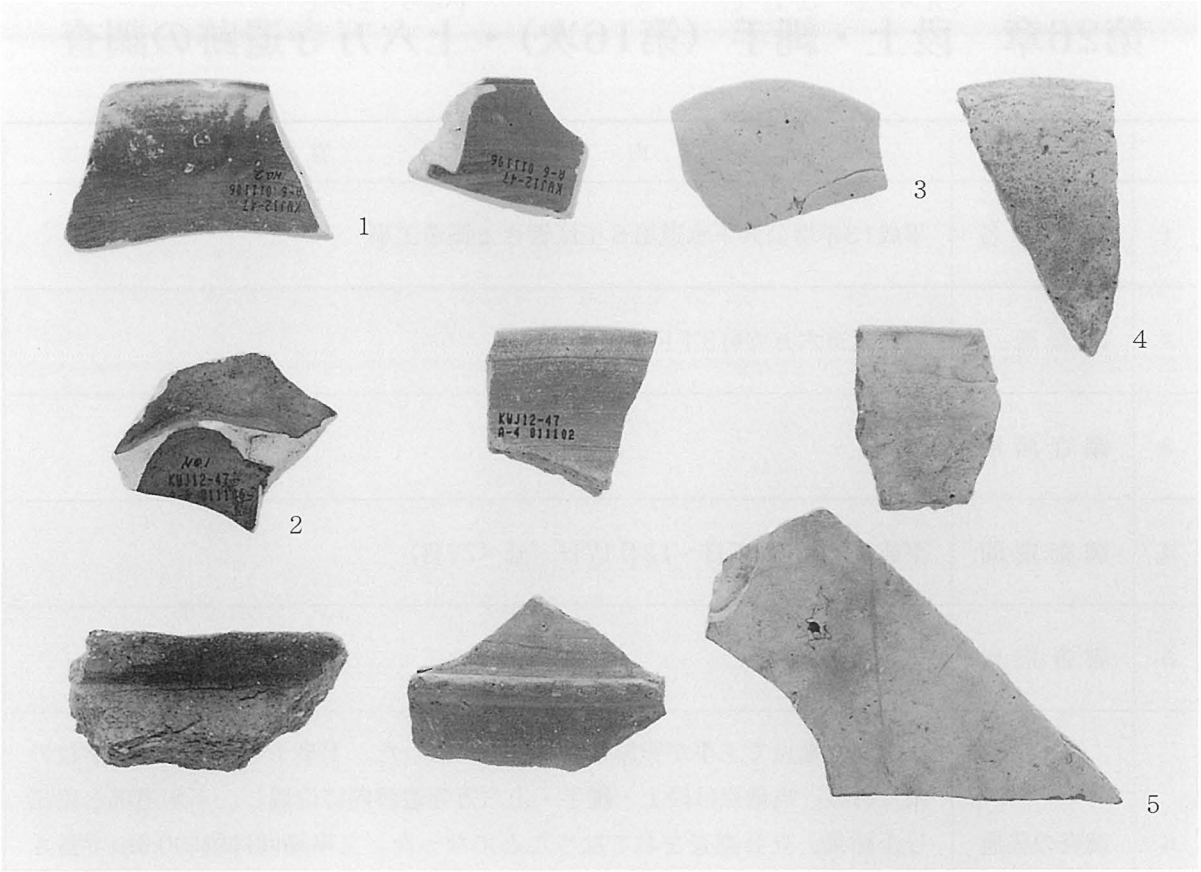
掘削状況

2.7cmを測る。内面は横方向の密なミガキが見られるが、外面はやや粗いミガキである。２は和泉型の瓦器椀底部である。底部径は4.8cm、残存高は2.4cmを測る。内面底部に格子状の暗文が見られる。３は中世土師器小皿である。口径7.8cm、器高1.4cmを測り、外面底部に粘土紐の痕跡が残る。４は口径10.4cm、器高2.5cmを測る土師器坏である。内外面に横ナデ調整が、外面底部に一定方向の指ナデ調整が見られる。５は奈良時代の土師器皿底部である。外面底部に木の葉の圧痕が残る。

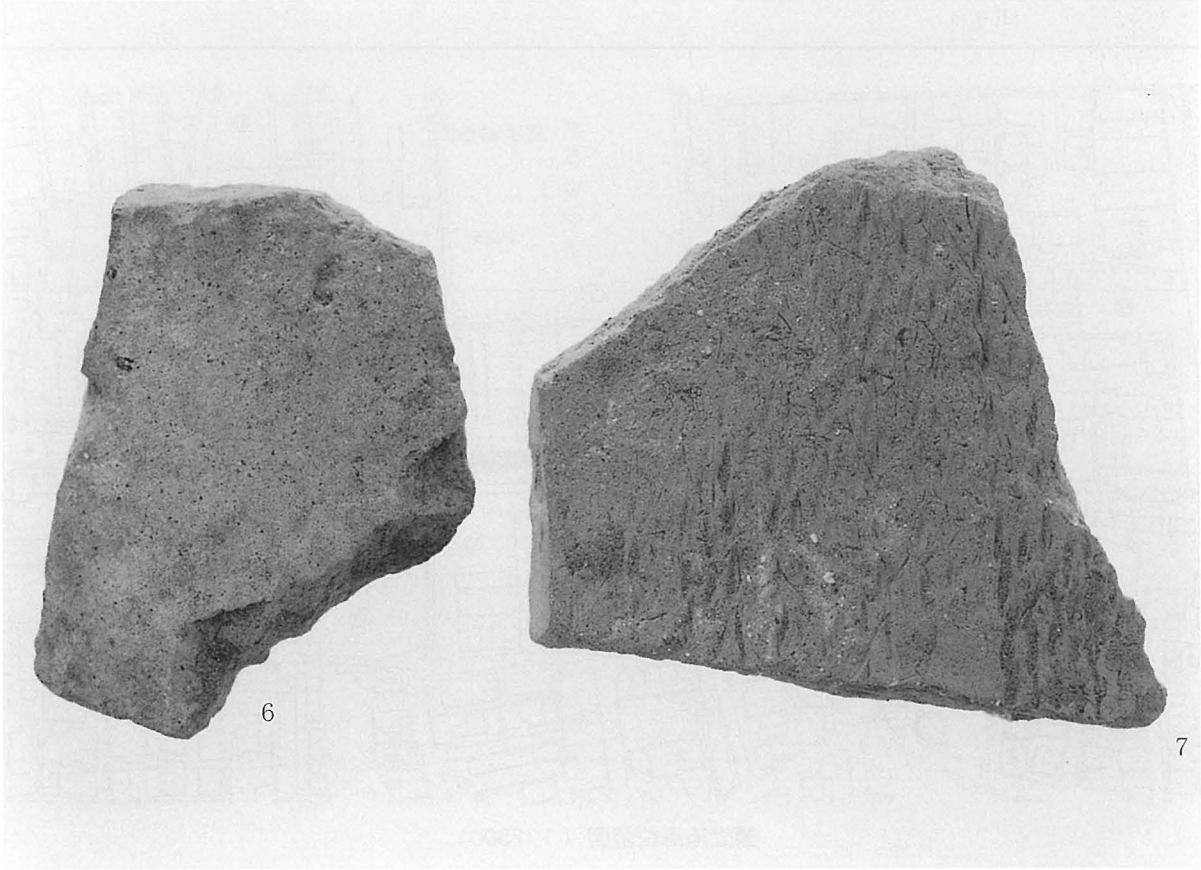
６は丸瓦である。外面はナデ調整、側面はヘラケズリ調整である。内面には布目痕（８本/cm×11本/cm）が残る。生駒西麓産。７は平瓦である。凹面は布目痕（８本/cm×11本/cm）が残り、一部ナデ消している。また凹面側部を4.0cmほど縦方向にナデ消している。凸面は縄目タタキがみられ、側面はヘラケズリ調整がなされている。

## ４．まとめ

当調査区東側は河内寺の推定寺域内に位置しており、Ａ－17地区付近には南大門が推定されている（Ｐ28・河内寺跡伽藍推定復元図参照）。今回、河内寺に関する遺構は検出できなかったが、河内寺跡第９次調査などでみられた中世の整地層を確認することができ、かなり広範囲で整地が行われたことがわかった。



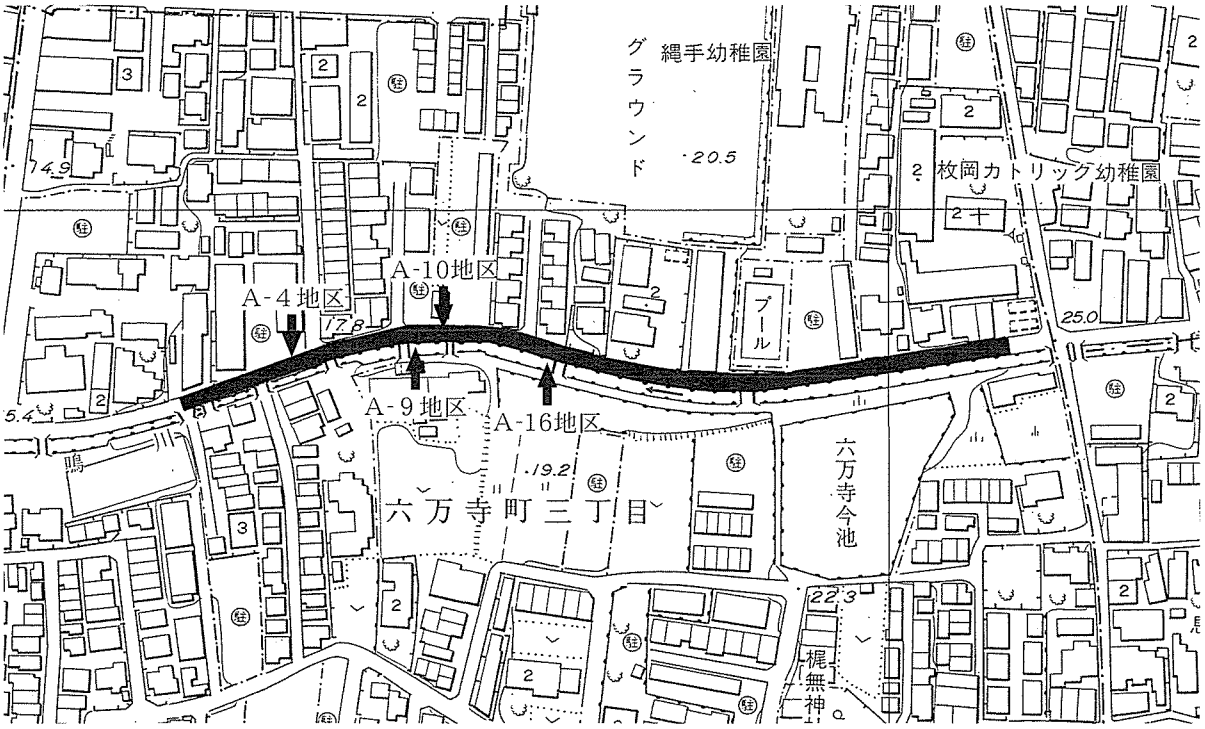

出土遺物（土師器・須恵器・瓦器）




出土遺物（瓦）

# 第26章　段上（だんのうえ）・縄手（なわて）（第16次）・上六万寺（かみろくまんじ）遺跡の調査

| | 名　　称 | 内　　容 |
|---|---|---|
| 1 | 事　業　名 | 平成13年度公共下水道第８工区管きょ築造工事 |
| 2 | 調査地点 | 東大阪市六万寺町3丁目 |
| 3 | 調査面積 | 89㎡ |
| 4 | 調査期間 | 平成13年10月25日～12月17日（延べ27日） |
| 5 | 報告担当 | 才原金弘 |
| 6 | 調査の経過 | 上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は縄手中学校の南である。当地点は段上・縄手・上六万寺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9mで長さ104mの間であり、開削工法である。 |




調査地点位置図（1/2500）

1. 調査の概要

今回の立会調査地は河川改修された川に沿って実施した。そのため、工事によって撹乱を受けていた所が大部分を占めた。

Ａ－４地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/2)細～中粒砂。

第３層　暗褐色(10YR3/3)細礫～中粒砂。

第４層　黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂混じりシルト。

第５層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト。古墳時代の遺物包含層。

第６層　オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト。

Ａ－９地区の層序

第１層　盛土。

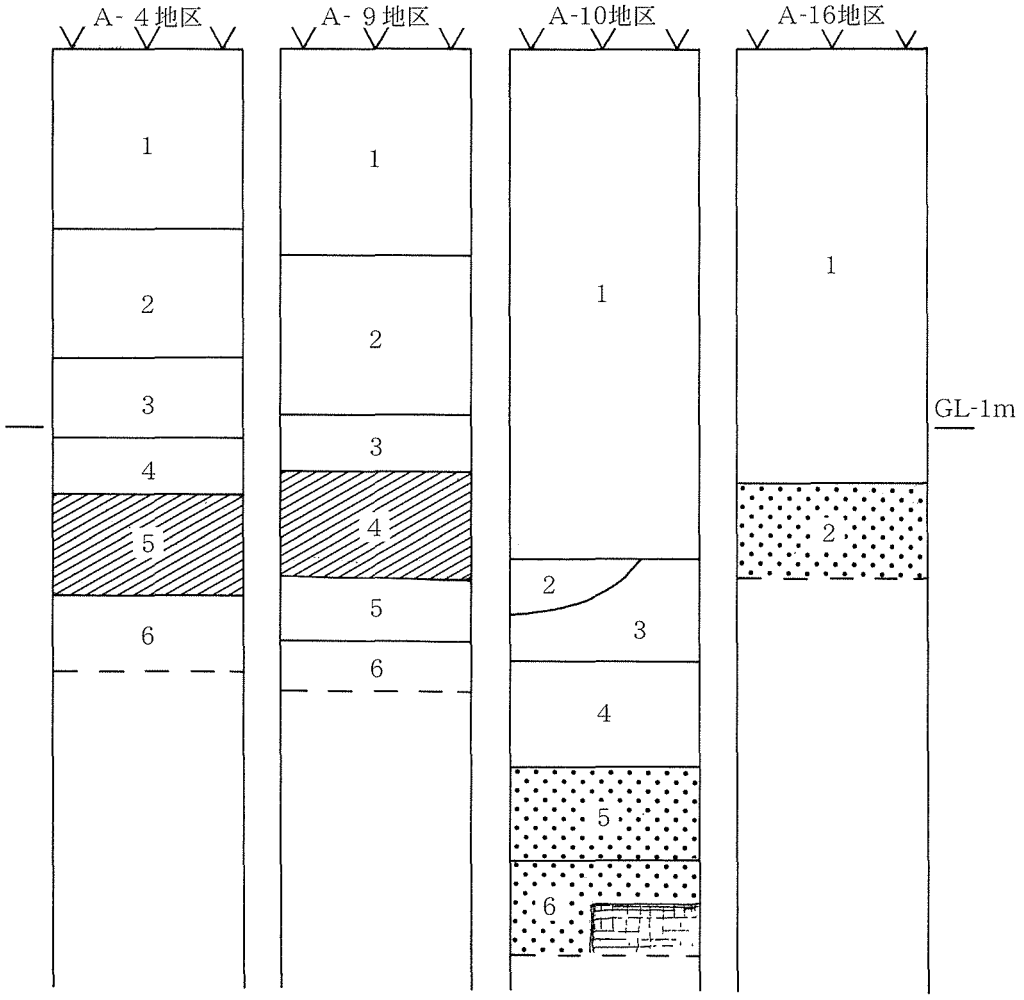
第２層　黒褐色(10YR3/2)細～中粒砂。

第３層　黒褐色(2.5Y3/2)シルト混じり細～中粒砂。

第４層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト。古墳時代の遺物包含層。

第５層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト混じり細～粗粒砂。

第６層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルト。




土層断面柱状図

Ａ－10地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/2)シルト混じり細～中粒砂。

第３層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細～中粒砂。

第４層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細～粗粒砂。

第５層　オリーブ黒色(5Y3/1)細～中粒砂混じり粘土質シルト。遺構内の埋土。

第６層　黒色(5Y2/1)中～粗粒砂混じりシルト質粘土。遺構内の埋土。

Ａ－16地区の層序

第１層　盛土。

第２層　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト混じり細～中粒砂。中世期の遺物包含層。

2. 出土遺物

古墳時代、奈良～平安時代、中世期の遺物がある。

古墳時代の土器

須恵器、土師器、韓式系土器が出土した。

須恵器　器種は甕・蓋・杯・高杯がある。１～５は甕である。口縁部が大きく外反し、口縁端部が面をもつもの（１）と下方へ肥厚するもの（２・５）がある。５は体部外面にタタキ目が残る。７・８は蓋である。７は天井部がやや丸みをもち、口縁端部は丸く終わる。天井部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。天井部と口縁部の外面境に１条の凹線文、口縁端部に刻み目を施す。８は天井部が丸く、口縁端部がわずかに面をもつ。調整法は７と同様である。９～13は杯である。受部が長く内傾し、口縁端部が面をもつもの（９）と受部が短く内傾し、口縁端部が尖り気味に終わるもの（10～13）がある。体部下半の外面は回転ヘラケズリ調整し、他は回転ナデ調整する。14は高杯の脚部である。大きく裾広がりになり、端面が面をもつ。内外面は回転ナデ調整する。

土師器　器種は羽釜がある。25は長胴の羽釜である。口縁部が強く外反し、口縁端部が丸く終わる。口縁部と胴部の境に水平方向に伸びる鍔がつく。胴部内面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整、内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。

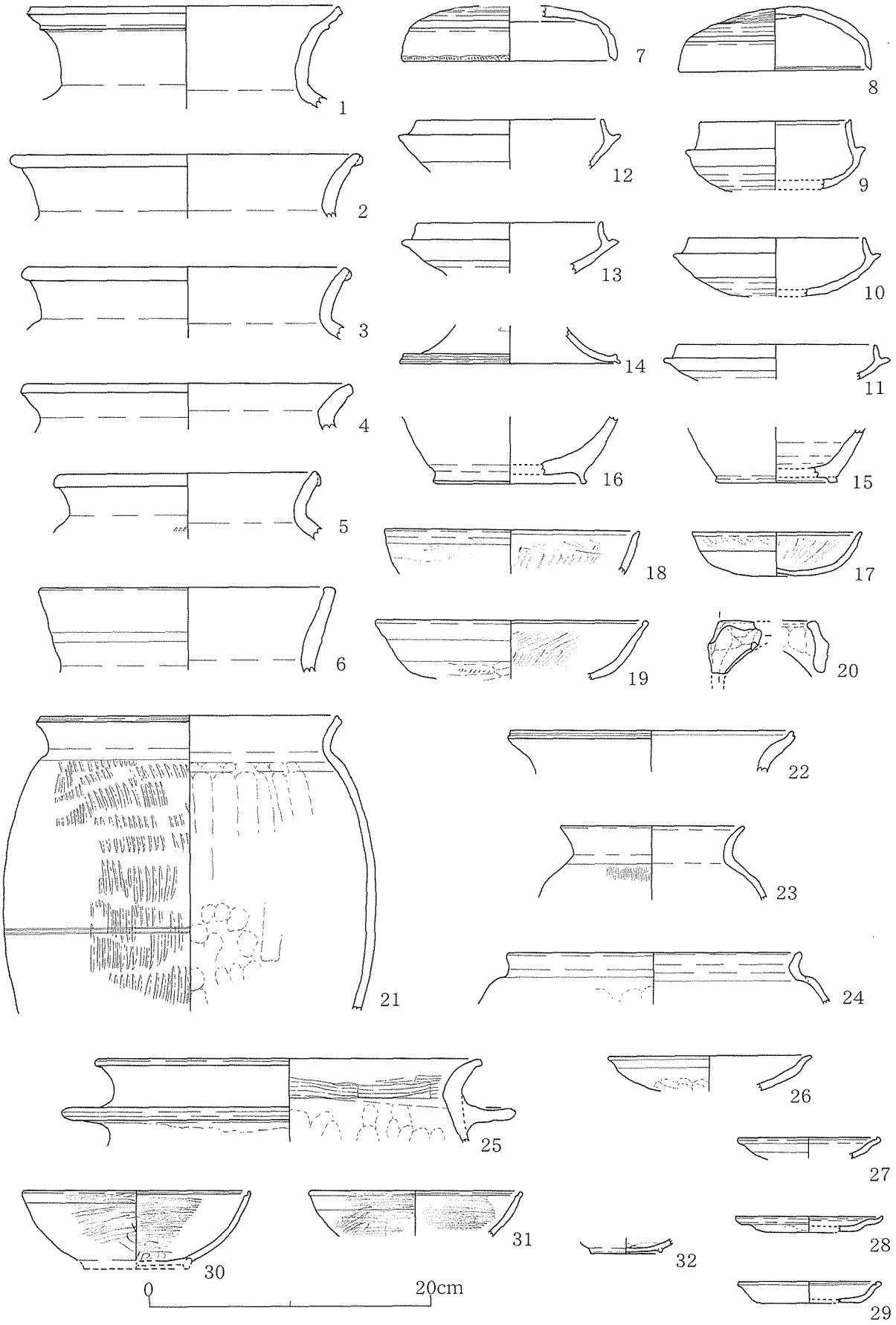
韓式系土器　器種は甕がある。21は長胴の甕である。胴部の張りは少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。胴部外面はタタキ目調整し、内面はナデ調整する。内面に指頭圧痕が残る。胴部外面の中位に２条の浅い沈線を施す。

奈良～平安時代の土器

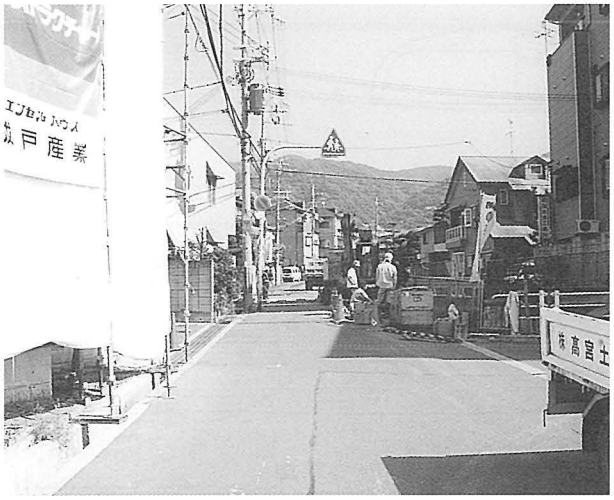
須恵器、土師器が出土した。

須恵器　器種は壺がある。６は口縁部が直口する壺である。口縁端部は面をもつ。15・16は壺の底部である。底部は平底であり、体部が外上方に伸びる。底面に台形を呈する高台を削りだす。内外面は回転ナデ調整する。

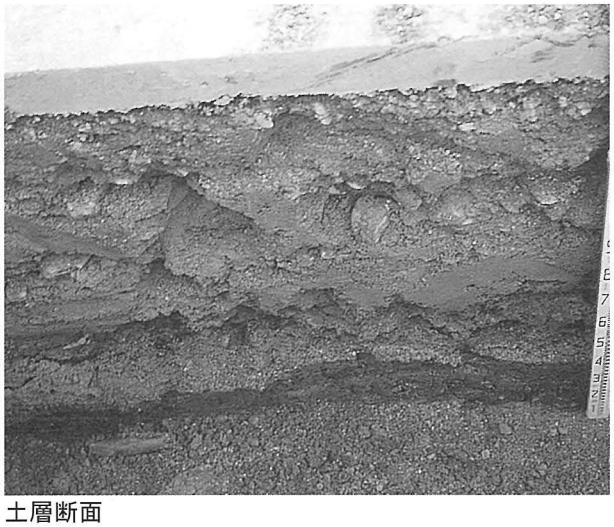
土師器　器種は杯・ミニチュア竈・甕・皿がある。17～19は杯である。17・18は口縁部が短く外反し、口縁端部が尖り気味に終わる杯である。17は体部外面をナデ調整する。内面はヨコナデ調整の後、放射状の暗文を施す。18は内外面をヘラミガキ調整し、内面に放射状の暗文を施す。19は口縁端部が内側へ肥厚する杯である。体部下半はヘラケズリ調整する。内面に二段の放射状の暗文を施す。20は口縁部と炊口の一部が残るミニチュア竈である。作りは粗雑であり、内外面に指頭圧痕が残る。22～24は甕である。22は口縁部が大きく外反し、口縁端部が面をもつ。23は張りのある体部より口縁部が強く外反する。口縁端部は尖り気味に終わる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。24


1
2
3
4
5
6
7
8
12
9
13
10
14
11
16
15
18
17
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
20cm

出土遺物実測図



調査地遠景


土層断面

は体部と口縁部の境に段がつき、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。26～29は皿である。26は口縁部が外反し、口縁端部が丸く終わる皿である。27～29は口縁部が外反した後、さらに内傾する皿である。口縁端部は内側へ巻き込み、丸く終わる。

中世期の土器

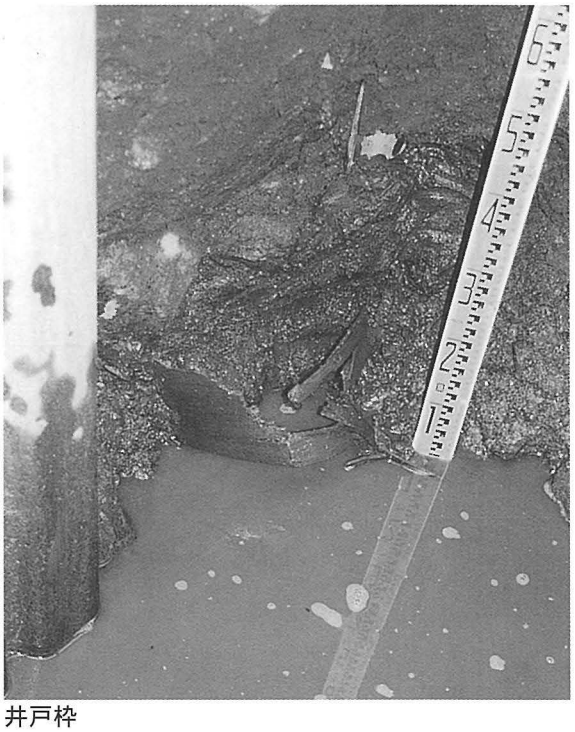
瓦器が出土した。

瓦器　器種は椀がある。30～32は椀である。30・31は口縁端部の内側に沈線が廻る、いわゆる大和型の椀である。内外面は密なヘラミガキ調整する。30は見込み部に平行線の暗文を施す。31は底部である。断面形が三角形を呈する高台を貼り付ける。見込み部に連結輪状の暗文を施す。

3. まとめ

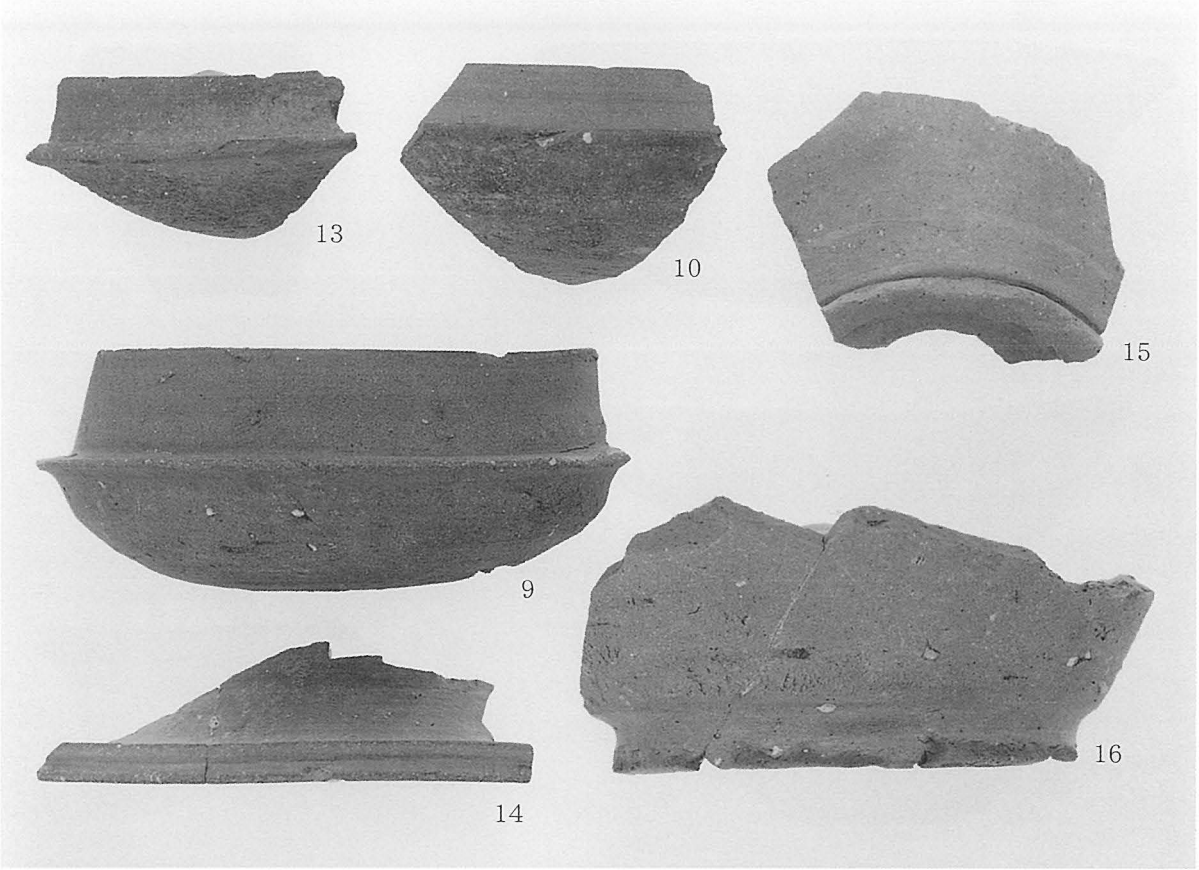
今回の調査では西側部で古墳時代と中世期の遺物包含層を確認した。また、A－10地区では中世期の曲げ物井戸を検出した。東側部では撹乱のため遺構・遺物の有無は確認できなかった。今回の調査地周辺には古墳時代～中世期の集落が存在すると考えられる。

土層断面

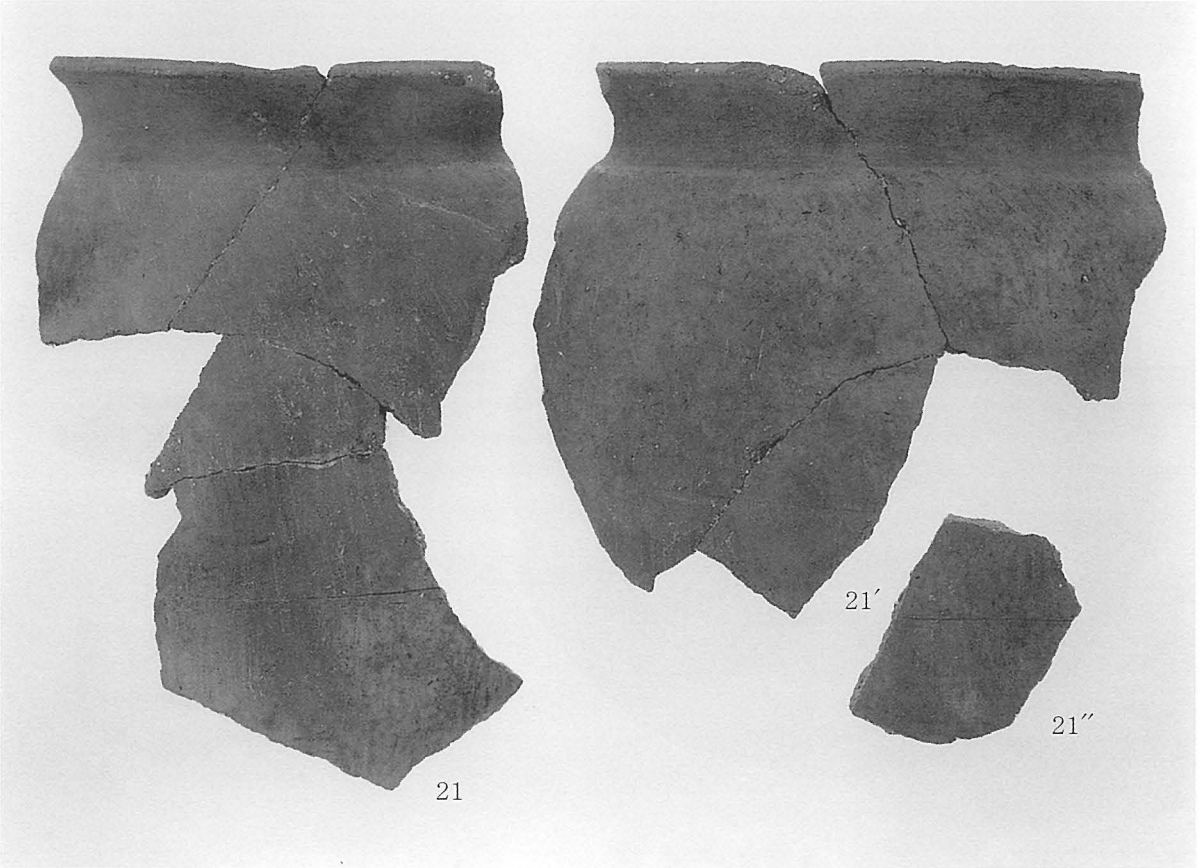

井戸枠

出土遺物（須恵器）

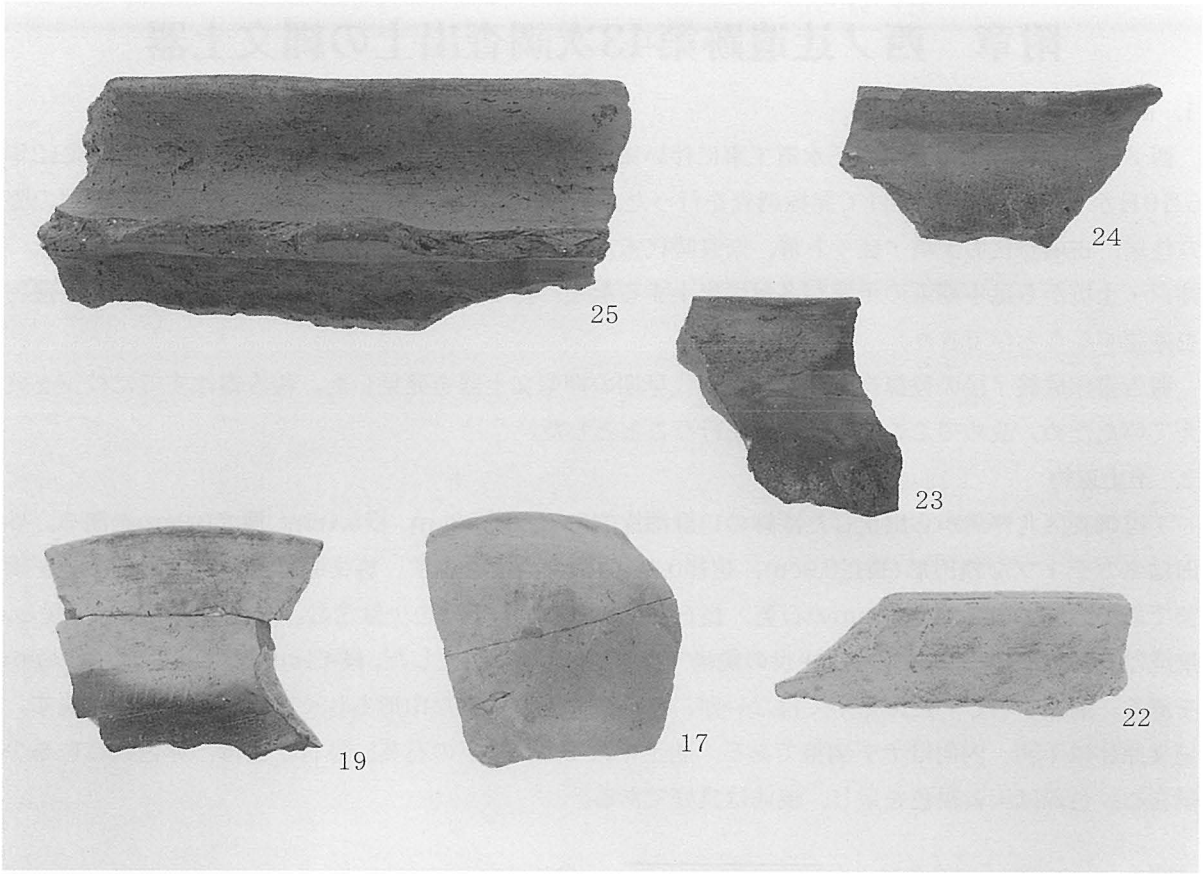
出土遺物（須恵器）



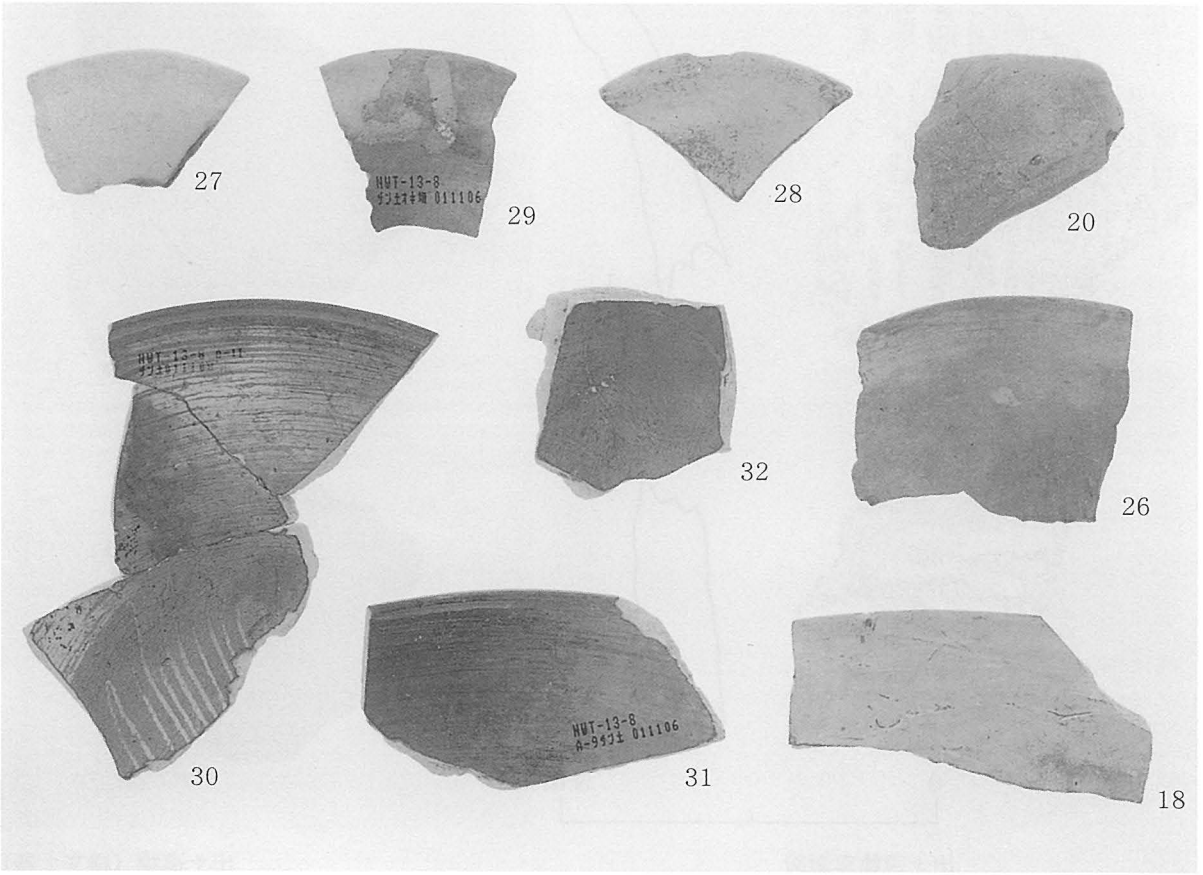

出土遺物（須恵器）




出土遺物（韓式系土器）




出土遺物（土師器）




出土遺物（土師器・瓦器）

# 附章　西ノ辻遺跡第43次調査出土の縄文土器

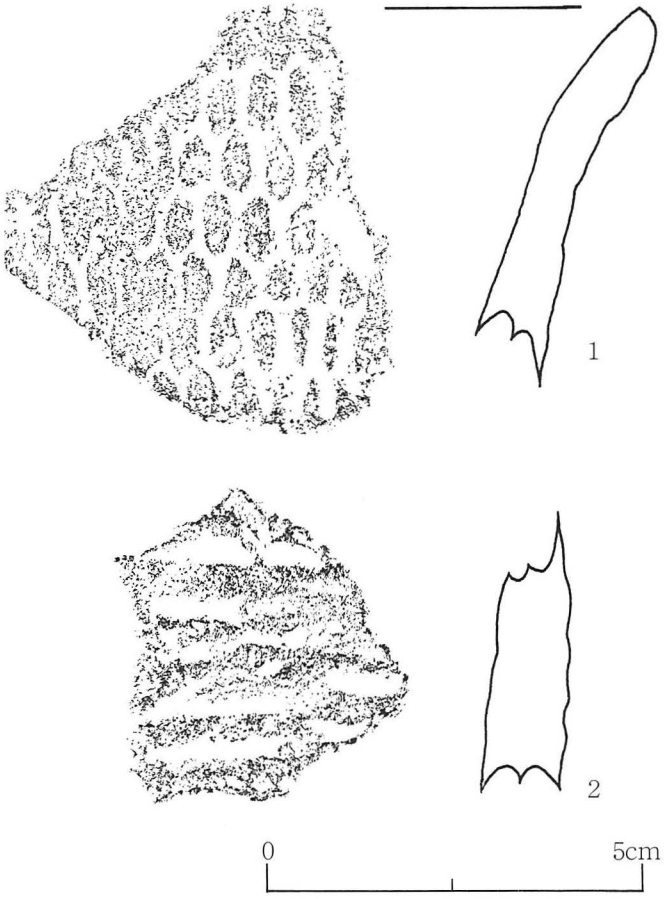
1. 調査の概要

西ノ辻遺跡第43次調査は、下水道工事に伴い東大阪市東山町1428番地など約1550㎡を、平成12年5月9日から10月18日にかけて発掘調査を行った。その結果、弥生時代中期の井戸や土坑、後期の竪穴住居、古墳時代の土坑・ピット群、奈良時代末から平安時代初めの井戸などを検出し、弥生時代の井戸・土坑からは中期末の土器が多量に出土するなど、弥生時代中期から中世にかけての遺構・遺物を確認することができた。

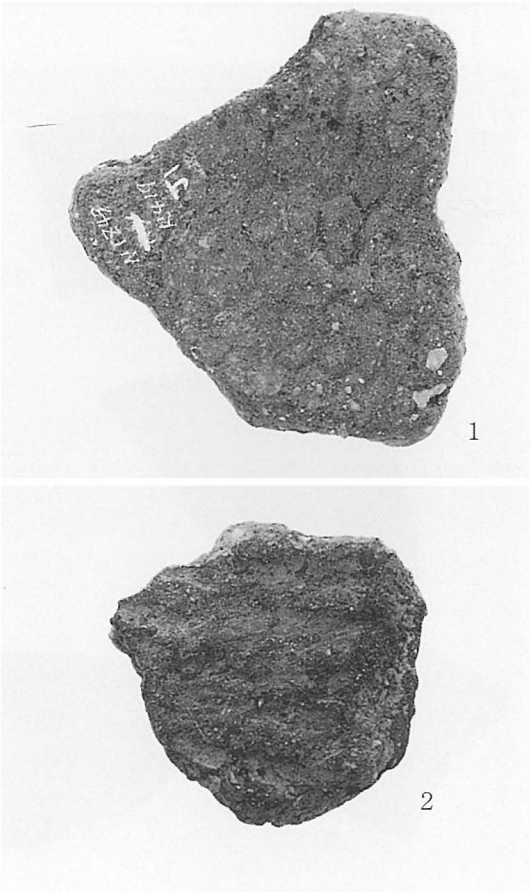
報告書作成終了後の登録作業中に縄文時代早期の押型文土器を発見した。報告書はすでに校正を終えていたため、改めてここに追加報告を行うこととした。

2. 出土遺物

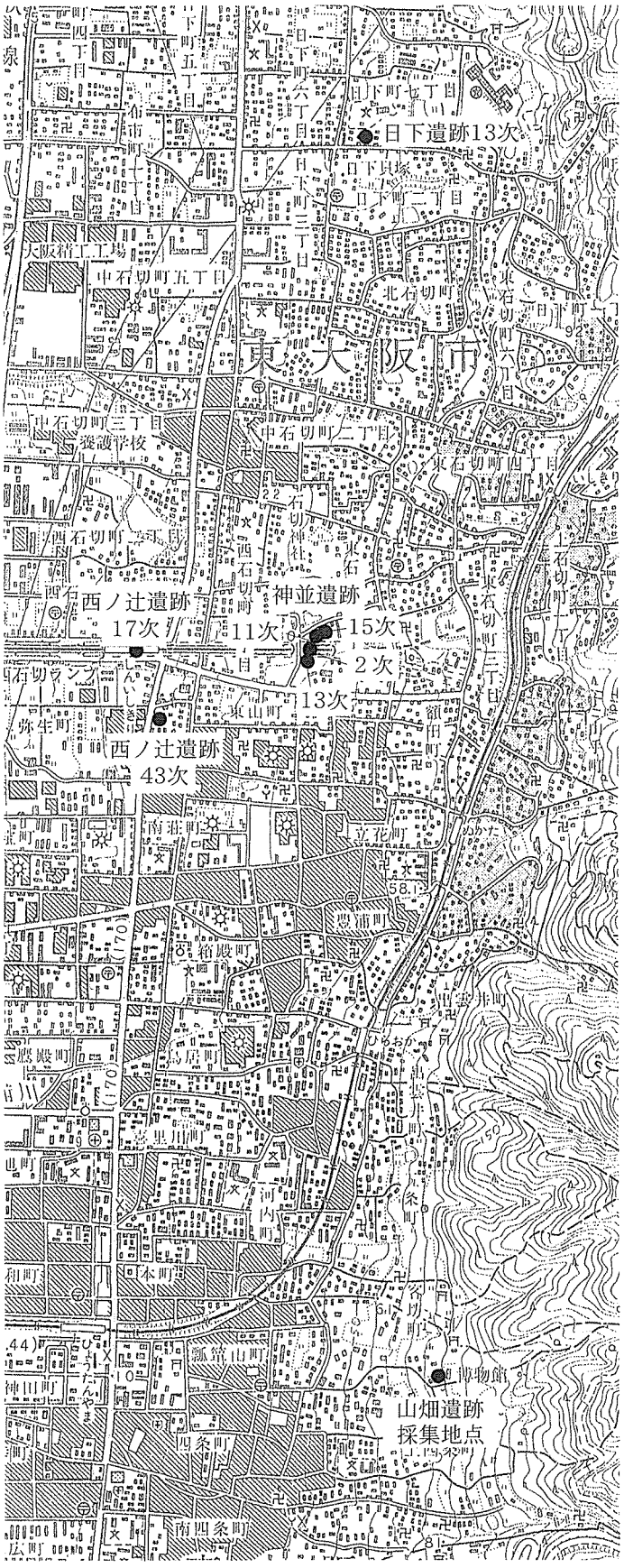
1は調査区北側溝から出土した深鉢の口縁部片である。縦5.3cm、横5.1cm、厚さ0.9cmを測る。外面はネガティブな楕円形(長径0.9cm、短径0.4cm)の押型文を施す。施文原体は不明。内面はナデ調整である。胎土中に1～3mmの石英、長石と1mm未満の雲母を少量含む。色調は灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。2の体部片は中世の鋤溝であるSD25から出土した。縦4.1cm、横3.6cm、厚さ1.0cmを測る。磨滅が著しいため定かではないが、外面はポジティブな山形もしくは平行の押型文を施す。施文原体は不明。内面はナデ調整である。胎土中に1mm以下の石英、長石と雲母、赤色軟質粒を少量含む。色調は灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。




出土遺物実測図




出土遺物（縄文土器）




押型文土器出土位置図（1/20000）

１・２ともに非生駒西麓産で、神宮寺式に属すると思われる。

3. まとめ

東大阪市内ではこれまでに、西ノ辻遺跡第17次調査、神並遺跡第2・11・13・15次調査、日下遺跡第13次調査で出土している。また山畑遺跡で１点採集されている。

特に神並遺跡からはかなりまとまって押型文土器が出土している。第２次調査では楕円状の集石遺構が検出され、土偶、有舌尖頭器、石鏃、石匙など共に出土している。第11次調査でも集石土坑、焼土坑、土坑から土偶や有舌尖頭器などと共に出土している。これらのことから、この地域に縄文時代早期の集落があったと考えられている。また西ノ辻遺跡第17次調査では弥生時代中期の自然河川（谷筋）の最下層出土品として1点報告されている。この自然河川（谷筋）は神並遺跡から西に延びており、出土した押型文土器は上流の神並遺跡からの流入品と考えられている。

今回出土した押型文土器は、神並遺跡で出土した土器の器壁が0.6cmほどなのに比べ、1.0cmほどとやや厚いのが特徴である。また神並遺跡から出土した押型文土器はネガティブな楕円文を主体とする神宮寺式が主であり、1のようなポジティブなものは数少ないこと、神並遺跡出土品は生駒西麓産であるのに対し１・２ともに非生駒西麓産であることも特徴である。これらのことから、西ノ辻遺跡にも縄文時代早期の遺構や遺物包含層が存在する可能性が考えられる。しかしながら神並遺跡からの流入品の可能性も捨てられなく、今後の調査に期待するのみである。（吉田）

東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告
－平成13年度－
平成14年３月31日
発行所　東 大 阪 市 教 育 委 員 会
印刷所　グランド印刷株式会社